英雄予備軍冒険譚

かっぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄予備軍冒険譚

【Ｎコード】
Ｎ７５２６Ｗ

【作者名】
かっぷ

【あらすじ】
飛竜が空を舞い、妖精が草原に歌う幻想の世界。人として生まれた少年ヤマトは、ノエルという少女と出会い、彼女を守ると心に誓う。やがて冒険者となった二人は、腕を磨いて経験を積み、互いに信頼を高めて行く。だが次第に離れて行く二人の実力――ヤマトは普通の人間。ノエルは特別で希少な存在、天使であった。守ると誓った相手に守られるという矛盾に悩みながらも、がむしゃらに進むヤマト。周囲の期待に応えたいと思いつつも、ヤマトと離れたくないと願うノエル。そんな二人に、最大の試練が訪れる。～～オーソ

ドックスな西洋風ファンタジー世界を舞台に繰り広げられる、青春冒険活劇～～

序話：ダメ人間と失格天使（前書き）

戦闘シーンなど、残酷な描写が含まれている話がございます。その都度、前書きにて警告表示をさせて頂こうとは思いますが、苦手な方はご注意下さい。

序話：ダメ人間と失格天使

大きな木の下で、年端も行かぬ幼い少女が泣いている。
愛らしい顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃ、白いワンピースは土で汚れて泥だらけ。長く綺麗な金髪には折れた枝が絡まり、膝小僧は擦り剥けて血が滲んでいる。
木から落ちたのだ。
しかし彼女は傷が痛くて泣いているのでは無い。
彼女の背中から生える一対の翼――真っ白な光を放つ美しい翼だ――その翼が、傷付いていた。発光する翼の所々が赤く染まり、一部が裂け、一部が折れていた。抜け落ちた羽は付近に散らばり、風に晒された端から細かな光の粒へと分解され、空へ昇って行く。
天使の象徴たる、純白の翼。
その翼が傷付いてしまった事に、少女は酷く心を痛めていた。翼を失えば天使ではいられない。飛べない天使など、天使では無い。
傷付いた翼を羽ばたかせ、無理矢理飛ぼうと試みる少女。だが折れた翼は風を捕らえる事無く無意味に傷口を広げ、ただ光の粒を撒き散らすだけ。
少女の表情が絶望に染まる。泣き声が大きくなる。

（しょうがねぇ奴だな……）

少年は呟く。
少女の泣き声は彼の耳に届いていた。早く助けてやらなくては。そんな気にさせる泣き声。早く彼女の元へ駆け寄って、手を差し伸べなければならない。
少女がまた羽ばたき、光の粒が舞う。そして更に泣き声が大きくなった。モタモタしてはいられない、早く行かなくては。少年は少女の元へと走る。早く、一刻も早く。悲痛な泣き声が少年を急かす。

胸が締め付けられる。
　少女に近付くにつれて舞い散る光の量が増えてくる。少女から放出され、ゆらゆらと漂う光の粒。その一つ一つが明るく優しい光を放ち、触れればほのかに暖かい。まるで母の腕の中にいるような安らぎ……母を知らぬ少年でさえ、そう感じた。
　だが捻くれ者の少年はその安らぎに反発するするように、あえてぶっきらぼうに言った。

（おい、もう泣くな）

　少年の声に、泣いていた少女が顔を上げる。可愛らしい少女だ。ささくれ立った少年の心に、生まれて初めて大きく熱い物が宿る。

（泣いたってしょうがねぇだろ？　ほら、元気出せよ）

　汚い服で拭った手を、そっと差し伸べる。
　高鳴る鼓動。その理由に少年は気付かない。

（そんくらいのケガなんかツバ付けときゃ治るって）
（で、でもっ！　私、飛べなくなったら……）
（大丈夫だよ、ケガが治ったら飛べる。もし飛べなくても、飛べるようになるまで俺がずっと面倒見てやる。だから心配すんな）
（……うん）

　そっと握り返される手。差し出された少年の手に、少女の手が重ねられる。柔らかく、暖かい手のひら……全ての痛みと苦しみが癒されてゆく、そんな気さえする。

（ありがとう）

言って、少女が笑った。まるで天使のような……いや、天使の微笑みだ。

（お、おう）

その笑顔が眩しくて、思わず目を逸らしてしまう。くすくすと笑う少女。

（何だよ、笑うなって。いま泣いてたと思ったらこれかよ……全く、しょうがねぇな）

光溢れるこの場所で、少年は誓う。この少女を守る事を。二度と傷付かぬように、二度と涙を流さぬように。この笑顔を守り抜くと。

第一話：暗闇の中で（前書き）

戦闘シーンあり。残酷な描写がございますのでご注意下さい。

第一話：暗闇の中で

深い洞窟。暗闇が支配するこの場所では、松明の明りなど蛍火に等しい。しかしそれでも燃え盛る炎は自らの役割を果たし、洞窟の岩壁を明るく赤く浮かび上がらせる。

そこに響くのは足音、水音、激突音。澱んだ空気がふわりと動き、腐った水と湿った土の嫌な臭いが鼻腔へと流れ込む。それはべっとりと顔に付着した泥水の臭いだ。

「ちっくしょっ！」

水溜りに倒れこんだ少年が悪態を付き、片手で顔の汚泥を拭い捨てた。泥を擦った跡が日に焼けた肌に残る。

歳は十五くらいだろうか。多少目付きは悪いが、それなりに整った顔の少年だ。

簡素な革鎧を纏ったその身体は若干小柄で力強さは無いが、無駄が無くシャープで機敏な印象を与える。手にした短剣もまた薄汚れてはいたが、使い込まれた刀身は剣呑な輝きを放ち、切っ先の鋭さに衰えは無い。

着古した服を泥で汚した少年は倒れたままで頭を振り、黒髪から滴る泥水を散らせて視線を上げる……と、そこに鋭く尖ったツノの先端が迫っていた。

「うぇっ！？」

情けない悲鳴を上げながらも身を捻り、突き出される角を辛うじて避ける。革鎧を掠めた角が硬い岩壁を穿ち、盛大な音と火花を散らす。

慌てて起き上がり、数歩後退して体勢を立て直す少年。汗ばんだ

手をズボンで拭いて短剣を握り直し、改めて視線を真正面へと向ける。

そこには赤銅色の肌をした、異形の怪物が立っていた。

逞しい人間の身体に雄牛の頭を付けたような外見。その頭部には鋭く尖った二本の角が生えている。身長は少年の倍。腕や脚、胴の太さは倍以上もある。

その怪物の名はミノタウロス。少年はこの凶暴な怪物を倒すために、暗くジメジメとしたこの洞窟へと足を踏み入れたのだ。

『ぶおぉぉぉぉーっ！』

ミノタウロスが吼えた。腹に響く重低音が洞窟の壁を震わせる。ちょこまかと逃げまわる少年に業を煮やしているのか、怪物の爛々と輝く瞳には闘争心と怒りの色が見てとれる。

がつっ、がつっ。

岩と蹄とがぶつかる音が断続的に響く。ミノタウロスが地面を蹴る音だ。突撃前の牛が良く見せるこの動作の意味が、そのまま眼前の怪物にも通じる事を少年は知っている。

「この牛野郎……ちょっと優勢だからって良い気になりやがって。見てろよ」

呟いた少年は短剣を両手で握り、腰の横で構えた。片手で使う事しか想定されていない短剣の柄は短く、両手では持ち辛い。しかし贅沢を言える状況では無いだろう。

「さぁ来やがれ、ケリつけてやる！」

少年が叫ぶ。それを合図としてミノタウロスが鼻息を噴き出し、頭を下げて姿勢を低くした……次の瞬間！

「うごぁッ！？」

巨大な岩石と勢い良くぶつかったかのような衝撃。少年は数メートルの距離を吹き飛ばされていた。地面に落下してもその勢いは衰えず、更に数メートルを転がって岩壁にぶつかり、ようやく停止する。

この時になって少年は自覚した。自らの予測が甘かった事を。ミノタウロスの突進がいかに恐ろしい物であるのかを。頭を低く下げた時こそ、牛頭人身の怪物が驚異的な瞬発力と比類なき突進力を発揮し、真の脅威となる瞬間だったのだ。

「ぐぇっ、げほっ！　げほげほげほ……がはッ！」

肺から無理矢理追い出された空気が咳となって少年の口から飛び出す。同時に吐血。汚泥が鮮やかな赤で染まる。

血で汚れた口元を拭おうとして、右腕が妙な方向に曲がっている事に気付く。右足も同様に、膝の下で関節を無視して真横に折れ曲がっていた。他にも左の鎖骨に肋骨数本、指も何本か折れているようだ。

「げはっ！　ぐあ……痛ってえぇ」

ダメージを認識すると同時に、痛みがこみ上げてきた。咳き込む度に全身が激しく痛む。

見ればミノタウロスは既に体勢を整えていた。逞しい両腕を広げて真っ直ぐに立ち、少年を威嚇するかのように角をゆらゆらと揺らしている。その頭部からは、元々二本あった角の間に三本目の角が生え出していた。

マズい、このままじゃやられる。

今すぐ立ち上がり、ミノタウロスの追撃に備えなくては。しかしボロボロになった身体は思うように動かず、無理に動かそうとすれば激しい痛みを返してくる。

「くそっ……」

悪態をつき、少年は付近に目を走らせる。衝突の際に取り落とした短剣を探しているのだ。

しかし松明が照らす範囲に短剣は転がっていない。それ以前に短剣が見つかったとしても、砕けた指では手に取る事さえ難しいだろう。

万事休す。

だが少年は諦めない。諦めるわけにはいかない。

挫けぬ強い意思で痛みを押さえ込み、ミノタウロスの動向に気を配りながら手探りで短剣を探す。汚泥に潜む石コロに指が触れる度に目の眩むような痛みが襲ってくるが、集中を途切れさせるわけにはいかない。再度突進を受けたが最後、そこに待つのは確実なる死なのだ。

「……ん？」

ミノタウロスを注視しながら短剣を探す内、少年はある事に気がついた。

怪物の頭から新たに生えてきた三本目の角。その一本だけが他の二本と形が違っている。見ようによっては十字架のようにも見える形、それは少年が今探している短剣の、柄部分の形状に酷似していた。

「もしかして……」

呟いた思いが、現実の物となる。
短剣だ。少年の短剣がミノタウロスの頭蓋に深々と突き刺さっているのだ。

『ぶほっ、ぶほ、ぶっ……ほっ……』

ミノタウロスの荒かった鼻息が途切れ途切れとなって行く。頭の揺れが大きくなり、身体が傾き、膝が折れる。やがて呼吸が途絶えた時、雄牛の巨体は地鳴りと共に汚泥の中へと倒れ落ちた。

「へっ、へへ……やった！　ざ、ざまぁ見やがれ……げほげほっ！」

咳き込みながらも、血まみれの口元を歪ませる少年。
怪物とはいえミノタウロスも生き物には違いない。頭に剣を突きたてられては無事で済まなかったようだ。倒れた後はピクリとも動かず、せいぜいが時折り手足を痙攣させるだけ。白目を剥き、口からは長い舌がだらしなくはみ出している。

「よし、あとは戦利品を持っ……げほっ、げぼ……げぼっ！」

辛うじて強敵を屠った少年。しかしその代償は大きい。
咳き込む度に吐き出される血は、時間と共にその量を増やしている。食道か、肺か、内臓のどこかに損傷を負ったのかもしれない。

「ちょっと……や、やばいかな……」

治療しなくては。腰のポーチに入れてある治療用の薬を飲みさえすれば急場は凌げるはずだ。
辛うじて動く左手でポーチを探り、細いガラス瓶を探り出す。透明な瓶の中には薄水色の液体が封入されており、揺れ動く度に淡い

光を発する。これが魔法の傷薬、通称『ポーション』。飲めばたちどころに傷を塞ぎ、体力を回復させる。少々値は張るが、荒事に関わる者にとっては必須とも言える薬だ。

「痛っ……よっ、んぐぐっ！」

複雑な紋様が刻まれた蓋を開けようと指先に力を込める。しかし思いのほか蓋は固く閉められており、また折れた指が自由にならない事もあって、なかなか開ける事ができない。

「このっ。開けよ、開け……げほっ！　も、もうちょっと……う、げぼっ」

苦しい。喉に溜まった血に溺れてしまいそうだ。指先が痺れて感覚があやふやになり、靄がかかったように目が霞む。体中の痛みがまるで他人事のように感じ始める。それはつまり魂が肉体を離れ、温かな身体が冷たい肉塊へと変わってゆく瞬間でもあった。

「まずい……死ぬ」

朦朧とする意識の中、少年は死を間近に感じた。いつの間にか視界は暗闇に閉ざされ、指先には何の感覚も無い。一瞬でも気を抜けば深い暗闇の中へと引きずり込まれ、二度と戻ってこられなくなる。その確信がある。

「死ん……で、たまる……」

見えない目を開き、感覚の無い身体を動かして死に抗う少年。ポーションを飲みさえすれば、少しでも回復できれば。

しかし流れ出しす血液と共に抗う力も、強固な意思も、彼に宿る

様々な物が流れ出し、土へ吸い込まれて行く。

「……」

間もなく、少年の思考が途絶えた。意識は深い暗闇の中へ。

そこには何も存在せず、何も感じない世界があった。空気も水も光も闇も無く、上下左右さえ無い、ただの空間だ。この空間で待っていればその内お迎えが来て、いわゆる『あの世』へと連れて行ってくれる。少年の魂はその事を知っていた。

そして魂の知識に違わず、お迎えがやってくる。

流れるようなブロンドヘアーに透き通るような肌。光り輝く純白の翼を背中に備えた、愛らしく幼い少女。彼女こそが神の使い、天使。自ら発する輝きを反射して頭上に浮かぶ光の輪は、彼女が本物である事の証明だ。

彼女は少年のすぐ傍に舞い降り、泥で汚れた頬にそっと触れて優しく声をかけた。

『――ヤマト、大丈夫?』

鈴を転がすような声を心地よく感じながら、少年は思う。お前が迎えに来てくれたのか、と。

少年は天使の少女に見覚えがあった。幼い頃に木の下で出会った小さな天使。可愛らしい顔を涙でぐしゃぐしゃにして泣いていた、あの天使だ。

『いま、治してあげる。あまり心配させないで』

少年の全身を淡い輝きが包み込む。その光は暖かく柔らかな羽毛のような優しさでもって、傷と痛みをそっと払い落としてくれる。

――心配させないで――いつの頃からだろう、その言葉を多く聞

くようになったのは。昔はそんな事、無かったのに。

『ほらヤマト、ぼんやりしてないで、そろそろ行きましょう』

――行くって、あの世か？　そうだな、心残りは色々あるけど、お前が案内人ってんなら……それもいいか。

差し出された天使の手を握る少年。身体を包む光が輝きを増し、目の前が真っ白になる。ふわりと浮き上がるような、それでいて落ちているかのような浮遊感に身を任せ、手を引かれるままに少年は光の中へ――。

「……っ！　ヤ……起きてお願い！　ヤマトっ！！」

真っ白な光から抜けると、そこは薄暗い場所だった。澱んだ空気に腐った水と湿った土の臭い。そして目の前には、見目麗しい天使の少女。

少年の手を握りしめ、必死の声をかけてくる彼女。その手の温もりは先ほどまでと何ら変わり無い。だが彼女は幼い天使の姿では無かった。面影はあるものの、その姿は少年と同程度――少女と呼べる外見をしている。

「う……んぅ？」

「良かったヤマト、気が付いた！　んもう、本当に心配したんだからね！？」

今にも泣き出しそうだった少女の表情が、ぱっと明るくなる。

そうだ、この顔だ。あの時、差し出した手を握り返してきた時と同じ、絶望の中にあって希望を感じさせる笑顔。この笑顔を守りたくて、俺は……。

少年は――ヤマトは、未だはっきりとしない頭で天使の名前を呼

んだ。

「……ノエル」

天使の少女、ノエル。子供の頃に木の下で出会って以来、もう十年の付き合いになる幼馴染。

「俺、どうなって……ここ、あの世か？　天国にしちゃあ薄暗いけど、もしかして地獄に落ちた？」

「もう、何言ってんの。地獄に天使がいるわけないでしょ？」

そっと目元を拭うノエル。

「天国でも地獄でもないわ。ここは洞窟、あなたが倒れてた場所よ」

少し怒りながら、それでいて笑っているような複雑な表情で彼女は続ける。

「ヤマトが一人でミノタウロスやっつけに洞窟へ行ったって聞いて私、飛んで来たのよ？　そうしたら血塗れで倒れてるの見つけて……」

ノエルの背中から生える一対の翼が、ヤマトの身体を包み込むように広がっていた。そこから放たれる光の粒子が彼の痛んだ身体に触れる度、心地よい温かさが生まれ、傷が塞がってゆく。

「こうやって治してたってわけ。どう、少しはマシになった？」

「ああ、随分ラクになってる」

ノエルたち天使と呼ばれる種族は、自らが発する光の粒子を操り

様々な奇跡を起こす。ヤマトの身体を癒すこの力も、その内の一つだ。

あれほど苦しかった呼吸は楽になり、咳も出なければ血も吐かない。折れた手足も少しずつではあるが回復し、元通りになってゆく。

「手足が千切れでもしてない限りは治せるわ……って言ってもまだ時間かかるから。完全に治るまで動かないでね」

治療に集中する為に目を閉じたノエル。その整った横顔をじっと見つめるヤマト。

――そうか、天国じゃ無かったんだな。またノエルに助けられたってワケか。

彼女にばれないよう、ヤマトはそっと溜息をついた。彼が窮地を救われたのは、これが初めてでは無い。これまでに何度も救われ、助けられてきた。その度にヤマトは同じ溜息をつく。また助けられてしまった、と。

「……気を落さないでヤマト。人間がミノタウロスと戦って、命があっただけでも大したものよ」

隠したつもりだったが、見透かされていたようだ。微笑を湛えたノエルの優しい慰めが少年の心を、プライドを薄く削り取る。

――お前が来なけりゃ死んでた。

その本音を押さえ込むヤマト。

勝てると思っていた。勝てない相手では無いと。楽勝とはいかないまでも、なんとか倒せるだろうと踏んでいた。ところが蓋を開ければこの有様だ。結局、今回もまたノエルに助けられてしまった。

「もう、また溜息出てるよ？　そんなに卑屈にならずに元気出して。今回の事、本当に凄いって思ってるんだよ？」

「ああ、わかってるよ」

疎ましげに答えるヤマト。もっと上手くやれたはずなのに、という思いが中々頭から離れない。

しかしノエルの言うとおりだ。卑屈になっていても仕方がない、ミノタウロスと相打ちだって大したものじゃないか。そう考え、気持ちを切り替える事にした。何より、彼女の前でこれ以上みっともない姿を見せたくは無い。

「よしっ！」

パチン、と乾いた音が響く。ヤマトは自らの頬を張って陰鬱な気分を払拭すると、驚き顔のノエルを真っ直ぐに見つめて口を開く。

「悪かったよノエル、サンキューな。来てくれて正直助かった。そろそろ腹も減ってきた事だし、治し終わったらさっさと引き上げようぜ！」

「……うんっ！」

明るく頷くノエル。

「それじゃあ早く治しちゃわないとね。もう外は真夜中だよ」

言って、天使の少女は嬉しそうに翼をばたつかせた。舞い散る光の量が増え、治癒速度がぐんと上がる。ぼんやりとした輝きでしか無かった光は、洞窟の壁面を照らし出して余る程の輝きへと光量を増す。

「今日の晩飯、何食おうかな。この時間じゃ日替り定食も終わってるだろうし」

「それじゃあ私が作ってあげようか？」
「お、そりゃ助かる！　けどよ、前の時みたいな野菜尽くしは勘弁してくれよな」

他愛の無い会話。暖かい輝きが屈託の無い二人の笑顔を包み込む。こんな時間がずっと続けば……。言葉にならない気持ちが心を満たす。

だがそんな想いとは裏腹に、安息の時は終わりを迎えようとしていた。

「ん、なんだ？」

先に気付いたのはヤマトだ。

純白の輝きが照らし出す洞窟の岩壁。そこに何かの影が映っていた。それは不気味に揺らめきながら、次第に大きくなっている。

「どうしたのヤマト？」

小首を傾げるノエル。その時、壁に映る影が動いた。

「ノエル！　後ろだっ！！」
「え……きゃっ！」

ヤマトの警告とノエルが弾き飛ばされたのは、ほとんど同時だった。短い悲鳴と共に華奢な身体が洞窟の壁に打ち付けられ、その衝撃は岩壁を揺らし、細かな砂を舞わせる。

「ノエルっ！」

叫ぶヤマトの眼前には、倒したはずのミノタウロスが立っていた。

牛頭の怪物は倒れた時と同じく、脳天に短剣を突き立てられたまの姿だ。深々と刺さったそれによって満足に首も回せない、そんな状態でミノタウロスは立っていたのだ。

精気に満ち溢れ赤銅色をしていた肌は黒ずみ茶褐色に。瞳は濁った血のような深い赤に染まっている。その姿を一言で言い表すなら……。

「……悪魔」

ヤマトの口からこぼれ出た言葉は、図らずも怪物の本質を言い当てていた。

その悪魔が太い右腕を振り上げる。攻撃の瞬間に備え、体勢を整えるヤマト。しかし腕は横合いへと向きを変える。その方向には、壁を背に力無く倒れている天使の少女。

「やめろっ！」

叫び、飛び出すヤマト。矢のような速度でミノタウロスに体当たりを見舞い、殴り、組み付き、爪を立ててすがり付く。治りきっていない手足や内臓が悲鳴を上げるが、構ってなどいられない。

しかしミノタウロスはそんなヤマトなど全く意に介さず、ノエル目掛けて腕を振り下ろす。二度、三度。振るわれた豪腕は確かな精度でもって、天使を硬い拳と硬い岩の間に挟み、叩き潰す。

打撃音と岩が砕ける音が響くたび、白い羽が舞い散る。

「うわぁぁぁっ！！　この野郎！　やめろ、やめろってんだ糞ウシ！　こっち狙いやがれ！！」

気が狂いそうな程の焦燥感と無力感がヤマトを襲う。どんなに頑張っても、死に物狂いで挑んでもミノタウロスを止めるどころか拳

を逸らす事さえ叶わない。これでは何もせずただ見ているのと同じだ。

「畜生っ！」

ミノタウロスとノエルとの間に割って入ろうとするヤマト。しかし腕の一振りで吹き飛ばされてしまう。薙ぎ払われたヤマトは独楽のように回転しながら宙を舞い、地面に叩きつけられる。たった一発で体中の骨が砕け、何本もの筋が千切れた。声すら出す事ができない。

鬱陶しい雑魚を片付けたミノタウロスはノエルへと向き直り、拳を大きく振り上げる。次は渾身の一発を見舞うつもりのようだ。

それをなんとか阻止しようと、ヤマトは砕けた手足で地面を這いずる。しかし……遠い。ミノタウロスとヤマトの間には距離的にも実力的にも、努力や根性だけでは埋まる事の無い開きがあった。

『ぶおぉぉぉっ！』

雄叫びと共に振り下ろされる豪腕。ヤマトをボロボロにした一発を遥かに上回る速度の、体重が乗った鉄拳。それがノエルに叩きつけられる。耳が痛い程の打撃音と共に空気が震え、岩が砕けて壁に亀裂が走る。

「……っ！」

無事を願う叫びさえも掻き消す爆音。それが一瞬の衝撃波となって過ぎ去った。

振動の収まった洞窟に、闇と静寂が戻る。

拳を振るった体勢のまま、ミノタウロスは動きを止めていた。まるで天使を葬った余韻を楽しんでいるかのようだ。

ヤマトは何もできなかった。いや、彼は死に物狂いで頑張ったのだ。だがそれは、全くの無駄に終わってしまった。悔しさ、後悔、哀しさ……様々な負の感情が津波のように押し寄せる。

そして動き出すミノタウロス。壁から引き剥がすように、拳をゆっくりと引き戻してゆく。その光景から思わず目を逸らすヤマト。拳が退いた場所には、ぺちゃんこに潰され無残な姿となった天使が……そう思ったからだ。

しかし彼の想像は、現実と重ならない。

「んぐぐぐ……ん～っ！」

拳と岩壁の間から漏れ出す純白の光。

「よ……よくも好き放題に殴ってくれましたね！　このくらいで天使が倒せると思ったらっ！……大間違いです！！」

光の中にはノエルがいた。驚いた事に彼女はその細腕でミノタウロスの豪腕を受け止め、押し返している。そして翼を大きく広げたかと思うと、気合の掛け声と共に巨大な怪物を投げ飛ばしたのだ。

地響きが起こり、岩盤が砕けて小石が落ちる。そんな中ふわりと空中に浮かび上がったノエルは、凛とした態度でもって倒れたミノタウロスを指差す。

「あなた、悪魔に魂を売りましたね？　死を逃れる為とはいえ……その行為を見逃す事はできません」

輝きの中で佇むノエル。その優雅な姿は絵画に表される天使そのものであり、世界最強を誇る種族『天使』としての威厳に満ちている。

彼女が羽ばたく度に何本もの羽が空に舞い、光へと姿を変える。

それらは大小様々な光の球となり、暗闇の中をゆっくりと漂う。

「悪魔と取引して安易な力を得た事、恥と知りなさい！」

光の球が輝きを増す。危険を察し、ミノタウロスが真っ赤な目を見開き低い唸り声を上げた。そして体勢を低くして頭を下げ、足で地面を掻き始める。突進の準備動作だ。二人の距離はそう離れていない。気を抜けば驚異的な瞬発力で瞬く間に間合いを詰められ、尖った角で串刺しとなる。

ノエル、気をつけろ。

そう叫ぼうと力を振り絞るヤマトだったが、声は出ず微かな呻きが漏れ出すのみ。しかしノエルはそれに気付き「心配しないで」と呟き微笑んだ。その表情には確かな実力に裏打ちされた絶対の自信が見て取れる。そして――。

『ぶおぉぉおっ！』

ミノタウロスが突進を開始した。一瞬、姿が掻き消える程の急加速でもって、ノエル目掛けて真っ直ぐに突き進む。心臓が一回脈打つ程の間に、その間合いは回避不可能な物へ。

「ノエルっ！！」

全く避ける素振りを見せない天使の少女へ、ヤマトの喉奥から声が絞り出された。その声に呼応するようにノエルの周囲に漂う幾つもの光球が、鋭い槍に形を変える。

「悔い改めなさい！」

放たれる光の槍。それはまるで、光の雨。

夜空の星が全て飛来したかのように、無数の輝く槍が一斉にミノタウロスへと襲い掛かり、幾重にも貫いく。その速度は彼の怪物が見せた突進などとは比べ物にならず、真なる光の速さ。人間の動体視力では輝く軌跡を追うのが精一杯だ。

漆黒の巨体を貫いた光の槍は、軌跡を残しつつ地面や壁に当たって跳ね返り、二度、三度と怪物の身体を貫き通す。それが全ての槍で繰り返され、やがてミノタウロスの姿は大きな光の球に包まれ、覆い隠されていた。

「神よ……罪深き者を許したまえ」

ノエルの言葉に見送られるようにして、高く、長く、ミノタウロスの断末魔が洞窟内に響く。

その雄叫びが反響を終え、洞窟内に静けさが戻る頃、光の球は弾け散るように消え、その場には真っ白に燃え尽きた灰のような物だけが残る。これが悪魔に魂を売り、天使にケンカを売った者の成れの果てだ。

傷付いた身体を庇いながら、ヤマトは風に流され消えてゆく灰を複雑な思いで見つめていた。

第二話：ダメ人間と優秀天使

――翌日。

抜けるような青空に日は高く昇り、人々は食い扶持を求め労働に精を出す時間帯。街に何件かある食堂の中でも、値段とボリュームには定評のある店にヤマトはいた。

目の前には焼きたてパンとカットチーズが並び、香ばしい芳香でもって『私を食べて』と誘いをかけている。しかし彼はそんな誘惑に目もくれず、ジョッキになみなみと注がれたミルクをちびりちびりと舐めるように味わうのみ。

ヤマトは、酷く疲れているのだ。と言ってもミノタウロス戦の疲れが残っているわけでは無い。疲れの発生源が現在進行形で目の前に居るからだ。

「ちょっとヤマト、聞いてるの？　昨日のミノタウロス退治、あなた一人じゃ受けられないレベルの依頼だったよ！？」

可愛らしくも厳しい叱責の声が食堂内に響く。

腰に両手を当てヤマトの前に仁王立ちするのは天使の少女ノエル。輝く金髪に純白の翼、ゆったりとした白いローブを纏った姿は優しい天使のイメージそのものだ。しかし、声を荒げる度に頭上で輝く天使の光輪が光を強めるのは、彼女が本気で怒っている証拠だったりする。

「ヤマト！　き、い、て、る、の！？」

「聞いてるよ、うるさいな……」

言葉のリズムに合わせてバシバシと机を叩くノエル。パンとチーズもそれに合わせて跳ね踊る。いい加減無視する事もできなくなっ

て、ヤマトが渋々といった様子で口を開いた。

「別に良いだろ？　何も悪い事したワケじゃねぇし、冒険者規定だって違反してないぜ。何より、ちゃんと依頼達成してる。結果オーライだ」

「良くない！！」

大声と共に、ばんっ、と勢い良く机へ叩きつけられる一枚の羊皮紙。紙には昨日倒したミノタウロスのイラストと共に、生息場所や倒した際の懸賞金、そして注意事項など様々な事柄が書かれている。

「これ、昨日ヤマトが受けた依頼の募集要項よ。ここ、ちゃんと見た？」

ノエルが指差した先には『推奨合計レベル２０以上』と書かれている。

「書いてある意味、わかる？　これはね、一緒に戦う仲間のレベルが、合計２０以上の方にオススメです、って意味なのよ？」

「わかってるよ、そんな事くらい」

「じゃあヤマト、あなたの冒険者レベルは？　組合から認定されてるレベルはいくつ？」

腰を曲げ、ヤマトへ顔を近付けるノエル。パンやチーズとは性質の違う良い香りが少年の鼻腔をくすぐり、屈んだ事によって広がったローブの胸元から、白く柔らかな膨らみが見えそうになっているのだが……。

「あなたのレベルは、い、く、つ、で、す、かっ！？」

急かす言葉に合わせ、ばんばんっと机を叩くノエル。胸元を覗き込んでいる場合では無いようだ。

「よ……4だけど」

「でしょう!?　じゃあわかるよね、レベル4と20の違い！　5倍よ、5倍！　差は16！　これって猫と虎くらいの差なのよ、わかってる!?」

レベルとは、個人の総合的な能力を簡略化して数値に置き換えたものだ。一般人の平均をレベル1とし、経験を積み、功績を重ねて周囲に実力を認められるたびに数値が上昇して行く。つまり大雑把に言えば数字が大きいほど強い、という事になる。

「でもな、絶対に20以上じゃなきゃダメってワケじゃ……」

翼をはためかせて強弁するノエルに反論しようと口を開くヤマトだったが……。

「ダメよ!」

一喝され、口を閉じる羽目になる。

「ヤマト、あなた昨日ミノタウロスと一対一で戦って、勝てそうだと思った?　ヤマトはレベル4だけど、それは数字上の話だけで、本当はレベル20相当の実力があるの?」

真っ直ぐな瞳で見つめられ、ヤマトは言葉に詰まる。

無茶をしているという自覚はあった。だが推奨レベルがいくつだろうと、相手がミノタウロスであれば善戦できる自身がヤマトにはあったのだ。十回戦って、七回くらいは……いや、五回くらいなら

勝てるだろうか？　運の要素が絡むが、勝てない相手ではない。

「確かに俺はレベル２０の奴ほど強く無いけどさ、牛が相手だったら十分勝ち目は……」

「あのねヤマト。レベル２０の人はね、十回やれば十回勝つの。それが『レベル２０のくせに弱い』って言われてる人だとしても、レベル２０に認定されてる人なら、ミノタウロスに危なげ無く勝っちゃうの」

思わず口を噤むヤマトに、ノエルは優しく諭すように語り掛ける。

「冒険者への依頼って、色々危ない事が多いでしょ？　何かと戦ったり、危険な所へ行ったり。だから推奨レベルの所には確実に依頼をこなせるだろうってレベルが書いてあるの」

昨日の自分を振り返るヤマト。もしノエルが来なければ、無茶な依頼を受けて失敗した馬鹿な冒険者として屍を晒す羽目になっていただろう。

「別に推奨レベルが絶対だ、って言ってるわけじゃないの。それにヤマトが弱いとか、そういう事を言いたいわけでも無いの。でもね、わざわざ推奨されてるって事は……」

「はいはい、わかった、わかったよ。人間風情が無茶すんなって事だろ？　いちいち説教臭いんだよ」

天使の至言を口うるさいと切って捨て、ヤマトは強引に会話を終了させた。似たような事を毎回のように言われているのだ。いい加減、聞き飽きる。

「もう、またそうやって卑屈になる……」

「わかったって言ってるだろ。昨日は無茶しすぎた、反省してるよ」

また口を開きかけたノエルだったが、ヤマトの台詞に「全く、もう」と溜息混じりに呟くと、腰のベルトポーチを開いてゴソゴソと中を漁り始める。

「本当に次は気をつけてよね……じゃあ、はいコレ」

ノエルが取り出したのはコブシ大の革袋だった。机の上に置かれたそれは、じゃらりと金属音をさせて形を変える。中身はどうやら銀貨のようだ。

「カネか……どうしたんだよコレ？　結構な額だぞ。盗んだのか？」

「そんなわけ無いでしょ！　ミノタウロス退治の報奨金よ。昨日の内に冒険者組合で受け取っておいたの」

冒険者組合、報奨金。両方ともヤマトにとっては聞きなれた言葉である。

ヤマトやノエルは一般に『冒険者』と呼ばれる者たちの一人だ。様々な危険が予想される事柄を仕事として請け負い、その報酬として金銭を受け取り生活の糧としている。

そして冒険者が仕事を請け負う際に発生する金銭のやり取り、仕事内容の確認などといった事務的な事柄を統括し、取り仕切っているのが『冒険者組合』だ。

冒険者を名乗る者は全員この組合に所属し、組合の定めたルールに則って活動している。

「はい、ヤマト。あなたと私で半分こね。回復してあげたんだから、それで良いでしょ？」

「俺はいいよ。お前が全部取っとけ」

そう言うとヤマトは、革袋をフォークの先で器用に持ち上げてノエルへと投げ渡す。胸でそれを受け、きょとんとした表情でノエルは問い返した。

「どうして？　ヤマトが受けた依頼なんだから、本当なら全部ヤマトが取ったって良いんだよ？」

「バカ言え。一緒に倒したってんならまだしも、結局あの牛を倒したのお前じゃねえか。俺は何にもして無いんだ、報酬なんか貰えるかよ」

「えぇ～！？　確かにトドメは私だったかもしれないけど、ヤマトだって頑張ったじゃない。そんな意地張らなくても……」

がたん、と机を揺らして立ち上がるヤマト。どこへ行くのかを聞こうとするノエルには構わず、ごちそうさまと言い放って店を出る。その後を追いかけようとしたノエルだったが……。

「ちょっと待ちな、天使のお譲ちゃん」

食堂の主人に呼び止められる。

「食い逃げは困るな。彼氏のメシ代、代わりに払ってくれるかい？」

「か……彼氏じゃありません！」

抗議の声を上げるノエルを尻目に、ヤマトの姿は街の雑踏へと消えていった。

第三話：湖の魔物（前書き）

多少ですが残酷な描写がございます。苦手な方はご注意下さい。

第三話：湖の魔物

街を離れ、街道を行くこと二日と半日あまり。そこから道を逸れ、山林へと分け入る。枝葉を掻き分けて進めば、人の手が入った雑木林は早々に終りを告げ、そこから先は森々たる緑色の領域だ。

「もうすぐ目的地ね。そこの丘を越えたら見えるんじゃないかな？」

正午過ぎ、草いきれが蒸し暑い森の中。少女は、背中の白い翼を優雅に羽ばたかせてそう言った。

天使の少女、ノエル。

彼女が羽ばたくたびに振りまかれる光子は柔らかく温かな光を放ち、不快な湿気を優しく押しやって涼を成す。

「ふぅ……やっとかよ。結構遠かったな」

ノエルの隣に立ち、額の汗を拭うのは黒髪の少年、ヤマト。

背負っているバックパックがやけに大きく見えるのは、彼が小柄な為だけではない。空中からの偵察と道案内を兼ねるノエルの負担を減らす為、二人分の荷物を背負っているからだ。

「こんな事なら、もっと荷物絞ってくりゃ良かったぜ」

「頑張ってヤマト。あと少しだよ」

低空をホバリングして木々の隙間をゆるゆると進みながら、汗だくのヤマトへと声援を送るノエル。翼をこちらに向けて送ってくれる風の心地良さが、少年に歩く気力を呼び起こす。

「よっしゃ、行くかぁ！」

踏み出す足に力を込めて、腐葉土に包まれた地面を蹴る。
一歩一歩、確実に。足下を良く見て、滑りそうな所や崩れそうな所は避け、立ち止まる事なく、けれど無理はせず、無心でひたすら両の脚を出し続ける。

「見えたよ、ヤマト！」

明るいノエルの声に顔を上げてみれば、そこは山の頂。いつの間にか登りきっていたのだ。そして眼下に広がるのは一面の蒼。濃い緑の中にあってその蒼色は鮮やかに映え、眼に眩しい。
それは湖だった。四方を山に囲まれた窪地に水が貯まり、大きな湖になっているのだ。どうやらまだ新しいようで、背の高い木が水の中からにょっきりと頭を出しているのが見える。
大きく息を吐いてヤマトは荷物を降ろし、背伸びをして肩のコリを解す。そして懐から羊皮紙を取り出すと、書かれている内容と深い蒼を湛える湖とを見比べた。

「こいつが今回の依頼対象か……でかいな」
「信じられないよね、この湖が全部スライムだなんて」

スライム。
ゲル状の不定形生物である。性質、生態は様々だが総じて知能は低く、暗くジメジメした所を好む。熱や冷気に弱い事が多い反面、物理的な攻撃に対しては高い耐性を見せる。
そのスライムが大量発生しているから排除して欲しい――これが今回、二人が受けた依頼の内容だ。

「物理攻撃に高い耐性ねぇ。厄介だよなぁ」
「切ったり叩いたりしてもやっつけられないって事だもんね」

「量も量だしな……」

話しながら丘を下り、湖のようなスライムに接近する二人。
最初こそ慎重に接近を試みていたものの、手で触れられる程にまで近付いてみても何の反応も見せないスライムの鈍感さに拍子抜けしてしまう。

「スライムと見せかけて、実は普通の湖なんじゃねぇか？」

ヤマトが手近にあった木の枝を、青色の水面目掛けて投げ入れた。
ちゃぷ、と小さな水音を立てて水面に刺さる木の枝。波紋が立つような事は無く、水しぶきも上がらない。だがしばらく見ていると、枝の周辺に細い触手が何百、何千と立ち上がり、枝を幾重にも絡め取って泉の中へと引きずり込んでゆく。

「うぁっ……何も知らずに水に入ると、飲み込まれて溶かされちゃうのね」

白煙を上げて溶ける枝を見ながら、気持ち悪そうに呟くノエル。
周辺に気を配って見れば、一部だけが溶けた木の幹や動物の死骸が点在するのがわかる。
本能の赴くまま、満腹になるまで生物と呼べるもの全てを食べ続ける。それを獲物の豊富な森林で繰り返し、このスライムは湖と勘違いされるようなサイズにまで成長したのだろう。
その摂食行動や成長自体は、自然界の営みとして間違っているとは言えない。しかし肥大化したスライムを警戒してか山林からは獣が消え、地中の栄養が失われた事により、樹木の立ち枯れ被害も出ている。近隣の安全や秩序を考えた場合、このスライムを放っておくわけには行かない。

「おいノエル。俺は火で炙ってみるから、お前は……」
「うん。神聖魔法で攻撃してみるね」

頷き、ノエルは純白の翼から光の粒子を放ち始める。
神聖魔法――先日の洞窟で傷付いたヤマトを癒し、ミノタウロスを葬り去った天使の特殊な能力の事だ。攻撃に限って言えば、神に仇名す存在に対して高い威力を発揮し、逆に神への信仰を欠かさぬ者には効果が薄いという特徴がある。守りや癒しについては、その逆だ。

「例の牛みたく、悪魔に魂売ってりゃ一撃必殺なんだろうけど……難しいだろうな」

荷物から火口箱を取り出し、慣れた手付きで火種を作り始めるヤマト。害のある存在ではあるが、一応スライムも自然界の生き物。ノエルの神聖魔法が効果的であるとは思えない。

「どうだ、ノエル？」

火種を松明に移し、輝く天使を眩しそうに見やる。するとノエルは力無く首を横に振り「見てて」と湖面を指差した。
ヤマトが見ていると、天使の翼より生み出された無数の光球が槍と化し、波一つ無い群青色の湖面に次々と叩き込まれる。先日、ミノタウロスが誇った鋼のような肉体をいとも容易く貫き、焼き尽くした光の槍だ。
しかし今は湖の表面を薄く削るのが精一杯。ある槍は水風船が割れるような音と共に弾けて消え、ある槍は簡単に弾かれて何処かへと飛び去った。そして残ったのは、これまでと大差無く佇む湖の如きスライムだ。

「神よ、罪深き者を許……」
「倒しても無いのにキメ台詞言ってんじゃねぇよバカ。こっち手伝え」
「……なによ、バカじゃないもん」

無粋なちゃちゃ入れに余韻を邪魔され不満気なノエルだったが、すぐヤマトと合流し、作業に加わる。

「んじゃ、出発前の打ち合わせ通りで頼む」

神聖魔法が通じないとなれば、頼りになるのは炎だ。全ての物を平等に焼き尽くす、破壊の権化。進化の過程で人が手に入れた、最も強力な武器とも言われている。

ノエルに手渡される油壷と枯木、枯葉。熱に弱いスライムを炎でもって片っ端から炙る、この手の案件では定番となっている作戦をヤマトは実行しようと言うのだ。

「準備できたよ、ヤマト。指示通りだと思う」

空から枯れ木を運び、油を撒いたノエルがヤマトの元へと戻る。準備は整った。あとは延焼しないように森から距離を置き、逃げられないよう四方から火を掛ける必要があるのだが……。

「向こう岸、私が点火してこようか？」
「大丈夫だ、まあ見てろよ」

申し出を断り、ヤマトが松明を振りかぶる。彼が見つめる先には、こんもり盛られた細い枯れ木と、そこから湖の周囲を囲むようにして繋がる油まみれの木の葉たち。

「そらよっ！」

掛け声と共に松明が弧を描いて飛び、盛られた枯れ木に命中した。
その瞬間、閃光のように炎が瞬いたかと思うと獣が走るような速度で枯葉に燃え移り、見る間に湖岸全てが炎に包まれる。
もうもうと立ち上る真っ赤な炎、灰色の煙。発生する熱量は凄まじく、離れていても肌がヒリヒリと痛む。

「凄いねヤマト！　大成功だよ！！」

ヤマトの鮮やかな手際に、感嘆の声を漏らすノエル。実際ベテラン冒険者も舌を巻く程に、その仕掛けは見事だった。
揮発する油を枯葉で押し止め、燃えやすい枯れ木を導火線代わりに広範囲に炎を広げる。ヤマトも他の冒険者から仕掛けは聞いていたが、試すのはこれが初めて。だが思いのほか上手く行き、会心の手応えを感じていた。

「我ながら上出来だ！　この火力なら日暮れまでにはケリつくだろ」

満足げに頷き、巨大なキャンプファイヤーと化した湖から離れるヤマト。あとは森へ燃え移らないように注意を払いながら、時が流れるのを待つだけだ。

「じゃあ、野営の準備しておくね？」

言って、ノエルが荷解きを始めた。スライムの最後を看取った後、ここで夜を明かしてから山を下ろうという算段だ。
そうしよう、と頷いたヤマトの耳に、バチバチと肉が爆ぜるような音が聞こえて来た。そちらへと目を向けてみれば、湖面の如きスライムが泡立ち、苦しげに波打っている。時折り何本かの触手が現

れては炎に焼かれ、縮れて消える。それを繰り返しながら、スライムは徐々にその体積を減らしていた。

その姿に、感傷を覚えるヤマト。生きようと必死にもがく様は、遥か高みの花を得ようと遮二無二手を伸ばす自分と重なって見える。

スライムだって生き物なのだ。無理に殲滅しなくても、ある程度小さくなった所で逃がしてやれば……。

そこまで考えて、ちらりとノエルの様子を窺う。彼女はなんと言うだろう？

命を大切に思うのは良い事だと同意してくれるだろうか？　それとも冒険者として『スライム退治』という依頼を確実にこなすべく、最善を尽くそうと言うだろうか？

悩む間に時は過ぎる。日は傾いて山に掛かり、陽光は白色から橙色へ。山林を燃えるような色に染め上げる。

「なあ、ノエル……」

「ん、どうしたの？」

火が小さくなってきた。ここで油を追加投入しなければ、スライムは小さくなりつつも生き延びるだろう。そしてまたいつか巨大に成長して、人々の生活を脅かすのだ。

だが、そんなのはずっと先の話。それならば……。

「このスライムなんだけどよ……」

ヤマトがそこまで言った時だ。

びゅるっ、と液体が波打つ音がした。

何の音かと悩む間も無く、次の瞬間にはノエルの身体が無数の触手によって絡め取られる。

「んぅ～っ！？　むぐぐっ！」

スライムだ。炎に焼かれて悶えるスライムが、これまでの緩慢な動きからは考えられない素早さで触手を伸ばしたのだ。
両手両脚、そして翼までも封じられ身動きの取れないノエル。スライムは顔にも張り付き、口を開ける事さえ出来ない。
水溜り程の大きさにまで縮んでいたスライムの、どこにこれほどの余力があったのか？　ノエルに駆け寄るヤマトの視界の隅で、ごぼごぼと沸き立つようにして地面から吹き上がるゲル状の生物。
スライムは炎に焼かれて体積を減じたのでは無かった。熱を嫌い、地面の中に潜っていたのだ。

「畜生！　ノエルから離れやがれ、この野郎！」

ノエルに張り付き、手繰り寄せようとする触手。それ掴み、力任せに引き剥がそうとするヤマト。しかしスライムの体表はヌルヌルと滑る上、千切れたと思ってもすぐに再生してしまう。
掴み取っては捨て、捨てては掴む。必死で繰り返すヤマトだったが、スライムは減るどころか徐々に触手を増やし、ノエルの身体を自らの中心へと引き寄せて行く。
やがてヤマトの手から、白煙が上り始める。スライムに触れる部分の皮膚が溶け始めているのだ。既に掌は爛れて剥け落ち、体液の飛び散った肘までの皮膚はボロボロになっている。そして、それはノエルも同じだった。触手に絡みつかれた部分から白煙が上がり、穴だらけになった衣服が朽ちた木の葉のように舞い落ちて行く。

「くっそおぉぉ！！」

叫び、ヤマトは何度も何度も触手を引き千切る。両手の肉は溶けて見るも無残な有様となり、動かす度に激しい痛みが襲う。だが、気にしている場合では無い。

勝利を確信し、弱者を哀れむ心が招いた危機。情けを掛けようなどと考えず、一気に焼いていれば違った展開があった筈だ。自分の甘さ……油断と慢心が、守るべき少女を危機に陥れたのだ。

「ノエルっ！　ノエルッ！！」

「……！　……っ！」

叫ぶヤマトの声が聞こえているのか、全身をスライムに包み込まれたノエルではあったが、何かを伝えようと必死に口を開いている。だが彼女を包むスライムが邪魔をして、その意図を全く汲み取る事ができない。

「また……こんなっ！　こんな事になるのかよ！！」

ミノタウロスの時と同じだ。悪魔に魂を売り、力を増したミノタウロスに全く歯が立たなかった自分。必ず守ると……二度と傷付かぬように守ると誓ったのに……手も足も出ない。

スライムに包まれたノエルの身体から噴出す白煙。それが周囲の粘液と混ざって濁り、もう彼女の姿は殆ど見えない。更には濁りもろとも、スライムの奥へ奥へと沈み込んで行く。

このまま何もせず、何も出来ずただ見守る事しか自分には出来ないのか？

「ンな事……俺が許せるもんか！！」

スライムの元を離れ、走り出すヤマト。彼は野営予定地に置かれた油壷を手に取ると、頭上に掲げて叩き割った。真っ黒な油が周囲に飛び散り、独特の臭気が満ちる。当然、ヤマト自身にも油は降り掛かった。

その油塗れの状態で彼は、火種に手を伸ばす。

赤熱した木炭に指先が触れた瞬間、少年の身体を真っ赤な炎が包んだ。

「がぁぉぉぉッ！！」

叫び声とも悲鳴とも付かぬ絶叫を上げるヤマト。灼熱の炎は痛んだ肌を舐め、髪を燃やす。息を吸えば喉が焼かれ、目を開けば眼球が爛れた。

だが彼は痛みを堪えて走り出す。全く怯む事なく、全力で走る。泉の底へと沈みつつある天使の下へ。

「ノェ……ッ！」

名を呼ぼうにも酸素が足りず、声が出ない。だが少年は必死で叫び、手を突き出した。燃え盛る手をスライムの中へ。スライムは熱を嫌う。これならばノエルにまで届くはずだ！

手を前に出し、身体ごとスライムに埋るようにして、一歩、更に一歩と奥へ踏み込んでゆくヤマト。高熱の油が爆ぜる音がして粘性の液体が道を開けた……その瞬間、指先に感じる柔らかな感触。間違い無い、これは……！

「ノエルっ！！」

頭からスライムの中へ突っ込み、ヤマトは柔らかな感触を握り締める。すると向こうもヤマトの手を握り返して来た。まだ彼女は生きている！

スライムの海の中、無心で柔らかな感触を手繰り寄せるヤマト。そして大切な存在を、両腕の中にしっかりと抱きしめた。

柔らかく、温かい、心休まる感触。二度と離すものか、たとえどんな事があったとしても。ヤマトが心に誓った……その時だった。

「少年！　動くなよ！！」

野太い声が辺りに響いた。そして突然の風切り音。次の瞬間には、宙に放り出される感覚。

気が付けばヤマトとノエルはスライムの体内から、乾いた地面の上に投げ出された。

一体、何が起こったのか？

痛む両目をこじ開けた、ヤマトの視界に映った物。

それはサイコロのように寸断されたスライムと、剣を構えた複数の人影だった。

第四話：戦いの夜に（一）

暗闇の中、オレンジ色の炎が揺れる。その輝きの中で楽しげに踊るのは、火の精霊たちだろうか？　灼熱の炎は精霊と共に風に乗って舞い、自らを囲む人々に光と温もりを与え続ける。

「本当に助かりました。ありがとうございます」

何度目なのかもわからないが、ノエルがぺこりと頭を下げた。絹糸のような金髪が炎を照り返して赤銅色に輝き、天使の光輪が淡く明滅する。

「いやいや、礼には及ばないよ。困っている時はお互い様……冒険者の教則本にも、そう書いてあるじゃないか」

ノエルの声に応えたのは、彼女と同じく金髪の青年だった。白銀の鎧に身を包み、腰には長剣を携えた長身痩躯の姿。ヤマトやノエルと同じく、彼も冒険者であるようだ。

歳はヤマトよりも少し上……二十歳程に見える。細面で整った顔付きからは華奢な印象を受けるが、身に付けている武具は重厚で、貧弱な者では動く事もままならないであろう重量級の逸品である事が窺える。

「ほら、干し肉が温まったよ……といっても、ノエルさんは天使だから肉は食べないのかな？」

金髪の青年が、焚き火で炙っていた保存用の肉を差し出した。

ここはスライムが居座っていた場所から少しだけ山を登った野営地。眼下に見える深く窪んだ地面が、つい先程までスライムが溜ま

り湖のように見えていた場所だ。
そのスライムが跡形も無く消え去り、日も落ちた今。彼らは焚き火を囲み、静かな夜を過している。

「ありがとうございます。でも、せっかくですが私は遠慮しておきます……ヤマトはどう？」

問いかけたノエルに、隣に座るヤマトは腕を十字に組んで意思を表した。食べたくても食べられない……溶解液と炎で傷めた喉が回復していないのだ。

「全くもう……無茶ばっかりするから」

そう言って口を尖らせ、ノエルは翼から舞い散る光の量を増やした。光は次々にヤマトへと降り注ぎ、熱傷でボロボロになった肌や髪、そして骨が見える程にまで溶け落ちていた両手をゆっくりと癒して行く。

「知ってるでしょ？　私は天使なんだからスライムの溶解液くらいなら耐えられるし、じっとしてれば息しなくても平気だって」

咎めるように言うノエルに、不満気な表情のヤマト。あの時は無我夢中で……と言いたかったが、喉が痛く喋るのも辛い。それに、そんな言い訳をするのも恥かしい。

「溶け難い鉄の棒とかを熱して、ゆっくり突き出してくれたら十分なのに……」

反論が無いのを良い事に、ぶつぶつと小言を続けるノエル。満身創痍のヤマトとは違い、スライムに全身を取り込まれたはずの彼女

は全くの無傷だった。絶対無敵との呼び声高い天使の防御力は伊達ではないのだ。

だが強いて言うなれば……。

「けほっ……よく言うぜ。素っ裸で目ぇ回してたクセに」

やっと喋れるまでに回復したヤマトが、イヤミたっぷりの口調で返した。

天使の防御能力も自分の身体以外の部分……身に付ける服にまでは及ばないようだ。スライムから助け出された時、彼女の服は全て溶け、一糸纏わぬ姿となっていた。スライムに絡みつかれた際に濛々と噴出していた白煙は、服が溶ける事によって立ち上った煙だ。現に彼女は今も素肌の上に毛布を羽織っているだけという、少々恥かしい格好を強いられている。

「し、仕方ないでしょ！？　服はどうしようもないんだもん！　それに目を回してたんじゃなくて、あれは……！」

「はいはい、良いモン見せてくれてありがとよ」

頬を染めて怒鳴るノエルをサラリと黙らせ、金髪の青年へと向き直るヤマト。

「ありがとな、マジで助かったぜ。俺はヤマト。悪ぃんだけど、もう一回アンタの名前聞かせてもらって良いか？」

さっきは耳をやられてて聞こえなかったんだ。そう言って苦笑するヤマトに、金髪の青年は快く頷いて口を開く。

「僕はサークス。さっきも言ったんだけど、礼には及ばないからね？」

サークスと名乗った金髪の青年はゆるやかに微笑み、右手を差し出した。ヤマトもこれに応え、二人は握手を交わす。

華奢な外見に反しサークスの掌は硬く力強かった。弛まぬ修練の痕跡が透し見える、鍛え上げられた冒険者の手だ。これまでに数え切れぬ程の経験を積み、修羅場を潜って来たのだろう。

目に見える経験値とも言える掌を前に、自分の両手を思い苦笑するヤマト。ノエルによって頻繁に癒される手のひらは、傷跡も少なく柔らかい。

多少は傷跡も残った方がベテランっぽくてカッコイイかもしれない――そんな事を考えていたヤマトに、サークスが続けて話しかけてきた。

「ヤマト君。もし、どうしても礼を言いたいというのであれば、相手は彼だ。だってキミたちを助けたのは僕じゃなくて、そっちの――」

サークスが視線で示した先。虫の声さえ聞こえぬ原生林の暗闇から、大きな人影が姿を現した。

身長は二メートル程。全身を真っ黒な体毛に覆われた、二本足で立つ狼。それが人影の正体だった。

彼は厚手の衣服を纏い、簡素な板金鎧を着けて、手には薪にするつもりだったのだろうか？　乾いた枝を何本か持って、真っ直ぐな瞳でヤマトとノエルの二人をじっと見つめている。

「彼の名前は太郎丸。僕の仲間で、種族は見ての通り人狼だよ。この辺りじゃ珍しいよね？」

サークスの紹介を受け、小さく頭を下げる太郎丸。人狼と呼ばれる種族の頭部は犬と変わらない為、鼻先をくいっと下げただけにも

見える。

「二人が気を失ってる間、彼には周辺の索敵を頼んでたんだ。人狼は聴覚や嗅覚がとても鋭いから……で、どうだった太郎丸？」

「問題無い」

短く答える太郎丸。無愛想とも感じられる彼の態度に、サークスが苦笑しながら補足する。

「気を悪くしないでくれ。太郎丸はいつもこうなんだ。必要な事以外、あまり喋らない。だから驚いたよ、キミたちを助ける時に出した大声には」

サークスに言われ、一時間ほど前に聞いた声を思い出すヤマト。スライムの腹にまで響いた、野太い声。その持ち主が太郎丸だったのだ。

――少年、動くなよ！

スライムに飲まれかけていた時だ。そう叫び、森の中から飛び出して来た太郎丸。彼は一足飛びに間合いを詰め、居合い切りの要領で腰の曲刀を抜くと同時にスライムを叩き切っていた。

刃が閃く事、数回。その度に豆腐でも切り分けるかのように、スライムが細切れの立方体へと姿を変える。そしてそれら立方体が地面に落ちるよりも速く、太郎丸はヤマトと、彼が掴んで離さないノエルを、スライムの腹から引っ張り出した。

その時の様子を、溶けかかった瞼の隙間からヤマトは見ていた。

スライムをバラバラに切り裂きながら、自分たちには傷一つ負わせない太刀筋の正確さ。二人の人間を軽々と引っ張り上げる強靭な肉体、そしてバランス感覚。どれもこれも人間離れしており、到底自分には真似出来ない離れ技だ。

そして更に……。

「太郎丸、どけっ！」

遅れること数秒。駆けつけたサークスが叫ぶ。

その声に素早く反応し、ヤマトとノエルを抱えたまま飛び退る太郎丸。

「おぉぉぉッ！！」

サークスは抜き放った白銀の長剣を天に掲げ、雄叫びと共に力を込める。すぐさま剣は不思議な淡い光を帯び、刃からチリチリと電光を放ち始めた。ぎゅっと大気が押し固められて呼吸が重くなり、剣の輝きに光が集まるにつれてサークスの周囲から光が薄く、闇が濃くなって行く。

そして――。

「魔物よ、塵芥に還れッ！　奥義……滅空！！」

叫び、サークスが剣を横に薙ぐ。すると一拍を置いて、剣の軌跡から雷光を纏った衝撃波が扇状に解き放たれた。触れる物全てを粉々に砕き、灰燼に帰すサークスの秘技、光波・滅空刃。発生方向とは真逆に退避しているヤマトたちでさえ、全身を叩かれたかのような衝撃を感じる、それ程の威力だ。

小石を粉砕し、残り火を掻き消して爆音と共に広がる衝撃波。矢のような速度でスライムへ到達したそれは、既にバラバラとなっているスライムを触れる端から粉微塵に砕いて、消滅させて行く。スライムに再生の猶予も、逃げ出す暇さえも与える事無く、衝撃波の通り過ぎた所は綺麗さっぱり何も無い空間と化す。それこそが技名「滅空」の由来だ。

「まだまだっ！　欠片も残しはしない！」

剣に力を溜め、連続して衝撃波を放つサークス。凄まじい破壊力の前に、あれほど大量に居たスライムが、見る間に殲滅されて行く。

自分では、手も足も出なかった強敵が、いとも容易く。

助け出されたヤマトの胸を、例え様の無い無力感が嬲る。ミノタウロスと戦った時に感じたのと同じ、無力感が――。

「……マト？　ヤマト、どうしたの？　ほら、太郎丸さんにお礼くらい言いなさいよ」

ノエルに呼ばれ、我に帰るヤマト。どうやらボンヤリと考え込んでしまっていたようだ。

わかってるよ、うるさいな。ノエルにはそんな憎まれ口を返しておいて、太郎丸へと右手を差し出す。

「助かったぜ、ありがとうな」

「……」

握手こそ受けたものの、表情一つ変えずむっつりと黙ったままの太郎丸。だがヤマトには少しだけ、彼が優しげに目を細めたように見えたのだが……気のせいだっただろうか？

「さて、自己紹介も終わった所で夜も更けてきた。そろそろ寝る準備をしよう」

タイミングを見計らったサークスの提案に、異論を挟む者は誰一人として居なかった。

第五話：戦いの夜に（二）

冷たい夜風が頬を撫でる。

鎧の上から纏う防寒、耐熱効果のあるマント、通称サーコートには夜露が纏わり付き、身を捩る度に珠となって滑り落ちて行く。昼間は汗ばむほどの陽気だったのだが、この季節の山間部、昼夜の気温差は思いの他激しいようだ。

冷えた指先で小枝を掴むと、ヤマトは小さくなった焚き火を掻き混ぜて、暗い空を見上げた。夜明けまでは、まだ少し時間がありそうだ。

彼の側では毛布に包まったノエルが小さな寝息を立てている。その近く、木にもたれて剣を胸に目を閉じるのはサークスだ。

野営の際には交替で見張りを立てて睡眠を取るわけだが、今はヤマトが見張りの順番。深夜から夜明けにかけての、最も辛い時間帯の見張りである。

虫の声さえ聞こえない静かな夜。薪の爆ぜる音がやけに大きく感じられる。

「虫やら何やら、スライムが片っ端から食っちまったからか？」

誰に問うでもなく、静けさへの疑問を口にするヤマト。その声に応えるのはノエルの安らかな寝息だけ……そう思っていた。

「いや……警戒し、身を潜めているだけだ」

背後から、押し殺した低い声が掛けられる。

驚いて振り返ると、そこに居たのは漆黒の毛並みを持つ人狼の姿、太郎丸だ。さっきまでは索敵に出ていたのだが、いつの間にか戻っていたらしい。

太郎丸は黙ってヤマトの隣に座ると、小さくなった焚き火へ乾いた枝を足した。索敵ついでに拾ってきたのだろう。

「お、サンキュ。これで朝まで大丈夫だな」

ヤマトの声に頷く太郎丸。彼が見張りをする順番はヤマトの一つ前……つまり既に見張り番を終えている。だが何故か彼はその後も眠ろうとせず、ヤマトの見張りに付き合っていた。

初対面の自分たちに、まだ警戒を解いていないのだろうか？　太郎丸の横顔を盗み見て、そんな事を考えるヤマト。

まあ無理もない。清廉潔白でまかり通る天使のノエルはともかく、ヤマトはどこの馬の骨ともわからない人間だ。出会って半日で気を許すなど、まともな神経を持つ冒険者であるなら考えられない。

だがヤマトはなんとなく、こうも考えていた。

太郎丸は案外、付き合いの良い奴なのかもしれない、と。これといった理由は無い。ただ、なんとなく、だ。

「なあ、アンタ達ってパーティー組んで長いのか？」

パチっと弾けた薪の音に後押しされ、ヤマトが沈黙を切り崩し声を掛ける。

パーティーとは、一緒に冒険をする仲間の事だ。今の状況であればヤマトはノエルと。太郎丸はサークスとパーティーを組んでいるという事になる。

「いや……三ヶ月程前からだ」

短く答える太郎丸。会話を嫌がっている風では無い。単に口下手なだけなのだろうか？

「そうなのか？　案外短い付き合いなんだな。こなれた連携してたから、てっきり長いのかと思ったぜ」
「サークス殿に誘われてな。それまでは独りだ」

腰の曲刀を鞘から少しだけ抜き出し、刃の調子を確認しながら太郎丸は言葉を返す。
ほぼ全身の毛が真っ黒の彼だが、手と足の先端だけは手袋でもしているかのように真っ白だ。それが月と炎の光を反射して、やけに目立つ。

「お主は？」
「俺？　俺はノエルと結構長いな……幼馴染だし、もう十年くらいかな？　腐れ縁ってヤツか」

十年前……ノエルと二人で冒険者となった時は、共にド素人でありレベル１だった。近隣の野犬を追い払うのでさえ苦戦し、二人で逃げ帰る事さえあった程だ。
しかし次第にノエルが天使の能力を自在に操れるようになると、状況が変わる。
ほぼノーコストの治癒能力。無敵とも呼ばれる防御能力。汎用性の高い光を操る能力に加え、飛行能力、交渉に有利な美貌。更には神の道から外れた邪悪な存在に対する強力な攻撃能力。最後には世間一般の気高い天使というイメージが放つ、抜群のブランド力……それら全てが高く評価されたノエルがレベル２０の認定を受けたのは、ヤマトがまだレベル２と３の間を行き来していた頃だった。

「俺もアンタくらい強けりゃな。一人旅でもして一気にレベル上げすんだけど……」
「無理、なのか？」
「ああ。実力不足ってのもあるけど……俺が一人で依頼受けようと

すると、コイツがいつも勝手に付いて来るんだよ」

言いながら、ヤマトは隣で寝息を立てる天使の鼻を摘む。やがてノエルが顔をしかめ、うんうんと寝苦しそうに身悶えし始めると、彼はイタズラっぽく笑って手を放すのだ。

そして自嘲気味に笑って続ける。

「とか言っても、ノエルからしたら俺はスゲぇ頼りなく見えるんだろうな。だから援護してやらなきゃ、って感じで付いて来るんだろ……まあ十年冒険してレベル４じゃ、そう思うのも無理無いよ」

普通の人間が冒険者として名乗りを挙げ、十年間ひたすら頑張った場合の平均レベルは１０前後。一年に一つレベルが上がるという計算だ。そう考えればヤマトのレベルは平均の半分にも満たないという事になる。

「実際ノエルには、いっつも助けられてばっかりで……あ～あ、強くて頼れる男になりたいぜ」

自らの言葉を誤魔化すように、大きく伸びをしたヤマト。

すると、堪えきれなかったのだろう。太郎丸が小さく吹き出した……笑っているのだ。

「な、なんだよ？　笑う事無いだろ？」

「ふふ……いやなに、すまぬ。ヤマトといったか……お主、ノエル殿から『そんなに卑屈になるな』と言われたりせぬか？」

「え！？　なんで……？」

驚きの声を上げるヤマト。初対面の相手に普段の言動を見抜かれた動揺が、大っぴらに表へ出てしまう。

そんな素直な反応を返すヤマトへ優しげに目を細め、太郎丸はゆっくりと立ち上がって言った。

「ヤマトよ、自信を持て」

大きな声では無い。間近の者にしか聞こえないような、小さな声だ。だが太郎丸の言葉はやけに鮮明な音となりヤマトの耳へ届いていた。

「為したい事に実力が追い付かぬ、もどかしさはわかる。それ故に落ち込む気持ちもな……だが考えてみるが良い。本気で頼りないと思う男の側に十年近くも身を寄せる、そんな馬鹿者は居るまい」

座ったまま、漆黒の人影を見上げるヤマト。無口だと評された人狼の言葉は、聞き流す事の出来ない重みでもって心を満たす。

「ノエル殿は、お主と一緒に居る事を望んでいるのだ。他の誰でも無い、お主だからこそ共に歩もうとしている」

太郎丸の言葉に、ヤマトは驚きが隠せない。

冗談であれ社交辞令であれ、そんな事を言われたのは、これが初めてだった。

幼馴染という立場を利用して、希少な天使を占有する雑魚冒険者。お人好しのノエルが断れないのを良い事に、つまらない冒険へと連れ出しては天使の恩恵を受ける恥知らず。それが一般的なヤマトの評価だ。

ノエルの実力であれば、もっと大きな依頼……例えば国家の存亡に関わるような冒険へと旅立ち、仲間と共に喝采を浴びるような活躍する事もできるだろう。それが世の為であり、ひいては彼女の為だ。だがヤマトが無理矢理連れて行くものだから、それが出来ない

……二人を知る者の大半は、このように考えている。
しかし太郎丸の意見は違っていた。ノエルは自ら望み、ヤマトの側に居ると彼は言う。

「お主は自分で思うよりも遥かにノエル殿から頼られ、信頼されているのだ。それを自覚し、胸を張るがいい」
「ははっ、何を言い出すかと思ったら……気休めのつもりか？　タチの悪い冗談にしか聞こえないぜ」

苦笑するヤマト。そして思う。
初対面のお前に、俺たちの何がわかるんだよ。証拠も何も無く、知った風なクチ聞いてんじゃねぇよ！　と。
だが……。

「けど……あんがと。ちょっとだけ、報われたかも……しれねぇ」

ヤマトは俯き、呟く。

「俺、もっと……」

語尾が掠れていたのは、朝靄が喉に入り込んだ為だろう。落ちた雫も朝靄が生んだ物に違いない。
太郎丸は少年に目を向ける事無く、東の空をただ真っ直ぐに見やる。
気が付けば空は白み、朝日が四人の冒険者を照らし始めていた。

第六話：新しい風

酒と油の匂いが混ぜこぜとなった店内。朝食を取ろうと集まった人々を、波間を泳ぐように掻き分け、小柄な少年が壁際の席を目指す。

「ヤマト、こっちこっち！」

人込みから、ぴょこんと頭一つ抜け出して手を振る天使の少女ノエル。地面から少しだけ浮び上がり目印となっているのだ。ゆっくりと浮かぶ程度であれば背中の翼を羽ばたかせる必要は無く、人々の中にあっても邪魔になる事は少ない。

「お待たせ！　いやぁ、今日も込んでるなぁ」

ノエルのもとへと辿り着いたヤマトが、トレイに載せたミルクとハムサンドをテーブルいっぱいに広げる。数量は四人分……ヤマトとノエル、そしてサークスと太郎丸の分だ。

「なんだか悪いね、朝食をねだる様な真似をしちゃって……」

ヤマトの向かいに座るサークスが遠慮がちに言った。だが、そんな彼の言葉をノエルはすぐさま否定する。

「なに言ってるんですか！　あれだけお世話になったんですから、このくらい当たり前ですよ！」

「そういうこった。さ、安物だけど遠慮なく食ってくれ」

朝食を並べ終えたヤマトも言って、食事を促す。

そういう事なら……と、サークスと太郎丸の二人はパンに手を伸ばし、賑やかな喧騒に包まれた、和やかな食事が始まった。

ここはヤマトとノエルが拠点を置く街の宿屋兼食堂「ほろ酔い亭」。一階が食堂となっており、二階は主に冒険者が間借りする宿となっている。その為、ほろ酔い亭に集まる人々の大半を冒険者が占めていた。ヤマトたち二人も例に漏れず、それぞれ二階に部屋を借りて自室としている。

スライム退治の依頼を終えたヤマトとノエルは、サークスたち二人と共に本拠地であるこの街へと戻り、仮宿を探す二人にせめてもの恩返しと、朝食をご馳走する事にしたのだ。

「これは……凄く美味いね。陳腐な表現だけど生地が柔らかくて、こう……もちもちしている。それにこのドレッシングも絶品だよ」

「ですよね！？　私もお気に入りなんです」

ハムサンドを頬張り、サークスが絶賛の声を上げる。焼いたパンにハムとチーズ、刻んだ野菜を挟んだだけのシンプルな料理ではあったが、シャクシャクと歯ざわりの良い野菜と、ハムの塩気。あらゆる要素が互いを引き立てあって絶妙の味わいを醸し出している。一言も喋らずパンに齧り付く太郎丸も、いつの間にやら二個目を平らげようとしていた。

「スライム退治の報酬も入ったし、二人とも遠慮するなよな？　どうせ、これくらいしか騎れねぇし」

「そうかい？　じゃあ遠慮なく……」

サークスも二つ目のパンを手に取って微笑む。

焼きたてのパンは香ばしい上に表面はサクサクで中は柔らかく、固い干し肉に慣れた口にはこの上ない食感だ。しかも貧乏な冒険者

でもたらふく食べられる程に安いのだから、文句のつけようが無い。

「あ、そういえば……」

パンを千切って口に運んでいたノエルが、思い出したようにサークスたちへと話を振った。

「お二人とも、凄く高名な冒険者だったんですね。すいません、私ったら全然知らなくて……」

「そうそう、厨房のオッサンも言ってたな。確かアンタの二つ名……白銀のサークス、だろ？　その歳で二つ名って凄いよな、びっくりしたぜ！」

ヤマトたちに言われ、サークスがはにかんだ笑顔を見せる。

たまたま、幸運が続いて名前だけが売れたんだ。そう言った白銀のサークスだが、聞けばレベルは３２だと言う。偶然や幸運だけで辿り着けるレベルでは無い。

人間の限界レベルが５０と言われている現在、世界でも有数の使い手であろうと思われる。

そして太郎丸もまた確かな使い手だった。レベルは１７。サークスとは比べるべくも無いレベルだが、もともと冒険者として活動している人狼が少ない為、過小評価されているきらいがある。事実、スライムを寸断した剣閃はレベル１０中程では不可能な鋭さを持っていた。

「街に帰ってから、やけに見られてんなぁとは思ってたけど、みんなアンタたちを見てたんだな」

「悪いねヤマト君、余計な気を使わせちゃって。この辺りには殆ど来た事無かったから平気だと思ったんだけど……」

太郎丸と合わせて白黒のコンビだから良く目立つんだよ、との言葉を飲み込んだヤマト。太郎丸の黒は毛色だから仕方ないとして、サークスの白銀鎧は、ちょっと……自分の趣味じゃない。白銀には魔を退ける効果があると聞くが、流石に銀ピカの鎧は派手すぎやしないだろうか？　まあ一定以上の実力があれば、多少目立つくらいの方が都合が良いのかもしれないが……。

「……サークス殿」

ヤマトの思考を断ち切るように、食事を終えた太郎丸がボソリと何事かを囁いた。

そういえば、太郎丸と二人で話したあの夜以降、流暢に喋る彼の姿を一度も見ていない。ヤマトが見聞きしたのは全て、夢か幻だったのでは無いかとさえ思える。

「ああ、そうだね。例の件、二人に相談してみよう……ちょっと良いかな？」

断りを入れ、サークスが傍らのザックから一枚の羊皮紙を取り出しテーブルに広げた。冒険者をしている者であれば、頻繁に目にするその紙は……。

「仕事の依頼書……か？」

ヤマトの声に頷くサークス。彼は丸まった羊皮紙の隅にジョッキを置いて重石代わりにし「とりあえず目を通してくれないか」と促した。どれどれ、と興味深そうにヤマトとノエルの二人は依頼書を覗き込む。

そこに書かれていた内容を簡単に言ってしまえば、良くあるお使いの類だった。ちょっと遠くにある、ちょっと珍しい物を取ってき

て欲しいという、時間こそ掛かるものの危険も少なく比較的簡単な仕事依頼だ。

「ちょっと前に見つけてキープさせて貰ってたんだけど……うっかりしててね」

サークスが羊皮紙の上に指差す先。そこには「推奨レベル：２０以下」と書かれている。

「良い仕事だとは思うんだけど、僕と太郎丸だと平均レベルが２０を越えてしまって、請けられないんだ」

「ああ、それで……」

冒険者への依頼に推奨レベルが書かれているのには、幾つかの理由がある。

一つは危険を避ける為。低レベルの冒険者が誤って、手に余る仕事を請けてしまわないようにするのが目的だ。

そして二つ目は、強力な冒険者が美味しい仕事を全部持って行ってしまわないようにする為。簡単で実入りの良い仕事を初心者にも残し後進を育てようと、冒険者組合が考え出した苦肉の策なのだ。

「私たち四人がパーティーを組めば、平均はえっと……」

「１８ちょい、か。イケそうだな」

意外にも早い暗算でヤマトが答えた。高レベル認定を受けている三人を前に、自分だけがぶっちぎりで低レベルである事が気にはなったが……。

『自信を持つのだ。何も恥じる事は無い』

太郎丸の言葉が頭を過ぎり、落ち込みそうになる気持ちを支えてくれる。

「どうする、ヤマト？」

小首を傾げて問いかけるノエル。だが問うとは言っても半ばポーズのみで、二人の答えは殆ど決まっている。

「なあサークス。アンタたちさえ良ければ、この仕事俺たちも……」

ヤマトが最後まで喋るより早く、サークスの頬が緩む。そして差し出される右手。

「決まりだね。よろしく！」

「ああ、こっちこそ」

男二人がテーブルを挟んで握手を交わし、こうしてレベルのバラつきが酷い四人パーティーが誕生した。

第七話：幻の琥珀色（一）

渋柿の長持ち。呪うに死なず。雑草はたちまち茂る……そんな言葉たちがある。

悪い物、憎い何かに限って世に出て威勢を振るう。そんな意味の言葉だ。憎まれっ子世に憚る、とも言うだろう。

サークスと太郎丸。二人の厚意を受け、一緒に冒険へと旅立ってから既に一週間が過ぎた。だがノエルは未だに、依頼人の事を思い出すと冒頭の言葉が頭に浮かんでしまう。

「おい、ノエル」

隣を歩いていたヤマトが、自分の眉根辺りをツンツンと突いて知らせる。また、しかめっ面になっているぞ……そう言っているのだ。

いけない、いけない。天使は笑顔が命！

頷き返して、ノエルは無理に口角を上げて笑顔を作る。あまり良い笑顔とは言えないだろうが、難しい顔をしているよりは断然マシだろう。

「はは……まあ確かに、ノエルさんがそんな顔をする気持ち、僕もわかるよ」

先頭を行くサークスが軽く振り返って苦笑混じりに言うと、隣で太郎丸が頷いて見せる。

彼らは今、二列縦隊で木々の合間を縫うように続く小道を進んでいた。森の奥深く、依頼人ご所望の品が取れる集落を目指しての旅路だ。

「すいません、せっかく誘って下さったのに。お仕事が嫌というわ

けでは無いのですけど……納得が行かないというか、なんというか……わぷっ！？」

顔面に蜘蛛の巣を受けて、ノエルの言葉が途切れる。

これでもう何度目だろう？　翼を広げ、低空をふわふわ浮いて移動するものだから、少し高い位置に張られている蜘蛛の巣に片っ端から引っかかってしまう。誰も行き来しない高さであるから、巣が除去されていないのだ。

「ううう……もうっ！　どうしてこう……あぶっ！？」

蜘蛛の糸を取る事に集中するあまり、また新たな巣に激突するノエル。

「もうお前、普通に歩けよ……」

「むぅ～、飛んでる方が楽なのに」

ヤマトの呆れ声に、ノエルは少し不満そうに地面へと降り立つ。と同時に……。

「ひやぁっ！？」

湿った苔に足をすくわれ、尻餅をついてしまった。

手はドロドロ。スカートと下着も、苔の湿気を吸い取ってぐっしょり。肌に冷たい感触が伝わって来る。

こんな事なら軽装のサンダルではなく、しっかりとした靴を買ってくれれば良かった……そう思ったが、後悔先に立たず。不快指数がぐぐっと上昇する。

「ほらノエル、掴まれよ。ンな不機嫌そうな顔して……あれもこれ

も、全部依頼人が悪いんだ！　ってかぁ？」
「そんな事……」
からかいながら手を差し伸べるヤマトに、そんな事は無い！　と反論しかけたノエルだったが……。
「そんな事……あるっ！」
不満気な表情を露わにし、認めたのだった。

時は遡り、一週間前。
サークスと太郎丸に連れられ、今回の仕事を依頼した人の所へと赴いた時だ。
目の前に聳えるのは、城壁と見紛うばかりの巨大な門。見渡す限りの広大な庭。そして王侯貴族の宮殿を思わせる規模の、煌びやかな邸宅。そのどれもが隅々まで管理が行き届き、ゴミはおろか落ち葉一つ、チリ一つ落ちていない。
超お金持ちの趣味を地で行く、贅の限りを尽くした住まいの主。彼こそが今回の依頼人、エフティー・ノーウェイその人だった。
「お前たちが、名乗りを挙げた冒険者か？」

謁見の間を思わせる広い室内。一段高い場所で豪奢な椅子に腰掛けた小太りの中年男性が、両脇に半裸の美女をはべらせて問い掛けてきた。
その問いに肯定であると返し、礼法に則って頭を垂れるサークス。太郎丸は半歩後ろで顔色一つ変えずに立っている。だがヤマトは……。
「ぐはっ……ヒールだ、ヒールくれノエル……」

大人っぽい美女の露わな姿態を前に、鼻血を流して最後尾でしゃがみ込んでいた。

「何してるのよ、もうっ」

慌ててハンカチを取り出し、捻ってヤマトの鼻に詰め込む。

斜に構えてはいるが、基本的に真面目なヤマト。女性に免疫が無いのはわかるが、ちょっと色っぽい人が居たくらいで鼻血を出さなくても良いのに……。

翼を広げ、少年の首の後ろ側をトントンしながら癒しの力を使っていると、件の半裸美女たちがこちらを見て微笑んでいるのが見えた。

はずかしいなぁ、もう……。動揺など微塵も見せず、今も依頼人と交渉の最中にあるサークスや太郎丸を、ヤマトも少しは見習って欲しい。

赤面して、俯くノエル。もうちょっと格好良くキメられないものか？　そうすれば私だって堂々と……。

「何をゴチャゴチャとやっている？」

ノーウェイがノエルとヤマトに目を止めた。珍しい物でも見るようにクリクリと瞳を動かして、興味津々といった様子だ。

まあ確かに、女の裸くらいで鼻血を出す者が彼と接見するなど珍しい事なのだろう。

「なんだお前、女の裸が珍しいか？　この女が欲しいのか？」

妙に嬉しそうなノーウェイ。美女を立ち上がらせてヤマトに見せつけ、動揺する彼の様子を楽しんでいるのだ。

趣味の悪い事を……と内心で思うノエルだが、辛うじて顔には出さない。不快感を露わにしては、パーティーの代表として振舞っているサークスに迷惑が掛かってしまう。

だが……。

「こんな物で良ければ、報酬代わりにくれてやるぞ」

そう言うと、ノーウェイは美女を蹴り飛ばした。突然の事に対応できず、無様によろめき、段上から滑り落ちて倒れる美女。剥き出しの素肌に、薄っすらと血が滲む。

「それには、既に飽いた。だが奴隷商にでも持ってゆけば、それなりに値が張るだろう」

慌てて駆け寄ったヤマトたち四人へ、見下した視線を投げ掛けるノーウェイ。

こんな物？　飽きた？

ノーウェイが発する言葉に、ノエルの憤りは限界を超えた。怒りが言葉となって口から溢れかけた……その時だ。

「よっしゃあ！　んじゃあこの人、俺が貰った！　予約した！！」

倒れた美女とノーウェイの間に立ち、ヤマトが大声で叫んだ。

「売値と報酬を差し引いて、残りは銀貨でくれ！　おいアンタ、後でやっぱり女を返せとか言うなよ？　俺が予約したんだからな！」

有無を言わさぬ強い口調に漲る気迫。ほんの少し前まで鼻血を流していた少年と同一人物とは思えない。

そうして自身が注目を集める傍ら、そっと仲間たちへと目配せを

送る。その意味を即座に察し、倒れた美女へ治療を施すノエル。そんな彼女へ、勝手な事をするな……と言いかけたのだろう。段上にて口を半開きにした状態のノーウェイが、サークスと太郎丸の気迫に圧倒されて言葉を吐けず、酸欠になった金魚のように口をパクパクとさせている。

「んで？　俺たちに何か取ってきて欲しいんだろ？　ちゃちゃっと行ってくるから、言ってくれ」

「う……うむ。では……」

ヤマトに促されて金魚状態から脱し、ノーウェイが召使いへと指示を出す。

すぐさま駆けて来た召使いから、依頼の詳細が書かれた羊皮紙と地図を奪うようにして受け取るヤマト。

「じゃ、行ってくるけど……その女は俺の報酬なんだから大事にしとけよ！　傷物になってたら違約金貰うかんな！」

「う……わ、わかった」

ヤマトに気圧されて冷や汗を流すノーウェイの様子に、すっきりと溜飲を下すノエル。天使としてはどうなのかと自分でも思ったが、感情はどうしようもない。ざまあみろ、だ。

こうして、脅迫じみた捨て台詞を残し、ヤマトたちは今回の冒険へと旅立ったのだった。

そして時は戻り、くねくねと続く山道を行く四人。

「……確かに最低の依頼人だったけど、金払いは良いって話だからね。ちゃんと仕事さえこなせば全部丸くおさまるよ」

「ま、そうなる事を期待するしか無ぇな」

どこか楽観的に話し合うサークス、そしてヤマト。二人の間には、とにかく仕事をキッチリとこなして、話はそれからだと達観した雰囲気がある。

しかしノエルの気分は晴れない。

あの後、ノエルは誰にも内緒で、屋敷の使用人たちにノーウェイについての話を聞いてみた。

最初は警戒していたのだろう。誰も彼も口は固く、主人であるノーウェイを多く語る者は居なかった。しかし天使であるノエルにだけはと、口々に主人の悪行を吐露し始めたのだ。

使用人たちへの不当な労働環境に始まり、後ろ暗い者たちとの繋がり、多岐に渡る違法な取引。それら全て、いっそ清々しい程に「金の為なら何でもやる」と宣言するかの如き所業の数々。

とはいえ、使用人たちの証言を全て信用してしまえる程、ノエルもお人好しでは無い。彼女は穢れ無き天使であるが、同時にシビアな冒険者でもあるのだ。しかし疑いの眼差しで使用人たちを見渡してみても、ノーウェイが悪党であるという結論だけは同じだった。彼ら使用人たちは、主人を犯罪者だと主張するリスクを犯してなお、口を開いているのだ。

バレればタダでは済まない事を承知の上で、この天使なら……ノエルならば状況を打開してくれるかもしれないと一縷の望みを掛けて。

「……はふぅ」

「なに溜息ついてんだよノエル？　ほら、もう着くぞ」

ヤマトに言われて視線を上げれば、木々の間から小さな集落が見え隠れし始めていた。

第八話：幻の琥珀色（二）

半分壊れた窓から、湿った空気と共に朝靄が進入してくる。
そんな中、ヤマトたち三人の男は長椅子に腰掛けて、出発の準備に余念が無い。
剣を鞘から抜いて具合を確かめ、鎧のベルトを締め直している。
素早く慣れた手付きでありながら、慎重かつ丁寧なチェックだ。
ここは山中にある人口五百にも満たない集落、その隅にある今は使われていない建物の中。持ち主である村長の許可を得て、冒険の拠点となる仮宿として使っているのだ。
慌しい朝。
彼らが身支度を整える間、鎧を身に着ける必要も無く武器も持たないノエルは、自分の準備を終えてすっかり手持ち無沙汰となっていた。
なんとなくポーチの蓋を開け閉めしていると、丸まった真新しい羊皮紙が目に止まる。今回の依頼について書かれている依頼書だ。

「世にも珍しいコーヒーねぇ……」

依頼書を広げ、呆れた、と言いたげな表情でノエルが呟く。
小人閑居して不善をなす……とまでは言わないが、お金持ちが暇を持て余した場合も、似たような事になるらしい。
今回、ノーウェイから取って来るようにと依頼を受けた品は、現地の言葉でコピ・ルアクと呼ばれる非常に珍しいコーヒー。生産量が少ない為、市場に出回る事は殆ど無い幻の逸品なのだという。

「たった一杯のコーヒーの為に冒険者を雇うだなんて……」

馬鹿じゃないの？　という言葉を辛うじて飲み込む。

美味しい物が食べたいだとか、特定の何かに入れ込む気持ちはわかる。だが、それにしたって時と場合によるだろうとノエルは思う。

今回支払われる予定の報酬は、屋敷で見かけた使用人全員の食事、数か月分に匹敵するであろう大金だ。こんな事にお金を使う余裕があるのなら、もっと先にすべき事があるのでは無いだろうか？

まあ、その報酬を得ようと名乗りを挙げた自分たちに、ノーウェイを悪く言える義理が無い事はわかっているのだが……。

「ノエルさん？　考え込むのも良いけど、油断だけはしちゃ駄目だよ」

サークスの声に、ノエルはハッとして頭を振る。

そう、油断は禁物だ。何故なら、自分たち以外にも多くの冒険者がこの依頼を受け、全員が失敗しているのだから。

「他の連中、どうして失敗したんだ？」

「さあ？　なんでも、目的のコーヒーを手に入れる事が出来なかった、としか聞いてないな」

話しながらヤマトとサークスが立ち上がった。どうやら準備が終わったようだ。太郎丸も立ち上がり、軽く頷いて準備完了を告げる。

「じゃ、そろそろ行こう。暗くならない内に収穫したいからね」

サークスがそう言うのを待っていたのだろうか？

けたたましい音と共に、入り口の扉が勢い良く開かれる。

咄嗟に身構えるヤマトたち。だが……。

「もう、準備良いんでショ？　サッサと行くよ！」

入り口に立っていたのは、日に焼けた肌が健康的な、齢十にも満たない小さな少女。コーヒー収穫のガイドとして雇った、この集落に住むスミという娘だ。

乱雑に頭のてっぺんでまとめられた、落ち着いた赤色の髪。穴を開けた布に頭を通し、腰の部分を紐で縛っただけの簡単な服装。交易用として広まっている標準語の発音も、少々怪しい所がある。

あまり豊かでは無いこの集落を象徴するような少女だった。

「なにシてるの？　モタモタしてると、日が暮れちゃうよ！」

「何を言ってんだか、このチビは……まだ太陽は昇ったばかりだっての。ほれ、見てみろよ……っても、お前の身長じゃ見えねぇか」

出発を急かすスミを、ヤマトがからかう。彼にしてみれば、軽口を叩いた程度の認識だったのだろうが……。

「うるサい、糞チビ！　糞シて寝てろ！！」

「あイテっ！　こ、このやろ……！」

何気ない台詞が、スミの逆鱗に触れたようだ。ヤマトの脛を思い切り蹴っ飛ばし、短い手足でチョコマカと駆けて行くスミ。俊敏な動きで木の陰に隠れると、ヤマトへ向けて舌を出し、アホだのバカだの、レベルの低い挑発を繰り返す。

「こんにゃろ……待ちやがれ！」

そんなスミを追いかけ、駆け出すヤマト。

「あ、ちょっとヤマト！　もうっ、大人気ないんだから……」

「さあノエルさん、僕たちも行こう。幸い、二人の向った方向と目的地は同じだ」

微笑を湛えて出発を促すサークスと、溜息をつきながら採集用の袋を担ぐノエル。太郎丸も無言のまま、それに続く。

こうして冒険者一行とガイド一名は、希少なコーヒーを求めて森の奥深くへと向ったのだった。

第九話：幻の琥珀色（三）

ツヤツヤとした緑色の葉っぱは、大きな手のひらのような形。太い幹は高く伸び上がり、見上げれば首が痛くなる程。その所々に小さな赤黒い果実をつけた樹木が辺り一面、所狭しと繁っている。

「これだよ、コーヒーの木。間違い無い」

ヤマトの背中に乗ったガイドのスミが太鼓判を押し、色めき立つ冒険者たち。

森に入り込んで、約一時間。いともあっさり、彼らはコーヒーの木群生地へと辿り着いていた。

「どぉだ糞チビ、見たかアタシの実力！」

「へぇへぇ、大したチビだよお前は……」

鼻息荒く、ヤマトの後頭部を叩くスミ。ヤマトの相槌は随分と適当ではあったのだが、どうやら褒められたと思ったのだろう。彼女は薄い胸を反らして顔を紅潮させている。

コーヒーの木を探しながら追いかけっこして互いに罵りあう内、スミはすっかりヤマトに懐いていた。追いかけっこで疲れたスミをヤマトが背負ってからは特にそれが顕著で、コーヒーの木のガイドを雇ったのか遊び相手として雇われたのか、わからなくなってしまう程だ。

「それじゃ、早速収穫しようか」

「俺とノエルが木から落すから、みんなは下で拾ってくれ」

スルスルと器用に木を登り、緑の葉生い茂る天辺付近で声をかけ

るヤマト。ノエルも小刀を手にフワリと舞い上がり、ふとスミに問いかける。

「ねえスミちゃん。コーヒー豆って種だから、実の外側は少しくらい傷ついても大丈夫なんだよね？」

「え……っと。あ、う……うん」

ノエルの何気ない問い掛けに、なにやら口ごもるスミ。ちょっと人見知りしてしまったのか、それとも知らない事を聞かれて困ったのか。

「ま、なるべく傷付けないようにすりゃ良いだろ」

「そうだね。それじゃ、落しま～す！」

言うが早いか、腐葉土の積もった地面にコーヒーの実が次々と落下し始める。

誰も摂る者が居ないのか、たわわに実った果実の量は非常に多く、回収が追いつかない程だ。それらを一つ一つ丁寧に袋へと収めて行く。

傷付いた果実から濃厚なコーヒーの匂いが溢れて付近に漂い、目を閉じて深呼吸すれば、上等なカフェにでもいるような錯覚を覚える。ただ一人、極端に鼻の利く太郎丸だけはしきりに鼻を擦り、ゲフゲフと苦しそうにしていたが……。

ともかく、一時間も経った頃だろうか。

「ストップだ、ヤマト君。もう袋が一杯で持ちきれない」

サークスの声がする方へ注目してみれば、両手でやっと抱えられるようなサイズの、ずっしりと重そうな麻袋が四つ出来上がっていた。ここまで何のトラブルも無く、驚くほど順調な行程に、拍子抜

けの感さえある程だ。

「ふぅ、こんだけあれば十分だよね？」

「そうだな。んじゃあ、引き返すか」

ノエルと頷き合い、木から降り立ち額の汗を拭うヤマト……と、その視界の端に、一瞬動く物が映った。

それに最も早く反応したのは太郎丸だ。跳ねるような動きで体勢を整えると、腰の剣に手を掛け、重心を低く身構える。

「何かいるぞ！」

警告を発する太郎丸。

やっと事態に気付いたノエルが翼を広げて臨戦態勢を取り、スミが身を固くしてヤマトにしがみ付く。サークスは少し遅れて、取り回しの良い短剣を抜き放った。

軟らかな土を蹴立て、木々の間を何か小さなモノが走り回る。かなり機敏な動き。一瞬だけ赤茶色の毛並みが見えたが、その程度でしか目に止まる瞬間が無い。

「気をつけろ、みんな！」

油断無く短剣を構え、サークスが考えを巡らせる。

木々が生い茂り、腐葉土に足を取られる森の中ではこちらが不利だ。一匹くらいならどうとでもなるだろうが、複数体が現れた場合、足手まといを守りながら戦うのは難しい。ここは一旦、撤退を……。

そう考え、全員に伝えようと口を開きかけた時だった。

「みんな、チョッと待って！」

その足手まといこと、スミが大声で叫んだ。

「静かに！　大声を出せば狙われるぞ！」
「大丈夫、襲われたりしない！　大丈夫、大丈夫だカラっ！」
「そうは言うが、一体何が大丈夫だと言うんだ！？」

スミの声に多少の苛立ちを感じながら、サークスが身構えたままで尋ねる。彼女は大丈夫だとしきりに訴えているが、根拠の無い子供の妄言に踊らされ、パーティーを危険に晒すわけには行かない。警戒を維持し、このまま安全圏へ下がるのが良策だ。
しかし、そんな妄言に踊らされる者が居た。

「ああ？　スミ、大丈夫なのか？　なんだよ、ビビって損したぜ」

スミを庇い、最後尾へと下がっていたヤマトだ。彼はそそくさと短剣を仕舞うと、足手まといと共にスタスタと前衛へと歩いて来る。

「待て、ヤマト君！　まだ安全は……」
「いいえサークスさん、どうも大丈夫みたいですよ？」

緊張の維持するサークスに、上空からゆっくりと降りてきたノエルが優しい声を掛けた。

「ほら、あそこを見て下さい……可愛いですよ」

彼女の指差す方向……そこに居たのは、小さな猫だ。
赤茶色の毛並みと、シャープな身体つき。街で見かける野良猫よりは精悍な顔付きをしていたが、それでも確かに猫だ。尻尾は細く、手足は頼りなげで、ふかふかの毛並み。どうやら、まだ子供のようだった。

「な!?　どうしてこんな所に、こんな小さい幼獣が……」

訝しむサークス。普通、人間が騒いでいるような所に野生の獣はやって来ない。来るのは交戦的な魔物くらいだと彼の経験は言っている。

そんなサークスの警戒心を感じ取っているのだろうか？　猫は冒険者一行を警戒しながらジリジリと移動し、落ちていたコーヒーの果実を一つ咥えた。そして慌てて木の後ろへと逃げ込むと、シャリシャリと齧り始める。

「ははっ、どっかのチビみたいな動きだな。腹減ってんのか？　ほら、もう一個食えよ」

ヤマトがコーヒーの実を放り投げると、猫は少しだけ身体を強張らせたものの、すぐに実を咥えて木の陰に隠れ、今度はあぐあぐと何度も噛み潰して飲み下して行く。

「なんだよ、可愛いなコイツ。目付き悪いけど」
「そうだね……ほら、もっと食べる？」

すっかり和むヤマトとノエル。その後ろでは、サークスがようやく緊張を解いて、スミに話しかける。

「そうか、スミちゃんはこういった猫がコーヒーを食べに来る事を知っていたんだね？　それならそうと、最初に言っててくれれば……」
「う、うん……ゴメン」

叱られた為だろうか？　気落ちしたような表情を見せるスミ。

「子供とはいえ、一応はガイドとして……」
「まあ良いでは無いかサークス殿。最初から危険が無いと知っていては、我々の警戒も緩もうというもの。結果的に、これで良かったのだ」

まだ何か言い足りなそうだったサークスを、太郎丸がやんわりと宥める。普段喋らない彼だけに、口を開いた時の存在感には無視できない物があった。サークスもそれを感じたのだろう。「それもそうだね」と引き下がり、大人気なかったとスミに詫びる。

「う、ううん。ゼンゼン大丈夫、気にしないで！　ほら、いつまでもネコと遊んでないで、行くよ糞チビ！」
「糞とかチビとか言うんじゃねぇよ！」

明るい笑顔を取り戻したスミが走り出し、大きな麻袋を担いだヤマトが追う。
そんな二人を見送りながら、ノエルは感じていた。
漠然とした違和感と、奇妙な不安を。

第十話：幻の琥珀色（四）

自らの容姿を引き立てる化粧も、やりすぎれば逆効果となるように、素晴らしい香気も時と場合によっては台無しになる。コーヒーの香りが、まさにそれだ。

「ぐっ……けふ、けふっ……」
「おい、大丈夫かよ太郎丸？」

室内にコーヒーの香りが充満している。
ここはヤマトたちが冒険の拠点として借りている、集落の隅に建つ小屋の中。

「少し休憩するか？」
「いや、それには及ば……けふっ、けふっ！」

四人の冒険者たちは採集してきたコーヒーの実を、飲料用コーヒーとする為の作業の真っ最中。全員が口元を布で覆っての単純作業。身を潰し、種を取り出し、炒る。ひたすら地道に手を動かし続けるだけの、簡単ではあるがちょっと面倒な作業だ。
しかし問題は作業の難易度では無い。煎られた種子より燻り立つ、濃厚なコーヒーの香りだ。

「けふ……けふんっ！　げふっ！！」
「やっぱり一旦休憩にしましょう？　太郎丸さん、私と一緒に来て下さい。治療しますから」
「か、かたじけない……！」

ヨレヨレの太郎丸を連れて小屋の外に出る冒険者たち。山間を抜

けて吹き付ける、木々の香りを含んだ風が疲れた身体に心地良い。

「ふう～……っ。楽勝かと思ったけど、結構キツいなぁ」

口布を外し、深呼吸するヤマト。コーヒーは嫌いでは無いが、あまりに強烈な香りを長時間嗅いでいた物だから、少し頭が痛い。人間である自分がそれなのだから、凄まじく鼻が利くといわれる人狼の太郎丸には耐え難い苦痛だろう。

そう思いながら周囲を見渡せば、ノエルに連れられて木陰で休む太郎丸の姿が目に入った。

「太郎丸さん、ゆっくり深呼吸して、気を楽にして」

木の幹にもたれ掛り、ぐったりと座り込んだ太郎丸。その身体をノエルの翼が優しく包み込む。

淡い輝きを放つ純白の翼。その光が徐々に膨らみ、やがて太郎丸の全身も同様の光を放ち始める。

「どうですか？」

「む、これは中々……心地良い物だ」

ウットリとした表情で呟く太郎丸。先程までしきりに出ていたクシャミとも咳ともつかない症状も治まり、苦しげだった呼吸も緩やかになっている。

「私の治癒、即効性は無いですけど、使えば無くなるというような物ではありませんから。いつでも、遠慮なく言って下さいね」

「……心得た」

普段は見る事の無い穏やかな表情で目を閉じ、優しい暖かさに身

を委ねる太郎丸。ノエルの放つ光は彼の、クシャミや咳以外の小さな切り傷や打撲の類も、全部まとめて治して行く。

そして数分が経ち、そろそろ太郎丸の体調も万全に戻った頃だ。

「ねえ天使のお姉ちゃん、ちょっとイイ？」

集落に戻るなり姿を消していたスミがひょっこりと姿を現し、ノエルの服を引っ張った。傍らには杖を突く高齢の男性が、震える足でスミに寄り添うように立っている。ノエルの記憶が確かなら、確かこの男性は集落の代表者であったはずだ。他の者から長老と呼ばれているのを聞いた覚えがある。

「どうしたのスミちゃん？」

「あのね……」

問いかけたノエルに、スミはちょっとだけ迷い、俯いて遠慮がちに、小さな声で神の使いである天使へ「お願い」をした。

「おじいちゃんの足……診て欲しい」

スミの連れてきた高齢の男性は、ノエルの記憶通り集落の長老であると名乗り、あわせて自分は足が不自由であると明かした。元々は健常であったのだが、何年か前に転び、足と腰を痛めてからは歩くのにも苦労しているという。

「この通り、歳も歳でな……用を足すにも小さな娘を煩わせる始末。あまりに心苦しい」

片手で杖を突き、逆の手ではスミの肩を借りる長老。若い頃は元気だったのだろう。彼の表情に落ちる影は深い。

ノエルは黙って彼の話を聞き続ける。

「ならば駄目で元々、幸いにも訪れた天使様にお頼みをと思うて……。天使様にこのような老人が願い出るなど、厚かましい事は承知の上なのですが……」

「お願い、お姉ちゃん！　お金なら……」

そう言って、懐から小さな革袋を取り出そうとするスミ……と、その幼い手に天使の手のひらが重ねられる。

「大丈夫だよ、そんなの。私たちを手伝ってくれたスミちゃんのお願いだもん」

微笑むノエルに、曇っていたスミの表情が一気に晴れ渡る。

「おぉ、天使様……！　なんとありがたい……っ！！」

「そんな、どうぞ顔を上げて下さい。私たちもスミちゃんには力を貸してもらったのです。何もお気になさらず」

しきりに頭を下げ、恐縮する長老。そんな彼を宥めながら、ノエルはスミに言った。

「じゃあスミちゃん、私からもお願いして良い？　あのね……」

慌てて駆け寄ったスミは、フンフンと鼻息荒くノエルの「お願い」に耳を傾ける。

そして――。

「な……何事だい、あれは？」

近くの川で手を洗い、ついでに顔も洗って小屋へと戻ったサークスは、我が目を疑った。自分たちが借りている小屋の前に何十人も……いや、何百もの人が集まり、ごった返しているのだ。

小さな集落である。これだけの人数ともなれば、もしや住民全員が集まっているのではないだろうか？

「サークス殿、戻られたか」

目を丸くするサークスに、木陰で休んでいた太郎丸が声を掛ける。驚きを隠しきれないサークスは太郎丸の調子伺いも程ほどに、目の前の有様について尋ねる。

「人だかりの、中央付近を見られよ」

そう言われ、サークスは木に取り付いて少し背伸びをし、人込みのど真ん中へと視線を走らせる。

そこでは純白の翼を大きく広げた天使が、目を閉じて微笑を湛え、周囲に光の雨を降らせていた。

「あれは……」

「ノエル殿だ。彼女が住民を癒している……無償で、片っ端からな」

馬鹿な！

サークスはその一言を、辛うじて飲み込んだ。

ありとあらゆる傷や疾患を癒すと噂される天使の他者治癒能力。その力は神の愛が如く無限であり、尽きる事は無いとされる。しかし天使とて生物である以上、能力を使えば疲れが溜まり、どこかで必ず限界が訪れるはずだ。無限などというのは言葉のあやだろう。とりあえず目的のコーヒーは手に入れたものの、冒険はまだ半ば。そう考えた時、無駄に力を使うのは愚の骨頂といえる。

「帰り道の事もある。程々で止めるように言わなければ」
「無駄だ」
険しい顔で歩き出そうとしたサークスを太郎丸が止める。
「無理はするなと伝えたのだが、大丈夫へっちゃらです……との事だ」
「そうか……」
その言葉に、サークスも諦めがついたのか木陰へ腰を下ろす。太郎丸が言って聞かなかったのだ。自分が言っても同じだろう。
天使の少女は、こんな山間の小さな集落で力を振るって、一体何がしたいのか。どうしても治療が必要な急患が居る様子も無いというのに。多少住民から喜ばれる事はあっても、ただそれだけ。お礼にと、小銭を握らされて終り……といった所が関の山だ。
「全く、困った事だ。異種族……特に天使や悪魔といった種族は、僕ら人間には理解し辛い部分があるね」
目の前の光景を呆然と見つめるサークス。光を纏い、人々を優しく癒すノエルの姿は、天使の名に相応しい神々しさであり、目を覆いたくなる程に気高く、美しい。
そして美しい天使の周囲には、小柄な少年、ヤマトの姿もあった。声を上げ、集まった人々を整理し、効率良く並ばせている。何やら「こちら最後尾」と書かれた手製の看板まで持っている様子だ。
「どうもヤマト君は、随分と手馴れているようだね」
「うむ。毎度の事なのだろうな」

感心したように、半ば呆れたように、サークスと太郎丸は呟く。

「まだしばらく時間が掛かりそうだ。少し早いが、食事にするかい？」

「……うむ」

二人は頷き合い、小屋の中へと姿を消した。

第十一話：幻の琥珀色（五）

冒険者たち四人が集う小屋にスミを伴った長老が姿を現したのは、ノエルの治療が一段落付き、各家々からは夕食の香りが漂い出す、そんな時間帯の事だった。

もうすっかり足の傷が癒えたらしい長老は、しっかりとした足取りで冒険者たちの下へと歩み寄ると、深々と頭を下げてこう言った。

住民全員にお恵みを頂き、我ら皆、感謝して余りある。そこまでして頂きながら、何も返す物が無いどころか、我らは皆様に隠している事がある。せめてもの恩返しに、それを今からお伝したいと思う。

「その隠し事が、コレか……」

夕焼けに染まる山林に、冒険者たちとスミ、合わせて五人の若者はやって来た……いや、戻ってきた、というべきかもしれない。

ここは昼間にコーヒーの実を集めた森。まだ記憶に新しい香り漂う、見覚えのある場所だ。

「なるほど、この猫がね……道理で、コーヒーの実を食べるわけだよ」

そう呟くサークスの前には昼間見かけた猫が、無邪気な表情で佇んでいる。また食べ物でも貰えるとでも思っているのだろうか？警戒する様子は無く、手を近づけても指先に鼻を擦り付けてクンクンするくらいで、全く逃げようとしない。

「希少なコーヒー、コピ・ルアク。コピとはコーヒーの事。そしてルアクとは猫の事……すなわち、猫のコーヒー」

長老は言った。コピ・ルアクとは、山猫の食べたコーヒーの果実から作られると。

コーヒーの果肉は消化され、腹には種だけが残る。その熟成された種を腹から取り出し、炒った物が希少なコーヒー豆として世間に伝わっているのだと。

「アタシたち、たまに猫の毛皮を取るから……その時にお腹から出た豆を使うの。でも、ほとんど取れないから……」

スミが小さな声で言った。産出資源に恵まれない山間の集落において、柔らかくしなやかな猫の毛皮は、貴重な資源。もしもコピ・ルアクの取り方が世に知れ渡り、幻のコーヒーを求めて件の猫が乱獲されるような事になれば、集落にとって大きな打撃だ。あっという間に猫は絶滅し、コピ・ルアクは本当の意味で幻となるだろう。

「なるほど、他の冒険者たちがコーヒーを手に入れられなかった理由がわかったよ。肝心の生産者に口を噤まれちゃあ、どうしようも無い」

「……ごめんなさい」

しょんぼりと俯くスミ。その頭を、ノエルが軽く撫でる。

彼女としても、せっかく仲良くなれた人たちに隠し事をするのは辛い物があったのだろう。撫でられた頭をノエルの服に押し付け、鼻を啜っている。

「さて、それじゃあ……」

すらりと長剣を抜き放つサークス。そんな彼へ、少し疲れた表情のノエルが躊躇いがちに声を掛けた。

「やっぱり、殺すんですか？」

その声にスミが首をすくめ、猫は小首を傾げる。

「ああ、長老の好意を無駄にはできないし……僕たちは冒険者だ。いけ好かない相手ではあるが、依頼人にコーヒーを届けなくちゃならない」

表情を曇らせ、サークスが言う。子供に聞かせるような事では無いと配慮したのか、多少抑え目の声だ。

「この猫は可哀想だが……せめて苦しまないように、一撃で首を刎ねるよ。汚れ役は、僕がやる」

皆に離れるように言って、構えを取るサークス。

「あ……う……」

何か言わなければ、と口を開くノエルだったが、言葉が詰まって出てこない。

確かに何の罪も無い猫を殺す事に強い抵抗はある。だが奇麗事だけで人は生きられない。清廉潔白を由とする天使ノエルではあるが、理想と現実に開きがある事くらい知っている。危険でシビアな世界に生きる冒険者であるなら、尚更だ。

ここで猫の腹を裂き、コピ・ルアクを得なければ依頼は失敗してしまうのだ。サークスの意見は一方で正しく、止めたくても、その為の言葉が見つからない。

これは魔物を排除するのと同じ事。必要な犠牲なのだと、目を閉じ耳を塞ぎ、心に蓋をしてやり過ごす以外に無いのだろうか？

「では……ッ！」

サークスが剣を振りかぶった。スミが身体を固くして目を閉じ、ノエルは目を背ける。

夕焼けの赤い光を反射した銀の刃が、真っ赤な軌跡を残して猫の首を通り過ぎる――。

だが、猫の首が飛ぶ事は無かった。かわりに響いたのは、甲高い金属音。

「……何のつもりだい？」

銀の刃は、鋼の刃に阻まれ猫の寸前で止まっていた。サークスと猫の間に身体を割り込ませ、ヤマトが剣を受け止めたのだ。

「あ、危ねぇ……！　俺ごと叩き斬られるトコだったぜ」

緊張の中に薄笑いを浮かべ、ヤマトが呟く。あと一瞬でも遅ければ、ヤマトと猫の首が、仲良く地面に転がっていた事だろう。

「どいてくれないか、ヤマト君。猫へ下手に恐怖を味あわせる方が、僕は酷い思う」

「ちょっと待ってくれ！　少しで良いんだ、時間をくれ！　俺に考えが……」

ヤマトの背中に庇われた猫を半泣きのスミが抱き上げたのを見て、サークスは溜息と共に剣を引いた。そして厳しい口調で言い放つ。

「考え？　それはもしや、猫に豆を吐かせる……なんてアイディアじゃないよね？　それくらいなら僕も考えたさ。だが猫の腹で熟成

が必要だという事を考えた場合、確実性に欠ける」
「い、いや。まあ確かに似たような事ではあるんだけど……」
言いながら、その場にへたり込むヤマト。剣を受けた衝撃によるものか、それとも恐怖による物か、彼の両手足には震えが来ている。
「ふぅ、ちょっと痺れが取れるまで待ってくれよ」
「……まあ良い。どちらにせよ……」
猫を抱くスミをちらりと見て、サークスは再度大きな溜息を吐く。
「この状態の猫を斬れる程、僕は鬼畜にはなれない。キミの話を聞こう」
ほっと息を吐く一同。
そしてヤマトは、ぽつぽつと自分の考えを話し始めた。

第十二話：幻の琥珀色（六）

あいも変わらず豪奢な室内。

無駄に高い天井と、毛足の長い絨毯。壁には良くわからないが値の張りそうな絵画が掛けられ、その隣からは立派な角を持つ鹿の剥製が首を突き出している。そして、どこを見ても何を触っても、とにかく広く大きいのだ。

集落を後にして依頼人であるノーウェイの屋敷へと帰還したヤマトたち四人は、依頼を受けた時と同様、だだっ広い部屋へと通されていた。

「ほぉ！　この芳醇な香り……そしてこれまでに無い深みとキレ！　程好い酸味と、僅かな苦味。クセは多少強いが、それがまた……」

傅く冒険者たちの正面、広い室内の上座にあたる段上では、コーヒーカップを片手にノーウェイがどこで覚えたのかも知れない御託を長々と垂れ流していた。

「もう一杯だ！　コピ・ルアクを淹れよ！」

上機嫌でおかわりを要求するノーウェイ。召使いと思しき女性が慌てて黒色の液体をカップへ注ぎ足し、逃げるようにして立ち去る。

「うむ……素晴らしい味わいだ。良くやったぞ冒険者。流石は噂に名高い白銀のサークスと、天使ノエルよな！」

「お褒めに預かり、光栄です」

ゆっくり頭を下げるサークス、そしてノエル。美男美女の優雅な立ち振る舞いに、召使いたちの間から甘い溜息が漏れる。

「ケッ！　何が素晴らしい味わい、だよ。どぉせ味なんかわかりもしねぇクセに」

どこからか聞こえてきた呟きに、美男美女は身体を固くして冷や汗を流す。二人の背後に控えるヤマトの声だった。

「ん？　何か言ったか？」
「い、いいえ。何も……んっ！」
「んギャ……！！」

言いながら、ノエルは踵でもって背後に立つ誰かの足を思い切り蹴飛ばした。ヤマトに良く似た、押し殺した悲鳴が聞こえたような気もしたが、きっと空耳だろう。

「まあ良い、大儀であった。報酬は使いの者を宿へ遣らす故、後で受け取るが良い」

コーヒーを啜って満足げに息を吐き、空いた手を、まるで野良犬でも追い払うかのようにヒラヒラとさせるノーウェイ。そして思い出したように続けた。

「そうそう、報酬の一部は中古の女で支払う約束であったな。余は、ちゃんと覚えておるぞ」
「……はい。では我々は、これにて失礼致します」

舌打ちをするヤマトを余所目に、顔色一つ変えずサークスが言った。腹立たしくはあるのだろうが、それを表に出す程子供では無いと言う事だろう。

踵を返し、扉へと向う冒険者たち。

これで、この嫌な感じの依頼人ともこれっきりだ……全員がそう思った時だ。

「これ、時にお前たち。このコーヒーをどうやって手に入れた？」

唐突に、ノーウェイがそう聞いてきた。

「これまで何人もの冒険者を雇ったが、誰一人として持ち帰った者は居なかった。お前たちは、どうやってコピ・ルアクを手に入れた」

この何気ない質問に、ノエルは全身の毛穴から嫌な汗が噴出すのを感じていた。

言えない……猫の体内から取り出したのです、とは。それを言ってしまえば森の猫は乱獲され、長老の不安が現実の物となってしまう。かといって、適当にはぐらかす事も難しいだろう。手に入れてきたコピ・ルアク其の物の信憑性を疑われかねない。そして本当にどうやって手に入れたのかは、絶対に……絶対に言えない。

横目でサークスの様子を窺えば、どうやら自分と同じ所で思考停止しているようだった。丹精な顔に、一筋の冷や汗が流れ落ちる。

「どうした、どうやって手に入れたのかと聞いているのだ。余の質問に……」

どう答えたら良い？　なんとはぐらかせば良い？　どうすればみんな幸せになる事が出来る？

答えの見えないまま、ノエルがとにかく何か喋って時間を稼ごうとした……その時だ。

「クソだよ」

広い室内にヤマトの声が響き渡った。
驚いてノエルが振り返れば、仁王立ちするヤマトと、その隣で頭を抱える太郎丸の姿が映る。

「くそ……とな？」
「ああ、そうだ。あのコーヒー、コピ・ルアクってのは現地の言葉で猫のコーヒーって意味でなぁ……」

意地の悪い目付きで、ニヤニヤと薄笑いを浮かべるヤマト。幼馴染としての直感が、ノエルの警鐘を打ち鳴らす。
まずい、急いでヤマトの口を塞がなきゃ！
慌ててヤマトへと駆け寄るノエル。だがその行動は、ほんの僅かに遅かった。

「なんと、猫の糞から取れるんだよ！！　クソの中から取れるコーヒー豆を、向こうじゃコピ・ルアクって言うんモガモガモガ……！」

言っちゃった……！
言っちゃいけない、本当の事を。

「そ……それは、まことか？」

ノーウェイの問い掛けに冒険者たちは目を逸らし、誰も答えようとしない。ただ口を塞がれたヤマトただ一人だけが、とても楽しげな表情で段上を見つめている。
その沈黙こそが、コピ・ルアクの真実を雄弁に語っていた。

一週間前。
一匹の猫が命拾いをした、しばらく後。
集落付近、コーヒーの木が生い茂る原生林にて、ヤマトは見事に

コピ・ルアクを見つけていた……猫の糞の山から。

「ほらな！　見ろよ、あると思ったんだ！　この種って結構固いだろ？　そう簡単に消化できないって事になったら、最後にはケツから出すしか無いもんな」

嬉しそうに語るヤマト。彼の眼前には、たくさんの糞と、それに塗れたコーヒー豆。どうやらこの付近の猫は、一箇所で用を足す習性があるようだ。

彼は猫のソレを解し、細かく選り分けて……いや、多くは語るまい。

「大したものだ、ヤマト君。キミのお手柄だ、僕が浅はかだったと認めざるを得ない」

「や、やったねヤマト……」

「げふっ、けふけふ……」

「……」

そんなヤマトを、遠巻きに見つめるサークス、ノエル、太郎丸。

そしてスミ。

「いやぁ、それほどでも……木の上から見た時にさ、猫の糞してあった所から、なんか芽が出てたんだ。だからもしかして、とは思ってて……それはそれとして、お前らも少しは手伝ってくれよ。結構大変なんだよコレ……」

糞を選り分ける作業を続けながらヤマトがぼやく。だが……。

「キミの手柄を横取りするほど、僕は恥知らずな男じゃないつもりさ」

「私はその……天使ってキャラクター的に、ちょっと……」
「げふっ……けほっ！」

誰もが彼を遠巻きに見守り、一歩たりとも近寄ろうとしない。しかしそれも無理からぬ事だろう。雑食性である猫の糞は、多少距離を取っていてもなお、かなり匂う。

「何だよお前ら、冷たい連中だぜ。それでもパーティーか！　なあスミ、お前は手伝ってくれるんだろ？」

名を呼ばれたスミは、猫を抱いたままヤマトを正面に見据えて、悲しげにボソリと呟く。

「アンタ本当の意味で、糞チビになっちゃったね……」
「おいコラぁ！　クソとか言うんじゃねぇよチビ！　そもそも俺が居なきゃなぁ……！」

と、こうしてヤマト一人の手によって幻のコーヒー豆コピ・ルアクは穏便な方法によって集められ、冒険者たちは無事にノーウェイの元へと届ける事に成功したのだった。

そして現在。

「……つまり余は、猫の糞まみれの物を口にした、という事か？」
「一応、洗ってはあるけど……まあ、そういう事になるな」

ここまでバレては仕方ない。そう達観したノエルの束縛から解放されたヤマトは、この上なく嬉しそうにノーウェイと向き合う。タチの悪いイタズラのネタばらしを楽しむ、意地悪な男の子そのものといった風情だ。

「こう言っちゃなんだけど、苦労して取ってきたんだぜ？　戻って来る間、何回手を洗ってもニオイが消えねぇし……ああ、ニオイってのはウ〇コのニオイな」
「……！」

ヤマトが一言喋る度にノーウェイの顔色が、どんどん赤みを増して行く。カップを持つ手は震え、両脚も痙攣してガタガタと椅子を揺らす。その様はまるで、癇癪を起こして泣き喚く幼児のようだ。
そして部屋の片隅からは、普段虐げられる立場の召使いたちが、怒りに震える主人の様子を心底楽しそうな表情で覗き見ている。

「こ……この痴れ者が！　何故先に教えぬ！？　知っておれば、そのような汚い物ッ！！」
「でもウマかっただろ？　ウ〇コのダシが利いてて」

一瞬の静寂。それを破ったのは……。

「ぷふっ！」

笑いを堪えきれず、太郎丸が吹き出した声だった。

「ふっ、ふはははははっ！」
「あはっ！　あはははは！」
「ゲラゲラゲラ……」

太郎丸につられて、至る所から次々に上がる笑い声。これまでの鬱憤を晴らすかのように、冒険者たちも屋敷の使用人たちも、全員が大声で笑い出す。
これほど楽しく、痛快な事があるだろうか？　皆が心の中に抱え

る「ざまぁみろ！」が、笑い声となって溢れ出したのだ。
腹を抱え、涙を流し、笑いすぎて咳き込む者もいる。それでもなお楽しげな笑い声は止む事を知らず、屋敷全体に響き渡る。

「うひひひひ……」
「あはは……あはっ、あはは……」

笑い声は絶え間無く続き、やがて、皆が笑い疲れた頃だった。

パリンっ！

頼りなく、切ない音が室内に響いた。
それがコーヒーカップの割れる音だとわかった時、笑い声が次第に小さく、少なくなって行く。

「よくも……余を謀り、コケに……ッ！」

音のした方向には、椅子から立ち上がり、冒険者たちを睨むノーウェイの姿があった。
激しい恥辱と怒りの為か、その顔は林檎のように真っ赤に染まり、今もなお赤みを増して行く……その色は本当に赤く……まさに真紅と呼ぶべき色だ。

「おい、アイツ……な、なんか……大丈夫なのか？」

動揺の混じる声で、ヤマトが呟く。
皆が見守る中、ノーウェイは頬も、唇も、耳の先も、目の中にまでも赤色が広がり、首や手も同色に染まって行く。そして林檎のようだった赤は深みを増し、血のような色へ。そして暗く錆び付いた鉄のような色に変わる。

「みんな……気をつけて！」

誰に言うでもなく、そう呟いた時。天使ノエルは感じていた。

悪魔の到来を。

第十三話：幻の琥珀色（七）（前書き）

残酷なシーンがございますので、苦手な方はご注意下さい。

第十三話：幻の琥珀色（七）

高価な調度品が並ぶ広い室内。その奥まった一段高い場所に立つ男から、目に見えない力の波が断続的に放たれている。その波を受けた時、人はただ立っているだけで肌が粟立ち、脚が震える。

耐え難い恐怖の為に。

「皆さん、逃げて下さい！　今すぐにっ！！」

鋭く大きな声でノエルが叫んだ。我へと帰った使用人たちは、か細い悲鳴を上げながらアタフタとこの場を離れ始める。

恐怖を発散しているのは、屋敷の主人であり、冒険の依頼人でもあるノーウェイだ。しかし今となっては彼をノーウェイと呼んで良い物かどうか疑問が残る。人というカテゴリを、大きく逸脱しつつあるのだ。

顔から全身に広がった赤色は深みを増し、濁った血のような色に。そして彼の四肢にはブクブクと丸いブドウのような塊がいくつも飛び出し、内側から服を押し破ってどんどん増殖を続ける。更には胴体部分も革袋に水を注ぐかの如く肥え太って行き、垂れ下がる脂肪で目は塞がり、腹には何段もの肉ヒダが出来上がる。

「こいつは……悪魔憑きか！」

生き物が、地獄からの囁きに耳を傾け堕落した姿。それが悪魔憑きだ。

非常に強い欲望や欲求、恐怖といった感情を感じ取って悪魔はやってくる。そして彼の甘言に身を委ねた瞬間、身体も魂も、全て悪魔の物となってしまう。

「おいノエル！　悪魔憑きになるのって、生きモンが死ぬ時くらいじゃねぇのかよ!?」

震える手で短剣を抜き放ち、ヤマトが叫ぶ。

ちょっと前に彼が戦った牛の怪物ミノタウロスは、死の間際に悪魔憑きと化して猛威を振るった。死の恐怖と生への執着が、件の怪物を悪魔憑きとさせた原因だろう。

だが目の前に居るノーウェイは違うはずだ。

「多分、死ぬほど恥かしかった……この恥辱を味わうくらいなら、悪魔に魂を売った方がマシだと感じたのだろうね」

言いながら最前線へと踏み出し、サークスも剣を抜いて構える。

「憤死、という言葉もある程だ。屈辱だったのだろうな」

隣に並び立つ太郎丸。彼も臨戦態勢で、いつでも抜ける構えだ。

「つまりヤマトのせい……」

「俺かよ!?　いや、ちょっとからかったくらいで死ぬほどキレなくても良くないか？」

「冗談よ、ヤマト。きっとノーウェイさんは、ずっと前から目を付けられてたんだと思う……それに悪いのは誰でも無い、人の弱みに付け込む悪魔なんだから……！」

翼を広げて浮かび上がるノエル。彼女を守るかの如く男たちは陣形を組み、戦いの準備が整う。

「理由はどうあれ、生きとし生けるもの全ての敵である悪魔に、交渉の余地はありません！　戦い、滅するのみですっ！」

ノエルの凛とした声が響く。それは神の使いであり悪魔と相反する存在、天使としての言葉であると同時に、この世界に生きる者全ての常識でもある。

甘い誘いでもって生き物を堕落させ、魂を奪おうと目論む悪魔たち。そのしもべとなった者を、野放しには出来ない。

「ギザマら……許サヌぞ……コノ恥辱……」

しゃがれた声を上げて赤黒い身体をぶるりと震わせ、段上で一歩を踏み出すノーウェイ。質量保存の法則を無視して膨れ上がった重量で床が砕け、片足がめり込んだ。

その瞬間、戦いの火蓋が切って落された。

「これ以上待つ道理も無い！　先手を取らせてもらう！！」

言うが早いか、サークスと太郎丸が飛び出した。

段上のノーウェイだったモノ目掛けて突進して一気に間合いを詰め、至近距離で放つ必殺の一撃。

「食らえ、滅空ッ！！」

魔力迸る銀の剣が振り下ろされ、空間が歪む程の衝撃波が生み出される。巨大なスライムを塵へと帰した技だ。

ノーウェイを中心として、毛足の長い絨毯が激しく放射状に波打ち、余波を受けた椅子が砕け散り、床材が粉々になって宙に舞う。更には壁に大穴が開き、隣の部屋まで瓦礫と一緒にノーウェイを吹き飛ばす。

「ふっ！！」

壁を蹴り、空中の瓦礫さえも足場として、吹き飛ぶ最中のノーウェイへ追い付いた太郎丸が、裂帛の気迫と共に間髪入れず斬撃を叩き込む。

未だ滅空の威力が残る衝撃波の中心。舞い上がる粉塵のキャンパスに、物差しで引いたような美しい直線が三本刻まれた。すり抜け様の、目にも止まらぬ剣閃だ。

「ぐガァッ！」

ノーウェイが獣のような呻き声を上げて仰け反り、瓦礫の中へと倒れこむ。一発で止めを刺すには至らなかったが、かなりの痛手を与えたようだ。プドウのように膨れたイボが千切れ落ち、ダブダブの腹にも深い傷を負っている。そして、そこからは真っ黒な液体がドロドロと流れ出していた。

「このまま押し切る！」
「おおっ！！」

サークスが再度、滅空を放つ為の集中に入る。その数秒という時間を、太郎丸の畳み掛けるような連続攻撃が稼ぎ出す。

幾重にも重ねられた剣閃。それら一つ一つは、悪魔憑きとなり高い防御力を得たノーウェイの致命傷とはならない。しかし確実に彼から体勢を立て直すチャンスを奪い、反撃の手を封じていた。

「よし、もう一発……ッ！　避けろ、太郎丸！！」

サークスが剣を斜めに振り下ろし、爆風と共に二度目の衝撃波が放たれた。

体勢を崩したままのノーウェイに回避の術は無く、またも直撃。

周囲の瓦礫同様に肉は千切れ、身体の末端から順に粉々に粉砕されて塵になって行く。
だが……。
「ぶふっ……ブフははは っ！　コノ程度か、白銀のサークス！！」
鋼さえも塵と化す滅空の勢力範囲から、ノーウェイの笑い声が響く。彼は一連の攻撃を耐え切ったのだ。
身体の表面を削り取られてタールのような体液を垂れ流してはいたものの、重要器官にはダメージが無かったようだ。一度は千切れたブドウのような肉豆も黒い体液の中からみるみる再生し、元以上に身体全体を覆い尽くして行く。
「今の技ガ、切り札ナノダろう？　ブフハッ！　笑止千万！　多少痛イが、恐レるに足りヌぅ！！」
身体を揺らし、真っ黒な体液を飛び散らせて笑うノーウェイ。垂れ下がった瞼の下で、赤黒い眼が不気味な輝きを増す。
「今度ハ、コチラの番……だ！」
ボンッ！　と、ゴム鞠が弾むような音。気がつけば、ノーウェイは高々と飛び上がっていた。全身の肉豆をバネにして跳ねたのだ。そして天井にぶつかり、再度ゴム鞠のような音を響かせて反射。斜めに飛んで、壁にもぶつかって、更に反射。繰り返す度、速度が徐々に上がって行くのがわかる。
その体型からは想像し難い敏捷さと凄まじい速度。反射のたびに天井や壁が悲鳴をあげ、弱っている箇所には穴が穿たれた。
更に二度、三度。壁や柱を蹴って加速すると、遂に方向を定めて真っ直ぐにサークスへと迫る。

「マズは、貴様だ！」
「くっ！！　だが……甘いッ！」

高速で飛来するノーウェイに対し、サークスの対処は冷静だった。素早く身を屈めると、イボだらけの肉塊を両断すべく、その進路上へ垂直に剣を差し出す。しかし……。

「ぐあぁぁッ！？」

サークスの剣が命中した直後、甲高い金属音と共にガリガリと岩肌を削るような音が響き、激しい火花が散った。悲痛な声はサークスの物。彼が握っていた銀の長剣は手を離れ、床の上を滑って行く。その刃は所々が欠けてボロボロになり、鋭利だった切っ先は削れて丸くなっている。

「どうヤラ、甘かっタのは、オマエの方だったなサークス」

部屋の中央付近、床を大きく窪ませて停止したノーウェイが、嬉しそうにたるんだ頬肉を歪ませた。剣が命中したと思われる胴部には金属の擦れた跡は残るものの、傷とはなっていない。しかもその痕跡さえ時間と共に消えて行く。

悪魔との契約は、傲慢な男にゴムのような弾力性と金属並の強度を持つ身体。そして化物じみた再生能力を与えていた。

「噂に名高いオマエも……」

足下に滑り来た銀の剣。それに一瞥をくれて脚を乗せ、軽々と踏み割るノーウェイ。

「我がチカラの前には、無力！」

彼が力を誇示し悦に浸ると、ブクブクと泡立つようにして全身の肉豆が更に増えた。

最早四肢と呼べる部分と胴体部分の区別すら曖昧で、イボイボの付いた赤黒いボールに小さな突起として頭が乗っているような状態だ。

「お次ハ誰ヲ……」

声も濁り、元の肉声を留めていないノーウェイ。ゴボゴボと汚泥から湧き上がる気泡のような不快な声だ。

剣を失い、手を負傷した様子のサークスを戦力外と見極め、ノーウェイが獲物を求めて首を廻らせると……頭上に眩いばかりの光が見えた。見上げれば、赤黒い身体が漂白されるような純白の輝き。天使が放つ、光子の煌きだ。

「悪魔と取引をして安易な力を得た事こそが恥と知りなさい！」

ノエルが光を解き放つ。

気付いた時にはもう、ノーウェイの身体は光の中にあった。

蛍のように漂う無数の白い輝きが、緩急をつけて彼の身体を貫き通す。

「グブぉ……！」

悪魔の肉を貫いた光は別の光とぶつかり、元来た方向へと戻る。その際にもう一度肉を貫き、更に別の光とぶつかって別方向へと走る。そしてまた肉を貫き……そんな事がノーウェイの周囲で、何千、何万回と繰り返される。

周囲から見てそれは、光の残像が紡ぎ出す細い糸によって、輝ける繭が生み出されて行くかのような光景だ。

「こ、これが天使のチカラ……なんて、美しい……！」

痛む手首を押さえながら、サークスが呟く。

強力かつ無慈悲な光の奔流は、神々しい輝きを放つ天使の姿と共に、青年の心に強烈な印象を刻み込んだ。

それは人がどれほど望んでも届かぬ高み。神の領域。

この瞬間、サークスの中で何かが変わった……そんな気がした。

第十四話：幻の琥珀色（八）（前書き）

残酷なシーンがございますので、苦手な方はご注意下さい。

第十四話：幻の琥珀色（八）

床は砕けて瓦礫と化し、調度品は砕けて価値を失った。
ゴミ一つ落ちていなかった先程から一転。廃墟の如く変わり果てた室内。
埃の舞う部屋の中央付近で眩い光を放ち、音も無く、激しく渦巻く光子の群れ。その中心では悪魔に魂を売り渡した男が、神々の怒りによって容赦なく身体を焼かれている。
なんとも凄まじい威力。天使の御業に目を奪われたサークスと太郎丸の心に安堵が宿り、身体から緊張が抜け落ちる。
これで終わった。自分たちの勝ちだ。

「ダメです、二人とも油断しないで！」

しかし天使の少女ノエルは光を操りながら、未だ緊迫した声で言った。

「まだ……あと少し足りないっ！」

光が、次第に弱く、細くなって行く。
そして光の繭から現れ出でたのは、赤黒い塊。燃え残った肉のような、醜悪なる肉塊だ。

「いや、ノエルさん。確かに完璧では無いかもしれないが、流石にこれでは……」

生きてはいないだろう。微動だにしない肉塊を前に、サークスがそう言ったのも無理は無い。
無数のイボによって倍近くにも膨れ上がっていたノーウェイの身

体は、その大きさを人並みにまで減じていた。そして、その身体自体も光によって貫き焼かれてクズ肉のようになり、時折り笛のような音を立てて褐色の肉汁が飛び出す以外、なんの反応も見せない。

「いいえ、まだです。悪魔はこうして人を欺き、油断を誘……ッ！！」

言葉を最後まで続ける事無く、突然ノエルの身体が勢い良く吹き飛ばされ、天井に打ち付けられた。

見れば焼け焦げた肉塊の中程から、真っ赤な色をした真新しい触手が勢い良く伸び、ノエルを押し上げている。

「チッ！　馬鹿な人間と違って、手の内がバレてイル天使の相手は厄介ダナ」

肉塊の中から声が聞こえてきた。先程まで聞いていたノーウェイの声から雑音を取り払い、不快な要素のみを残した、ある意味で洗練された声。

そして声に続き、肉塊から腕が突き出される。触手と同じ真っ赤な肌、尖った爪。その手の持ち主は肉を無造作に掻き分け、引き裂いて、その姿を冒険者たちの前に現した。

「……ヤア。ハジメマシテ」

その姿は肌が赤い以外に、人の物と大差無いように思えた。

ノーウェイから贅肉を削ぎ落としてシャープに整え、少々爪を伸ばしたような姿。大きな身体というわけでもなく、小さすぎるという事も無い。人間のごく平均的な体型、平均的な顔付きに見える。

ただ特徴的なのは、ノエルを突き上げた長い触手……尻尾だった。腰の中程から腕の半分くらいの太さを持つ、グネグネと動く尻尾が

生えている。

「ソコのキミ……サッキは、凄ク痛カッタヨ」

土煙が爆ぜた……と思った時、その赤いノーウェイは太郎丸の眼前に迫っていた。

「ぐほぁッ！？」

腹部に衝撃。太郎丸の口から、鮮血と空気が押し出される。続けて下顎が蹴り上げられた。

目の前の景色がグルグルと回る……と思った時には、身体が空中で何回転もして床と壁に叩きつけられていた。

その時、太郎丸は何の痛みも感じていなかった。ただわかったのは、腹部に受けた一撃は背骨ごと身体を貫いて反対側に抜け、次の一撃でもって下顎と頚椎を砕かれただろう、という事だ。

剣を振るう間もなく倒されるとは、不覚の極み……だが、それを口にする事さえ叶わない。

「太郎丸さんっ！！」

天井に打ち付けられた格好のまま、ノエルが叫ぶ。

こんな事なら、あと少し……あと少しだけ光を集めて攻撃に移れば良かった！

後悔の念が、少女の胸を押し潰す。

普段とは違う連携。先手必勝を期すサークスと太郎丸の攻撃は激しく速く、この上無く強烈な物だったが……ノエルには早過ぎた。悪魔を滅する聖なる光。それを集めるには時間がかかるのだ。

二人の攻撃が止み、ノーウェイが攻撃に転じて動きを止め、隙を見せた時がチャンスだと思った。しかし、光の収束が不十分だった。

もっと弱い相手であれば倒せていたかもしれない。だがノーウェイに取り付いた悪魔は思いの他強力で、彼の敵にはあと少し……時間にして四秒ほど足りなかった。

「このぉっ！」

全力を振り絞って尻尾を振りほどき、太郎丸の元へ急ごうとするノエル。

「ソウはサセ無イ」

言葉通りの意図でもって、ノーウェイは尻尾の先を八つに割いてノエルの身体に絡ませた。そして手足の爪を床に付き立てて踏ん張ると、渾身の力でもって振り回し、所構わず叩き付け始める。

「きゃ……！」

「コレナラ、チカラを溜メル事、叶ワヌ。アノ獣が死ヌマデ、コウシテ遊ンでクレヨウ」

天使であるノエルは、神の加護によって悪魔の攻撃でダメージを受ける事は殆ど無い。だが掴んで振り回されては、光を集めて行使する天使の能力自体が使い辛い。集中が出来ないのだ。

しかもノーウェイの能力は先程までよりも更に上昇していた。人としての肉体や自我を失い、より純粋な悪魔に近付いた為だ。

早く、早く尻尾を引き千切り、太郎丸の元へ行かなければ。腹部に受けた傷は間違いなく致命傷だった。一刻も早く治療を行わなければ、彼の命はもう……！

「さ……サークスさん！　ポーションを、太郎丸さんにっ！」

全回復には及ばないだろうが、即効性のある回復薬であるポーションを与えれば、太郎丸生来のタフネスと相まって多少の延命措置くらいにはなるはずだ。振り回され、目を開ける事さえ困難な状況の中で、命の灯火を繋ごうとノエルは必死に叫ぶ。

「あ、あぁ……」

弱々しい返事がサークスから返る。だが彼は動けなかった。怖かったのだ。

自らの誇る必殺技。それを大きく上回る天使の攻撃。それらを持ってしても悪魔は倒れる事無く、逆に太郎丸を一瞬で打ち倒してしまった。

今の自分は完全に戦力外であり、相手にされていない。だがもしも、下手に動いて目立ったなら……次は自分の番かもしれない。その思いが、無意識下での恐怖が。サークスの足に釘を刺し、その場に繋ぎ止めてしまう。

「サークスさんっ！！」
「ククク、ヤハリな。臆病者メ」
「くっ……！」

ノーウェイも、こうなる事を予測していたのだろう。それ故に太郎丸を先に打ち倒し、サークスを後回しにしたのだ。

焦るノエル。もう時間が無い。こうする内にも太郎丸の腹からは血が大量に流れ出し、心臓の鼓動が弱くなる。呼吸は……既に止まっている！　早く、なんとかしないと……！

「はい、そこまで！！」

唐突に、ノーウェイが体勢を崩した。踏ん張っていた手足が床か

ら離れた……というよりも、踏ん張っていた床が周囲から切り離されて、足場としての機能を失ったのだ。
この気を逃さず、渾身の力で尻尾を振り払うノエル。

「チッ！　コノ……！」

舌を打ちながらノーウェイが振り返り、尻尾の先端を見る……が、既にノエルは脱出済み。まんまと天使に逃げられてしまった。
一体何が起こった？
足下に微かな気配を感じて視線を落せば、いつの間に忍び寄ったのだろう？　短剣でもって足元の床を引っぺがすヤマトの姿が映った。

「あ、見つかっちまった。よう、はじめまして……か？」
「雑魚が、味ナ真似を」

戦闘が始まるや否や姿を消していた一番の臆病者。この四人の中で最も弱い小僧であり、最もムカつく糞野郎。それがノーウェイの、ヤマトに対する認識だ。そんな雑魚が、今更何をしに来たというのか。
とりあえず蹴りの一発でも見舞ってやれ。それだけで脆弱な小僧の身体は真っ二つとなり、即死するだろう。
そう考え、ノーウェイが軸足に力を込めて蹴り脚を振りかぶった瞬間……多量の細かい砂が顔にぶつかり、視界を覆い尽くした。

「グッ、ブァっ！？」

凄まじい速さの蹴りが、砂煙を真っ二つに切り裂く。そこにヤマトの姿は無い。

「目潰シとは小癪ナ……！」

悪魔と化したノーウェイは、砂が少々目に入ろうと痛みは無い。だが視界が悪くなるのは必然だ。

コーヒーの件といい、今回の目つぶしといい。このヤマトとかいう小僧は要所要所で顔を出し、邪魔をする。取るに足らない雑魚でありながら、この上なくうっとおしく、腹立たしい。

「ソコかッ！」

「おっと！」

目の端に映った動く物体目掛け、鋭い爪を見舞おうとする。だが、またも何かがノーウェイの視界を覆い隠した。

今度は砂では無い。目の前に現れたのは、ヒラヒラと薄く大きな布……見覚えある、屋敷のカーテンだ。戦闘開始から姿を消していた間に、どこかの窓から拝借したのだろう。

苛立ちと共に爪で薙ぐと、小気味良い音を立てて横一文字に引き裂かれるカーテン。その隙間から見えた景色に、またもヤマトの姿は無い。それとほぼ同じタイミングで、横合いから同じようなカーテンが投げ掛けられ、再度ノーウェイの視界を奪う。

「フザケルな小僧ッ！！」

ノーウェイの苛立ちは頂点に達した。

両手と尻尾を使い、顔に纏わり付くうっとおしい布地を細切れに破いて捨てた。ようやく開けた視界。その正面に、表情を強張らせるヤマトの姿を捉える。

「悪魔をココまで愚弄シタのだ。小僧、覚悟は良イな！」

「く……」

これ見よがしに腕を構え、ヤマトに刺すような視線をぶつけるノーウェイ。脆弱な肉体を引き裂かんと爪が鋭さを増し、骨ごと捻じ切ってやろうと腕の筋肉がはちきれんばかりに膨らむ。

そして悪魔は、レベル４の少年に死を贈ろうと一歩を踏み出す…

…が、その場で足を絡ませて転んでしまった。

「な、何ッ！？」

「くっ……ぷははっ！　蹴躓いてんじゃねぇよ、ばぁか！」

ヤマトはそう言って笑ったが、ノーウェイにはわかった。何かに躓いたのでは無い。足に何かが絡まっているのだ。

自らの下肢を見れば、ロープの両端に錘が付いたボーラと呼ばれる道具が両脚に絡み付いている。狩りの時などに、獲物の足止めを目的として使われる投擲用の道具だ。カーテンに気を取られている隙に、投げ付けられていたのだろう。

「ほれ、もう一丁！」

「ガァッ……！」

ヤマトの投げたボーラが、今度はノーウェイの顔に命中する。更に何本も何本も投擲され、これでもかというくらい幾重にも絡みつくボーラ。これも先程の砂と同じだ。痛みは無いが視界は遮られ、蜘蛛の巣が顔に絡まったかのような不快感。うっとおしい事この上無い。

「ヤマト！　太郎丸さんに……！」

「わぁってるよノエル！　おらよっ！！」

ボーラを右手で操りながら、ヤマトは左手でベルトポーチから数

本のポーションを取り出し、太郎丸へと投げ付ける。
ガラス容器に入れられたポーションは血塗れで倒れた人狼の身体にぶつかり、粉々に砕けて降り注ぐ。直後、傷の周辺から湧き上がる魔法の光。

「これでとりあえず、血は止まるだろ。後はノエルっ！」
「うん！」

頷き合う二人。ノエルは大きく羽ばたいて舞い上がり、ヤマトは腰を低くして短剣を構える。
その様子に、焦りを感じたのはノーウェイだ。
もう時間が無い。あと十数秒もすれば天使は力を溜め、降魔の光を放つだろう。本来なら逃げたい所だが……小賢しい小僧の道具類が厄介で、天使を振り切れるとは思えない。
こうする間にも、光が天使へと収束して行く。
それならば……！

「一瞬で小僧を殺シ、天使を叩キ落シテクレル！」

可能な筈だ。人狼さえも反応できない悪魔の瞬発力を持ってすれば、トロい人間に一撃を加える事くらい容易い。さっきは目潰しを食らい外したが、今度は外さない！
両の脚に力を込め、思い切り床を蹴るノーウェイ。弾け飛んだ床材が地面に落ちるよりも早く、ヤマトの眼前に迫る。そして繰り出すのは硬く握り締めた拳。こいつで、どてっぱらに風穴を開けてやる！
だが流石に無警戒の相手とは違う。目で追いきれてはいないようだったが、ヤマトは反射的に腕を下げてノーウェイの拳をガードしていた。
しかし、甘い。

スローモーションのように感じる世界の中、ガードした腕の肉がひしゃげ、骨が折れる感触がノーウェイの拳に伝わる。皮が裂け血が噴出し、折れた腕もろともに拳は胴体に命中。貫くには至らないが、肋骨の大半と内臓のいくつかに深刻な損傷を与えた手応えがある。

拳を振り切ると、小僧の身体はいびつに曲がって反対側の壁まですっ飛んで行った。勢い良く壁に激突し、力無く地面に横たわる膳寂な人間。命はあるかもしれないが、これで戦闘不能だ。残るは天使のみ！

頭上を見上げれば、天使の娘は未だ力を溜めている最中だ。無防備な今なら、容易に攻撃を加える事が出来る。

「貰ッ……！！」

高く跳躍しようと、身体を縮込めて備えた時だ。突然、後頭部に強い衝撃を受けた。

よろめき、膝を付くノーウェイ。瞬時に硬い物がぶつけられたのだと悟った彼が見たのは、甲高い音を立てて床を叩く鋭い曲刀。それは瀕死の太郎丸が、力の全てを振り絞って投げ付けた愛刀だった。

「半死人が、ヨクモヤッテクレタ物ダ」

先に死にかけの人狼を片付けるか？　いや、今は天使が優先だ。ノーウェイが見せた、一瞬の迷い。その一瞬で、またも事態が動く。

「舐めてんじゃねぇぞ、オラァ！！」

立ち上がりかけていたノーウェイは、またも唐突に側頭部への打撃を受け、床に手を付いた。

今度は、助走を付けた飛び蹴り。相手は……致命傷を与えたはずのヤマトだ。

「何故……！？」

混乱するノーウェイ。ヤマトには、かなりの痛手を与えたであろう事は間違い無い。骨は折れて内臓は傷付き、とても飛び蹴りを放てるようなコンディションでは無いはずなのに！

「ばぁか！　ポーションに決まってんだろ！」

あらかじめダメージを受けるとわかっていたヤマトは、それを見越してポーションを飲んでおいたのだ。

例えば高い場所から飛び降りる時などにあらかじめポーションを服用する事で、着地の衝撃を受けた直後から回復が始まり、結果的に傷を浅くする事ができる。ポーションは効果時間が短い為、直前に使用しなければならないのがネックではあるが、生存率を上げる為に冒険者の間では良く使われるテクニックである。

「太郎丸へ投げるついでに、自分も飲んでおいたんだよ。気付かなかったか？」

気付かなかった。顔に絡まったボーラを取る事に専念していた為だ。

「まぁ弱い奴には、弱い奴なりの戦い方があるって事だ。わかったか、バカ！」

なんという邪魔臭さ。なんという腹立たしさ。

雑魚だからトドメは後回しで良いと考えたのが、そもそもの間違

いだったのだ。一番ムカつくこの小僧を、一番最初に殺すべきだった！

「つっても、俺は使用人逃がすのにウロウロしてて、最初ここに居なかったけどな」

「小僧……ッ！」

怒りに全身を震わせ、ゆっくりと立ち上がるノーウェイ。

今度は油断しない。今度は如何なる動きも見落とさない。一挙手一投足を観察し、小僧が得意とする不意打ちの類は絶対に許さない。確実に首を刎ね、回復の及ばぬ世界へと一撃で叩き落してくれる！

「貴様は殺ス！！」

「やなこった！　食らいやがれ！！」

案の定、ノーウェイが動きを見せるとヤマトも動いた。ポケットの中に隠し持っていた何かを流れるような動きで取り出し、投げ付けて来る。

「見切ッタ！！」

予想通りの行動。

ノーウェイはその場で踏み留まると、ヤマトが投げ付けた小さな何かを凄まじい動体視力で見極め、鉤爪で両断した。その上で爆発物の類を警戒し、顔を庇う。

「……？」

だが、何も起らない。

両断された小さな何かは、力無く地面に落ちて転がった。

それは、一粒のコーヒー豆。

「もう、ネタ切れだ」

ヤマトの声に、ハッとして顔を上げたノーウェイが見たのは、会心の笑みを浮かべるヤマトと、自分の周囲に漂う清浄なる光の粒。

警戒しすぎたのだ。コーヒー豆などに構わず、思い切って突っ込んでいれば間違いなくヤマトの命は奪えた。だが何かあると思い、二の足を踏んでしまった。

自らの過ちに気付いた時、もう既にそこは、引き返す事のできない場所であった。

「終りです……悔い改めなさい」

「ヌオオォォォ！！　糞ガアァァァァッ！！」

周囲に漂う光の粒が槍と化し、ノーウェイの身体を幾重にも貫く。光の槍は互いにぶつかり反射しあい、輝く軌跡が重なり合って輝く珠が形成される。

そんな中、獣のような絶叫が屋敷に響く。

「ヤマト、覚エてイロ！！　貴様ダケは、何千、何億回生マレ変ワロウとも見ツケ出シ、最高の屈辱と絶望を与エテ……」

ノーウェイが……いや、彼に取り付いていた悪魔が最後に発した呪いの言葉は、途中から断末魔となって虚空に消えた。降魔の光は闇の住人に対して容赦する事無く、完膚なきまでに存在を抹消する。

やがて輝きが消え、静寂なる時が訪れた時。

疲労困憊、満身創痍の冒険者たちの前には、神に逆らった者の成れの果て……真っ白な灰だけが残されていた。

第十五話：変わらぬ日々、変わる明日

良く晴れた昼下がり。
冒険者たちが集う食堂兼宿屋『ほろ酔い亭』には、妙に食欲をそそる安っぽい油とビールの匂いが漂っていた。
昼食を済ませ、腹を満たし終えた冒険者たちはそれぞれのパーティごとにテーブルを貸し切り、様々な話に花を咲かせている。
色々な人種、色々な職業が集まるこの場所。かなり特異な外見であっても、数分もすれば溶け込み、馴染んでしまう。そんな懐の深さがある。
だがそれでもなお、目立ってしまう人たちというのは、どこにでも居るものだ。

「申し訳ございません……なんだか、私が目立ってしまっているようで……」
「気にすんなよ。別に悪い事してるワケじゃねぇし」

丸テーブルを囲む五人の男女。ヤマトとノエル、サークスと太郎丸。そして長身の美女がその「目立つ人たち」だ。
有名人のサークスと太郎丸。そして存在そのものが珍しい天使のノエルに加え、どこか浮世離れした雰囲気の美女が注目度に拍車を掛ける。更にその美女は、美しいという事以外にも注目を集める理由があった。

「んだけど、その尖った耳は隠しといた方が良いかもな」
「は、はいっ！」

ヤマトに言われた美女が、青みがかった長い髪で、鋭く尖った耳をそそくさと隠した。

「しかし、まさかアデリーネさんがエルフだったとはね。本当に驚いたよ」

サークスが集まる視線に苦笑しながら言った。

エルフ。

深く古い森に住み、森の民とも呼ばれる少数種族。妖精の一種とも言われている。

魔力の扱いに長け高い知能を誇り、非常に寿命が長く、人間の十倍以上の時を生きる者も珍しく無い。外見的な特徴としては、鋭く尖った耳。そして人間の美的感覚から見た場合、種族全体が美男美女揃いである、という事に尽きるだろう。

ただし非常に排他的であり、他種族との積極的な係わり合いを避ける傾向にある。

「申し訳ございませんサークス様。私、お屋敷以前の記憶が曖昧で、世間の事を殆ど知りませんので、自分がそんなに珍しい種族だなんて思っても無くて……」

「いやいや、責めたんじゃないんだ。むしろ嬉しかったくらいさ。エルフと天使が同席するシーンなんて、そう簡単に見れる物じゃないからね」

優しく微笑んだサークスに、エルフの美女ことアデリーネが少し緊張を解いた。

彼女は先日までノーウェイの妾であり、ヤマトが報酬代わりに身請けを申し出ていた女性だ。元主人たるノーウェイが悪魔憑きとして討たれた今、彼女は事前の約束に従ってヤマトたちのパーティーに身を寄せていた。

高い水準で整った顔。優しげであり、憂いを帯びた瞳。細身でありながら女性的な起伏に富んだ身体つきと、長い手足。そしてさら

さらの長い髪は腰の辺りまで伸びて、涼しい青色に輝いて見える。
一般的なエルフの水準からしても、アデリーネはかなりの美女である。その出自やエルフという種族自体の物珍しさもあってか、人目を引く事この上無い。

「まあ子供の時からずっとノーウェイさんの家に居たのなら、無理も無いですよね」

冷たいオレンジジュースをストローですすり、ノエルが言った。
アデリーネの話では、ごく小さい頃に屋敷に来てからというもの外に出た事は一度も無く、今では子供の頃の記憶も殆ど残っていないと言う。屋敷の中での出来事が彼女にとって世界の全てであり、ノーウェイに仕える事を疑いもしなかったのだ。

「はい……ですので私、少し常識に欠けている部分があると思います。ご迷惑をお掛けするかとは存じますが……」
「いいよ、気にするなって。ほら、良かったら食いなよ。腹減って無い？」

ヤマトの気遣いに、嬉しげな微笑みを返すアデリーネ。大人っぽい容姿とは裏腹に、その表情はまるで初恋を覚えたばかりの少女だ。
その時、ノエルの表情がほんの一瞬だけ強張った事に気付いた者は居ただろうか？

「ところで、次の依頼についてなんだけど」

あまり空気が読めない性分なのか、それともあえてそうしたのかは判らないが、唐突にサークスが口を開いた。
彼はテーブルの上を軽く片付け、前回したのと同じように丸まった羊皮紙を広げて、カラのジョッキを重石にする。

「一応、僕の方に『伝説の武具を探す』って依頼が舞い込んでる…
…ま、依頼というか宝探しの類だけどね」

冒険者は何も、他者からの依頼のみで成り立つ商売では無い。時には自ら進んで迷宮に赴き、魔物を倒して腕を磨き、隠された財宝を探したりする事もある。

「あ～……悪いけど、俺と太郎丸はパスだな。傷がまだ癒え無いんだ」

ヤマトが言って、袖を上げて見せた。ノーウェイの拳を受けた彼の腕は内出血が続いている為に赤紫色で、腫れも引いていない。脇腹も同じ状態で、動くと痛むのだ。

太郎丸の症状は更に酷く、腹には血の滲む包帯が何重にも巻かれ、首は石膏と包帯で固定されている。普通に歩き回る事くらいは出来そうだが、戦闘を含めた激しい運動は難しそうだ。

「悪魔の攻撃には呪詛が乗ってるから、治りが悪いの」

傷を見たノエルが、申し訳無さそうに言う。

ノーウェイとの戦いから一週間。二人に対しては毎日のようにノエルが治療を行っていたが、全回復には程遠い。悪魔の呪いに最も効果的なのは、本人の自然回復力。時間が薬、というわけだ。

「ごめんね。私の能力が、もう少し強ければ……」

パーティーの治癒は天使の役目。悪魔の呪いに阻まれて、自らの役目を果たせていない事に負い目があるのだろう。ノエルの声が沈む。

「バカ。太郎丸なんか、ポーションだけじゃ危なかった。下手すりゃ死んでたんだぞ？　俺らは、お前のお陰でここまで良くなってんだよ」
「……うん」
ヤマトの声に、ノエルが頷いて少しだけ身を寄せる。他人からはわからないくらいの、ほんの少しだけの接近だ。
「そうか……全員で行きたかったが、無理は出来ないものな。いや実はこの宝探し、期間限定でね……この機会を逃すと、次は五年後なんだ」
心底残念そうにサークスは言った。
宝探しの舞台は海底洞窟。五年に一度だけ口を開く洞窟に、伝説の武具は眠るという。
潮の香り漂う、深く暗い洞窟。湿った岩壁を伝い歩き、海水が穿つ岩の隙間を潜れば、見た事も無い海洋生物が魔物として襲い掛かってくる。そうして数多の困難を退け辿り着いた先には、フジツボがびっしり付いた宝箱に詰まった光り輝く金銀財宝――。
事の真偽はともかくとして、冒険者と名乗る者であれば一度くらいは体験してみたいシチュエーションではある。
「というわけなんだ。だから……これはもう、完全に僕のワガママなんだけど……もし皆が許してくれるのなら……」
依頼内容をざっくりと説明したサークスは、多少躊躇いがちに言葉を続ける。
その後ヤマトたちは最後までサークスの話を聞き、どうして彼がそんなにも言い難そうにしていたのか、その意味を知るのだった。

第十六話：記憶の中の故郷（一）

蔦が幾重にも重なり絡まりあって、天然のトンネルを作り出す。ざわめく葉の隙間から僅かに差し込む日光が、落ち葉の道に斑模様を描き出し、大自然と言う名の芸術家の偉大さを歩く者たちに思い知らせている。

時折り、優しい風だけが通り抜けるその道。だが今日は、珍しい客人の姿があった。こんな事は何年ぶりだろうかと森の精霊たちは囁き合い、虫たちは蔦の葉に身を隠す。

「お二人とも、本当によろしかったのですか？　こんな事にお付き合いして頂いて……」

蔦のトンネルを行く三つの人影。その内の一つ、アデリーネが遠慮がちに聞いた。

ノーウェイの屋敷で着ていたセクシーな服装から一転。彼女はシックな装いの動きやすそうなパンツルックに身を固め、背中には小さなザックを背負っている。長い髪はアップにしてまとめ、エルフの特徴である尖った耳も隠す事無く露わにしていた。どこか清楚で、知的な装いだ。

「良いんだよ。俺も、太郎丸も、リハビリみてぇなモンだ」

小柄な身体に少し大きめの荷物を背負ったヤマトが、そう言って顔を上げた。後に続く太郎丸も、無表情ながら頷いて肯定の意思を表す。

彼ら三人は前回の依頼に引き続き、森へやってきていた。誰も踏み入る事の無い森林の奥深く。秘密の通路を通らなければ行き着けないと噂されるエルフの隠里を目指して。

「それに例の宝探しに行けなくて退屈だったしな」

汗を拭いながら、ヤマトは数日前、ほろ酔い亭でサークスが言った言葉を思い出していた。

「この宝探し、俺と……ノエルさんの二人で行かせてもらえないか？」

「え……えぇっ！？」

この提案に最も驚いたのは、他ならぬノエルだった。まさか自分の名前が出るとは思っていなかったのだ。

「本当なら全員でと思った。けれど太郎丸とヤマト君は本調子で無く、荒事に向かない。かといって信用の置けない他の冒険者とは組みたくない。しかし僕はどうしても、この案件に挑戦したいんだ。たとえ一人でも」

サークスは、なるべく要点だけを冷静に淡々と語っているつもりだったのだろう。だが言葉の端々から、この『伝説の武具を探す』という話にかける想いの強さが滲み出している。

「だが、挑むからには当然成功を収めたい。そこで考えた。付き合いは短いがノエルさんなら信用できるし、能力は言うまでも無い。だから、こんなチャンスは滅多に無いから……僕の我侭である事は重々承知しているんだが……」

思いついた単語をそのまま口に出すかのような、あまり上手とは言えない語り口。だが、だからこそ彼の真剣さが窺えた。

「ヤマト君とノエルさんがコンビを組んでいるのに、それに割り込むような形で……しかも怪我を負った太郎丸を置いて行くなど、相当な恥知らずだとは思う。だけど、僕は……」

サークスの冷静さは、既に氷解していた。机の上で握り締める拳には力が入って血の気が失せ、爪の先まで白く変色している。

「僕は……伝説の武具を探したい！　五年は……長すぎる」

語り終え、俯くサークス。

誰も、言葉を発しない。食堂という喧騒の中にあって、静かな時間が流れる。

そんな中で、ノエルは悩んでいた。

サークスはきっと、伝説の武具に強い思い入れがあるのだろう。何度も世話になった彼に恩返しの意味も込めて、協力してあげたいとは思う。

だが同時に、強い抵抗も感じていた。

ノエルは、ヤマト以外の誰かと二人で冒険へ出た経験が無い。というよりも、もともと冒険という行為そのものに大した興味は無いのだ。そんな彼女が危険と苦労を伴う冒険へと赴く理由。それは……。

「……」

ちらりとヤマトの様子を窺うノエル。彼は口をへの字に曲げて腕を組み、何事か考えているようだった。

私、どうしたら良いと思う？

そう問えたら、どれほど楽だったろう。

行っちゃ駄目だ。

そう言ってくれるなら、どれほど嬉しかったろう。

「……わかりました、サークスさん。今回の宝探し……私で良ければ、同行させて頂きます」

自分から、そう言うしか無かった。

ヤマトに聞いたとしても「行ってこい」と言っただろう。十年以上も同じ時を過したノエルにはわかる。あれだけ真剣な様子を見せたサークスさんの気持ちを無視できるヤマトでは無いと。

「あ……ありがとう、ノエルさん！」

嬉しそうな表情を見せるサークス。ノエルとしては心中複雑であったが、幾分か救われた気がした。

「いいえ、こちらこそ。よろしくお願いします」

言って、ぺこりと頭を下げる。

一度決めたからには、もう気持ちを切り替えなくてはダメだ。サークスの期待に応えられるよう頑張らなくては。

話を聞く限りでは、この町の近くでは無さそうだ。移動を含めて一ヶ月か二ヶ月か……かなり長期間の冒険となるだろう。

そうなってくるとノエルの脳裏には冒険とは別の、新たな悩みが浮上してくる。

「あ、あの……ノエル様？　私の顔に、何か？」

アデリーネの怪訝そうな声にハッと我に帰ったノエルは、慌てて視線の意図を誤魔化した。無意識のうちに凝視してしまったようだ。

自分が留守の間、彼女は……アデリーネはどうするのだろう？

成り行きとはいえ、一応彼女はヤマトに買われた身。主人と召使

いの関係だ。そしてヤマトは怪我人。となれば、いくら無茶が服を着て歩いているような彼であっても、依頼を受けて冒険に出るような事はしないだろうし、そもそも怪我人に仕事を頼む依頼人もいないだろう。となるとヤマトとアデリーネは宿に留まり、いつも一緒という事になる。朝も昼も、そして夜も。

偏見を持つのは良くないとは思うし、それ自体について善悪を語るつもりも無い。だがアデリーネは屋敷にいる間、あんな事やこんな事をして主人であるノーウェイの歓心を得ていたという事実がある。

女性に免疫の無いヤマト……誘われるまま、あっさりコロっと骨抜きにされてしまうのではないか？　そんな不安な感情を頭の中から消し去る事が出来ない。

「すいません、ちょっと宜しいですか？」

暗澹たる思いにノエルが囚われている中、不意にアデリーネが何かを思いついたように口を開き尋ねた。

「もしヤマト様のお許しを頂けるのでしたら、実は……私も少しお暇を頂きたいのです」

突然何を言い出すのかとキョトンとするノエル。

そんな彼女に、アデリーネは意味有り気な微笑を返して言ったのだ。

「私の、生まれ故郷を見てみたいのです」

そして今。

アデリーネの故郷を目指し森を行く三人の最後尾で、ひたすら押し黙り一連の成り行きを見守っていた太郎丸は、こう考えていた。

天使とエルフ。知力が高い事で知られる両種族であるが、こと男女の機微に関しては、エルフが一枚上手である、と。

太郎丸の想像ではあるが、唐突にアデリーネが故郷を見たいと言い出したのは、ノエルを慮っての事だったろう。ヤマトから遠ざかろうとしたのだ。もしかすると、ずっと以前から里帰りを望んでいたのかもしれないが……あのタイミングでは多少、不自然に思えた。

「へぇ、凄ぇなココ。通路も何もかも全部、生きてる植物やらで作ってあるんだな！　初めて見るモンばっかりだ」

「私もです。外の世界は久しぶりですし、故郷の記憶も曖昧ですので、見るもの全て珍しく映ります」

太郎丸の前を、他愛の無い雑談に興じながら進む二人。その様子に、人狼は人知れず溜息を漏らす。

前述したアデリーネの気遣い。それを台無しにしたのがヤマトだった。一人で故郷へ向うと言うアデリーネに、ヤマトは同行を申し出たのだ。自他共に認める世間知らずの女一人での旅路は、あまりにも危険だからというのが理由だ。それに、怪我をしていて暇だからとも付け加えた。

確かにその通りであると思うし、この申し出は純粋な、ヤマトの善意であり優しさだったのだろう。

だが、太郎丸は思った。

お前から二人きりになってどうする！　空気を読め馬鹿者！！

と。

案の定、アデリーネは困惑の表情。大人しく休養してて欲しいとヤマトに説くものの、効果は薄そうに思える。そしてアデリーネの逆サイドでは、ノエルがあからさまに不満げな表情で手元のパンを千切り、粉々にして皿の上に並べていた。……ちょっと怖い。サークスは能天気に洞窟のマップなど眺め、この微妙な空気に気付いてさえいないようだ。

これはもう、仕方が無い。

「某も行こう」

こう言う以外に無かった。自分も同行するとなれば、ノエルも多少は安心するだろう。正直、傷の痛みは酷いが、見て見ぬ振りは出来ない性分だ。

「お、トンネル抜けるぞ。そろそろ居住区か？」

「いいえ、確かもう少し距離があったような……」

静かな森に響く声を聞きながら、またも太郎丸は思う。

ヤマトよ、もう少し女心というものを考えろ、と。

先程から会話を続ける二人ではあるが、注意して聞いていれば積極的に話題を作り、話しかけているのはヤマトの方だ。多分、彼には下心など無く、急激な環境の変化に心細いであろうアデリーネを気遣っての事だろうと思える。

だが、それを端から見た場合どうだ？　ノエルが心配するのも良くわかる。

ヤマトはまだ若い。そんな彼に、男と女の心理まで考えた上での気遣いを行動を要求するのは、あまりにも酷であり難しいだろう。

これから多くの経験を積んで、徐々に慣れてゆく物ではあるが……今、正にその技術が必要だという時だというのに……。

「……？」

不意にアデリーネが立ち止まった。そして振り返り、太郎丸と目が合う。

こちらの視線が気になったか？　そう太郎丸が考えた時だ。アデリーネが、苦笑して見せた。

『ヤマト様からこんなにも優しく、色々と気を使って頂けるのは凄く嬉しいのですが……少し、ノエル様に申し訳無いです』

そんな声が聞こえた……気がした。

なるほど、ヤマトの無邪気な優しさも、太郎丸が同行した意味も、全て察しているという事か。エルフの高い知力と、長い寿命に基づく人間観察力、人生経験は伊達では無いらしい。

それならば……。

ゴツン、と鈍い音が森に響く。

「ぐはっ!?　何すんだよ太郎丸!　痛ぇじゃねぇか!」

「おぉっと、失礼した」

太郎丸は剣の鞘で、軽くヤマトの頭を叩いた。軽くとはいっても女たちの鬱憤により多少の威力上乗せがあったかもしれないが、概ね『軽く』の範囲内であったろう。

「カンベンしてくれよ～。今回はノエル居ねぇから回復出来ないんだからさぁ」

痛む頭を擦りながら、さらりと女の名を出すヤマト。

そして再度、ゴツリと鈍い音。

「痛ぇ!!」

「む、すまぬ」

そんなにヒョイヒョイ脳裏に浮かぶ名であるなら、もうちょっと気を使ってやるがいい。

この女泣かせが!!

第十七話：記憶の中の故郷（二）

視界の全面を埋め尽くす深い緑。息をすれば空気が濃く感じられ、静寂の中に耳を澄ませば柔らかな葉の擦れ合う小気味良い音や、植物が水を吸い上げる音さえも聞こえてきそうだ。

木々の生い茂る森の中、所々に架けられた橋や、木材を加工して作ってある道具の類が微かな生活臭を感じさせる場所。ここがアデリーネの生まれ故郷、エルフの隠里だ。

「どうだ、アデリーネ。懐かしいモンとかあるか？」

「はい……景色は、私の記憶とは随分違っています。ですが所々に懐かしさを感じさせる物があります」

愛しげに樹木を撫でながらヤマトの問いに答えるアデリーネ。

自分がこの郷を離れてから、どれくらいになるだろうか？　木は育ち、あるいは枯れ果て、目に見える物は随分と変わっている。だが空気は……郷の雰囲気は、あの頃のままだ。

視線を上げれば、樹上に細い枝を組み合わせて作られた家のような物が見える。そこから垂れ下がる蔦を使い、子供の頃の自分は、この広い郷の中を思うがまま自由に走り回っていた。木と木の間に備え付けられた、朽ちた板。それを的に、弓矢の練習に励んだ日々が蘇る。

風の音、森の香り、落ち葉の感触。

何故、忘れていたのだろう？

きっと、屋敷での生活には必要が無かったからだ。思い出しても辛いだけだと、記憶の底に沈み込んでいたのだ。

「ヤマト様。私、少し見て回って来ても宜しいでしょうか？」

「おう、行って来いよ。俺たちはココで待ってるから」

ヤマトと太郎丸にぺこりと頭を下げると、アデリーネは軽やかなステップで土を蹴り、郷の緑に溶け込むようにして木々の隙間へと消える。その何気ない所作の中に、エルフが森の人と呼ばれ理由の一端を垣間見るヤマトたち。

「……自分の家とか、見に行ったのかな？」

「わからぬ。だが長い時間を生きる彼女らにとって、過去と向き合う事は何か特別な意味があるのだろう」

喋りながら、適当な倒木に腰を下ろすヤマトと太郎丸。二人ともずっと我慢していたが、この郷に入ってからという物、ノーウェイから受けた傷が地味に疼く。この場の清浄な空気に、悪魔の呪詛が反応しているのかもしれない。

二人は申し合わせたかのようにザックから水筒を取り出し、口に運んだ。少し温い液体が喉を潤す。水筒の中身は、ノエルが作ってくれた薄めのポーションだ。レモン風味で、ほんのりと甘い。

「過去ねぇ……そんなモンかぁ？　昔の事なんざ、どうでも良いと思うけどな」

「周りにとっては、そうだろう。しかし本人にとっては、重要な事もある」

諭すように言った後、何かを思い出しているのか、自分の手をじっと見つめる太郎丸。どこか、寂しげだ。

ヤマトは彼の過去について何も知らない。知っているのは、ここよりもずっと東の出身で、剣の扱いが得意だから冒険者になったという事くらい。家族や恋人の有無も、故郷を離れた理由も、そういえばちゃんとした年齢さえも知らない。

少しくらいは、詮索したい気持ちもある。だが……どうでも良い。

太郎丸が実は財閥のおぼっちゃんでも、勇者の血を引く子孫でも、凶悪な犯罪者だったとしても、今の自分にとっては関係が無いと思える。短い期間ではあるが一緒に旅をしている内に、理屈では無くそう感じるようになった。

「そういやぁ……ここって、人の気配がしねぇな」

ヤマトは話を変える事にした。昔話は、また今度で良いだろう。本人が必要だと感じた時で。

「……エルフは、長寿故に出生率が低い。その為、何かしらの理由で数が極端に減った場合、あっさりと全滅してしまう事があると聞く」

太郎丸が答える。出発前、サークスより聞き及んだ知識だ。そして、彼はこうも言っていた。

「アデリーネ殿は子供の内にここを去り、詳細は覚えていないと聞く。いくらエルフが賢く、魔力に長けるといっても、子供を一人で郷の外へ行かせるような真似はせぬだろう。ならば当時、子供を一人行かせねばならぬような理由が……緊急避難が必要な何かが、ここで起ったのではないか？」

「緊急避難ってオマエ……例えば山火事とか？　けど、そんな風には見えないぜ。それに、全員で逃げりゃ良いじゃねぇか。一人で行かせる意味がわかんねぇ」

太郎丸の語る推論に、ヤマトが疑問を返した。答えを期待したわけではなく、そうでなければ良いな、という期待を込めた反論だ。

「何があったのかはわからぬ。だが、そう考えればアデリーネ殿の

記憶が曖昧な理由と人が居ない理由に、とりあえずの説明が付く。緊急事態が発生し、子供にとってはワケのわからぬまま、大人のエルフによって逃がされた、とな」

そこまで喋った後、一旦口を閉じる太郎丸。実はサークスは、まだもう少し予想を語っていた。アデリーネが何かを隠し、嘘を付いているのではないか、との予想だ。

だが、それをここで言うつもりは無い。

「単にココに飽きて他所へ移ったんじゃね？　街からも遠いし、不便だろ」

「馬鹿な。単身者の引越しでは無いのだぞ。そんな気楽には……」

「そうですよヤマト様。ここはここで、良い所もあります。住めば都なのです」

いつの間に戻っていたのだろう？　アデリーネが木陰から姿を現した。本人に隠れていたつもりは無かっただろうが、あまりに自然な振る舞いであった為、周囲の緑に同化して認識できなかったのだ。

「おう、おかえり。どうだった？　なんか良い物でも見つけられたか？」

「良い物、といいますか……太郎丸様のお話を、半ば裏付けるような物でしたら多少」

アデリーネの言葉に身を硬くするヤマトと太郎丸。自分たちの話を、どの辺りから聞いていたのか？

だが今はそれよりも、太郎丸の話を裏付ける物というのが気になった。

「見て頂きたい物がございます。お二人とも、こちらへどうぞ。そ

の場所へ、ご案内致します」

百聞は一見にしかず。

そう考えたのだろう。アデリーネは多くを語らず、二人を郷の中央へと誘うのだった。

第十八話：記憶の中の故郷（三）

エルフの隠里が、隠里でいられる理由――それが今、ヤマトの目の前に聳え立っている。

視界の全てを占拠する太い幹。見上げれば、空を覆いつくす程に生い茂る濃緑の枝葉。郷の中央に生えるその木は、とても太く、とても高く、とても大きく――古くから森に生きるエルフの長い歴史を象徴するような、見事な大木だった。

「これが、私たち郷の者の間で御神木と呼ばれている、大切な木です。この木は大地から魔法の力を吸い上げ、周囲に迷い道の魔法を掛けていると伝えられております。その魔法のお陰で、この郷は隠里として存在できるのです」

アデリーネが丁寧な口調で、どこか誇らしげに語ってくれた。エルフである彼女にとって、自慢の代物なのだろう。

「魔法を使う大木かぁ」

「はい。お二人には確認し辛いと思いますが、魔法の素養がある方でしたら木が魔力を放っている様を見る事ができるはずです」

そう言われ、ヤマトは目を凝らしてみた。自身に魔法の素養が無い事は知っているが、もしかしたら多少は見えるのではないか？そう思ったのだ。

「見えたか、太郎丸？」

「いや……」

囁きあう二人。

そんな男たちに微笑みながら、アデリーネは傍らの苔生した石の側へとしゃがみ込む。両手で抱えられる程度の、それほど大きくない石だ。

「魔力の流れは見えなくても大丈夫……本題は、こちらですから」

そう言った後、彼女は石に生えていた苔を丁寧に剥がして見せた。丸くスベスベとした石。全体的に白く、所々に薄くヒビが入っているようだ。

「アデリーネ殿。それは……？」

「はい。エルフの、頭骨です」

言って、石を……石と思われていた頭蓋骨を、そっと抱き上げるアデリーネ。中程まで土に沈み、所々が欠けてはいたが紛れも無い。それは確かに頭蓋骨だった。

そして、その事実に気付いた今ならばわかる。

木の周囲を見渡せば、他に幾つも目に付く白っぽく丸い石。そして枯れ木と思われた白っぽい枝の数々。

「全て確認したわけではありませんが、元々ここに住んでいた皆さんの、遺骨だと思います」

「これ全部が！？」

ヤマトが驚きの声を上げる。骨の多くは土に埋もれ、木の陰や茂みの下に隠れていたが、目に見える範囲だけでも百や二百は下らないだろう。

「それと、これを……」

アデリーネが改めて頭蓋骨を差し出した。良く見れば、その側頭部にあたる位置に大きな切れ込みが入っている。鋭い刃物で切り裂かれたかのような深い傷跡。この傷が頭蓋骨の持ち主が亡くなる原因となった事は、容易に想像できた。

「多くの骨に、このような傷が。それ以外にも、木や岩にもそれらしき痕が散見されます」

「って事は、太郎丸が言う緊急事態ってのが、この傷を付けたってワケか」

言って、もう一度周囲を見渡すヤマト。木々の隙間から垣間見える骨の数々に、辛く、苦しい思いが込み上げて来る。

今は骨になってしまっているが、かつて、これだけの数のエルフがここで血を流し倒れたのだ。静かな森に悲鳴と怒号が飛び交い、濃い血の匂いが漂ったのだ。

「……」

気が付けば太郎丸が目を閉じ、遺骨へ向けて正座で手を合わせていた。彼の故郷における、死者の魂を慰める所作の一つだ。

ヤマトの故郷に、そういった風習は無い。だが太郎丸の隣に座り、形だけでも真似て手を合わせる。

安らかに眠れ、名前も知らないエルフたち。アンタたちが助けた娘は、今ここで生きてる――。

伝わらないかもしれないし、的外れかもしれない。けれど、これだけは伝えたかった。

アンタたちの死は、決して無駄じゃ無い。

「ヤマト様、太郎丸様……」

ヤマトの傍らに膝を付いたアデリーネが口を開きかけた時、風が流れた。不意の事に違和感を感じた彼女が風の吹く方を見てみると、いつの間にか人が立っているではないか。

人といっても、人間では無い。人型をした何かだ。

薄っすら蒼く発光する半透明の身体。大きさは人間の大人くらいで、全体的に女性的でやせ細ったようなシルエット。地面からは少し浮かび上がり、風にたゆたう羽毛の如くフワフワと揺れ動き、眼球は無く、代わりに蒼い発光体がこちらをじっと見つめている。

「な、なんだコイツ？」

「面妖な……！」

突然現れた正体不明の相手に警戒し、構えを取るヤマトと太郎丸。それに反しアデリーネは、懐かしい物でも見たような様子で表情を和らげる。

「あなたはシルフ……！　まだここに残っていたのね？」

風の精霊、シルフ。

世界の根幹を成す四元素、地、水、火、風の内、風の属性を司る代表的な精霊の一つだ。知性は低く、本能で行動すると言われている。

風の吹く場所であれば、そこかしこに存在する精霊ではあるのだが、「精霊使い」と呼ばれる特殊な才能を持つ者でなければ目視する事が出来ない。だが気まぐれに、こうして人前に姿を現す事もある。

「大丈夫です、お二人とも。このシルフは、私がここに居た頃からずっと存在し続ける精霊です。郷の緩やかな風の如く、優しく、穏やかな性質ですから」

言いながら、シルフに近寄るアデリーネ。もぬけの殻となっていた故郷に見知った顔を見つけたのだ。その喜びや安心感は、筆舌に尽くし難い物があるだろう。

「お願いシルフ、私に教えて。ここで何があったのか……私のお父さんと、お母さんはどうなったの？」

問い掛けて、シルフへと手を伸ばす。触れ合う事で意思の疎通を……そう思ったのだろう。

だが、横合いからそれを阻む者があった。

「危ねぇ！！」

ヤマトのタックルを受け、倒れこむアデリーネ。背中をしたたかに打ちつけ、一瞬息が出来なくなる。

「いたた……何をなさるのですかヤマト様。何も危険な事は……？」

頬に落ちてきたヌルりとした液体。それを指先で掬い取った時、不満を訴えるアデリーネの言葉は止まった。

それは真っ赤な血だ。ヤマトの肩口から滴り落ちた、彼自身の血液だ。

「早く！　この場を離れるのだ！！　ぐぉあッ！？」

そしてヤマトの背中越しに見えたのは、身体を盾にして何者かの攻撃を受け止めている太郎丸の姿。既に全身血だらけで、こうしている間にも風切り音と共に傷がどんどん増えている。

「こ、こっちだアデリーネ！」

わけもわからず、ヤマトに手を引かれて大樹の陰へと身を隠すアデリーネ。

こんな事がずっと昔に、あった気がする……。

「無事だったか、二人とも？」

「おう、太郎丸。お陰さんでな。そっちも……大丈夫そうだな」

アデリーネが既視感に囚われていると、すぐに太郎丸も同じ場所へ逃げ込んできた。体中に切り傷を負い、黒い体毛が真っ赤な血に染まってはいたが、意に掛ける様子も無い。

「とりあえずは回復だ。太郎丸、ポーション持ってるか？」

「うむ、十分に有る。心配無用だ」

男たちが無事を確認しあい、傷を癒し始めた頃。アーデリネの心は思い出の中にあった。

そう、かつてこの郷から逃げ出した時の事。

突然やってきたのだ。真っ赤な身体をした者たちが。そして森に住まう、穏やかなはずのシルフが暴れ始めた。

理由はわからない。だが多くの同胞が真っ赤な者たちによって薙ぎ倒され、シルフの鋭い風によって切り裂かれた。自分は両親に手を引かれ、木の陰に逃げ込んだ。その時、両親は傷を負っていた。深い傷だ。だがポーションで治療すれば大丈夫だと思った。けれど……。

「ヤマト様、太郎丸様……その傷は、ポーションでは治りません」

アデリーネが、はっきりとした声で言った。そして、その言葉に

男たちが疑問を挟むより前に、彼女は続ける。

「曖昧だった記憶が、私の中に戻ってきたのです。今すぐ包帯で止血して下さい、お手伝いします」

呆気に取られる男二人の身体へ、ザックから取り出した包帯をグルグルと巻きつけて行くアデリーネ。何がなんだかわからないヤマトだったが、傷に関して言えば確かに彼女の言うとおりだ。

シルフの放った風の刃からアデリーネを庇い、背中に受けた傷。普段であればポーションの二、三本でも飲むか、傷口にかけるかすれば大した問題もなく治る傷だ。しかし今回は痛みこそ和らいだものの、劇的に回復する様子は無い。そしてそれは、太郎丸の傷も同じ状況であるようだった。

「アデリーネ殿。記憶が戻ったと仰られたか？　では、あのシルフは一体……？」

自らを止血しつつ聞いた太郎丸。その問いにアデリーネは表情を曇らせ、それでもしっかりとした口調で、手早く答えた。

「彼の精霊は、悪魔の毒気に当てられているのです」

第十九話：記憶の中の故郷（四）

かつてエルフの隠里を襲った悲劇。
平和な郷へ突然現れた、悪魔の群れ。
今となっては何故悪魔がエルフの隠里を襲ったのか、襲うことができたのか、その理由は定かでない。だが事実として、襲撃は起った。
暗闇の中、真っ赤に光る目が木々の合間で閃く度に誰かの悲鳴が上がり、命の炎が消えた。悪魔の力は圧倒的だった。
しかしエルフたちとて、ただ無様にやられ続けたわけではない。最初こそ劣勢であったエルフ側だったが、地の利と人の輪によって体勢を立て直すと、エルフ族に伝わる秘法の力と、郷に住まう風の精霊シルフの力を借りて反撃に転じる。そしてついに悪魔たちを退ける事に成功したのだ。
だがしかし、本当の悲劇はそれからだった。
味方であったはずのシルフが狂い、エルフを襲い始めたのだ。

「確か両親の話では、精霊であるシルフは物質界の生き物よりも魔法的な存在であるから、悪魔の呪詛を強く受けたのだろう、と……」
「物質界って俺らの居るこの世界の事か？　まぁ良くわかんねぇけど、悪魔に混乱させられちまったって事だな」

大きな岩陰から、少しだけ身を乗り出して話すヤマトとアデリーネの二人。その視線の先には、竜巻のような風を纏って触れる物全てを切り刻む、狂えるシルフの姿がある。
しっかりと何かに掴まっていなければ吹き飛ばされてしまいそうな暴風が吹き荒れ、無作為に、無造作に、ただただ力を振るい暴れ回る姿は、時に大自然がもたらす無慈悲な自然災害そのものだ。

「シルフから受けた傷がポーションで上手く回復しないのも、悪魔の呪いが関係しているからでしょう」

岩にしがみ付いたアデリーネが、風の音に負けないよう声を張り上げる。

彼女の両親は、悪魔の呪いのせいで亡くなった。蘇った記憶の中には、温もりを失って行く手の感触と共に、そう刻まれている。

「んじゃ、野郎が郷の仇って事で……やっちまって良いんだな？」

「はい、ダメージを受けて力を失ったシルフは精霊界へと還ります。同時に悪魔の呪いからも解き放たれるでしょう。死ぬわけではありませんから、遠慮なく。ですが……」

アデリーネが乱れた髪を整えて、ヤマトへと向き直る。

「ヤマト様、あのシルフ……このまま放置しておいても良いのですよ？　きっと、この郷のエルフたちは全滅しているでしょう。そうなれば私以外、ここを訪れる者も居ないはず。それなら危険を冒し……むぐっ！？」

「ほい、そこまで」

喋るアデリーネの口を、ヤマトが無造作に押さえて黙らせる。

「あのシルフ、お前の知り合いなんだろ？　だったらブン殴って、正気に戻してやろうぜ」

そう言って、ヤマトは顎の先で少し離れた場所にある岩の陰を指し示す。そこには木や石の破片を一箇所に集め、蔦で縛って巨大なボール状に加工している太郎丸の姿があった。

「太郎丸も言ってただろ？　安寧の享受を由とするなら、冒険者などしておらん！　とかなんとか。危ないから止めとこうって考えるような奴が、冒険者なんかやってねぇよ」
「そ、それはそうかもしれませんが……」

戸惑うアデリーネ。ヤマトや太郎丸の好意は嬉しいし、シルフを正気に戻したい気持ちは誰よりも強いつもりだ。しかし先にも述べた通り、理屈で考えれば、いま無理をしてシルフに挑む必要は無い。主力たる二人の男は怪我を負っているし、戦闘を想定していたわけでは無い為に準備も不足している。せめて一旦引き返し、傷を癒してから再度来る方が良い。そうに決まっている。

「ほら、行くぜアデリーネ。シルフの野郎がお待ちかねだ」

未だ迷いの消えない彼女にヤマトが言った。両手に革のグローブを嵌めて何度も握りなおし、調子を確認している。完全にやる気の表情だ。

太郎丸もそれは同じようで、準備が整ったと親指を立て、こちらへ合図を送っている。

「きっとシルフの野郎も、懐かしいお前を見つけて嬉しかったんだ。それで正気に戻して欲しくて出てきたんだろうぜ。だったら今しか無ぇ！　また今度だとか、次の機会だとか、あるかどうかのチャンスを待ってる場合じゃねぇ。やるんだ！　今、この時に！」

効率的では無いし、理に適ってもいない。だがヤマトの言葉は妙にアデリーネの胸に響いた。

自分はエルフだ。人よりも遥かに長い時を生きる。だからだろうか？　チャンスを待つ事が、当たり前になっていた。今よりもっと良い機会が訪れる。明日か明後日か、あるいは何百年後かもしれな

いが、準備を整えてチャンスを待てば良いと考えていた。
だがヤマトは違う。不確実な未来に希望を賭けたりしない。今この瞬間に出来る限りの努力を惜しまない。常に全力で走り続けているのだ。

「……ノエル様が苦労なさるはずですね」
「ん？　何か言ったか？」

苦笑するアデリーネ。疲れる生き方だと思う。こんなにも全力疾走されては、付いて行く方がたまらないだろう。
だがそれでも付いて行きたいと願ったのなら……。

「わかりましたヤマト様、お願いします。あのシルフを……精霊界へ還す為、お力をお貸し下さい！」
「よっしゃ、任せろ！　一発ブチかましてやろうぜ！！」

それを合図として、吹き荒ぶ風の中をヤマトは岩陰から飛び出した。飛ばされそうになりながらも地面に取り付き、手近な石を拾ってシルフへと投げ付ける。

「こっちだ、こっち！　このスケスケ野郎！　風吹かすだけの能無しか、このヘボ！！」

あからさまな挑発を行いつつ、次々に石を投げ付けるヤマト。狂えるシルフが言葉の意味を理解しているとは思えないし、石も届く事無く竜巻に巻き上げられてしまったが、それでも下劣な悪態と投石は続く。

「無視ってんじゃねぇぞコラァ！」

そんな掛け声と共に投げた細長い石。それが偶然にも風に乗り、爆風の壁を掻い潜ってシルフの元まで届いた。そして見事に喉元へ命中……したかに見えたが、まるでそこには何も無いかの如くシルフをすり抜け、反対側の爆風によって粉砕されてしまう。

「チッ！　やっぱりかよ」

予想した通りだった。シルフはヤマトたち物質界とは違う、精霊界の住人だ。アデリーネの言葉を借りるなら、より魔法的な存在といえる。そんな精霊たちに干渉する為には、物質界の物では駄目なのだ。

「アーデリネの言う通り、魔法か、魔法の掛かった武器じゃねぇと触る事も出来ないってワケか」

ノエルの操る光の魔法や、サークスの剣技『滅空』のように直接魔法力を放出する技。あるいは魔法の武器でなければシルフには傷をつける事さえ出来ない事になる。

だが希少品である魔法の武器など持ち合わせている筈も無く、ヤマトも太郎丸も魔法と絡めた剣技など習得していない。そして魔法を操る素養があると思われるアデリーネも、その術を知らなかった。

つまり今この場にいるメンバーに、シルフを倒せる者は居ないという事だ。

「でもまあ、ここまでは予想通り……おっとぉ！」

賑やかに喋るヤマトの目に一瞬だけ、ほぼ無色透明なブーメランのような物が見えた。辛うじて身をかわすと、足下の土が派手に抉れて宙に舞う。シルフの繰り出す風の刃だった。それが次々に生み出され、甲高い風切り音と共にヤマト目掛けて飛来する。

無差別に猛威を振るっていた狂えるシルフが、彼一人に狙いを定めたのだ。

「やっと本気になりやがった。俺相手に手を抜くとか、ちょっとナメ過ぎなんだよオマエは！」

ヒョイヒョイと身軽に動き、風の刃を避けるヤマト。だが強気な口先とは裏腹に、その動きは鈍い。先の戦いで負った傷と、強烈な風が彼の動きを妨げているのだ。

「ぐっ……ヤベぇ、風が強くて……！」

シルフの周りを守っていた竜巻が、全てヤマトの周辺に集まる。叩きつけるような爆風に、一瞬でも気を抜けば遥か上空まで巻き上げられてしまいそうだ。

しかも風の中に地面から巻き上げた枝や小石が混ざり込み、凄まじい勢いでヤマトの身体を殴り、突き刺す。特に守る物の無い剥き出しの腕や頭には多くの枝が突き刺さり、飛礫によって次々に青アザが刻み込まれて行く。

「畜生……！」

身を守るのに精一杯で、身動きの取れないヤマト。このまま嬲り者にされるか、あるいは風の刃で……と思われた時、太郎丸がシルフの背後に雄叫びと共に現れた。

「おオォォォッ！！」

彼は先に準備していた蔦で固めた巨大な球を、全身を使い、渾身の力でグルグルと振り回す。ミシミシと筋肉が軋み、傷口が開いて

鮮血が噴出した。だが構う事無く蔦の球に十分な速度を持たせ……。

「どっせえぇぃ！！」

勢いを付けてシルフに叩きつけた！

唸りを上げて飛来する巨大な球を、咄嗟に竜巻で防御するシルフ……本来、物理的な攻撃の影響を受けない精霊には必要の無い防御だ。しかしそれは、生物が本能的に持つ防衛反応だったのだろう。目に物が飛び込んだ時、人が咄嗟に瞼を閉じるように、シルフは竜巻で防御を行った。

爆風に煽られ、粉々に砕け散る蔦の球。だが同時に、竜巻の回転も乱れていた。風の力だけでは蔦球の大きな質量を受け止める事が出来なかったのだ。

瞬間、強く吹き荒れていた風が止まり、凪となる。

『今だ！　アデリーネ！！』

「やあぁぁぁぁぁッ！！」

男たちの叫びに合わせ、タイミングを計っていたアデリーネがシルフの元へと駆け込む。その手には、魔法の輝きを宿す棍棒――エルフの御神木、その枝をへし折って作った、即席の魔法棍棒だ。

アデリーネは走る勢いを乗せ、手にした棍棒を大きく振りかぶる。そして力一杯、全力で持って狂えるシルフの頭を……ブン殴った！

ごつん、と鈍く重い音が響く。彼女の握る無骨な棍棒は、眩い輝きを放ちながら、狙い違わずシルフの頭をカチ割った。更に二度、三度。アデリーネは大上段から棍棒を振り下ろす。薄い手の皮が裂け血が滲んだが、構う事無く渾身の力を込める。

「えいっ！　えぇいっ！！　……はぁっ、はぁっ……！」

何度、棍棒を振るっただろう？
自らの血で汚れた棍棒を手に、肩で息をするアデリーネ。彼女の前では、元々半透明だったシルフが更に透明度を増し、殆ど透明な状態となって宙に浮かんでいる。その姿はまるで風に漂う綿毛のように、ただ流されるままの力無い存在であるかのようだ。
もう、この世界に留まる力を失ったのだろうか？　そう思った矢先だ。

「っ！？　キャアァァッ！！」

鋭い突風がアデリーネを襲った。風の刃に切り裂かれ、細い髪や服の切れ端と共に、血煙が空に広がる。
狂えるシルフが最後の力を振り絞り、巨大な竜巻を起こしていた。これまでで最も大きな竜巻だ。周囲の物を巻き上げ、木々を巻き込み、蔦球の残骸も全て上空へと放り上げて行く。
烈風を伴い、あらゆる物を粉々にする強烈な竜巻。だがこれは、シルフにとっても我が身を削る諸刃の剣だった。半透明の身体が端から削れ、風と共に消え失せて行く。
このまま、この竜巻を耐え忍べばシルフは力尽きる。そうなれば自分たちの勝利だ。
しかし！

「もう、待たせたりしない！」

アデリーネが、棍棒を手に立ち上がった。体中に受けた傷からは血が滲んでいたが、彼女の固い意志の前に障害とはなり得ない。
吹き付ける風の中を、一歩、また一歩と地面を這いずるようにしてシルフに近付く。彼が自ら消えてしまう前に……これまで自分を待っていた彼への、ケジメを付ける為に。

「きゃ……！」

だが軽量のアデリーネでは、シルフへ近付くにも限界があった。あまりの風に身体が浮き上がり、前に進む事はおろか踏ん張る事さえ出来ない。

もう時間が無いというのに……どれほど強く願ったとしても、駄目な物は駄目なのだろうか？

「あきらめんな！　こっからが本番だろ！！」

間近でヤマトの声がした。同時に、風が緩む。

風上にヤマトと太郎丸が居た。互いに肩を組み、地面に爪を立てて踏ん張って、身体を風除けにしてアデリーネの願いを力強く支える。

「アデリーネ殿ッ！！」

「お前の意地、野郎に見せてやれ！」

狂えるシルフへと続く、道が出来た。

「はいっ！！」

アデリーネが駆け出す。ヤマトと太郎丸が作った風のトンネルを突っ切り、消えかけているシルフの元へ。そして……！

「てやあぁぁぁぁッ！！」

棍棒を眼前に構えたまま、走る速度を殺す事無く身体全体でぶつかる。そうしてシルフを背後に聳え立つエルフの御神木へと、まさに全身全霊を込めて叩きつけた！

太い幹に雷のような輝きが走り、無数の葉が舞い落ちる。手元の棍棒は砕け、破片が鮮やかな輝きを撒き散らしながら飛び散った。そしてシルフも……。

「……」

雪が溶けるかの如く、身体の端から順に解れ、光の粒となって消えて行く。この世界で精霊としての形を維持する力を失い、元居た精霊界へと還るのだ。

言葉は無く、音も、何も無い。ただ一陣の優しい風だけが、アデリーネの頬を撫でて空へ、高く高く流れて行く。

『こんな方法しか取れなくてごめんなさい。長い間、ほったらかしてごめんなさい。逃げようとして……ごめんなさい。あっちで、ゆっくり休んでて』

古いエルフの言葉を風に乗せ、アデリーネは目元を拭った。

そして傷付いた手のひらを、棍棒と同じ輝きを放つエルフの神木に添えて、祈りを捧げるのだった。

第二十話：深海に眠る伝説（一）

ぽつり、ぽつりと水滴の滴り落ちる音と、生臭い磯のニオイ。暗闇に閉ざされた洞窟の中は外に比べ、格段に気温が低く肌寒い。

奥の方から流れ来たヒンヤリとした空気が服に入り込むのを感じ、ノエルはローブなんて物を着る選択をした半日前の自分を酷く責める。

「大丈夫かい、ノエルさん？　いま少し、震えてたように見えたけど」

「いいえ、お構いなく。天使は寒冷耐性もあるので平気です」

軽く振り返り、後ろに居るサークスへと笑顔で応えるノエル。光を操って明りとする為、今は彼女が先頭なのだ。

天使に寒冷耐性があるのは本当だが、平気というのは嘘だ。冷気で傷を負うような事は無いが、寒い物は寒いし、鳥肌だって立つ。そしてノエル個人としては、温かい所の方が好きだ。

「そうかい？　流石は天使だね。僕なんて寒がりだから、鎧より防寒装備の方が重いくらいだよ」

そう言ってサークスは、白銀の鎧の上に羽織る二重のサーコートを指して見せた。鎧の下に着ている服も、普段より分厚い物にしているようだ。

正直、羨ましい。

そのサーコート、一枚貸してくれないかな……と思ったノエルだったが、言い出せない。何故ならば、彼女は天使だからだ。天使は厚着をして着膨れなんてしないし、寒さに歯を鳴らしたりしない。いつも純白のローブを身に纏い、優しい笑顔で微笑む……そういう

物なのだ。

「それにしても、広い洞窟ですね……」

こうなれば話を変えて、気を紛らわせるしかない。

ノエルは身体から放つ光を増やし、明りの届く範囲を大きく広げた。

どこまでも続く湿った岩肌。そこに張りつくフジツボが、普段この場所が海の中にある事を示している。

ノエルとサークスが訪れたこの洞窟。これこそが五年に一度、地元民の間で『水無し』と呼ばれる大潮の日にだけ姿を現す海底洞窟だ。

「このどこかに、伝説に名を残す武具の手掛かりがある……という話なんだけどね」

サークスが地図を広げ、明りにかざす。海の底にあった洞窟入口を潜って、既に半日。分かれ道や目印を書き記す地図の記号も、随分と増えていた。

潮が引いて洞窟探索の出来る時間は、丁度丸一日。帰りの方が早く移動できると考えても、そろそろ引き返し始めないといけない時間帯だ。

「ノエルさん、もう少しだけ進んで……何も無ければ、引き返そう」

「……はい」

残念そうなサークスの声。無理も無い事だろう。この海底洞窟に、彼はたとえ一人でも挑戦したいと言っていたのだ。何の成果も無く引き返すなど、相当に後ろ髪引かれる物があるに違いない。

この洞窟は以前より、伝説の武具に纏わる噂の絶えない場所だっ

た。その為、五年ごとにある大潮の日には多くの冒険者が訪れ、彼らによって入り口近辺は隅々まで探索し尽くされている。
今回、二人が訪れているのは入り口から更に一歩奥へと踏み込んだ深層部。未探索で、地図もろくに書かれていない未知の領域だ。危険だが、それ故に何かがあるのでは？　と期待してしまう。

「すまない、ノエルさん。せっかく来てもらったのに、無駄に終わるかもしれない」

ノエルが放つ光を頼りに、更に奥へ。天井が低くなり、道が細くなって来た。
これまでの経験から、こういった道は行き止まりになっている事が多い。サークスの言葉は、それを感じての物だったのだろう。

「いいえ、無駄だなんて……私は見聞が狭いので、良い経験になります」
「そう言ってくれると、ありがたいな」

道は細くなりつつもまだまだ続き、気温も更に下がる。
付近の岩にはフジツボも、海草の類さえも付いていない。いま二人が歩いている場所は、普段ならば海の底にあって、本当に深く暗く、太陽の明りも温もりさえも届かない場所なのだろう。

「ノエルさんは、いつもヤマト君と一緒に活動しているの？」
「ええ……実を言うと、ヤマト以外と組んでコンビで冒険に出たのは、これが初めてです」

ノエルの答えに、サークスが意外そうな声を上げる。天使ならば引く手数多だろうに、これまでに一度もパートナーを違えた経験が無いだなんて。そう、彼は言った。

サークスの驚きは勿論だとノエルも思う。実際、とても多くの人たちからパーティーに誘われ、引抜きにあった。半ば脅迫に近い事をされた事さえある。

だがその全てをノエルは断った。ヤマトと一緒でなければ、彼女にとって冒険など何の意味も無いからだ。

「それが、どうして僕と？　どういった心境の変化があったのか、聞かせてもらっても良いかな」

「ああ、それは……」

ヤマトに行けと言われそうな気がしたから。

「サークスさん、この冒険に随分思い入れがあるようでしたから。私で力になれるのなら、と」

「なるほどね……そうか」

返事をしたサークスの声には、どこか残念そうな響きが混じっていた。

「まあ確かに、この冒険……というか伝説の武具という存在について、かなり強い執着を自分でも感じている」

「目標や夢という事ですか？」

「うん。正確には僕の夢では無いけれどね」

そうして会話を交わす内、終着点が訪れる。

「行き止まり……ですね」

先細りの通路は、人が一人立てる程度の広さだけを残して途切れていた。あるのは、足元の水溜りだけ。

「残念ですけどサークスさん、引き返し……」
「いや、ちょっと待ってくれ」

ノエルを避けて前に出て、サークスが行き止まりにしゃがみ込む。そして剣を抜くと、足元の水溜りへ差込んだ。
すぐ底にぶつかるとか思われた剣だったが、その刃はスルスルと水に飲み込まれ、柄の部分を水上に残してもまだ底には届かない程だ。

「これは……深いな。ノエルさん、明りを！」

眩い明りによって照らし出される水溜り。水の透明度は高く、かなり深くまで視線が通るようになる。だがノエルの光をもってしても、その底は未だ暗闇に閉ざされていた。そして微かに、横道が更に奥へと続いているように見える。

「まだ、この向こうに道が続いてるんだ！」

ここは行き止まりでは無かった。多くの冒険者は水溜りの中に続く通路に気付かず、あるいはここで時間切れとなり、引き換えしたのでは？　もしくは水の中を進めず諦めたのでは無いか？
サークスが熱の篭った声を上げる。

「行こう、ノエルさん！　隠されて何かに、僕らは近付いている！」
「でも……」

既に半日が過ぎている。今から大急ぎで引き返したとしても、潮が満ちるまでに入り口まで戻れるかどうか微妙な所だ。それに、この水中の道がどこまで続いているかわからない。そもそも何かがあ

るとは限らない。だからここは安全策を……とは思う。
だがサークスは行く気だ。止めたとしても振り切って行くだろう。どうしても行きたいと、強い意志を湛えた彼の目が雄弁に語っている。

「……わかりました、行きましょう。でもサークスさんはここで待っていて下さい。私が行ってきます」
「え!?　いや、しかし……」

ノエルの意見に驚きの声を上げるサークス。そんな彼へ、天使の少女は落ち着いた声で、諭すように言葉を紡ぐ。

「私ならしばらくの間呼吸をしなくても平気ですから、水路が長くても大丈夫。それに明りの問題もありません。水中でも光子を噴射して、普通に泳ぐよりも速く移動できます。ですから……」

最後の言葉を飲み込むノエル。言わずとも彼女が何を言いたいのか、サークスにもわかった。
自分一人の方が良い。貴方がついて来ては、足手纏いだ……遠まわしに、ノエルはそう言っている。
肩を落すサークス。確かに、自分がついて行った所で、足を引っ張るだけであろう事は火を見るより明らかだ。本当なら自ら水路を進み、隠された伝説を垣間見たい……だがその思いをぐっと飲み込んで、サークスは言った。

「ノエルさん、キミに任せるよ」
「はい、任せて下さい。朗報をお伝え出来るように、頑張りますね」

こうしてサークスの夢は、ノエルの双肩に託されたのだった。

第二十一話：深海に眠る伝説（二）

天使御用達の白いローブを脱いで下着姿となったノエルに、太陽の恵み届かぬ海底洞窟の寒さは容赦が無い。ふかふかの翼で身体を覆っても、岩肌と直に触れるつま先は冷え切って、気を抜けば歯がカチカチと演奏を開始してしまいそうだ。それに加え、今から水に入らなくてはならない。軽く触れた水面は氷のように冷たく、骨まで凍ってしまいそうだ。自分で言い出した事とはいえ、どうしてこんな事になってしまったのか……悔やんでも悔やみきれない。

「ノエルさん、本当に大丈夫かい？　なんだか寒そうにしてるような……」

「い、いえ。その、ちょっと緊張で……武者震いですかね？」

少し離れた通路で、背中を向けたサークスが気遣わしげに言った。彼の目にはしっかりと目隠しが施され、天使の柔肌を見る事は叶わない。彼は、その手に握られたロープでノエルが寒そうにしている気配を感じたのだ。ロープはノエルの足首にしっかりと結び付けられており、緊急時には無理矢理にでも引っ張り上げる事になっている。

「それでは、行って来ます！」

「うん、気をつけて」

いよいよだ。覚悟を決めて足先を水に漬けると……。

「〜〜〜っ！！」

凍えるような冷たさが、震えと共に頭の先にまでやってきた。全

身に鳥肌が立ち、翼は羽毛が逆立って一回り大きくなる。
色々な意味でサークスに目隠しをしておいて良かった。こんなみっともない姿、とても見せられない――。そう思いながら、今度こそ本当に覚悟を決めて、ノエルは水中に身を投げ出した。

「……えいっ！」

どぷん、と空気と水が混じる音の後、突然訪れる静寂。そして下着や髪、翼に入り込んでいた空気が抜けて行くカプカプともコプコプともつかぬ音が聞こえ、今度こそ本当に、長い静寂が訪れる。
水は冷たかったが、だからといって支障をきたすような身体でも無い。ぐっと我慢して意識を集中、光を操って視界を確保した後、身体を反転させて水路を潜り始める。
入り口こそ狭い水路かったが、水中にはそれなりの広さがあった。両手、両脚を伸ばしても壁までにかなりの余裕がある円柱の内側……その苔さえ生えないゴツゴツとした黒い岩壁が、ノエルの光を反射して不気味に輝く。一応周囲に警戒しながら慎重に縦穴の底まで潜りきると、そこには水上からも微かに見えていた横穴が存在していた。

（かなりむこうまで続いてる。ロープ、足りるかな？）

ロープを手繰り寄せて長さに余裕を持たせると、ノエルは横穴へと身体を滑り込ませる。これも縦穴と同じく、入り口こそ狭いが進入してしまえばそれなりの広さがあった。進む先の末端までは光が届かず、闇に閉ざされている……随分と長い。
それにしても奇妙な光景だった。蒼い海の中であるにも関わらず、そこには何の生命も見当たらない。魚はおろか、海草の類も皆無だ。何度か海に潜った経験のあるノエルだったが、こんな場所は初めてだった。

（ヤマトに見せたら、どう言っただろ？）

不意に、そんな考えが頭を過ぎる。

もう彼とは半月ほども顔を合わせていない。幼い頃に、とある木の下で出会って以降、こんな事は初めての経験だった。それ故に、顔や声を時々は思い出さないと忘れてしまうのでは無いかと不安になってしまう。

最後にヤマトを見たのは、彼がエルフの隠里へと旅立つ日の朝だ。忘れ物は無いか、薄めたポーションは水筒に入っているかと問い質す自分に、ヤマトは言った。

「俺の事はいいんだよ。お前こそ、早く戻って来い」

あの鈍い彼の事だ。何かを意図して言った言葉では無かっただろう。だが戻って来いとの言葉が、無性に嬉しかった。

だが同時に、辛くもあった。

ヤマトの肩越しに、こちらを見つめるアデリーネの姿を見止めたからだ。彼女は自分へと一礼し、申し訳無さそうな笑顔を見せた。不安にさせてごめんなさいと、彼女の目は言っていた。

（違う……謝らないといけないのは、私の方だ）

アデリーネは気付いていた。ノエルが見せた、微かな不信感に。万人に無限の愛を与えなければならない天使が見せた、僅かな偏見に。

かつての主人であるノーウェイにそうしていたように、アデリーネがその美貌と身体を武器にヤマトに近付くのでは？　一瞬ではあるが、ノエルはそう考えてしまった。

（天使、失格だよね……）

生きる為に頑張っていたアデリーネ。その生き様を蔑むような事があってはならない……絶対に。だが他ならぬヤマトが対象だった為に、一瞬の嫉妬心が呼び起こした後ろ暗い気持ち。それをアデリーネは敏感に感じ取っていたのだ。

天使といえば、世間的には悪魔以外の全ての生命を慈しむ聖なる存在として知られている。そんな天使に疑いの目を向けられる事が、どれほど彼女の心を傷つけたろう？　であるにも関わらず、アデリーネには気を使われ、太郎丸にまで気を回されて、自分の未熟さを痛感したノエル。

（ヤマトもきっと、私が手を出すたびに、こんな気持ちになってたんだろうな……）

考えるうち、真横に向っていた水路は次第に斜め上へ。そして、程無くして垂直に昇り始める。

行く先に、揺らめく水面が見えた。自分の放つ光とは別の輝きも見える。ゴールはもうすぐだ。

「～……ぷはっ！」

水面を突き破って飛び出した先。そこは岩壁によって形成された、ドーム状の空間だった。球を半分に切ったような構造で、水の無い部分だけでちょっとした部屋くらいの広さがある。空気が溜まっており、何故か部屋全体が薄っすらと輝いていた。

「これ……魔法の明りだ」

羽ばたいて水から上がり、光を操ろうとして気付く。熱を伴わず

薄く青みがかった光は、魔法の力によって生み出された、照明の為にだけ存在する光の特徴だった。
その青みがかった光の発生源。それが部屋の中央にある、小さな石だ。
大きさは5センチ程。手の中に握りこめる程度の、いびつな形の石。部屋の中央で何の支えも無く空中に浮かび、虹のように表面の色彩を変えながら光の魔力を放っている。

「何だろう？　魔法の品物なのは間違いなさそうだけど……？」

小石に近寄るノエル。その時、ふと見た自らの翼に、何か文字が浮かび上がっている事に気が付いた。驚いて良く観察すれば、翼だけでは無い。肌や髪、身に付ける下着や、滴る水滴にさえ同じような文字が！

「この石の光……この光が文字になってて……距離や色に応じて、見える文字が変わってる！」

驚きの声を上げ、翼に映る文字に目を凝らすノエル。そこには現在では使われていない古代語で、何かの隠し場所についての記述がある。ノエルの知識では詳細まではわからなかったが、サークスの話と総合して考えれば……。

「これが伝説の武具の在り処……とか？」

これはもしや、大発見なのでは？　十年近く冒険者をしていて、初めての経験だった。ノエルの頭に明るい未来が想像される。
この石を持って帰り、謎の言語を解読して、みんなで宝探し！
サークスさんは念願の伝説的武具を手に入れて夢を叶え、太郎丸さんも同じように装備を充実させる。同時に金銀財宝も手に入って、

アデリーネさんは平穏で優雅な生活を。そしてヤマトも何か、生存率が上がるような魔法の御守りを手に入れて、毎日気楽に冒険しながら充実した生活をして……それで私も……！

凄く良い。とても素敵な生活だ。きっとみんな喜ぶ！

ニヤけた表情のまま、石に手を伸ばすノエル……と、これまで虹色だった表面が、突然深い青色に変化した。その途端！

「キャッ……！！」

あっ！　と思った時、ノエルは硬い岩壁に叩きつけられていた。魔法の小石から放たれた凄まじい衝撃波……というよりは絶え間なく押し寄せる圧力によって、彼女は弾き飛ばされたのだ。

「ぐっ……うぐぐ……！」

信じられない程の圧力。ミノタウロスの怪力を押し返した天使の力を持ってしても、抗う事が難しい。叩きつけられた岩壁が徐々に砕け、身体がめり込んで行く。空気や光さえも部屋の中央から押しのけられて壁際で圧縮され、濃い青色の輝きを放つ。上昇した空気圧によって呼吸は出来ず、光と共に視界さえも歪む。とてもではないが、普通の生物が耐えられる圧力では無い。だが……。

「てやあぁぁぁぁッ！」

天使としての能力を全開にしたノエルが、押し寄せる圧力を押し返した！

純白の翼と天使の光輪から放たれる白い光。それを身体の前面で盾のように展開し、青色の光として認識できる圧力波を防ぎ、相殺して行く。

「んぐぐぐっ……！　このくらいっ……！」

大瀑布の如く押し寄せる光の奔流を押し退けながら、ノエルは部屋の中央に輝く小石に手を伸ばす。

これがあれば、きっとみんな幸せになれる。私だって満ち足りた生活を……ヤマトと一緒に……！

「てっ……天使、なめるなあぁぁぁっ！！」

純白の光が爆発するように広がり、全てが眩い輝きを放ち、影が消え失せた。そして何もかもが白一色で塗りつぶされる。岩壁も、水面も、魔法の石も――ノエルの意識さえも。

――そして、どれほどの時間が経ったのだろう？

彼女が意識を取り戻した時。目の前には緑の木々と、抜けるような青空。そして見知った男性の顔があった。

「……ルさん！　ノエルさん!?　良かった、気が付いた！　本当に良かった!!」

「あれ……サークスさん？　ここは？　私、何を……？」

安堵の表情を浮かべるサークスに、ノエルは尋ねた。まるで寝起きであるかのように頭がボンヤリとして、考えが纏まらない。

どうやら毛布の上に寝かされていたようだ。身体にはサーコートが掛けられており、近くから打ち寄せる波の音が聞こえて来る。

「ここは、海底洞窟の外。入り口の近くにある砂浜だよ。ええと、行き止まりの水路へノエルさんが潜った――そこまでは覚えてる？」

「ええ、確か足にロープを結んで……」

手渡された水を飲む内、ノエルもようやく頭がはっきりとしてきた。

「キミが潜ってしばらく後、物凄い地震があったんだ。その直後、洞窟の中に水が入ってきて……」

順を追って、丁寧に説明するサークス。

どうやら地震が起ったのは、ノエルが石の圧力に弾き飛ばされたのとほぼ同じタイミングであるようだった。危険を感じたサークスは慌ててノエルに繋がったロープを手繰り寄せ……。

「そうしたら驚いたよ。ノエルさん、ぐったりして意識が無いんだもの！　その場ではロクな応急処置も出来なくて、悪いとは思ったけど肩に担いで脱兎の如く……ってわけさ」

「そ、そうだったんですか、助かりました……そっか、私あの時に気絶して……」

良くわからないが、石に拮抗しようと力を振り絞った結果、意識が飛んでしまったようだ。

サークスには感謝しなくてはならない。もし自分一人であったなら、死ぬ事は無いにせよ、誰も訪れなぬ冷たく寒い水牢へ、半永久的に閉じ込められる羽目になっていたかもしれないのだから。

「本当にありがとうございます、サークスさん。助けて頂いたのは、これで二度目ですね」

「いや、お礼を言いたいのはこっちの方さ！　一つは……これ！」

サークスが取り出した小さな革袋。その中に、見覚えのある小石が入っていた。

「ノエルさんが、大事そうに握ってたんだ。この輝き……魔法の品だ。水路の奥で手に入れたんだよね？　きっと、何か伝説の武具に纏わる物に違いない」

満面の笑顔で、サークスが言った。まるで子供のような、無邪気な表情だ。

魔法の小石は初め見たような淡い蒼の輝きを湛え、静かに革袋の中で転がっている。ノエルを壁に叩きつけた、荒れ狂う光の奔流が嘘であるかのようだ。

「それと、もう一つ……お礼というか、役得というか……これも二度目かな？」

「……？」

首を傾げるノエルへ、顔を背けながら、綺麗に折り畳まれた衣服を手渡すサークス。

「ゴメン。急いでたから、着せる暇が無かった。それにまさか、丸裸になってるとは思わなくて……」

「……えっ？」

小石のあった部屋で受けた岩さえも粉砕し得る強烈な衝撃と圧力に、薄く柔らかな下着が耐えられるはずも無い。

ノエルの素肌へと掛けられたサーコートの下は、まさしく一糸纏わぬ姿。サークスと出会った日、スライムから助け出された時と同じ、完全なる素っ裸だ。

「天使って、ピンチになると服を脱ぐ習性でもあるのかい？」

「きっ……！！」

良く晴れた砂浜に。

「キャアアアアアアアッ！！」

ノエルの甲高い悲鳴と、ビンタの快音が鳴り響いた。

第二十二話：色々あっても山河あり

どこまでも続く新緑の草原。爽やかな風が駆け抜けると、ざわめきが波となって草木に見事な波形を描き出す。

そんな野原の小さな丘の上に建つ、小ぢんまりとした木造の一軒家。軒先に干された少量の洗濯物。玄関横に置かれた小さな農具。裏手には簡素な柵で仕切られた農場があり、太った牛が一頭、のんきに草を食んでいる。

「……ん、誰か来たのかな？」

家の中。

夕飯の準備に勤しんでいた幼い少女は、遠くから聞こえて来る足音を耳聡く聞き取って、不意の来客を予感した。

近隣の村からも遠く離れ、見る物も何もないこんな場所までわざわざ来る者は、そう多くない。今は町に出て働いている兄か、物騒な物取りか。このどちらかだ。

草を踏みしめて近付く足音はテンポが良く、しっかりとした足取りの若者を想像させる……それが複数だ。しかも足音の一つは、やけに重そうな音をさせている。きっと大柄な体型なのだろう。

小さな頭をフル回転させて考える少女。この家にやって来るのは、兄か、物取りかのどちらかだ。そして兄は小柄であり、いま聞こえている足音は大柄な人の物。という事は……間違い無い、これは物取りだっ！！

少女は肩口まで伸びた茶色の髪を素早く頭上にまとめると、火に掛かっていたフライパンを手に、戸の影に隠れる。

どんどん近付いてくる足音。その音はやがて玄関前で止まり、ドアがノックされ……。

「御免。こちらに、スダ……」
「せぇい！！」
「ぶぐォ……ッ！？」

先手必勝、不意打ち上等！　少女は、戸口から現れた人影に、良く焼けたフライパンを目一杯叩き込んだ。
鼻先に会心の一撃を受け、よろめき、跪く人影。良く見れば全身を包む真っ黒な体毛と、がっちりとした身体が目に入る。前に兄から聞いた、獣人の一種だろうと思った。だとすれば……！

「た、食べられて、たまるもんかーーーっ！」
「い、痛っ！　ちょ……暫し待たぐはっ、ぎゃんっ！？　きゃいんっ！」

物取りだけならまだしも、命まで取られてたまるものか！
少女は必死でフライパンを振り下ろし、黒毛の獣人（犬っぽい顔をしている）を叩いて叩いて、叩きまくった。
その回数が、果たして二桁に届いた頃だろうか？

「あわわわ……ちょっと待って下さい！　私たち、怪しい者ではありません！　私たちは……！」
「えいっ！　ていっ！　このっ！！　ド変態！　犬畜生！！　糞外道っ！！」
「聞いて下さいっ！　私たちは、ヤマト様のっ……！」

長身でスラリとした美しい女性が、獣人と少女の間に割って入った。知的な雰囲気を漂わせる、少女の憧れる女性像そのものの女性である。唯一気になる点といえば、尖った耳……そうか、この人はエルフだ！　だが、こんなに綺麗な女の人がウチに何の用があると言うのだろう？　死ね、死ねっ！　と連呼していた為に良く聞き取

れなかったが、一瞬聞き覚えのある名前が出たような気もした。

「ぜぇっ、ぜぇっ……な、何のご用ですか？　うちは貧乏で、盗って行くような物は何もありませんから！」

いい加減疲れた事もあり、とりあえず手を止めて、フライパンを構えたままで問う少女。

そんな警戒心丸出しの少女を刺激しないように、エルフの女性はゆっくりと、丁寧に話し掛ける。

「貴女はスダチさん……ですね？　私たちはヤマト様と一緒に旅をしている者です」

「……！　お兄ちゃんの、お友達……？」

「そ、そうです！　ああ、良かった……」

やっとわかって貰えた！　多くの尊い血が流れたが、やはり話せばわかるのだ。

エルフの女性ことアデリーネはホッと安堵の息を吐き、ようやく警戒心の和らいだ少女スダチに事の次第を話せる喜びに包まれていた。

「実は貴女のお兄様なのですが、この近くで動けなくなってしまいまして……」

事情を話すアデリーネ。

そして、数刻程の後――。

「ご……ごめんなさいっ！」

草原の一軒家にて、深々と頭を下げるスダチの姿があった。

彼女の前には、フライパンで殴られまくった黒毛の獣人こと、人狼の太郎丸。その隣ではアデリーネが苦笑し、更にその隣では、ヤマトがベッドに横たわりながら可笑しそうに笑い続けている。

「顔を上げられよ、スダチ殿。この程度、某にとっては何でもない。お気に召されるな」

スダチの前に膝を付き、低い声で語りかける太郎丸。本人としてはなるべく穏やかに喋ったつもりなのだろうが、どこか威圧的な響きがあるのは如何ともし難い。

恐る恐る顔を上げたスダチは潤んだ目で太郎丸を見上げ、口元をワナワナさせながら呟く。

「だ、だって鼻が……」

「む……いや、皆まで言われるな。委細構わず、武士に二言無し。大丈夫、何でも御座らん」

豪気なる太郎丸。だが彼の鼻の先には、少しだけ赤い物が滲んだ白い布が当てられている……フライパンの一撃を受けて、鼻血が出たのだ。

「おいスダチ、そんなに気にする事ねぇよ。さっきから言ってるけど、太郎丸は丈夫なんだって。それに本人が大丈夫って言ってるんなら、大丈夫だろ」

「でも……」

ようやく笑いが治まったのか、ベッドの上から声を掛けるヤマト。だが元気そうな声とは裏腹に、顔色はあまり良くない。

半身を起こし、よろめきそうになるのをアデリーネに支えられながら、彼は精一杯の元気でもって妹のスダチに軽く頼みを伝える。

「それよりさ、俺たちみんなハラ減ってるんだ。適当に何か作ってくれねぇか？」
「え……？」
「何でもいいからさ。な、頼むよスダチ」
「う、うん……わかった。ちょっと待ってて！」

跳ねるようにして起き上がり、軽く歪んだフライパンを手に台所へと駆けて行くスダチ。その後姿を見送ると、ヤマトは深く息を吐いて、再度ベッドへと横になった。

「……大切な妹さんなのですね」

ベッドの端に座り、気遣わしげに、優しい微笑を湛えるアデリーネ。

「そんなんじゃねぇけど、あんま心配させんのも悪ぃかと思ってよ……」

ぶっきらぼうに言って、視線を逸らすヤマト。その肩には幾重にも包帯が巻かれ、今も血が滲み出している。

彼はシルフと戦った際、背中に深い傷を負った。応急処置だけを行い帰路に付いたものの、深い森の中で予後が悪化。手持ちのポーションは既に使い切っており、立ち往生してしまったのだ。

太郎丸やアデリーネも傷が完全には回復しておらず、動けないヤマトを連れての長距離移動は難しい。仕方なく、最も近くの知り合い……つまりはヤマトの実家であるこの場所へ、妹のスダチを頼りやってきたというわけだ。

「仕送りはしてっけど、ずっと留守にしてんだ。たまに帰ってきた

兄貴がズタボロじゃ、安心してらんねぇだろ？」
「うむ、全くだな。だが、それ故にスダチ殿は逞しく成長されているようだ」
「ははっ。悪かったな、太郎丸。ウチのお転婆が無茶しちまって」
鼻の頭をさすりながら、太郎丸がニンマリと口の端を歪める。殴られた事を気にしてはいないようだが、相当痛かったようだ。
「まあ、流石にフライパンの角でしたからね……」
「うむ」
情け容赦の無い一撃だった。と、遥か後まで太郎丸は語り継いだと言う。
そうこうしていると、どこからか良いニオイが漂って来た。
「はい、お待たせ。出来たよお兄ちゃん」
スダチがボロ板に載せて持ってきたのは、柔らかく煮た豆とニンジンに少量の肉を加え、甘い味付けで整えた定番の田舎料理だ。
「こんなので良かったら、お二人も……」
「あら、有り難う御座いますスダチさん」
「かたじけない」
ヤマトのベッドを囲み、暫し食事に興じる四人。
スダチの手料理は簡素ではあったが中々の味わいで、保存食に飽きた冒険者の舌を楽しませるには十分すぎる物だ。
「へぇ、お前料理上手くなったんじゃね？」
「本当、とても美味しいです。スダチさん、良いお嫁さんになれそ

うですね」
「うむ……相違ない」
口々に料理を褒める三人にスダチは赤面し、モジモジと身体を揺り動かす。そして口の先を尖らせ、多少の不満を込めて言った。
「お兄ちゃん、いつも急に帰って来るから……先にわかってたら、何か用意するのに」
「無茶言うなよ。ノエルだったら定期的に来るんだから、良いじゃねぇか」
その台詞に、ますます不満の表情を深めるスダチ。
この男はまた、何もわかっていない――そんな思いを胸に抱きながら、苦笑を噛み殺す太郎丸とアデリーネ。どれだけ自分に対して無関心なのかと呆れ返る。
「そういえば、お兄ちゃん。今日はノエルさん一緒じゃないんだ？」
「ん……まあな。アイツは別件で出張中だ」
「ふぅん？　珍しいね、いつも一緒なのに。何してるか気にならない？」
そう無邪気に問われ、一瞬言葉に詰まるヤマト。
気になるかと言われたら、そりゃあ気になる。だが、自分が気にしてどうこうなる事では無い。何故ならノエルは、自分には不釣合いな……生きとし生けるもの全ての財産とも呼ぶべき、希少な天使なのだから。引き止められるならそうしたいし、これまではそうして来たのだが……。
「いや、まぁ気になるって言うか……こっちにも色々と事情が……」
「ノエルさんはきっと寂しがってると思うよ？　帰ってきたら、優

しくしてあげてね」
「……！」

言葉を失い、口をパクパクとさせるヤマト。
お前に言われなくても！　と言い返そうか、そんな事ねぇよ！と怒鳴ろうか。
好き勝手言いやがって、こっちも何かと考える所があるんだよ！……と思ったヤマトだったが、口には出せない。下手な事を言って素直に突っ込まれると、それこそ困ってしまう。

「ぷっ。どうやらスダチ殿の方が、ずっと大人であるようだな」

太郎丸が可笑しそうに、軽く噴出す。

「そのようですね……ヤマト様、優しくしてあげて下さいね？」

口元を押さえ、クスクスと肩を揺らしてアデリーネも笑った。

「う……うるせぇよお前ら！　メシ食ったら、さっさと寝やがれ！！」

ヤマトの怒鳴り声と他三人の楽しげな笑い声は、草原の風に乗って夜遅くまで響いていた。

第二十三話：英雄の凱旋（一）

大小、様々な建物が入り乱れた町並み。大勢の人々が行き交い、色々な店が軒を連ねる雑多な大通り。

雑踏と喧騒に塗れながら、ヤマトは久々に訪れた街の雰囲気を楽しんでいた。

結局、実家に逗留し続けて数週間。傷を癒しながら太郎丸に剣を学び、アデリーネから知識を得た。

冒険者組合を尋ねてエルフの隠里に関する報告をしたり、狂ったシルフについての情報提供も行った。その際、ヤマトにとって嬉しい事があったのだが……それはまた、後程。

ともあれ、淡々と続く晴耕雨読の日々。危険や死が隣り合わせの冒険と違い、退屈ではあるが穏やかな日常に生きる悦びのような物を感じるヤマトではあったが、ただ一つの焦燥感が彼を冒険者としての日常へと引き戻した。

「流石にノエルの奴も戻ってるとは思うけど……」

そう呟きながらヤマトが訪れたのは、冒険者の雑貨を扱う道具屋だ。松明やランタン、毛布や食器といった日用品に近い物から、ポーションやマッピング用方眼紙といった冒険者御用達の品まで、雑多な物を扱っている。

「ポーションを1ダース。あとランタン用オイルも」

カウンターの中年男性にテキパキと注文を伝え、使い果たしていた道具類を補充する。ノエルと一緒に行動していると忘れがちだが、回復薬や明りに纏わる物など、旅の中での消耗品は意外に多い。今回などは特にそれが顕著で、普段の冒険で自分がどれほどノエルに

頼っていたのかを、何度も痛感させられていた。

「……ちょっと、礼でもしとくかな」

そう思って見渡した道具屋の片隅に、目を引く物があった。

布張りのケースに収まった、小さな髪留め。淡い色合いの花びらがさり気無く散りばめられた、シンプルではあるが趣味の良い代物だ。

「なあ、オッサン。これ……いくらだ？」

何気なく出た自分の言葉に、ヤマトは多少の驚きを感じていた。

それと同時に、しばらく前に聞いた妹の言葉が脳裏を過ぎる。

『ノエルさんはきっと寂しがってると思うよ？　帰ってきたら、優しくしてあげてね』

柄でもないとは思うが、無視できない程度には胸に残っていたようだ。まさか自分よりも遥かに小さな小娘の台詞に影響されてしまうとは。

「……こんなモンで、アイツは喜ぶかねぇ？」

道具屋を去り際、ポーションとは別の、軽く包装された小さな包みを懐に仕舞い込み、ヤマトは独り呟いたのだった。

そして――。

「な、なんだこりゃ？　何の騒ぎだ！？」

普段から冒険の拠点として定宿にしている「ほろ酔い亭」に足を

運んだヤマトは、目を丸くして叫ぶ。
一階の食堂に押し寄せる大勢の人、人、人……それらが生み出す熱気と喧騒。食堂の許容量はとっくに超えており、外にまで溢れ出して混乱を増大させている。

「あ、ヤマト様。こちらです！」

人込みの中に見知った顔があった。アデリーネと太郎丸だ。実家から街までは一緒に行動していたが道具屋で別れ、二人は一足先にノエルやサークスの所へ向っていたのだ。

「どうなってんだコレ？　凄い人だな……お食事無料キャンペーンでもやってんのか？」
「いいえ。付近の方に話を聞いた所、どうやらサークス様とノエル様が凄い発見をなさったとか……」

凄い発見？　確か二人は、伝説の武具とかいう胡散臭い代物を探しに出ていた筈だ。それが見つかったという事だろうか？

「ヤマトよ、某が肩を貸そう」

太郎丸に言われ、ヤマトは彼の肩に飛び乗った。そうする事で長身の太郎丸よりも更に一段高くから辺りを見渡せるようになり、大きく視界が開ける。
幾つもの人垣の先……食堂の、いつも自分たちが集まっていたテーブルに、彼らは居た。
ノエルと、サークス。それと見覚えの無い獣人が二人、同じテーブルに付いている。
彼らは周りの者からしきりに声を掛けられ、その度に誇らしげな笑顔で何事かを返す。そしてサークスの前には見覚えの無い中型盾

が、恭しく真っ赤な布の上に置かれて人々の注目を集めていた。

「どうやら、あの盾が噂の中心であるようですね」

太郎丸にしがみ付き、同じように高い位置からの視線を手に入れたアデリーネが囁く。

「私たちがここを出る際、サークス様は『伝説の武具の手掛かりを探す』と仰ってましたよね？」

「ぬ、むぅっ。あ、アデリーネ殿……その、もう少し……」

柔らかな胸を側頭部に押し付けられて困った様子の太郎丸だったが、そんな事はお構い無しでアデリーネは続ける。

「きっと首尾良く手掛かりを手に入れる事が出来たのでしょう。そして……」

「俺たちが休んでる間に、手掛かりを頼りに探索へ出かけて、あの盾を手に入れた？」

「はい。一緒にいらっしゃる獣人のお二方は、その道程における同行者ではないかと」

太郎丸の頭上で交わされる二人の会話は、大した根拠も無い想像の産物ではあったが、見事に真実を言い当てていた。そして、その裏付けはすぐに成される事となる。

「あ……あっ！　ヤマト！　帰って来てたの！？」

人込みから上に飛び出していたヤマトに気付いたのだろう。ノエルが大きく手を振って声を上げた。その視線を追って、人々の注目がサークスたちからヤマトたちへと移る。

有形無形のプレッシャーを感じつつ人込みを掻き分けていつものテーブルまで移動すると、待ちきれなかったかのように、ノエルが口を開いた。

「みんなお帰り、遅かったね。大丈夫だった？」

「まぁな。それより……」

テーブルの上に置かれた盾だ。

その盾は五角形の中型盾で、腕に固定して使うタイプの物だ。それ以外の基本的な構造自体は、ごく一般的な物と同じであるように見えた。

特徴的なのは盾の表面に刻まれた魔法文字。まるでデザインであるかのように偽装されているが、これが伝説に残る程の逸品であるのなら、何らかの意味をもってそこに刻まれているのであろう事は疑いようも無い。

「これ、何か特殊な魔法とか掛かってんのか？」

「興味津々、という感じだねヤマト君」

サークスだ。椅子に座って腕を組み、穏やかな笑みを湛えた彼が落ち着いた声で話しかけて来る。

「冒険の結果とか、色々と話したい事はあるんだけど……それよりも、その盾の能力を見てもらう方が理解が早いかな？」

そう言って彼は、手近なテーブルからエールが注がれたジョッキを手に取ると、一気に中身を飲み干してヤマトに渡す。

「騙されたと思って、このジョッキで盾を思い切り叩いてみなよ」

「……？　思い切り、か？」

ちらりとノエルの方を窺うヤマト。するとノエルも笑顔で「やってみて」と促している。

いくらヤマトが非力とはいえ、金属製の盾に打ち付ければジョッキは容易く砕けるだろう。だが、あえてそれをやってみろと言うからには……。

「じゃあ、本気でやるぜっ！」

大きく振りかぶり、勢い良くジョッキを振り下ろすヤマト。ジョッキの砕ける乾いた音が食堂に響く……と思いきや、耳に聞こえたのは『ごつり』という、粘土でも叩いたかのような鈍く小さな音だけだった。

「……！？　全然手応えが無いぞ！　なんか、凄く柔らかい毛布を殴ったみてぇな……」

渾身の力であったにも関わらず、ジョッキは割れるどころかヒビさえ入っていない。更に何度か叩きつけてみたが、結果は同じだった。

ヤマトの素直な反応に頬を歪め、サークスが傍らのザックから羊皮紙を取り出してテーブルに広げる。

「それは『消撃の盾』と呼ばれる魔法の盾。受けた衝撃を完全に打ち消してしまう、絶対に貫けない無敵の盾さ」

サークスの言葉通り、テーブル上の真新しい羊皮紙にはその旨が書かれていた。

「へぇ……凄ぇな！　んでも、この羊皮紙は？　やけに新しいみて

ぇだけど……」

首を捻るヤマトに、横合いからノエルが言った。

「話せば長くなると思うから、部屋に移動しよ。そっちも何があったのか、ゆっくり聞きたいし」

その提案に全員が頷いてその場はお開きとなり、久々の会談は部屋へと場所を移したのだった。

第二十四話：英雄の凱旋（二）

宿の部屋は多少広めの四人部屋であったが、それでも七人が詰め込まれるとなると、かなり狭い。加えて三人は身体の大きな獣人である。

「な……なんだか部屋の中がオトコ臭くなっちゃうから、窓開けるね」

ノエルの手によって窓が開かれカーテンが踊り、涼しい風が清涼な空気を運んで来た。それを合図に、サークスが口を開く。

「さて……まずは最初に謝らないといけない。もう気付いてるだろうけど、僕とノエルさんはキミたちが留守の間に、件の盾を探す冒険に出た。そこの二人とパーティーを組んで、ね」

そこの二人と言いながら示した先に、先程から黙って様子を見ていた獣人たちが居た。

片方は太い腕に鋭い爪を生やす、虎の獣人。もう一人は筋骨隆々逞しい、馬の獣人だ。

「俺はガイラン。格闘による近接戦闘がメインだ。レベルは１６、よろしく頼む」

虎の獣人こと、ガイランが言った。それに馬の獣人が続く。

「俺様はバラ。レベル１５の重戦士系ってヤツさ。前からサークスの大将にゃ、ちょくちょく世話になっててさ。お前らよりは付き合い長いと思うぜ？」

多少、不遜な態度でそう言ったバラに苦笑して、サークスが軽くフォローに入る。

「以前、しばらくパーティーを組んでいたんだ。こんな調子だが、腕は確かだよ」

初めてサークスと会った時、彼は無愛想な太郎丸に苦笑いしつつもフォローを入れていた。それを思い出し、苦労人気質なのだろうと微かに同情するヤマト。

そうして互いに初対面同士の者が軽く自己紹介を済ませて行くのだが……。

「どした、太郎丸？　腹でも痛いのかよ？」

ヤマトは、普段よりも更に無口になった太郎丸が、じっとガイランを見ていた事に気が付いた。

「知り合いか？」

「……いや」

二人の会話はそこで打ち切られ、話の続きが始められる。

「続けて良いかな？　それで僕たちは盾を探して、西の火山に行ったんだ。知ってるよね、たまに噴火してる山だよ」

一応、といった感じで全員に確認を取る。その火山は割と有名ではあるが目ぼしい洞窟も魔物も居らず、冒険スポットとしてはマイナーな場所だ。

「そして色々と苦労はしたけど……結果は見ての通り、大成功さ！　これで、伝説の武具の手掛かりとされるコレが、確かな物であると証明できた」

サークスが首に掛けていた革の小袋を引っ張り出し、中身を見せる。入っていたのは、蒼く輝く小石……ノエルが海底洞窟で見つけた物だ。

「この石の光が、武具を探すヒントになっている。不思議なのは、光を当てる物や距離によって、浮かび上がる情報が変わる点だろうか」

言いながら、試しに石から出る光を机に投射して、次に天井へ投射してみる。

「本当ですね。先程とは違う文字や図形が浮かび上がって見えます」

「面白いでしょ、アデリーネさん。でもヒントを頼りに探索するのに、毎回こんな事をするのは不便だからって事で……」

ずるり、と重そうなザックから引き摺り出される羊皮紙の束。果たして何百枚あるのだろう？　凄まじい量だ。

「可能な限り書き留めてみた。中には読めない文字や意味不明な図形も多かったから、書き留めたというよりは、模写に近いけれどね。明日からはこれを元にして、また別の場所へ探索に出かけようと思ってる」

そこまで喋り、サークスは一旦口を閉ざす。次はそちらの番だ、という事らしい。

「では僭越ながら私の方から、ヤマト様と太郎丸様にご同行して頂いた行程について……」

一歩前に進み出るアデリーネ。馬面のバラが器用に指笛を鳴らし「待ってました、アデリーネちゃん！」などと茶々を入れる。

そんな中、ヤマトは隣に腰掛けるノエルへ、耳打ちでもするように小声で囁いた。

「よう……久しぶりだな」

「そうだね。かれこれ二ヶ月……ううん。三ヶ月ぶりくらい？　あんまり遅いから、心配したんだよ？」

少しだけ口を尖らせ、怒ったような口調で返すノエル。そんな仕草も久しぶりに見れば、以前より少しだけ大人びたような気がしなくも無い。

「危ない事とか、しなかった？」

ああ、全然。何の問題も無かった……と答えかけたヤマトだったが、アデリーネの説明が終われば全てバレてしまう。だから話を逸らす……いつもの手段だ。

「そういうお前はどうなんだよ？　誰も見つけられなかったお宝とか、危ない所にあったんじゃねぇのか？」

「ん……まあ、少しだけ。でも知ってるでしょ？　私、天使だもん。危ない事なんて、無いよ」

「そうかぁ？　お前、そそっかしいからな。まぁとりあえず、無事で何より……安心したぜ」

そんな事を呟いていたヤマトは、ノエルがやけに嬉しそうな顔で

自分の方を見ている事に気付いた。
間近で見る、幼馴染の顔。
風になびく髪。潤んだ瞳。白い頬に薄っすらと赤みが差し、濡れた唇は柔らかく、触れれば溶けてしまいそうな雰囲気だ。

「な……なんだよ？」
「ううん、別に」

何か、ノエルを喜ばせるような事でも口走っただろうか？
先程からの会話を思い出すヤマトだったが、特に思い当たるフシは無く、彼女の喜ぶ理由も思い当たらない。
だが一つ、アレの事を思い出した。ノエルにくれてやろうと、買った物の事を。

「そ、そう言やぁお前さぁ……」
「ん？」

唐突に手渡すのもなんだか気が引けて、適当な話題を振ってから……と思った矢先の事。ノエルの髪に、何かキラキラと光る物が付けられているのに気が付いた。

「あ……これ？　なんかね、伝説の盾を見つけたお祝いだって言って、サークスさんが……」

それは、金の髪飾りだった。翼をイメージさせる細かな細工。深みを感じさせる光沢。所々で輝く石は宝石だろうか？　ノエルの美しい金髪と光輪の輝きに紛れて気が付かなかったが、かなりの高級品だと一目でわかる、見事な飾りだった。

「に、似合うかな？」

「おう……良く似合うぜ」

本当に良く似合う。ノエルの為に作られたのでは無いかと感じさせる程に。

それに比べればどこかで見た小さな髪留めなど、子供の玩具程度の陳腐な品でしか無い。とてもでは無いが……渡せない。

「……というわけで帰還が少々遅れてしまったわけですが、これは安全を期す為に……あ、あのヤマト様、ノエル様？　聞いてます？」

「お！？　お……おう、聞いてるぜ。なんかまぁ、色々大変だったよな！」

「そ、そうみたいだね！　あははは……」

誤魔化し、曖昧な笑顔を見せる二人を前に、アデリーネは軽く溜息を吐いた。話を聞いてないのは、別にどうでも良い。だけど……特にヤマトへ問い正したい。

コソコソと仕舞いこんだ、その布張りの箱……本当に渡さなくて良いのですか？　それで後悔したりしませんか？　今、この時に頑張るのでは無いのですか？

そして最後に、誰にも聞こえぬように呟くのだ。

「この、いくじなし」

第二十五話：地獄に近いこの場所で（一）（前書き）

この話には残酷な表現が使われております。苦手な方はご注意下さい。

第二十五話：地獄に近いこの場所で（一）

硬い土を踏みしめるレザーブーツの音。それが幾重にも重なって、独特のリズムを生み出す。そのリズムは谷間から吹き上げる風に乗り、高く、どこまでも響いて山々に知らせて回るのだ。

奴らがやってきたぞ、と。

「目の前にある深い谷……この底に伝説の『賢者の鎧』がある」

サークスは羊皮紙を広げ、地図のようにして描かれている図面のバツ印部分を指し示した。

「多分、ここだ。先発隊はロープを使って崖を伝い谷底へ降りた後、各自で探索を行う。パーティー編成については先に渡した文書を参照してくれ」

あらかじめ打ち合わせをした通りの内容を各人に告げ、その場で解散。一応の確認ではあるが、冒険にはトラブルが付き物。準備については慎重過ぎて損は無い。

「本当に見つかるだろうか？」

水筒の中身を口に含んで一段高い岩の上に立つサークス。付近を見渡すと、目に止まるのは茶色い岩肌むき出しの切立った岩山。そして武器と鎧に身を固めた多数の人々……全て冒険者だ。

サークスは賢者の鎧を探すにあたり、大勢の冒険者を募った。総勢五十余名。ほぼ全員がレベル１０以上のベテラン揃いだ。それは探索の成功率を少しでも高めると同時に、伝説装備の独り占めを妬む、他の冒険者たちの不満を散らす為でもあった。

伝説の武具、その手掛かりを掴んだという事実。本来ならば黙っていたかったのだが、サークスとノエルの知名度がそれを許さない。海底洞窟での探索成功は、瞬く間に余人の知る事となってしまう。

件の青い石が指し示すヒントを頼りに消撃の盾も手に入れ、手に入れた伝説の手掛かりが本物であると公に知れた以上、他の冒険者も雇うなどして独り占めするつもりが無い事をアピールしなければ、何度寝込みを襲われるか知れた物ではない。他の武具を探す際にも同じ手法を取り、安全と見かけ上の公平性を保つ。その予定だ。

「自分が見つけるか、全く見つからなければ、それまで。もし他人が見つけたなら……頭を下げて、買い取らせてもらえば良いさ」

そのくらいの金は持っているつもりだ。人間では五本の指に入るレベル３２の実力と資本力は伊達では無い。それに全ては、自らの夢を叶える為に使う金。惜しくは無い。

「サークス様、ロープの準備が整ったそうです。いつでも降りられます」

「ありがとう、アデリーネさん。みんなを集めてもらえるかな」

わかりました、と一礼して駆けて行くアデリーネ。知的で、美しい女性だ。眼鏡など掛けたなら、すこぶる似合う事だろう。事業でも起こすのであれば是非とも傍らに居て欲しい存在だ。加えて希少なエルフである、というのもポイントが高い。何故ならきっと自分が生きている間には、彼女の美貌が老衰によって損なわれる事は無いのだから。

だが、現在に至るまでの経緯が問題だ。あのノーウェイに身体を差し出していた……それが引っ掛かる。何らかの事情があったのだろうとも察するし、女性を差別するような事はしたくないが……これればかりは別問題だ。深い仲となる事も考えるなら、当然、考慮す

べきだろう。まあ口先では何とでも言えるのだが……。
だが、あまり深く考える必要も無い。彼女に関して所有権はヤマトにあるのだから。言い方は悪いが、彼のような者がアデリーネ程の美人をモノに出来るチャンスなど、屋敷での、あの瞬間を置いて他に無かっただろう。アデリーネ本人も随分とヤマトに恩を感じているようだし、丁度良いのではないかと思う。

「これより、ロープを伝って谷底に降りる。先発隊は僕に続け！後発隊はその間、ロープとベースキャンプの防衛！　後発隊の指揮は……」

見渡せば、並み居る冒険者たちの端に、腕を組み目を閉じる黒毛の人狼が映る。

「後発隊の指揮は太郎丸だ！……頼むぞ」
「うむ……心得た」

ゆっくりと目を開き、短く答えて頷く太郎丸。頼りになる男だ。
狼の獣人である彼は、忠義に厚く義理堅い。質実剛健を絵に描いたような性格で、豪胆でありながら繊細。人間の限界を遥かに超える筋力と俊敏性を持ち、異様なまでに鋭い嗅覚も備えている。
前線で戦わせても強いが、後方で部隊指揮を任せてもそつなくこなす柔軟性も持ち合わせた、まさしく戦場の申し子のような存在だ。
ただ唯一、無愛想で口数が少ないのが球に瑕。コンビを組んでの冒険など、話が続かなくて非常に困る。コミュニケーションも取り辛いから、何を考えているか良くわからない事も少なくない。
今もそうだ。腕を組み、何を考えていたのか……余計な事で無い事を願っておこう。

「ノエルさんは、太郎丸と一緒に崖の上に残って、もしもの時に備

えて……あの、ノエルさん？　聞いてる？」
「あ、はいっ！　大丈夫です。負傷者が出た場合は、花火で知らせてくれるんですよね」
「そういう事。滑落者が出るかもしれないから、敵が出なくても気を抜かないでね」

ノエル……この上無く可憐な、天使の少女だ。最近は『聖女』の二つ名で呼ばれる事も多くなってきた。
出会った当初は天使の能力を持て余す、見た目だけの女かとも思ったが……実際にパーティーを組んでみてわかった。
彼女は、強い。
高い能力も然る事ながら、的確で冷静な判断力。いざという時の行動力。そして女性的な気配りにも長けていて、彼女がパーティーに居るだけで空気が華やぐ。安心感が違う。レベル２０程度と評価されているようだが、とんでもない話だ。パーティー全体に与える影響を考えれば、レベル３０……いや、４０以上と評価されても良いだろう。
最初は少し他人行儀な感じがしたが、最近では随分打ち解けて来た。このまま良好な関係を維持し、これからは、これまで以上に親密な関係を築きたい。
だが、その為には……。

「サークス、もう行くのか？　大丈夫だとは思うけどよ、気をつけてな」
「ああ……ヤマト君も。もしもの時は、頼む」

いま声を掛けてきた黒髪の少年、ヤマト。彼が、ノエルを惑わせる障害となっている。
レベルはたったの４。とはいえ、近くで見ていると不当に低すぎる気もするが……理由はわかる。

彼はノエルの幼馴染だ。その関係を利用して都合良くノエルを独占状態にしていた。その為、彼の実力はノエルあっての物と評価されている事、そして天使の独占を快く思わない者の評価が低すぎて、実力よりも低いレベルと評価されているのだろう。

と言っても、その実力もそれほど抜きん出た物では無い。多少の機転は利くようだが、身体的には一般人に毛が生えた程度。戦闘技術もまだまだ未熟で、特に非力さが目立つ。冒険者としては半人前……正当に評価したとして、精々レベル6か7程度だろう。

今回の探索にも、本来ならば同行できないレベルだ。だが彼だけを仲間外れにするもの気が引けるし……何より、ヤマトが参加する事を条件とする参加者が三名も居たのだ。

太郎丸、アデリーネ。そして……ノエル。頼りにならない故に、保護欲が働くのか？　ともかく、彼の参加を認めないわけにはいかなかった。

「よし、出発！」

今もヤマトは、せっせと予備のロープを運んでいる。非常に働き者である点は高く評価出来るのだが……自分が足手まといである事、彼だってわかっているはずだ。冒険における花形から外され、後方支援どころか荷物持ちのロバ同然だと気付いているはずだ。なのに何故、彼は何の文句も言わず探索に同行しているのか？　さっぱりわからない。

「この谷……やはり、かなりの深さだな。石の時といい盾の時といい、どうやってこんな場所に隠したのやら」

ロープに身体を預け、岩壁を蹴って少しずつ、慎重に下って行く。岩は脆く崩れやすく、細かな砂が積もって滑りやすくなっている為、十分に気をつけなければならない。唯一つ、気休め程度の安心点は、

もし滑落しても即死でさえ無ければノエルが居るという事。もし滑り落ちても絶対に諦めるなと、先発隊には通達してある。同時に、だからといって気を抜くなとも伝えてあるのだが……。

サークスがそう考えていた矢先。ガラッ、と岩の崩れる音。そして誰かの悲鳴が上がる。

「……落ちたか」

天使と言う存在が生む安心感、それは油断に繋がる。一瞬の油断が命取りとは、よく言った物だ。

直後、滑落した冒険者を追いかけ、上空からもの凄い勢いでノエルが急降下して行くのが見えた。運が良かったら助かるだろう。……仮に死んだとしても、ある意味アウトローである冒険者が美しい天使に看取られて逝けるのだから、それはそれで幸運かもしれない。

そうこうする内、ブーツの底にしっかりとした地面の感触が届いた。谷底に到着したのだ。

魔物の牙の如く、乱雑に並び立ち鋭く隆起した谷底の岩盤。平地は無いに等しく、太陽の光も遥か遠く頭上にあり、薄暗く、ほのかに寒い。漠然とした不安が、腹の底に溜まって行く。

「あるいは、ここにベースキャンプを張ってゆっくり探そうと思っていたけど……無理みたいだね」

サークスに続き、他の冒険者たちも次々と谷底へ到着する。それとは逆に、羽ばたく天使が誰かを抱えて崖の上へと飛んで行った。ノエルが負傷者を運んでいるのだろう……果たして助かったのだろうか？

「よし、ではパーティーごとに別れて、それぞれのエリア探索を……？」

サークスはここで、妙な事に気が付いた。
辺りが、やけに静かなのだ。
いや、静かなのは構わない。ここは生物を拒む切立った岩山の、深い谷の底なのだから。自分たち以外に動物を目にする事も無かったわけだから、静かで当然だ。だがどうして、自分たちの声さえしない？　土を踏む音や、鎧の擦れ合う音、風の音や、それに伴う様々な音がするはずだ。

「何かおかしい……みんな、気をつけ……！？」

音も無く、何かがサークスの足にぶつかった。驚いて足下を見れば、そこには馬の獣人……バラだ。バラが白目を剥き、口から舌をだらりと出して倒れている。

「お、おいバラ！　しっかりしろ、バラッ！」

バラを抱え上げるサークス。すると彼の太い首が、中程からがくりと折れ曲がる。それもその筈、バラの首は、骨ごとザックリと中程まで抉れ、ピンク色の肉が覗いていたのだ。
瞬く間に傷口より噴出す真っ赤な液体。この傷は深い、間違い無く致命傷だ。だがしかし、まだ助かる……助かるはずだ！

「ノエルさん！　早く来てくれ……ノエルさん！　ノエルッ！！」

上空を見上げて叫ぶ。天使の力があれば、この程度の死を遠ざけるなど容易い事のはず。だが光り輝く天使の姿は遠ざかるばかり……サークスの声に気付く様子は無い。

「くそっ！　聞こえないのか！？　いや……」

やけに静かな谷底。音も無く倒れ、ぶつかってきたバラ。

「音か！？　音が……声が遮断されている！」

その方法や理屈はわからないが、音の伝達が妨害されている。彼に他人の声は聞こえず、他人にとってもサークスの声は聞こえない。さっきからやけに静かなのも、それが理由だろう。

普段であれば、大した問題とはならないだろう。だが事態は逼迫している。少なくとも、レベル１５のバラを一撃で戦闘不能に追い込める何者かが、これを好機として襲い掛かっているのだ。

「みんな気を付け……と言っても聞こえないのか」

音が聞こえない以上、視力に頼るしか無い。なるべく平らな場所を選んでバラを寝かせ、辺りの様子に気を配る。他の冒険者たちは、まだ事態に気付いていないようだ。音の異常にさえ気付いていない者も多いだろう。経験豊富なサークスだからこそ、いち早く異常に気付く事ができたのだ。

「と、とりあえずバラに応急処置だ。ポーションを……いや、ハイポーションを！」

道具入れからポーションと、その濃縮版であるハイポーションを探す。回復薬など使うのは何年ぶりだろう？　ここの所、楽勝だったり魔法での回復に頼りっきりで、薬など使おうとさえ考えなかった。

常備しているポーションは二本、ハイポーションは一本。バラの傷を癒すには、全く足りない。荷物になるのを嫌い、どうせ使わないからと数を減らしていたのだ。

「これではヤマト君を笑えないな」

常に十本以上のポーションを持ち歩くヤマトを、ノエルが居るのに不要だろうと茶化した物だが……備えあれば憂い無し。どうやら、彼の方が正しかったようだ。

少し埃の積もったガラス容器を取り出し、蓋を開けるサークス。淡い魔法の輝き……ちょっと古いが、効果は失われていないはず。そう期待を込めて、抉られたバラの首へ液体を振り掛ける――。

（無駄だよ）

どこからか、声が聞こえた。

（無駄だって……ハイポ、高いんだろう？　無駄遣いは止めろよ）

油断無く、周囲に視線を走らせるサークス。声はすぐ近くから聞こえて来る……だが、周囲に怪しい人影は無い。そもそも音の遮断されたこの状況で、どうやって声を伝えるというのか？

（ほら見ろ。一応血は止まったけど、傷は塞がらないだろう？　この馬は死ぬ。キミには、どうしようも無い）

声は、サークスの頭の中から聞こえていた。そして声の通り、バラの傷は塞がらない。ポーションを全て使っても駄目だ。あまりの深手に、命を繋ぎ止める事さえ叶わない。

（そうしてサークス、キミも死ぬ。ほら、周りを見てみろよ）

慌てて周囲を見渡し、驚愕する。

いつの間にか、そこかしこで真っ赤な触手が蠢いていた。岩と岩の間を縫うように、脈打ちながら谷底いっぱいに広がっている。

サークスは、この触手に見覚えがあった。いつかノーウェイの屋敷で見た悪魔……膨れ上がった人の肉体を突き破り現れた、真っ赤な悪魔の尻尾。それに酷似している。

（おっと、虎の獣人が気付いたみたいだ。中々やるじゃないか……でも、遅い）

異変に気付き、こちらに駆け寄ろうとした虎の獣人ガイラン。だが数歩を踏み出す間に、地面から突き上げられた触手によって両腕を千切り飛ばされ、次の瞬間には胸板を貫かれて動きを止める。

（ふふふ……他愛の無い。もしかして、他の連中も似たり寄ったりなのかな？）

悪魔だ……間違いない。あの時、ノーウェイの屋敷で見た赤い悪魔が、この場に現れているのだ！　消える間際に奴は言っていた。何千、何万回生まれ変わろうと復讐すると。その第一歩が、これだと言うのか！？

剣を抜くサークス。このまま黙って殺されるのは真っ平御免だ。他の冒険者たちもようやく異変に気付き、散り散りとなって逃げ出して行く。ある者はロープにしがみ付き、ある者は岩陰に身を隠して震え始める。

（やはり、天使が居なければこんな物か。あの女を引き離せた時点で、私の勝ちだったな）

そうか。最初の滑落は、こいつの仕業だったのか。そうやってノエルの手を塞ぎ、こちらへの救援を遅らせたというわけだ。更には

谷底の音も消して連絡網を絶つとは……中々やってくれる。

（少し違うね、谷底の音については元々さ。伝説を求める者にそういう試練が用意されていたんだろ）

恨むならキミ達の先人を恨みたまえ……頭に響く声がそう告げた。

（それではサークス、さよならの時間だ。祈りの言葉を唱える時間？　それなら心配はいらない……ゆっくり苦しめながら殺してやる。時間なら、たっぷりとある筈だ）

鞘に納まる銀の剣を、しっかりと握り締めるサークス。

こんな所で……夢を目の前に、死ぬわけにはいかない。死にたくは無い！

幼い頃から父と共に冒険を繰り返して来た。父の夢は……伝説の武具を揃える事、唯一つ。夢半ばにして倒れた父の想いを引き継ぎ、自分も同じ目標を掲げて今日まで生きてきた。至極当たり前の事として。

そして親子二代で捜し求めた夢のゴールが、もう目の前に見えている！

「死ねるものかあぁぁぁぁッ！！」

命を賭け、サークスは剣を抜き放った。

第二十六話：地獄に近いこの場所で（二）

その時に起った様々な出来事をノエルが正しく認識したのは、これよりもずっと後。事態が取り返しの付かない事になってからだった。

まず最初に聞こえてきたのは、岩の崩れる音。そして誰かの悲鳴だった。

「一人落ちたぞ！」

そんな声がベースキャンプのテント内に聞こえた時、ノエルはテントから飛び出し、崖下へと身を躍らせていた。

今から追えば谷底へ叩きつけられる前に拾えるかもしれない。そう思い、思い切り羽ばたいて加速し、谷間を急降下して行く。

翼を折り畳んで風の抵抗を減らし、制御可能なギリギリの速度で後を追うと――見えた！　その男性冒険者はまだ崖の中程を、突き出した岩壁に叩きつけられながら落ちている最中だった。

まだ、間に合う！！

「くっ……！　てぇい！！」

目前に谷底が迫る中、辛うじて落ちて行く男性に追い付いたノエルは彼と落下速度をあわせ、腰にしっかりと手を回して翼を大きく広げる。そして急減速。男性の重み、そして武具の重みがズシリと両手に掛かり肩や肘が軋んで悲鳴を上げたが、絶対に手を離すわけにはいかない。これが命の重みなのだ。

そして……刃のように尖った地面に叩きつけられるギリギリの所で、停止する事に成功した。

「だ、大丈夫ですか？　いま、上まで運びますからね」
「う……す、スマん……」

良かった、生きていた！
男性は全身を強く岩肌にぶつけて何箇所も裂傷や骨折を負っていたが、まだ息がある。助けられる！　谷底に叩きつけられる前に確保できたのが大きかったようだ。

「良く耐えて下さいました！　生きてて下さって嬉しいです。もう少しの我慢ですからね、頑張って！」

なるべく負担を掛けないように、それでいてなるべく迅速に。ノエルはゆっくりとベースキャンプを目指し上昇する。その間にも光を操り治癒を行ったが、痛みを和らげる気休め程度にしかならないだろう。本格的な治療は、上に戻ってからだ。

「おいノエル、そのオッサン生きてるか？　それならこっちだ、テントを空けてある！」
「うんっ！　皆さんどいて下さい、怪我人です！」

崖上に戻ると、すぐヤマトが駆け寄ってきた。勝手を知る彼に導かれ、すぐさまテントへ。そこで急いで男性の治療に入る。
迅速かつスムーズな一連の流れ。当たり前のようだが、これまでに何度もやっているからこその、阿吽の呼吸だ。もしもノエル一人だったなら……あるいは顔見知り程度の他人しか居なかったなら、彼女は未だ怪我人を抱え、テント前でまごまごしていただろう。

「ん、もう大丈夫ですからね……気を楽にして、ゆっくりと呼吸して下さい」

苦痛に歪んでいた男性の顔が、次第に安らかな物となる。優しい光が体内を巡り、血を止めて傷を塞ぎ、骨を再生させて行く。

これでもう安心だ。ノエルが安堵の息を吐いた……その時。

地面が揺れた。

「……爆発？」

「いや、違うな……何の音もしなかった。近くで地震……か？」

テント内が、そして後発部隊として備えていた冒険者たちの様子が、俄かに慌しくなる。

「ちょっと外を見てくる。ノエルはここに居ろ」

ヤマトがテントを開けて、外へ出る。その時、入り口の隙間から具間見えたのは、谷底から勢い良く吹き上がる物凄い量の粉塵。一時、空が覆いつくされ日が陰る程の、赤茶けた細かな砂の群れだった。

火山の噴火を思わせるその現象は、サークスたちの向った谷底で何かがあった事を指し示していた。

どうする？

ノエルは迷った。ヤマトに言われた通り、この場で待機しておくべきか？　それとも急いで谷底へ向い、何かしらのサポートを行うべきか？　この状況下、彼女の知り得る情報。それら全てを鑑みても、どちらを選択すれば正解であるのかは誰にもわからない。

そんな中、ノエルは選択した。

この場で待機する事を。

「外が少し騒がしいですけど、私はここに居ます。安心して、リラックスしてて下さい」

不安そうな顔をする怪我を負った男性冒険者に、優しく語り掛けるノエル。彼を放っては行けない。現場へ向うよりも今は、自分に与えられた仕事を優先するべきだ。彼女はそう考えたのだ。

外へはヤマトが向った。太郎丸さんも居る。あとアデリーネさんだって頑張ってる事だろう。何もかも自分ひとりで出来るわけじゃない。だから、みんなを信じよう。

「きっと、大丈夫です」

そう呟き、にっこりと笑うノエル。その感情が、その考え方が。天使にとって非常に珍しい物である事に、彼女自身は気付いているのだろうか？

ともあれ、そのような判断を下したノエルだったが、根底にある不安が解消されたわけでは無い。音の無い地響きは断続的に続き、火山の噴火を思わせる谷底からの粉塵噴出も、未だに治まる気配が無い。

サークスは無事だろうか？　あと二人の獣人……バラとガイランも大丈夫なのだろうか？　みんな、かなりの実力者である事は知っている。だがしかし、この胸を打つ根拠の無い不安感は一体何なのだろう？

「……おい、見ろ。誰か上がって来るぞ！」

治療を続けていると、外からそんな声が聞こえて来た。どうやら事態が動いたようだ。

ノエルは自分の膝元に横たわる男性冒険者を見る……いつの間にか彼は、安らかな寝息を立てていた。今なら、少しくらい席を外しても大丈夫だろう。

「すぐに戻りますからね」

聞こえてはいないだろうが、そんな囁きを残し、テントを出るノエル。
辺りには粉塵が漂い、埃っぽく、靄がかかったような空気だった。
そんな中、崖の辺りに多くの人が集まっているのが見える。

「ちょっと失礼しますね」

ざわつく人込みを飛び越え、砂煙の先へと目を凝らすノエル。すると、微かに人影が見えた。何者かが大荷物を抱え、暗い谷の底から、ロープを伝い登って来る。

「……サークスだ」
「おぉっ！　サークスだ、白銀のサークスは無事だったぞ！」

冒険者たちの間から、明るい声が上がる。
確かにそれはサークスだった。
白銀の鎧は血と砂に汚れて激しく痛み、剣は鞘ごと中程で折れている。額からの激しい出血によって美しい金髪はべったりと頬に張り付き、なんとも凄惨な有様だ。
そして右手には馬の獣人バラを抱え、左の小脇には縄で胴に縛りつけた、虎の獣人ガイランを引き摺っている。二人とも血塗れで、気を失っているようではあったが……その身体に目立った傷は無く、命に別状は無いようだ。

「大丈夫……みんな、無事だ。じきに……上がってくる」

酷く疲れた様子でそう呟いたサークスは、その場で膝を折って倒れた。だが酷く満足げな……それでいて、今までに見た事の無いような、どこか不敵な表情で微笑む。

「作戦、成功……だ」

そう告げた彼の背中には、誰も見覚えの無い、古びた箱が大事そうに縛り付けられていた。

第二十七話：馬鹿な男

賢者の鎧探索から全員が無事に戻って、今日で二日目。
いつもの街の、いつもの「ほろ酔い亭」は、いつもよりも少し賑わっていた。

「この間はありがとう、お陰で鎧を見つける事が出来たよ」

食堂の中央で、サークスとノエルが探索の参加者に銀貨の詰まった袋を手渡している。冒険の成功報酬だ。
笑顔でそれを受け取った冒険者たちは口々に賢者の鎧発見を喜び、サークスを、そしてノエルを褒め称える。

「あっという間に伝説級の装備を二つも揃えるとは。やはり噂の二人がコンビを組むと一味違うな」
「しかも誰一人犠牲者を出さずに、だからな。格が違うよ」

困ったように笑う、サークスとノエル。だが同時にどこか誇らしげでもあり、満更でもないといった様子だ。

「どうだい、二人とも。もう結婚でもして、ずっと二人で冒険してみたら？」

銀貨の袋を受け取って嬉しそうな年配冒険者が、からかうような口調で言った。
照れて笑うサークスと、曖昧な笑顔を浮かべるノエルに、周りから賛同の声が上がり、冷やかしの口笛が鳴り響く。

「……チッ」

そんな中、笑顔の中心から離れた食堂の隅で、小さな舌打ちがなされた。
ヤマトだ。独りテーブルに腰掛け、硬いパンを齧りミルクを啜って、明るい声に聞き耳を立てる……そして舌打ち。これで何度目だろう？
気に入らない。何もかも、気に入らない。
まず、ノエルとサークスがいつの間にかカップルのように認識されていると言う事が気に入らない。
別にヤマトはノエルと付き合っているわけでも無いし、保護者というわけでも無い。だから口出しする権利など全く持って無いのだが、楽しげに笑う二人を見るだけで癪に障る。頭に来る。
サークスがさり気無くノエルの腰に手を回しているのも気に食わないし、ノエルの奴がそれを拒まず、サークスから貰ったと言う金の髪飾りを、ずっと大事そうに着けているというのも、非常に気に入らない。
そしてもう一つ。

「どうして誰も疑問に思わねぇんだよ……」

それは二日前、サークスが谷底から生還した時の状況だ。
サークスの鎧と剣には、明らかに戦いの痕跡があった。直前に響いた地響きも、彼の凄まじい剣技がもたらした物だろう。
だが崖上へとサークスが生還した時、彼は傷を負っていなかった。血痕は残っていたが、血は止まって傷は塞がり、打撲も殆どが癒えていた。これは治療をしたノエルが言ったのだから、間違い無い。
そして彼はその時、驚くべき離れ業をやってのけた。気を失った大柄な獣人を二人も抱え、背中に重い鎧を背負ってロープを昇ったという事だ。
皆は「火事場の馬鹿力だ」とか「流石は高レベル冒険者だ」とか

言って持て囃したが……本当にそんな事が、人間に可能なのか？
サークスよりも一回り大きいバラとガイラン。二人とも逞しい筋肉を持つ、非常に大柄な獣人だ。きっとヤマトでは、一人を持ち上げる事さえ難しいだろう。
物凄いピンチだったから信じられない力が出た？　確かに有り得る事だ。だがしかし、それにしたって異様過ぎないだろうか？

「……チッ！」

思わず舌打ちが出る。
誰かにこの事を相談したい。誰かの意見を聞きたい。だが、ヤマトには相談相手が居ない。
ノエルは最近、サークスにぺったりだ。とても話を出来る状況では無い。
太郎丸は例のガイランという獣人を見かけた日から普段にも増して無口になり、一人で何事か考えている時間が増えた。今日も朝から、どこかへと姿を消している。
アデリーネはと言えば、伝説の武具の在り処を写した羊皮紙を片手に、毎日のように街の書庫に篭っている。彼女なりに何か思う所があるのだろう。
そしてこの街に住む大半の者は、ヤマトの事を快く思っていない。聖女ノエルを独り占めしていた、ろくでなしの屑……そんな意見が大勢を占めているのだ。
つまり今、彼の周りには親しい者が誰一人居ないのだ。

「どうしたモンかねぇ……」
「何が、どうしたんだい？」

ヤマトの独り言に応える者があった。
サークスだ。いつの間にかヤマトの居るテーブルに歩み寄り、椅

子の背に手を掛けて優雅に佇んでいる。

「よう、サークス。ご苦労さん。傷の方はもう大丈夫か？」

「ああ、おかげ様でね。流石はノエルさんだよ、あっという間に全快さ」

嘘だ。傷は、崖の上に戻った時点で塞がっていた。

「バラとガイランって言ったっけ？　あいつらも？」

「うん、元気だよ。今日は鎧の鑑定に、魔法屋へ行ってもらってる」

確かその二人も、かなりの出血をした痕跡があった。鎧に血が溜り、全身の毛が血で真っ赤に染まる程に。だがサークスと同じく崖の上で見た時に、そんな傷は見当たらなかった。

どうする？　カマを掛けてみるか……？

「そういやサークス、あの時谷の底で何かと戦ったんだよな？　それ……」

「そんな事より、ヤマト君」

ヤマトの声を遮り、サークスが持っていた革袋を勢い良く机の上に置いた。他の冒険者に配っていたのと同じ、報酬の入った革袋だ。だが少しだけ開いた口から覗いているのは、眩いばかりの金色の輝き。

「おい、これって……」

「そうだよ、金貨だ」

重そうな革袋には、金貨が目一杯詰まっていたのだ。その価値は銀貨の百倍に及ぶ。これだけあれば何年も……慎ましい生活をする

のであれば一生だって、のんびりと暮らして行けるだろう。

「何だよ、これ？　随分多くないか？」

「ああ、これはね……」

言葉を区切り、一呼吸置いてサークスが言った。

「手切れ金さ」

どういうつもりだ？　そう聞こうとしたヤマトよりも早く、サークスが答える。

「ヤマト君。キミに……パーティーを抜けて欲しい。そしてノエルさんとも手を切り、二度と僕らの前に姿を現さないで欲しいんだ」

チッ！

ヤマトの舌打ちが響く。

「これだけあれば、当分は生活には困らないはずだ。たしか……妹さんが居るんだよね？　だったら兄妹で仲良く慎ましく……」

「断る」

即座に答えるヤマト。

「サークス、テメェにゃ悪いが、俺は冒険者を辞めるつもりは無ぇ！　ノエルと手を切るつもりもな！」

「そうかい。それは……ノエルさんの事が好きだから？」

ストレートな質問だった。

ヤマトはこれまで、ノエルに対する正直な気持ちを一度も口にし

た事が無い。だからだろうか？　今更、言葉にしてしまう事が憚られ、思わず口篭ってしまう。

「……悪いかよ」

だが、ここで引いたら負ける。そんな気がして、辛うじて、それだけを口にした。

「そうか、まぁ気持ちはわかるよ。身分違いだとはわかってても、熱い想いは止められない……ってヤツだね。ま、あれだけ美しい天使なんだ。近くに居て、好きにならない方がおかしいさ」

納得し、頷くサークス。どこか上から目線に感じるのは、ヤマトのひがみ根性あっての事か。

「これでキミがノエルさんと離れたがらない理由はわかった。でも、ノエルさんの方は？」

一瞬、サークスの表情が邪悪に歪む。

「実はキミから離れたがってるんじゃないか？　考えてみたまえ、もし仮に告白したとして、だよ」

椅子に両手でもたれかかり、薄い笑いを浮かべて続ける。

「昨日まで弟のように可愛がってた男の子に、突然告白されるノエルさん。困るよね？　困るだろう。キミを傷付けたくは無いが、かといって受諾も出来ない。だって、所詮は弟だもの……男としては見れない」

常に頭の片隅でモヤモヤとしている考えを、言葉として明確にされ、ヤマトの心が軋む。まるで打ち身痕を強く押すような、鈍く、それでいて耐え難い痛みだ。

反論したかったが、言葉が出てこない。なぜなら自分の中にある悪い予想。それと合致しているのだから。

「でも良かったじゃないか、これまで一緒に居れたんだから。もう満足だろう？　ヤマト君は大金を手に入れて冒険者を引退。ノエルさんには相応しい仲間が見つかった上、キミの面倒も見なくて良くなった……そう考えれば、万々歳じゃないか」

と、そこまで一気に喋ったサークスがふと喋るのを止め、少しだけ声色を落して聞いた。

「それとも……ノエルさんには、キミと一緒に居たいと思う、居なければならない理由でもあるのかな？」

先程までの明るい調子から一転。深く、澱んだ声。

「例えば、キミが近くに居ないと、ノエルさんが力を発揮できない……とか？」

唐突なサークスの質問に、ヤマトは言葉に詰まる。

「何言ってんだ？　そんなワケねぇだろ。サークス、お前……」

「いやなに、そんな事を聞いたのに深い理由は無いんだ。これまで、どうして彼女が格下のキミとずっと一緒に行動してたのか気になってね。もしやと思ったんだが……違うのか」

この男……サークスは一体、何を考えている？

ヤマトは眼前の優男に底知れぬ気味の悪さを感じ、知らず知らず背中に嫌な汗をかいていた。このまま放っておいたら、大変な事になるんじゃないか？　そんな予感がある。

「だっておかしいじゃないか。血の繋がらない男女が二人一緒に十年近くも居て、何も無いだなんて。他の理由を勘ぐらない方がおかしいだろ？　現に、この数ヶ月。キミが居ない間に僕たちは……」

また明るくなったサークスの声色。そこから次々に飛び出す言葉に、少年の胸が嫌な高鳴りを覚える。それ以上は聞きたくない……そう思った時だった。

「どうしたの、二人とも。難しい顔して？」

話題の中心たるノエルが、ひょっこりとやって来た。どうやら何も知らないらしく、無邪気な表情でヤマトに話し掛けて来る。

「今回の報酬、貰ったんだよね？　私、また近い内にスダチちゃんの所に届けて来るよ。良かったら、いま預かっとこうか？」

「あ、あぁ……いや……」

ノエルの優しい笑顔を前にどうして良いかわからず、曖昧な返事を返すヤマト。

全ての疑問をこの場でぶっちゃけて、サークスに確信を迫るべきか？　それとも信頼できる仲間……ノエルや太郎丸、アデリーネに話をして意見を聞くべきか？

ヤマトが悩んだ一瞬を、サークスは決して見逃さなかった。

「ノエルさん」

「はい？」

ノエルが返事をして、サークスの方へと振り向いた瞬間だ。

「……！！」

サークスはノエルの身体を抱き寄せ、彼女の唇を奪った。

時間にして、数秒程の事だったろう。だが、永遠にも感じられる程……長い、長い瞬間だった。

「なっ……何をなさるんですかっ！？」

両手でサークスを突き飛ばし、唇を拭うノエル。自分のされた事が信じられない、そんな様子だ。

「良いじゃないかノエル、このくらい。海辺で肌も露わなキミに口付けた事、忘れたのか？」

「あれはっ……！」

海底洞窟で青い小石を取った際、ノエルは気を失ってしまった。その後、助け出されたものの呼吸をしていなかった彼女に、サークスは応急処置として人工呼吸を施したのだ。後でそれを告げた際、サークスは何度もノエルに謝っていたが……。

「事実じゃないか。そうだろ、ノエル」

「あ……で、でも……！」

確かに嘘では無い。だが細かな事情を、この場で説明するのは憚られる。特にヤマトの前では……。

「わかってもらえたかな、ヤマト君。僕たちは既に、こういった関

係にあるんだ」

サークスの台詞に、ヤマトは何の反応も示さなかった。ただ驚愕に双眸を見開いたまま、微動だにしない。

「ち……違うの、ヤマト！　そうじゃないのっ！！」

酷く狼狽し、違う、そうじゃないを繰り返すノエル。その髪には、サークスから贈られた金の髪飾りが美しい輝きを放っている。これまで、アクセサリになんて興味が無い風だったのに、これだけは毎日欠かさず付け続けている。

そうか、そういう事か――。

だからサークスが、急にパーティー抜けろとか言って来たのか。

「ああ、わかったよサークス。俺が、馬鹿だった……って事だな？」

「ま、そういう事になるのかな」

椅子から立ち上がるヤマトに、ノエルが駆け寄り声を上げる。

「違うのヤマト、そうじゃない！　話を……私の話を聞いて！？」

だがヤマトに、彼女の声は届かない。すがる様にして服の袖を掴むノエルの手を乱暴に引き剥がし、ヤマトは拳を握り込む。

そして……。

「おぉぉぉッ！　サークスッ！！」

次の瞬間、ヤマトは雄叫びと共にサークスへと殴りかかっていた。

第二十八話：決別

赤味がかった夕焼け空はいつの間にか分厚い雲に覆われ、遠く山からは湿った空気が流れ込んでいた。

だがそれに気付く者は食堂内におらず、やがて外は冷たい雨。主婦は慌てて洗濯物を取り込み、店主は店先の物を片付けて、戸板を立て始める。

「おとといきやがれ、このクソガキ！！」

怒鳴り声と共にほろ酔い亭の裏口が勢い良く蹴り開けられ、ボロ雑巾のようになった少年が一人、放り出される。

少年は受身も取れず頭からゴミ集積場に突っ込み、嫌なニオイと残飯を付近に撒き散らしながら倒れ込んだ。

「手前みたいな奴の事を身の程知らずって言うんだよ！」

「ついでに恩知らずともな！！」

「野垂れ死ね、このクズ！」

激しい罵声と共に、裏口の扉が壊れそうな勢いで閉められた。と同時に食堂内の騒がしい声が遠退き、辺りは雨の音に包まれる。

「へっ……良く言うぜ。お前ら、尻馬に乗っただけのクセに……」

ゴミ塗れの少年ヤマトは、痛む頬の内側を舌で探り、誰に言うでもなく愚痴を漏らす。咥内にゴロリとした物を感じ、血の混じった唾と共に吐き出すと……それは折れた奥歯だった。

舌打ちと共に鼻先を擦った手の甲には鼻血が擦り付き、雨に溶けて流れて行く。他にも体中、至る所から鈍い痛みを感じる。自分で

は良くわからないが、随分とやられてしまったようだ。

「畜生……やっぱ強いんだな、レベル３２って……」

つい先程。

怒りと、憎しみと、多分嫉妬と……その他諸々、胸が破裂してしまいそうな感情に任せて、サークスへと殴りかかったヤマト。渾身の拳は的確にサークスの頬を捉え、白銀の二つ名を持つ男をよろめかせた。

だがそれは軽く……少しだけ。しかも、お情けを貰っての一発だった。

「これで満足したかい？」

涼しげに言って、薄く笑うサークス。その端整な顔に、パンチによるダメージはほんの少しも見当たらない。

「ンの野郎ッ！　ムカつくんだよ！！」

再度殴りかかるヤマト。だがサークスはそう何度も殴らせてはくれなかった。

細い竹がしなるかの如く上半身を反らせ、悠々と拳をかわしたサークスは、ヤマトの腕を取って背負い投げの要領で勢い良く投げ飛ばす。

重く風が唸り、破砕音と共にヤマトの叩きつけられたテーブルが壊れ、椅子が倒れて食べ物や食器が宙に舞う。騒然となる食堂内。

「や、やめっ……！　二人とも……ヤマトっ！！」

「くっ……どいてろ、ノエル！」

ノエルが割って入ろうとしたが、ダメージを堪えて立ち上がったヤマトは彼女を押し退けて、サークスへと再三挑む。

今度は脚に組み付き引き倒そうと腰を落とし、低い体勢から地を這うようなタックルを仕掛けるヤマト。速度、タイミング共に申し分無い鋭いタックルであったが……。

「青いな、ヤマト君」

「あぐっ！？」

サークスはそれを、振り下ろす拳一つで易々と撃退した。

後頭部に岩を打ち砕かんばかりの一撃を受け、地に這い蹲るヤマト。そこへ他の冒険者たちがやってきて、彼を取り押さえる。

「この馬鹿、サークスさんに何しやがる！」

「女取られたからってキレてんじゃねぇよ。少し落ち着け」

そんな冒険者たちの声も、今のヤマトには届かない。

「うるせぇ！　すっこんでろ！！」

そう怒鳴り、人々の手を振り切って憎きサークスへと迫る。だが……。

「キミでは無理だ。釣り合わない」

そんな言葉と、無造作に突き出されたサークスの正拳がヤマトの顔面にめり込み、鼻っ柱を砕く。

ずしん、と重たい一撃。目の前の景色が下へ流れ、ほろ酔い亭の天井が現れる。そして少年の怒りは、意識と共に軽く飛び……気付いたら、床に倒れていた。

「……う」

気絶していたのは、ほんの一秒にも満たない一瞬だったろう。しかし受けたダメージは計り知れず、視界が揺れて焦点が定まらず、身を起こそうにも手足に力が入らない。

しかし、それでも立ち上がろうとするヤマトに、周囲の冒険者たちが苛立ちを募らせる。

「もう止めろ。サークスさんに、お前が敵うわけ無いだろ？」

「この勘違い野郎が……多少痛い目にでも遭って、身の丈ってヤツを判らせてやった方が後の為かもな」

誰かが言った言葉が、やけに耳へ残る。

勘違い野郎――。そう、ヤマトは勘違い野郎なのだ。

幼馴染の天使を自分の女だと勘違いし、お似合いの相手に嫉妬する口だけの能無し駄目野郎。それがヤマトという男……自分なのだ。

「う……う、るせぇ。黙ってろ、この……ハゲ！」

「なんだと、この小僧！」

ハゲと言われたスキンヘッドの大男が、立ち上がりかけていたヤマトの顔面を殴る。たたらを踏んでよろめき、他の冒険者にぶつかるヤマト。

「仕方ねぇ……ちょっと頭冷やして来い」

ぶつかった冒険者もまたヤマトの腹を殴り、屈んだ所で下から上へ、突き上げる拳を顎に見舞う。更に続けて二発、三発と叩き込まれる拳。避ける事はおろか何の防御も出来ず、受身さえ取れず、ヤ

マトは薄汚れた床へ無防備に倒れこむ。
そこへ次々に飛んでくる容赦の無い蹴り。顔へ、脇腹へ、太股へ。何度も何度も、何人もの冒険者がヤマトという名の勘違い野郎に身の程を弁えさせようと蹴りを放ち、痛めつける。

「も、もう良いでしょう!?　皆さん、止めて……もう許してあげて下さい!」
「放っておこう、ノエルさん。ヤマト君には良い薬だ。それに心配はいらない。皆、加減くらいわかってる……死にはしないさ」

ヤマトへの暴行を制止しようと声を上げるノエルを、サークスが抱き止める。他の冒険者たちも、ノエルはもうあんなカスに関わるべきじゃ無いと、寄って集ってヤマトへの接近を阻み、引き離す。
そして……。

「おとといきやがれ、このクソガキ!!」

冒頭へと戻る。
屋根の下から叩き出されたヤマトに、降り出した雨は冷たく未だ止む事を知らず、次第に激しさを増すばかり。
立ち上がる事も出来ず、ゴミに紛れて濡れ鼠となった少年の身体は冷え切り、痛みはやがて冷たさ、そして寒さへ。

「いてて……ポーションは……と」

震える指先で懐を探り、薬の小瓶を探す……そして溜息。そういえば全部、ザックに纏めて部屋に置いてあるんだった。ノエルと合流したから、しばらく使わないだろうと思ったのだ。

「しくじったな、くそぉ……」

別のポケットにでも紛れ込んでいないだろうか？　そう思って弄った服の隠しポケットに、硬い手触りがあった。

取り出してみると、それはグシャリと潰れた布張りの箱。開けてみると、中身は砕けた髪飾り――ピンクの花びらが安っぽくて子供っぽい、到底ノエルには似つかわしくない……玩具のような髪飾りだ。

「悪ぃ……もう、いらなくなっちまったんだ。すまねぇ……」

迂闊にも自分に買われてしまったばかりに、役目を果たす事の出来なくなった髪飾り。いや、今や哀しげに雨の雫を落すだけのガラクタとなったソレへ、深く詫びる。

「……？」

その時、ギシギシと木の擦れる音がして、ほろ酔い亭の二階窓が開いた。何だろうかと見上げるヤマトの瞳に、輝く光輪と白い翼、そして見知った顔の天使が映る。

「……ノエル」

二階の窓から、ノエルが半身を乗り出していた。そしてゴミ捨て場に倒れたヤマトを見つけると、慌てて窓から飛び出し、翼を広げて舞い降りて来る。

「ヤマト、大丈夫？」

すぐ側に降り立った彼女は、気遣わしげにそう聞いてきた。その表情は、ヤマトがいつも良く見る……頼りない弟を心配する、姉の

顔。
少年の胸が、強く痛む。
「ボコボコにされちゃったね。いま治すから、力を抜いて……」
そう言って手をかざし、癒しの光で傷口を癒そうとしたノエル。
だがヤマトは、そんな彼女の手を無造作に払い除けた。
「……ヤマト？」
「いらねぇ」
それだけ言って、ヤマトが立ち上がる。相当な無理をしているのは誰の目にも明らかだったが、それでも彼は震える手足で立ち上がり、ノエルに背を向けた。
「ヤマト……あの、怒っ……私の、サークスさんとの事、だよね？あれはね、前にちょっと私、色々……」
「わぁってるよ。そんな事、わかってる。なんか事情があんだろ？色々と……お前やサークスでないとわかんねぇ事情が、さ」
背を向けたまま、震えるノエルの声に応えるヤマト。
自分の居なかった数ヶ月の間で、サークスとノエルの間に何があったのか？　そんな物、大体想像が付いている。そこで色々な事情があったであろう事。それだって、何となくわかっている。そしてきっと両方に共通しているのは、自分のような非力な人間ではどうしようもない「何か」だったという事――。
「そんな話……聞きたくねぇ」
痛む拳を握り締めて、滲む血のように声を絞り出す。

そうしてヤマトは顔を上げず、ノエルの顔を見る事無く、一歩ずつ闇へと向って歩き出す。

「ま……待ってヤマト！　話を……ううん、話は聞かなくていいよ！　だからせめて、傷の治療だけでも……！」

光で雨を弾く事も忘れ、ずぶ濡れとなりながら追い縋るノエル。
そんな彼女へヤマトは最後に一度だけ立ち止まり、酷く聞き取り辛い声で言った。

「これ以上、俺を惨めにさせないでくれ……！」

その後、彼は一度も振り向く事無く、立ち止まる事も無く、涙ぐむノエルを残して暗い雨の中へと消えて行った。

第二十九話：暗雲

日も高い時間帯。いつものほろ酔い亭一階の、いつもの場所。いつものように軽食が並ぶテーブルを囲み、いつも居る六人の姿がある。

「そろそろ次の武具を探しに出ようと思うんだ」

塩気の効いた生ハムを噛み千切り、サークスが口を開いた。彼の眼前には、いつものように羊皮紙が、これまたいつものようにジョッキを重石として広げられている。

「これは多分、手甲の類だと思うんだ。名前は『幻魔のなんとか』……資料に不明な点が多くてね、全部は読み取れなかった。でも場所の特定は出来てる」

新たに広げられた別の羊皮紙には、詳細な地図と様々な但し書きが交易用の標準語で書かれていた。どうやら現在地から馬車で十日程の距離にある洞窟内部が目的地であるようだ。

「最新の地図で確認すると、近くに小さな村がある。そこで準備を整えて……洞窟は狭い場所みたいだから、前のような人海戦術は使えない。だから少数精鋭、このメンバーで……」

「すまぬサークス殿、暫し宜しいか」

太郎丸の低い声が言葉を遮り、強引に話を中断させた。普段から無口な彼が、こういった形で口を挟む事は珍しい。

「どうしたんだい太郎丸。珍しい事もあるじゃないか」

「うむ……いやなに、少々気になっている事があってな。実は某、ここ数日ヤマト殿を見かけておらぬのだが……誰か知らぬか」

その言葉で、テーブルの空気が変わる。

サークスとバラ、ガイランの三人は「ああ、その事ね」といった雰囲気。

ノエルは目を逸らし、俯いてしまった。その話題には触れないで欲しい、聞いて欲しくないと、あからさまな態度だ。

アデリーネは、質問を投げ掛けた太郎丸と同じ。貴方が聞かなければ私が聞いていた……そう目で訴えている。

「何か心当たりがるようだな、サークス殿」

「ああ、すまない。別に隠すつもりは無かった……というか、ちょっと言い出し辛くてね。先に結論だけを言うと……彼は、パーティーを抜けたよ」

サークスの台詞に、少なからず動揺を見せる太郎丸、そしてアデリーネ。

「恥かしい話だけど、数日前に僕がちょっと揉めてしまってね。ヤマト君は、出て行った。どこに居るのかは、僕も知らない」

サークスの言葉を確かめるように、太郎丸の視線は俯くノエルの方へ。

見られている事を敏感に感じ取ったのだろう。少しだけ顔を上げて太郎丸を見つめ返したノエルだったが、すぐに辛そうに目を伏せてしまう。

「ノエル殿、一体……」

何があった？
ノエルに問いかけようとした太郎丸を、静かに首を振ってアデリーネが制した。その代わり、発言を引き継いでサークスへと質問を向ける。
「それではサークス様。この手甲の探索はヤマト様抜きで？」
そのつもりだよ、と頷くサークス。彼の左右に控えるバラとガイランも頷き、口々に言い放つ。
「大丈夫だよアデちゃん。あんな弱っちい奴一人くらい居なくても、俺様がキッチリ守って見せるからさぁ」
ブヒヒと唇を震わせて笑い、自信満々の様子を伺わせる馬の獣人バラ。
「レベル３２の剣士とレベル２０の天使が居る。戦力に不足は無い」
太い腕を組み、淡々と告げる虎の獣人ガイラン。直後、レベルの低い小物など邪魔なだけだと、独り言のように呟いたのが耳に残る。
「左様……か」
全員の様子を伺い、息を吐いた太郎丸。自分が少し場を離れていた間に、一体どれほどの事が起こったというのか。故郷からこの街へと戻る際もしきりにノエルの事を気に掛け、事あるごと口にしていたヤマト。そんな男が、華奢な身体を悲しみに沈ませるノエルを捨て置いて、独りどこかへ行くなど俄かには信じられない。
ちらりと、傍らのアデリーネに視線をやる。すると彼女も太郎丸と同じく、固い意志を湛えた瞳でもって頷いた。

「すまぬサークス殿。今回の案件、某は一緒に行けぬ」

ガタリと椅子を蹴るようにして立ち上がり、そう宣言する太郎丸。テーブル上の食事もそのままに、憮然とした表情で立ち去ろうとする。

「どうしたワンちゃん？　臆病風にでも吹かれちったか？」

「……用事が出来た」

からかうようなバラの台詞に意を解さず「御免」と言い残しテーブルを去る太郎丸。それに続き、アデリーネも席を立つ。

「申し訳ございません。せっかく誘って頂いたのに恐縮なのですが、私も暫しお暇を頂きたいと思います」

「おいおい、マジかよアデちゃん！　一緒に行こうぜぇ！　俺が守ってやるってば！！」

「いいえ、バラ様。お気持ちは嬉しいのですが、そもそも私はヤマト様に身請けして頂いた身。主人の下を離れる事自体が、有り得ないのです」

盛大に唾と不満をぶちまけるバラをやんわりと嗜め、丁寧に頭を下げるアデリーネ。

「それでは、これにて失礼致します」

そう彼女が言って頭を上げた時――ノエルと目が合った。

とても哀しげでとても心配そうな、今にも泣き出してしまいそうな、脆く弱い印象の天使。ノーウェイの屋敷で最初に見かけた時の、優しく穏やかな、暖かい太陽の光を思わせる女性の姿など、今の彼

女からは想像も付かない。

「あ、あのっ……」

何かを言おうと、口を開きかけるノエル。だがしかし、何が邪魔をするのか声になる前に掻き消え、意味を成す言葉とならない。周囲に伝わるのはもどかしさだけ。

だがアデリーネには伝わっていた。

「大丈夫です、ノエル様。あの方を信じて、いまはお待ち下さい。彼は、必ず戻ります。貴女の元へ……」

気休めにもならない、無責任な言葉だったかもしれない。しかしアデリーネの言葉は、心細さに震え、凍えかけていたノエルの心を包み、暖める。

「では」

もう一度頭を下げて、太郎丸の後を追うアデリーネ。遠ざかり、雑踏へと消える二人の背中を、ただ見送る以外に無いノエル。

そうしてしょんぼりと項垂れる天使を前に、黙ってテーブルに残る干し肉を口に運んでいたサークスが呟く。

「……気に入らないな」

彼の一言を、耳に留めた者は誰一人として居なかった。

第三十話：傷付いて、失って（前書き）

このお話の戦闘シーンにおいて、非常に残酷な表現がございます。
苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十話：傷付いて、失って

ほろ酔い亭のある街から、徒歩で三日程の距離にある宿場町。目立つ建物は何件かの宿のみで、町としての規模は小さく、長く住んでいる住民も多くない。

だが大きな街と街を繋ぐ街道の中間にあって交易の拠点として栄え、旅人が多く立ち寄り疲れを癒す事から「旅人の家」と呼ばれ、各方面から親しまれている。

人通りが多い道の周辺に見えるのは、踏み固められた土くれ剥き出しの地面に直接ゴザを引き、思い思いの商品を並べて売り捌く露天商たちの姿。彼らの品揃えは多岐に及び、道行く者たちの多彩な要求を満たし、目を楽しませる。

そんな露天商から少し離れ、町からも少し外れ、少しだけ森に入った辺り。朽ちた切り株に、酷く憔悴した様子で腰を下ろすヤマトの姿があった。

彼は切り株に愛用の短剣を突き刺し、研ぎ澄まされた鋼の刃を長い時間じっと見つめている。

「はぁ……」

溜息を付くヤマト。

短剣は、冒険者であった父の形見だ。

ずっと前に流行り病で亡くなった父と母。幼かった妹のスダチと、飛べない天使であったノエルを養う為、遺品の多くは二束三文で売り払ってしまった。だが実家の建物と飼っていた牛、そしてこの短剣だけは食うに困っても売らず、大事に持ち続けていた。

しかし今、ヤマトは悩んでいる。

「売っちまおうかな……」

何度目かもわからない自問自答。
彼は形見の短剣を、露天商に売ってしまおうかと悩んでいたのだ。
勿論、ヤマトとしては売りたく無い。どこにでもある普通の短剣ではあるが、父の形見であるし、長い間使い込んだという愛着もある。トドメには至らなかったが、ミノタウロスの頭蓋に突き刺してダウンを奪ったのも、この短剣だ。
父と同じ冒険者になろうと……強くなろうと決めた日からずっと、片時も離れず一緒に歩んできた大事な短剣。

「でも冒険者辞めたらもう、使わねぇもんな……」

何度も研いで磨り減った刃が、寂しげにヤマトを見つめ返す。

「しょうがねぇだろ？　金も無いし……」

短剣へと言葉を返す。
数日前の夜。サークスに伸され、ノエルに八つ当たりして、雨の中を着の身着のまま逃げるように街から去ったヤマト。その為、荷物の大半は宿に置きっぱなし。手元にあったのは僅かな銀貨と形見の短剣だけ……売れば小金程度にはなるかと思った壊れた髪飾りだが、どうやらゴミ捨て場に落して来たようだ。
以前から評判の良くなかったヤマトであったが、ついにここに来て「英雄サークスと揉めたカス」とレッテルの貼られた彼に、人々の目は特に冷たい。宿へ荷物を取りに戻ろうかと何度か考えたが、一昨日、顔も知らない通りすがりの小さな男の子に「この悪者め！」と石を投げられて……諦めた。嫌われ者にも程がある。宿に戻ろう物なら何をされるかわかったものではない。
かといって金は無く、食い扶持も無く、頼るものも無い。もう一昨日から水しか飲んでいない。

冒険者としての仕事で日銭を稼ごうと、冒険者組合へと足を運んでもみたが「英雄サークスと揉めたクズ」に回す仕事は無いとにべも無く断られ、冒険者としての仕事は完全に干されてしまった。

「仕事もしねぇで武器もってウロウロしてるだけって、もう冒険者じゃねぇだろ？　そりゃ単なるゴロツキだ」

自分の台詞に、自分で苦笑いする。今の自分はつまり、ゴロツキというわけだ。

「それに……もう冒険者やる意味、無くしちまったしな……」

あの日の誓い。柔らかな手を取り、光の中、胸に刻んだ強い想い。この娘を守る。傷つかないように、笑顔が失われぬように。その為に少年は強くなる事を望んだ。

強さ。

それは彼にとって、自分や妹、そしてノエルを守り育てた父の背中だった。父と同じ冒険者となれば、自分も強くなれるのではないか？

「そう思って必死こいてたけど、俺じゃ無理だった。結局は弱っちい俺が邪魔で、強い奴の方が……っていう話だよ」

あの夜、ほろ酔い亭で見た光景が鮮明に浮かび上がる。

ノエルを親しげに抱き寄せるサークス。それを拒む事無く、されるがままのノエル。そして二人は口付けて……。

「……もう、嫌だ！」

切り株へ、拳を強く打ち付けるヤマト。

「忘れちまえ、何もかも！　冒険者なんて辞めて、普通に働いて、普通に暮らすんだ！　そうだ、スダチにだって金を送らなきゃなんねぇ……いや、向こうで働けば良いんだ。きっとアイツだって、その方が喜ぶ！　よし、そうしよう！」

誰でも良い。中古屋にでも短剣を叩き売って飯を食べて、田舎へ帰ろう。そして一からやり直すんだ！

半ばやけくそ気味に声を上げ、ヤマトは短剣を切り株から抜き取り立ち上がる。そして一歩を踏み出した時……。

「……！！」

それは冒険者として危険の中に身を置いた男に呼び起こされた、微かな野生の本能だったかもしれない。

背中に感じた悪寒。森の中から忍び寄る危険の気配。音も無く、首筋へと迫る鋭い刃の予感。

何か根拠があったわけではない。だがヤマトは確信を得て前方へと飛び、同時に身体を捻って背後の「何か」へ短剣で切り付けていた。

激しい火花が散り、甲高い金属音が響き渡る。座っていた切り株が砕け、砂煙と共に宙を舞う。

「チッ……カンだけは良いか」

地面を転がって体勢を立て直したヤマトに、何者かの声が届いた。聞いた事の無い、しゃがれた老人のような声だ。

自分がさっきまで座っていた切り株。今は砕けて形も残っていないその場所に、大男が立っていた。

ヤマトよりも二回り以上大きな身体。前屈みでいる為に正確な所

はわからないが、純粋な身長は二メートル以上あるだろう。身に着ける軽甲鎧の上からでも確認できる太い腕と厚い胸板は、かつて見た者の中でも一番だろうと思える。

「何モンだ、てめぇ？　俺はヤマト……人違いじゃねぇのか？」

問いかけたヤマトに、件の大男は勢い良く腕を振って応える。この手で貴様を仕留めに来た。そう言っているのだ。

「……なんか良くわかんねぇが、俺で正解って事か。言っとくが金なんて持ってないぞ、この包帯野郎！」

大男を包帯野郎と呼ぶヤマト。

そう、大男には目立つ特徴があった。全身を隙間無く包帯で包んでいるのだ。顔も、目の部分だけを残して包帯でグルグル巻き。鎧の下まで全く地肌が見えないよう徹頭徹尾の巻き具合は、正体を隠す気満々の格好であると言えた。

とはいえ、包帯の上からでも確認できる事はある。例えば、骨格。そして尻尾の有無がそれだ。

「その体型と尻尾……肉食系の獣人か。名前は聞くだけ無駄なんだよな？」

ヤマトの問いに低い唸り声で応える包帯男。その迫力に怯えたように見せかけて……ヤマトはジリジリと下がって間合いを取る。相手が正体を隠す気満々であるなら、ヤマトだって逃げる気満々だ。

この世界において、太郎丸やバラ、ガイランのような獣人の割合は少なく、珍しい。多くの人目に止まれば止まるほど、彼らは目立つ。正体を隠したい目の前の包帯男にとって、人目は最も避けたい物の一つだろう。

そうなれば答えは一つ。人込みまで逃げれば良いのだ。
現在置から、人の多く集まる「旅人の家」までは、そう遠くない。全速力で走れば三十秒と掛からないだろう。今の内になるべく距離を取って、一気に走り去れば……。
ヤマトがそう考え、素早く振り返って逃げ出してやろう……と両脚に力を溜めた、その時。包帯男がしゃがれた声で言ったのだ。

「貴様が逃げた場合、町の者を殺す」
「なっ……なんでだよ！　町の連中、関係無ぇだろ！？」

疑問がヤマトの口を付いて出た。町の人は関係無いはずだ。知り合いなど一人も居ない……精々、自分に投石をくれた男の子くらいだ。だから別に誰が死のうと、ヤマトの知った事では無い。遠慮なく逃げる事が出来る。
出来るはずだ。

「足が止まっているぞ」
「しま……ッ！！」

ヤマトが見せた一瞬の隙。それを包帯男は見逃さなかった。
巨体が、地面を蹴った……次の瞬間、彼の者は目の前に居た。振りかぶった腕の指先に巻かれた包帯が千切れ飛び、鋭い鉤爪が飛び出す。そして爆風を伴った一薙ぎ！

「ぐぁっ！！」

呻き声と共に、ヤマトの小さな身体が弾き飛ばされた。そのままの勢いで雑木林へ飛び込み、太い木の幹に激突する。
息が出来ない。目の前がクラクラする。背中が、腕が……ヤマトの全身が悲鳴を上げていた。辛うじて鉤爪の一撃は短剣で防いだも

のの、受けた衝撃を殺す事は出来ずにこの様だ。

「がはっ！　ぼ……冒険者引退しようと思った途端にコレかよ……ツイてねぇな」

よろめきながらも、激突した木に掴まって立ち上がる。数日前に受けた打撲がぶり返し、新たに脇腹が酷く痛んだが、座ったままでは次に対処できない。どれほど辛くとも生き延びる為には立ち上がる以外に無い。

「くそっ、やれるトコまでやってやらぁ！」

雄叫びを上げて木に背中を預け、右手に短剣を構えて、周囲に注意を向けるヤマト。吹っ飛ばされ、包帯男を見失ってしまったのだ。

相手は獣人。しかも狼や虎といった肉食系の種族……生来の狩人だ。その驚異的な身体能力は人間の反射神経を軽く凌駕して余り有る。森という遮蔽物の多いフィールド。どの方向から攻撃がやってくるかわからない。神経を張り詰め、微かな異変に対しても即座に反応できるよう、命を削るような思いで集中する。

だが……。

「……っ！？　あぐっ……！！」

ざくっ、と固い木を抉る音が聞こえた直後、短剣を握る右手が、灼熱の棒を押し付けられたような激痛を訴えた。見れば腕の中ほどから、血に濡れた鋭い爪が四本、肉と皮を貫き飛び出している。

包帯男はヤマトの背後から、木を貫いて攻撃を加えて来たのだ。

「どうやら、当たったようだな」

言って、爪を捻る包帯男。貫かれた木の幹が、ホールケーキに突き刺したフォークを捻ったようにくり貫かれ、湿った音を立ててささくれ立つ。

グシャグシャとなって木片を散らす幹……そしてそれは、ヤマトの腕も同じだ。

「ぐぅ……うぎゃあぁぁぁぁぁッ！！」

爪が捻られた事により、腕の筋がパチパチと音を立てて切れ、骨と筋肉が剥がされる。引き裂かれた皮の間からは鮮血が漏れ出し、流れ落ちた血溜りの中に、右手から零れた短剣が力無く落ちた。

「くっ、うがあぁッ！」

覚悟を決めて、刺さった爪から右手を引き抜くヤマト。ズタズタとなった右腕の付け根を、抜いた腰紐で縛って止血する。だがもう既に、痛み以外で右手の肘から先の感覚は無く、指はピクリとも動かない。

「その右手、もう二度と元には戻らんだろうな」

嬉しげに言って爪の血を拭った包帯男は、邪魔な木を小枝のようにへし折り、軽々と押し倒してヤマトに迫る。

「久し振りの、喋る獲物だ……楽しませてもらおう」

包帯男が口にした台詞の前半を、ヤマトは自分の前で聞いていた。だが台詞の後半は、自分の背後から聞こえてきた。ヤマトにとって包帯男の敏捷性は、レベルや経験では補い切れない絶対的な力の差として立ちはだかる。

土を蹴立てる音を聞き取った時、そこに敵はいない。背後に気配を感じて振り返っても、振り返る首の動きよりも速く敵は移動し、死角へと回り込む。

「どこを見ている?」

「後ろっ!?　ぐっ……ギャアァァァ!!」

「ほら、どうした。早く逃げないと左手も使い物にならなくなるぞ」

包帯男がヤマトの背後から、握手でもするようにして彼の左手を掴んだ。ただそれだけでヤマトは絶叫を発し、苦しみ悶える。

がっちりと握り合わされた二人の手……その隙間から、搾り出されるようにして血が滴り落ちる。包帯男が凄まじい握力でもって、ヤマトの左手を握り潰しているのだ。

骨が砕け、筋肉が潰れる。必死に引き抜こうともがいても、包帯男の手は開かない。それどころかヤマトの肘に手を伸ばし、更には肩にも手を伸ばし、がっちりと捕まえて力を掛け始めた。

「ギャアァぁ……ぐぁ……がアァァァッ!!」

「脆い骨だ。簡単に折れ曲がる」

ごき、ごきっと鈍い音が響く。左腕の関節が一つずつ、順に破壊されて行く。肘があらぬ方向を向き、肩が肩甲骨と共に折れ曲がった。胸を締め付け、頭を割るような痛み。冷や汗が全身から噴出し、吐き気が込み上げてくる。

だが動かぬ右手では反撃どころか反抗さえままならず、振り切って逃げようにも、振り切る事さえ出来ない。

だが、それでも……。

「ゴルァ!!　舐めンなぁッ!!」

ヤマトが反動をつけて右手を振り、包帯男の顔面にブチ当てた。
威力は皆無。だが流れ出した血糊が視界を塞ぎ、残忍な獣人の行動を阻害する。

「チッ！　面倒な」

両手を離し、目に付いた血糊を拭い出す包帯男。
今だ。チャンスは今しか無い！
左手の痛みをこらえ走り出すヤマト。だがそれは逃亡では無い。
倒れた木の根元……落ちている形見の短剣を目指しての疾走だ。
包帯男は素早すぎて、ヤマトの速力では人目に付く場所まで逃げ切る事は不可能だ。それならば乾坤一擲……攻撃に転じて隙を突く、それしかない。彼はそう考えた。

「一か八か……ッ！」

血溜りの中にある形見の短剣を口で咥え上げて、くるりと振り返る。
柄をしっかりと噛んで固定し、包帯男へと狙いを定める。そして全力で大地を蹴り、勢いを付け、未だ視界の晴れない包帯男の首根っこを、体重を乗せた刃で叩き切った！
包帯が切り裂かれ、隙間から首が垣間見える。そして……。

「フン……これで全力か？　命を賭けてこの程度……人間風情の力など、知れた物だ」
「……！！」

切れたのは、首付近の包帯だけだった。首を叩き切るどころか、包帯の下に見えた赤と黒の毛皮から、毛の一本を切り落とす事さえ出来ていない。

「そうやって、剣を口に咥え攻撃するのなら……」

包帯男は顔の下半分に巻かれた包帯を緩め、口の辺りを露わにした。

顔の横付近まで割れた、大きな口。そこから見える咥内には鋭く太い牙が生え揃っている。

「せめて、この程度の力は欲しいものだ」

首筋に当たって止まっている短剣を手に取る包帯男。そして鋼の刃を口に挟む。

「あ……！！」

包帯男の牙が、鋼の刃に食い込む。徐々に曲がり、穴が開き、ひび割れて行き……そしてヤマトの見る前で短剣は粉々に砕け、地面に落ちた。磨り減った刃も、汗の染み込んだ柄も、全てバラバラだ。

「どうした、そんな哀しそうな顔をして。この剣が唯一の武器だからなのか……それとも大事な物だったか？」

反撃に失敗した上、形見の短剣までも失い、ヤマトの動きが止まる。そんな彼の首を易々と掴み、吊り上げる包帯男。

手は尽くした。精一杯頑張った。だが、どうしようもない事だって――その時、脳裏にノエルとサークスが抱き合う姿が浮かび上がり……ヤマトから抵抗する為の気力、その全てが失われた。

どんなに頑張っても、どうしようもない事だって……ある。

「つまらん。諦め、活力を失ったか……だが我が渇きを癒す為……

今しばらく、付き合ってもらうぞ」

そう言って、包帯男がヤマトの顎を掴み、無理矢理口を開かせる。

「剣も振れぬような役に立たぬ歯なら、もう要らんだろう」

「……！！　あがっ……がッ……！！」

前歯と前歯の間に鉤爪が強引に差し込まれた。歯と歯の間が開き、歯茎から血が滲む。ただそれだけでも、歯が根元から折れてしまいそうだというのに、包帯男はその鉤爪を……捻った。

「ギャッ！！」

バギン、と音がして白い物が二つ、口から飛び出す。森に落ち、土に紛れて見えなくなったそれは……ヤマトの上前歯だ。直後に上顎から真っ赤な血が流れ出す。

「ぐァ……！！」

「上の歯だけではバランスが悪い。下も……ついでに奥歯も面倒を見てやろうか」

「ひ、ひゃめ……ガっ、あぐっ……ギャ……！」

「遠慮は要らん。もう一生、虫歯で悩む必要が無くなるぞ……」

バキバキとへし折られ、零れ落ちて行く永久歯。その上、凄まじい握力によって顎までも砕かれる。

「どれ、もっと楽しませろ……次は、どこを責めて欲しい？」

森の中に木霊する無力な少年の悲鳴。その声は、その後も長く長く……いつまでも響き続けていた。

第三十一話：闇の胎動

光の無い状態を暗闇と呼ぶのなら、この場所は間違いなく暗闇といえる。

ただ一面の赤。赤が支配し、赤以外に何の要素も無く、光さえも無い空間。だから暗闇。真紅の暗闇だ。

その中で独り、彼は考えていた。赤の中に浮かび、休む事も、眠る事も無く、ひたすら考えていた。

人や動物など生き物の多くは、肉や野菜を食べ、それをエネルギーとして活動する。

肉体を持たぬ精霊たちは、風の動きや炎の揺らめき――それら大自然の営みそのものをエネルギーとして活動する。

そして悪魔は、生き物の欲望をエネルギーとして活動する。

では天使は？

天使の力は無限だという。湯水の如く何処からか湧き出し、人々を守り、人々を癒す。連続使用によって多少は疲れたり、精度が落ちたりする事はあるようだが、力そのものが枯れて無くなるような事は無いらしい。

おかしいではないか。

人や動物は餓えれば死ぬ。精霊たちに至っては、エネルギー源たる自然の営みが無い場所では存在する事すらできない。例えば炎の精霊が水の中に存在できず、逆もまた然りであるように。

悪魔だって同じだ。契約を交わした相手の欲望が弱ければ力は弱まり、欲望が消失した場合には完全に力を失い、場合によっては消滅してしまう。

なのに何故、天使だけが無限の力を得ているのだ。

生き物の欲望を糧とする悪魔。その実体は形を持たず、どちらかと言えば精霊たちに近い。

生き物たちに甘い声で囁きかけ、欲望を煽って契約を交わす。そして契約を交わした相手に取り付き、次第に欲望と力を増大させて、最後には肉体も記憶も精神も、魂さえも我が物とする。

非常に強力であると思われがちな悪魔――だが制約も多い。

まず取り付く相手と契約を交わさねばならず、それまでは心に囁きかける程度の力しか無い。首尾良く対象と契約を結べても、完全に相手を乗っ取るまでは本来の力を振るう事は出来ず、取り付いた相手の能力を増強する程度の事しか出来ない。

しかも悪魔は力を振るう度に魔力を消耗する。悪魔にとって魔力はスタミナのような物だ。休めば回復するし、仮に尽きたとしても死にはしないが、力は大きく減退する。

比べて、天使にそのような制限は無いという。

おかしいではないか。

彼は暗闇の中で考え続ける。

どうしてこうまで天使ばかりが優遇されているのか。

人形生物の中にあって飛べるというだけでも異質な存在だ。なのに、それに加えて強力かつ無制限に振るえる能力の数々……しかもそれらは、生まれた時から何の苦労も無く身に付いている天賦の才だというのだ。こんな物、ズルいの一言で済まされる問題では無い。神に愛されるにしても程があるだろう。

大体が、万物の長たる神でさえ……。

そこまで考えて……彼は、思考を止めた。

神でさえ……そう、神でさえ。ならば天使は？　神の使いたる天使はどうなのだ？

真紅の暗闇に包まれ、彼はほくそ笑む。
闇は、次第にその度合いを深く、濃くして行った。

第三十二話：悪魔の姦計（一）

ほろ酔い亭のある街から、馬車で十日ほど。街道からは少し外れた山間部にある人口は五百ほどの小さな村は、地産地消を地で行く、農業主体の穏やかな村だ。

「次の方どうぞ。深呼吸して、気を楽にしてて下さいね」

深夜。村の中央にある小さな集会所で、ノエルは年老いた老婆の背中に手を当て、柔らかな光を流し込んでいた。

長年の経験を刻むシワだらけの肌。年季を感じさせる曲がった腰。手にしているのは使い込み、磨り減った杖――どうやら肩と腰、あと足にも疾患があるようだ。高齢の方に多くみられる典型的な症状に、ノエルは寄る年波の残酷さを感じながら、丁寧に慎重に、人生の先輩へと癒しの力を発動させる。

「……はい、これで悪い所は治りました。けれど、あまりご無理はなさらないで下さいね」

しきりに頭を下げる老婆を優しく見送り、次の者を迎え入れる。今日はこれで二、三百人くらいは診ただろうか？

ノエルが訪れる村々で恒例となっている臨時診療所。伝説の手甲探しの道中に立ち寄った小さな村でも、それは例外無く行われていた。

「ノエル、外はもう暗くなっている。明日には出発なんだ、あまり遅くまでは……」

サークスが集会所の扉を少し開け、声を抑え渋い顔でノエルに告

げた。
　扉の隙間からは冷たい夜風が室内へと滑り込み、そこから覗いた空は薄暗く、微かに星の瞬きさえ見える。
　今朝早くに村へ到着したサークス、ノエル、そしてバラの三人。もう一人の獣人ガイランは何か用事あるらしく、別ルートでの行程となっている。その用事とやらを済ませたら合流する手筈だ。
　サークスはこの村で食料の補給と小休止を済ませた後、伝説の手甲が眠ると噂の洞窟へ挑むつもりだったのだが……村人に頭を下げられたノエルが「少しだけ」と、治療を始めてしまった。
　いつものパターンだ。

「申し訳ありませんサークスさん。明日の出発には間に合わせますので……」

　申し訳なさそうな表情で頭を下げるノエル。そういう意味で言ったのでは無いのだが……と、サークスは溜息をついた。
　天使は清く正しく美しい生き物であるが、助けを乞われると断れず、融通の利かない面がある。臨機応変な対応が求められる冒険者という職業にあって、これは少々面倒な話だ。
　だが集会所入り口で治療の順番待ちをする村人たちから「天使様の邪魔すんじゃねぇよ」という意思の込もった冷たい視線を一身に受け、サークスは一歩下がらざるを得ない。お門違いではあるが、どこぞの少年が感じていた苦労が偲ばれるというものだ。
　だが、まぁ……これはこれで、丁度良いのかもしれない。心の中で、何かがそう思考した。

「わかった。明日の朝、迎えに来る」

　諦めの表情でそう言い残し、立ち去るサークス。そんな彼の背中を見送って……ノエルは軽く肩を落とした。

いつもなら、このくらいの人数とっくに癒し終えているのだけれど――。

自分を中心に円を描くように並んでもらい、広範囲に及ぶ癒しの光でもって、多人数をまとめて癒す。そして治療の終わった人から順に後ろの人と交替してもらい、特に酷い症状の人だけを個別に診る。ちょっと機械的で人情味の薄い効率優先のシフトではあるが、タダで診てもらえると聞いて体調の良い人までやってくるのだから、ある程度は仕方ない。

これまではこの方法で、千人程度であれば一日で癒し終える事ができていた。だが今は違う。同じ方法を取ろうとしても人が集まり過ぎて混雑し、我先にと押し合う事で怪我人まで出てしまう。そうなってしまえば治療どころでは無い。

以前はヤマトが、多少強引とも横暴ともいえる態度で、集まった人たちを誘導してくれていた。

『ガキと年寄り優先だ！　若ぇヤツぁ顔洗って出直して来い！』

そんな怒鳴り声が、今は懐かしい。

癒しの光を迸らせながら、ノエルは想う。

どうして私は行かなかったのだろう。ヤマトが姿を消したあの夜に。太郎丸とアデリーネが席を離れた、あの瞬間に。

言い訳なら、いくらでもある。だが何時だって……無理を言って強引に後を追う事が出来たはずなのだ。

降り頻る冷たい雨の中を歩み去るヤマトに追い付き、無理矢理にでも治療を施す事くらい簡単だったはず。だがあの時は、ただそれだけの事が酷く難しかった。

自分を拒絶するヤマトの背中に……足が、指先が。一寸たりとも動かず、彼を追う事がどうしても出来なかった。

「……次の方、どうぞ」

まだ小さかった頃……神の命を受けて空から舞い降りた日の事だ。ノエルは風に流されて落下地点を誤り、翼を傷めて、うまく飛べなくなってしまった。

翼を失えば天使ではいられない。飛べない天使など、天使では無い。

傷付いた翼に絶望し、幼いノエルの目からは涙が零れた。悲しくてどうしようもなくて、ただひたすらに泣き続けた。一体、どれ程の時をそうして過したろう？　一日、二日、三日……昼夜が幾度となく繰り返され、景色の色が何度も塗り変わった。

やがて幼い彼女の頭から何もかも、神の命さえも消え去り、悲しみだけが溢れるようになった頃、不意に現れた小さな男の子――目付きは悪く小汚い格好で鼻水を垂らしており、頭も悪そうなヤンチャ坊主――それがヤマトだった。

彼はぶっきらぼうな言葉遣いで、泣きじゃくるノエルに話しかけた。そして思いつく限りの言葉と態度で彼女を励まし、勇気付けた。格好良い言葉も、スマートな立ち振る舞いもそこには無かったが、ノエルは確かに感じたのだ。

少年に宿る、暖かで優しい心を。

「お大事に……次の方……」

当時、冒険者をしていたヤマトの両親は、突然息子が連れてきた天使の少女に驚きはしたものの、柔軟な対応で彼女に理解を示し、家族として迎え入れて我が子のように愛情を注いだ。その頃、丁度スダチが生まれたばかりで、新たな家族が増える事に抵抗が無かったという事情もあっただろう。

こうして丘の上に立つ小さな家で、家族五人での生活がスタートした。

裏庭には牛が一頭のんきに草を食み、鳥が歌い、風が踊る平和な

日々。そんな中でノエルは、ひたすら空を飛ぶ練習を繰り返した。広い草原の坂道を走って下り、勢いを付けて飛び上がるのだ。

一年が過ぎ、二年が過ぎた。だが折れた翼を上手に動かす事が出来ず、全く飛ぶ事が出来ない。落ち込み、もうダメだと諦め、ヤケになって癇癪を起こした。一度や二度では無い。数えるのも面倒になるほどの回数だ。

「……どうしました、天使様？　何か、可笑しい事でも？」

「あ、いいえ。なんでもありません」

苦笑するノエル。面倒な子供だったろうな、と思う。今になって思えば当時の自分は――いや、今でも――本当に我侭で、困った子だった。

だがそんな自分を、家族は見捨てたりしなかった。

特にヤマトだ。何度も怒られたり叱られたりしたが、根気強く毎日毎日飽きもせず、一日中練習に付き合ってくれた。やがてその練習にヨチヨチ歩きのスダチが加わり、賑やかさと楽しさが増した頃……不幸が訪れる。

流行り病だ。

凶悪な死病であったその病は瞬く間に近隣地域に広がった。ほどなく、優しくてのんびり屋だったヤマトの母が倒れ、健康だった父も病魔の前に屈した。

あの頃の事を思い出すと今でも胸が痛み、目の奥が熱くなる。

幼いノエルは天使の力でもって、ヤマトとスダチを全力で守りながら、必死に両親の治療を試みた。だが力が弱く空さえ飛べず、天使としての能力も扱いきれていない彼女に、流行り病という敵はあまりに強大だった。

力及ばず痩せ細って行くヤマトの両親……いや、その頃には自分の両親も同然の、かけがえない存在となっていた父と母。自らの無力を嘆くノエルに、二人は死の間際、こう伝えた。

『ノエル、いままで良く頑張った。流石はウチの子だ。お前なら必ず、立派な天使になれる』

『私たちなら大丈夫。だってもう、十分すぎるくらい幸せだもん。だからこれからは、他の人たちにも幸せを分けてあげて』

この時、初めてノエルは気付いた。我が子を思う親の偉大さを。自分以外の人を思いやる気持ちの尊さを。どんなに辛くとも……文字通り死ぬほど苦しい時でも、愛する者の為ならば人は笑顔を見せる事が出来るのだと。

必ず立派な天使になる。そしてみんなに幸せを！

そう誓ったノエルに、満足そうな顔で頷いた両親が力尽きた――

その瞬間。世界が、光に包まれた。

「はい、お疲れ様でした。骨は繋がってますから添え木はもう必要ありませんけど、筋力が弱ってるでしょうから気をつけて……お怪我をなさらないように」

ノエルが天使としての能力を覚醒させたのは、それがきっかけだったろう。後で聞いた所、周辺の村々からも流行り病は消え失せ、病床にあった人たちも元気になったという。

翼は生え変わったかのように癒えて、練習の甲斐もあり空も飛べるようになり、光を自在に操る術も身に付いた。トントン拍子で各種能力も飛躍的に上昇し、天使として一人前になって行くのだが……それを一番伝えたかった人たちは、もうこの世に居ない。

そして、その頃からだ。ヤマトが冒険者を目指すと言い出したのは。

日々の糧を得る為に家財道具を売り払った彼は、安い賃金ながらも配達などの仕事をこなし、コツコツと身体を鍛えていった。俺は強くなるんだと、口癖のように繰り返しながら。

「……はい、お大事に。気をつけて帰って下さいね」

小さな女の子を連れた母親が、丁寧に頭を下げてから席を立つ。ウトウトと舟を漕ぐ幼子を胸に、集会所を後にする母親。彼女によって開けられた扉から見えた外の世界は真っ暗。既に月は空の頂点を越え、明日と呼ぶべき時間帯へと突入している。

「次の方……は、居ないみたいね」

まだ村人全員を診たという感じはしなかったが、流石にもう時刻が時刻だ。特にご老体に夜の散歩は少々骨が折れる事だろう。きっと明日の早朝、駆け込みで何人かが訪れるはずだ。そうしたらもう、この村ともお別れ。帰りにもう一度……とは思うものの、サークスはきっと足止めを嫌い、立ち寄りたがらないだろう。

「……ヤマト、何してるだろ？」

集会所から一歩踏み出し、空を見上げるノエル。その時に吐き出した息が白くなった事に気付き、薄手のカーディガンを羽織る。

ヤマトの事が気になって仕方ない。あの夜からずっと……特にここ数日は、胸騒ぎさえするようになった。

元気で冒険を続けているのだろうか？　それとも違う事をしているのだろうか？　この広い世界のどこに居るのか、何をしているのか。夜になると、今すぐ飛んで行きたいという気持ちを抑えられなくなる。ヤマトは嫌がるだろうが、今すぐ会って、伝えたい事が山ほどあるのだ。

「会いたいな、なぁんて……」

呟き、頭を振る。駄目だ、会えない。

『これ以上、俺を惨めにしないでくれ――』

彼はそう言った。

強い拒絶。近寄るなという意思。それらを感じ……嫌われた、と思った。

以前から感じていた事。自分がヤマトの重荷になっているという事実。

これまではヤマトの優しさに甘えていた。天使の真実を知る彼にだけは心を許す事が出来た。だから彼と一緒に居たいと冒険者になったし、少しでも力になりたいと天使の力を振るった。

「でも……そうだよね。自分より圧倒的に強い娘なんて、側に居たら嫌だよね」

薄々それにノエルが気付いたのは、二人のレベルがダブルスコアを刻み始めた頃だ。

差を埋めようと焦ったのだろう。次第にヤマトが無茶をし始め、大怪我をする機会が増えた。背伸びをして難しい依頼に挑むようになって失敗が増え、せっかく依頼に成功しても上がるのはノエルの評価だけ。実らない努力だけが降り積もり、なかなか成果は上がらない。

ヤマトは強くなりたいと言って冒険者になった。きっと父親のように家族を守りたいと願い、その力を欲したのだろう。だが彼の目的を、自分が邪魔してしまっている。

「私が自立しなきゃ、とは思うんだけど……」

そう思うものの、度々大怪我をする彼を放っておけず、また居心

地の良さに決意が定まらず、ズルズルと時間だけが経ち……とうとう愛想を尽かされ、彼はどこかへと行ってしまった。

きっかけとなった、ほろ酔い亭での一件は……思い出すだけで心も身体も鉛のように重くなる。

突然のキス……サークスが、前触れも無くあんな事をするだなんて今でも信じられない。思わず突き飛ばしてしまうくらい、物凄くショックだったが……英雄と謳われるサークスの面子を大勢の前で潰すわけにも行かず、強く否定できなかった。

あの時ヤマトは、どんな気持ちでサークスに殴り掛かったのだろう？　守るべき家族に手を出された怒りか、それとも――。

「はぁ……とっておきだったんだけどなぁ……」

唇に触れ、再度の溜息。切り札であったファーストキスは、くれてやろうと思っていた者の前で、別の男に奪われてしまった。といっても幼い頃のキスや応急処置の人工呼吸やらで、本当の初回分は遠の昔に失っているのだが……それとこれとは、また別物だろう。

それに嫌われてしまえばキスなどする機会も永久に失われたわけだし……。

そう思うと、またも溜息が漏れて陰鬱な気分がぶり返す。

「私が、もっとはっきり意思表示しとけば良かったのかな？　でも今更……自分勝手過ぎるよねぇ？」

見上げた夜空に問いかけると、悩みと共に、深い後悔が押し寄せる。

ヤマトにはもうアデリーネが居る。賢く思慮深い彼女なら、自分などよりも遥かに上手く彼と寄り添って行けるだろう。もう彼に、ノエルという天使は必要無い。むしろ邪魔だ。

「でも……」

会って、話をしたい。誤解を解きたい。あの時は動揺してて上手く言えなかった色々な事を、とにかく伝えたい。

我侭なのはわかっている。だが、あの雨の夜に出来なかった事を……形振り構わず我を通す行為を、今ならば出来る気がする。

今すぐ飛んで行こう、彼の元へ。その能力が今の自分にはある。今なら指先も翼も自由に動かせる。もう取り返しなんてつかない、終わってしまった事だ……でも後悔はしたくない。また拒絶されてしまうかもしれないが……こんなに心ざわめく夜を過すのは、もう嫌だ！

「……うん、行こう！」

カーディガンを投げ捨てて集会所に駆け込むノエル。自分の荷物をひったくる様にして小脇に抱え、誰にも見つからないよう頭を低くして外に出る。そして翼を大きく広げ、一気に夜空へと舞い上がった。

あっという間に周囲の建物が下に流れ、眼下に開ける景色。肌を刺すような冷気の中、真っ暗な世界を月が照らし、山々や村の建物を紫色に光らせている。

サークスや村の人たちには悪いが、出発を告げるわけには行かない。きっと引き止められてしまうから。半ば衝動的にこんな事をして……皆の信頼を裏切って。天使のくせに……いや、一人の責任ある大人として、本当に酷い事をしていると思う。

「そういえば私……昔は我侭だったとか思って、苦笑いしてたんだっけ」

だが結局は、あの頃から何も変わっていなかったようだ。三つ子

の魂百まで――いくら取り繕っても、我侭で臆病で泣き虫で……優しいあの人につい甘えてしまう、ノエルの性格は変わらない。

「……ごめんなさいっ！」

翼をはためかせ、村の上空を離れようとしたノエル。その目に……明りが映った。

揺れ動く、オレンジ色の明り。松明だろうか？　一つではない、数えるのが面倒なくらいの数だ。それらが村の中央付近、広場と呼ばれている辺りに集まっている。

草木も眠る丑三つ時。日が昇れば目を覚まし、日が落ちれば眠る文化が根差すこの世界で、こんな真夜中にどうしたのだろう？

何か、あったのかもしれない。

ノエルはヤマトへの想いに後ろ髪引かれながらも、高度を落とし、ゆっくりと光へ近付いて行くのだった。

第三十三話：悪魔の姦計（二）

村の中央広場。普段の昼間ならば主婦たちが集って語らい、子供が駆け回り、秋にはちょっとした祭りでも開かれているのだろう。

暗闇の中、松明を手に広場に集まる人々……村人、ほぼ全員だろうか？　夜である事もあってか高齢者の姿は少なく感じられたが、それでもかなりの人数だ。

彼らは広場の片側に集まり、どこか浮かない表情で広場の反対側をじっと見ている。

「ああ、来たのかノエル。もう少し経ってから呼びに行こうと思ってたんだけど、手間が省けたよ」

村人たちがじっと見る先……広場の中で最も見通しが良い位置に陣取っていたサークスが、家の影から広場をこっそり覗き見ていたノエルに気付き、声を掛けた。

しまった、と思ったノエルだったが、こうなっては仕方ない。大人しく皆の前へと姿を現す。

「どうも……」

「やあノエル、良い夜だね。天使は色々と光って目立つから、隠密活動には向かないようだ。今も物陰から光が漏れていたよ」

「お恥かしい限りです……それはそうとサークスさん。こんな真夜中に何を？」

視線を感じながら、広場を見渡すノエル。概ね覗いた時と変わりなかったが、少し見え辛い場所に馬の獣人バラが、意味ありげな微笑を湛えて立っていた。

「何の集まりかって？　いや、ちょっとね……村の様子を見てて、実験をしてみたくなったんだ」

ゆっくりとした口調で語り出すサークス。彼は何故か、前回の探索行で手に入れた伝説の装備『賢者の鎧』を身に纏っていた。全ての攻撃を無効化する、ある意味で究極の鎧。しかしノエルには鎧の色……松明の炎を映して輝く、傷口から湧き出す血のような真紅の外装が、白銀のサークスと呼ばれる彼には相応しくないと感じられた。

「僕はずっと前から考えていた。天使の力の源は何なのだろう、と。だって、おかしいじゃないか。殆どの生き物は何かを食べて生き、悪魔でさえ人の欲望を糧とすル。それなのに天使は？　何を糧にして生きてイるんだ？」

「……サークスさん？」

サークスの様子がおかしい。いや……冷静に振り返ってみれば、しばらく前からおかしかった。

どこかドライでビジネスライクな部分がありつつも、基本的には善人でパーティーの為に最善を尽くそうと努力するサークス。伝説の武具捜索に情熱を傾ける、男性らしく熱い一面も持っている――そんな彼のイメージから、今の彼が剥離し始めたのは何時頃からだったろう？

「そして僕は思イ至った。神は、人々の信仰心を力とする。だとすれば、その僕たる天使も同じでは無イのカ？　と」

「あなたは、一体何を……」

ノエルがサークスを問い詰めようと一歩を踏み出した瞬間だ。彼は腰の剣を抜いた。そしてそのままの勢いで、ノエル目掛けて横薙

ぎに刃を振るう！

「食らえ！　滅空ッ！！」

魔力迸る銀の刃から濁流のように膨れ上がる衝撃波。粉塵を巻き上げながら、たった数発で巨大なスライムを蒸発させ、ノーウェイの屋敷を半壊させた威力がノエルに襲い掛かる。

もしも彼女が無力な女性であったなら、今頃跡形も無く吹き飛び、広場に集う人々もまた粉々に砕け散っていただろう。だが、そうはならない。

「何をなさるんです、サークスさん」

軽く手をかざして平然と立ち、天使ノエルが言う。彼女は無事だ、村人たちも傷一つ負っていない。それどころか何が起こったのかさえ理解していないだろう。

サークスの前面に形成された光の膜。ノエルによって作り出されたオーロラのように優雅な動きを見せるその薄い膜が、放たれた必殺の衝撃波を受け止め、風さえも、音さえも防ぎ霧散させたのだ。

「流石は天使！　だが、これならどうだッ！」

下段に構え、剣の刃に魔力を収束させるサークス。集めた魔力を爆発させるのではなく、集中し、切れ味を増す事に特化させた技。名付けて……。

「裂空ッ！！」

空を裂き、鋼さえもバターのように切り裂く刃が、華奢な天使の身体を捉えた……かに見えた。

「無駄ですよ」

魔力を帯びた銀の剣はノエルに届く事さえ無く、彼女の手前で光の壁に弾かれた。剣に集まっていた魔力が弾け、眩いばかりの光を放つ。絶対的な天使の力は、人類最強クラスの実力者が放つ渾身の攻撃でさえも揺るぐ事は無い。

「こんな事をして、何のつもりで……？」

追求を深めようと、口調を強くした時……ノエルは彼の異変に気付いた。

「あの、サークスさん？　それは、その目は……！」

ノエルが見咎めた物。それは彼が身に付ける鎧と同じ、真っ赤な色に爛々と輝くサークスの目だった。その赤色は深く暗く、今までに何度も見た、欲望に負けて魂を売り渡した者たちの色。

「チッ……やっぱりダメだね。全力を出すと影響を隠し切れなイ。ワリと高性能な身体だけど、こればかリは仕方なシか」

「悪魔憑き……！？　まさか、そんなっ！」

あれほど強い男性が、悪魔に魂を売るような事が現実にあるのだろうか？　そんなノエルの先入観が瞳を曇らせ、発見を遅らせた。この所ずっと側に居ながらサークスが悪魔憑きとなっていた事に気付かなかった。対悪魔のエキスパートとも呼べる天使が、なんという体たらくだろう！？

「気に病む事は無いよノエル。この所、ゴタゴタとしていたからね。

天使としての本分に目が向いていなかったとしてモ……誰もキミを責められなイ」

「くっ……サークスさんの口を使って、悪魔がっ！　知った風にっ！！」

声を上げ、翼を広げるノエル。眩い光の粒が風に踊って弧を描き、夜空に星屑となって舞い広がる。

ノエルは怒っていた。サークスを惑わせた悪魔に……それに気付かなかった自分自身に。いくら知り合いでも、世話になった恩人でも、悪魔に魂を売った者を野放しには出来ない。滅ぼすしか無いのだ。サークスが甘言に惑わされるより前に、いくらかでも兆候に気付けていれば食い止める事が出来たかもしれない。だが、もう遅い。こうなってからでは、救う事は出来ない。

「罪をっ！　悔い改めて下さい！！」

ノエルが右手を突き出すと辺りを漂っていた光子が集まって輝く槍となり、その手に収まった。すぐさま投擲の構えを取るノエル。狙うはサークス、ただ一人！

「ブヒッ！　俺を忘れてもらっちゃ困るよ、ノエルちゃあぁぁん！！」

だがノエルの行動を阻止しようと、バラが背後から飛び掛かった。右手にはメイスと呼ばれる金属製の鈍器。当たれば人の頭蓋を粉々に吹き飛ばす威力を秘めたその武器で、ノエルの頭部を狙う――だが！

「どいてて下さいッ！！」

一喝！

ノエルの発した気迫は衝撃波となり、自身の倍はあろうかという巨躯の獣人を、広場の端まで弾き飛ばした。

積み上げられていた角材の山に激突して半ばまでめり込み、目を回すバラ。そんな彼を捨て置いて、ノエルは創り上げた光の槍を改めてサークス目掛けて投げ付ける。

暗闇に光の軌跡が刻まれた……そう認識された直後、狙い違わずサークスの胸板に命中、そして爆発！　聖なる光は質量を伴わず、何かが吹き飛ぶような事は無かったが、あまりに凄まじい光量に人々は目を覆い顔を背ける。

「……こんな事になるなんて……」

呟くノエル。光の槍はサークスの心臓を貫いた筈だ。

悪魔憑きは全身を完全に焼き尽くさぬ限り、その凄まじいタフネスで再び蘇ってくる事も多い。だが人の姿を多く残す今のサークス程度であれば、心臓を失えば命を保つ事は出来ないだろう。

そう考え、彼の状態を確かめる事無くノエルは集中を解く。それは光の槍に貫かれ、無残にも傷付いた恩人の姿を見たくないという無意識が働いての事だったろう。

だが彼女は知る事となる。それがいらぬ心配であったと、目の前に現れた現実によって。

「やれやれ、ヒドいな。相手が悪魔だとわかると、本当にキミは容赦が無いネ」

「……！？」

我が目を疑うノエル。光の槍を受けたはずのサークスが、平然と自分の前に立っている。傷一つ無く、いつもと同じ薄笑いを浮かべ、真っ赤な鎧もそのままに。

「あ……！」
「そうイう事さ、ノエル」
賢者の鎧だ。伝説に名を残す鎧は、あろう事か天使の一撃さえも無効化して見せたのだ。
「ま、天使といえど……こんなモノ、というワケだね」
サークスの台詞に同様を隠し切れないノエル。それはこの場で戦いを見守る住民たちにしても同じだった。悪魔を倒すために創られたと噂される鎧が、悪魔の力となってしまったのだ。
「さて。ではソロソロ、こちらのターンといった頃合か」
余裕の表情で佇むサークス。彼は剣先をノエルに突きつけ、こう宣言した。
「後ろの連中……彼らの命が惜しければ、僕の言う事を聞くんだ」
「……人質のつもりですか？　汚い真似を……ですが無駄ですよ」
人質を取られてもなお、凛とした態度を崩さないノエル。それは天使として、人の命よりも悪魔を滅ぼす事が大事……という意味では無い。
「サークスさんには見えないかもしれませんが、住民の方々と私たちの間に光の壁を展開しています。先程の攻撃くらいで、この壁は破れません」
サークスが悪魔憑きと知れた時、ノエルは光を操ってドーム状の

壁を創り出し、住民たちを囲っていた。それは人質を取られる事を避け、戦闘の余波から彼らを守る為。悪知恵の働く悪魔から人々を守ろうと、ノエルが巡らせた予防線だった。
しかし悪魔の奸策は、天使のそれを上回る。

「キミにも見えてないみたいだね。良く見てご覧よ、住民の皆さんを」
「……？」

サークスに言われるがまま、そっと視線を背後へと移すノエル……そして気付いた。
立ち並ぶ人々。その内の何人かの目が、血のように赤い。サークスと同じ、真紅の輝きを放っている！

「あらかじめ何人か、キミたちの言葉で言う所の悪魔憑きを紛れ込ませてアル。ついさっき目覚めたばかりだから力は弱いけど、お隣さんを縊り殺すくらいなら一瞬だヨ」
「なっ……！」

ノエルの表情から余裕が消えた。今、彼女の位置から見えているだけでも三人。人の影になっている者を含めれば、何人くらいの悪魔憑きが居るのだろう？　四人、いや五人か？　そのくらいなら一気にまとめて滅ぼせるかもしれない。だがそれにしたって、しっかりと位置が判明していると仮定しての話。どこに隠れているかもわからない悪魔だけを一瞬でピンポイントで、しかも複数体倒すのは……無理だ。

「……わかりました、サークスさん。あなたに従いましょう」
「話が早くて結構だねノエル」
「ですが、どうするつもりです？　先に言っておきますが、天使の

防御能力は無意識の物。意図してオフにしたりは出来ないのです。ですから私を倒そうにも、あなたでは傷一つ付ける事はできませんよ」

なるべく言葉を選び説明するノエルに、サークスはいつもの薄笑いを浮かべる。冷たい氷を思わせる、薄気味の悪い笑みだ。

「だから……実験なのさ」

サークスは言った。

神は人々の信仰によって力を得る。もし天使もそれに順ずるのなら、その信仰心を無くしてやればどうだ？

「信仰……すなわち信じる心。偉大な存在を心の拠り所として頼る気持ちだ。人々の、天使に対するそんな気持ちヲ全て奪った場合、一体どうなるのか……気になるよネ？」

語り終えた時、ノエルの顔色が明らかに変わった事をサークスは見逃さなかった。やはり、と確信じみた手応えがある。

これまでに見たノエルの立ち振る舞い……誰にも嫌われないように、大勢の者から好かれるように。ヤマトの前でだけ見せる素の自分を殺し、天使としての体裁を重んじた行動。それらは全て、天使の力の源である信仰を保つ為では無かっただろうか？

そうであるなら色々と合点が行く。

何故ヤマトが必要以上に自身を悪者としていたか、やけに周囲から嫌われていたか――きっと彼は知っていたのだ。ノエルの……天使の止むを得ない事情を。だから自分に悪意を集中させる事で、彼女を庇っていたのだ。

そしてヤマトが去った夜、ノエルは後を追わなかった。太郎丸とアデリーネが去った時もだ。これは天使という種族が持つ防衛本能、

あるいは神の束縛であったのだろう。みんなに平等で、誰からも愛される天使である為に――。

「というわけで、ノエル」

青ざめる天使へと、笑顔のまま剣を突きつけるサークス。あの邪魔な小僧が一人居ないだけで、これほどスムーズに事が進むとは。雑魚は雑魚なりに役立っていたという事だろう。

「キミにはこれから、堕ちてもらウ。後ろの連中が信仰の対象としてキミを見れなくなるまで、徹底的に……ネ」

「……！」

ノエルは思った。自分は、ここで死ぬかもしれないと。

かつて地上に降りたその日に感じた絶望。それと全く同じ物が、足音を立てて直近にまで迫っている。

「まずは、そうだな……服を脱いでもらおうカ」

ノエルはもう少し早く、彼の下へと飛ぶべきだったのだ。

第三十四話：悪魔の姦計（三）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十四話：悪魔の姦計（三）

揺れる松明の炎が、夜の広場をオレンジ色に染め上げる。
暖色に染まる世界。その中において唯一白い輝きを放つ者が今、屈辱に震え、華奢な身体を強張らせている。

「聞こえなかったのなラ、もう一度言おう。ノエル、服を脱ぎたまえ。裸になるンだ」

広場の中央に立つノエルのすぐ前でサークスが余裕たっぷりに言って、地面に突き立てた銀の剣に肘を乗せる。その声は聞き慣れたサークスのようでありながら、どこか邪な色を感じさせる不快な物だ。そして、最近どこかで聞いたような声……。だがその事に言及する余裕は、今のノエルに無い。

「は、裸って……こんな所で、こんな大勢の前で!?　そんなの……」
「おっと、ソコまでだノエル」

声を上げかけた天使の少女を、悪魔と化した男が遮る。

「今後、もしキミが僕に対し異論を申し立てたり、不満を陳べたりした場合……一回ゴトに住民を一人殺ス」
「なっ……！！」

剣を指先だけで摘み上げ、住民の方へと向けるサークス。

「そうだな、最初はソコに居る……ガキにしよう」

指し示された目線の先。そこに居たのは母親に抱かれた小さな子供……先程、集会所でノエルが最後に診た親子だ。

状況が飲み込めず不安と恐怖に震える母親と、何も知らず眠り続ける幼子。何の罪も無い、本来ならば何の関係も無い二人だ。

「……わかりました。でもサークスさん、約束して下さい。私が言う通りにしたら、他の方々には手を出さないと」

「ああ勿論。悪魔は契約でメシを食ってイるんだ。約束は破らなイ……絶対にね」

くるりと剣を回し、鞘へと収めるサークス。そして「これで少しは信用してもらえるか？」と、手を広げアピールして見せた。

「さあノエル、わかったのナラ……脱ぎたまえ」

促されて悔しげに唇を咬み、ノエルは自らの服に手を掛ける。腰紐を解き、袖から腕を抜きながら、こんな事になるのなら……と、今更どうしようも無い事に思いを馳せる。

やがて純白のローブが地面に落ちた。その下から現れたのは、同じく純白の下着だけを身に纏った、純白の肌を持つ天使。その姿を遠巻きに見つめる住民たちの間からは溜息にも似た歓声が漏れ、恥辱に震える天使の頬を紅色に染める。

「ナニをしているんだい、下着もだヨ。裸になれって言っただろ？」

サークスの命令に容赦は無い。ノエルはカタカタと鳴る歯を食いしばり、まずは胸元の布地を。次に腰周りを隠す布地を取り払う。

「手や翼で隠しちゃダメだ。今後、少しでもそんな素振りを見せたら……ワカってるね？」

「……はい」

裸体を隠す事さえ禁じられ、大勢の前で一糸纏わぬ姿となり、ただ立ち尽くすノエル。恥かしさで肌はほのかに紅潮し、大きな目は潤んで今にも涙が零れ落ちそうだ。

だがそんな本人の気持ちとは裏腹に、彼女の立ち姿は神々しさを感じる程に美しかった。神が創り出した芸術品、そんな言葉が見る者の心に浮かび上がる。

「良イ格好だねノエル。前に見た時よりモずっと、今の方が美しイ。そうやっテ恥かしそうに唇を噛むキミの姿を、ボクは見たかった」

サークスの言葉に、握り締めたノエルの両手が震える。悪魔の言いなりとなっている自分に腹が立って仕方ない。もし許されるなら今すぐ飛び掛り、卑劣な悪魔の横っ面に拳を叩き込みたいだろう。

「ヨシ次は、四つん這いになってボクの靴を舐めろ」

「っ！！」

だが、この状況でサークスに拳を見舞うなど、夢のまた夢だ。罪の無い人たちの安全を確保する為には、屈辱を受け入れるしか無い。

言われた通りに四つん這いとなり、赤子のように這いずってサークスの足下へと移動する。そして長い髪をかき上げて頭を下げ、賢者の鎧の一部であるブーツ部分へと舌を伸ばす。

ノエルの舌が、サークスのブーツに触れた瞬間……村民たちの間から「あぁ」と声が上がる。それは天使が悪魔に屈したという事実を見せ付けられた、落胆の溜息だった。

その声を聞きながらノエルは思う。今はこうするしか無いのだと。みんな、わかって！　と。

「ナニをシてるんだ？　表面だけじゃなくて、靴の裏も舐めなきゃダメだろ」
「くっ……は、はい」

サークスの言葉に頷き、そっとブーツを持ち上げて足裏にも舌を這わせる。ざらりとした砂の感触と土の味が口一杯に広がり、喉の奥からは何度も嘔吐感が込み上げて来た。だがその度にぐっと堪え、吐き気を飲み下し、またブーツを舐める。右足が終われば次は左足だ。表面だけでなく、今度は言われる前に裏面にまで舌を伸ばす。

「そうだ。良く出来たネ、ノエル」
「ふひっ。ノエルちゃん、次は俺のもキレイにしてもらえるかい？」

ようやくサークスのブーツを舐め終えたノエルの前へ、太い足を差し出したのはバラだ。獣人である彼には足に蹄があり、ブーツを必要としない。つまりノエルは直接バラの足を舐める事になるのだが……ソレはサークスに比べ、あまりに汚かった。泥や小石が割れた蹄の間に入り込み、顔を近づけただけで泥臭い悪臭が漂ってくる。

「どうしたノエルちゃん、嫌なの？　それなら……」
「い、いいえ！　出来ますっ！　よ……喜んで！」

慌てて声を上げ、ノエルは覚悟を決める。息を止め、目を閉じて、思い切って舌を突き出した。

「ぶほほっ、サイコーだねコレ！　気持ちイイし、裸のノエルちゃんを上から眺めるってのもスバラシイ！」

鼻息荒く、ご満悦の表情であれこれと賑やかに声を上げるバラ。更には命令に逆らえないノエルに対し、蹄の間まで舐めろだとか、

もっと舌を出せだとか、ああだこうだと指示を出しては楽しんでいるようだ。

その様子に、村人たちの失望は深まる。この如何ともし難い状況下の中、唯一の希望たる天使が悪魔の手に落ちたのだ。あまりにも他人任せ過ぎるという嫌いも有るだろうが……理性はともあれ、感情は止められない。

「おい、バラ。そろそろ良いだろウ？」

「そんな、大将！　まだ、もうちょっと！　あと百と八つ、試してないプレイがあるんだよぉ！」

「そう焦ルな。楽しミは後に取っておくモノだ」

サークスの説得によって、ようやくバラの足下から解放されるノエル。開きっぱなしだった口が疲れ、舌の根元がダルい。普段であれば少々の事では疲れさえ感じないのが天使なのだが……。

「ふむ。そろそろ、ヤってミるか」

顎に指先を当てて首を捻り、サークスがノエルの髪へと手を伸ばす。

「な、何を……」

不安げなノエルの声に応える事無く、彼女の金髪を二、三本掬い上げるサークス。細くしなやかなその髪をくるくると指に絡め取ると、渾身の力を込め、勢い良く引っ張った。

「痛っ！」

ぷつん、と小さな音と共に根元から抜けるノエルの髪。サークス

の指に絡め取られた美しい金髪は、ほどなく光の粒子と化して虚空へと流れ、消えて行く。

「ふ……ふふふっ！　フハははは っ！！」

自らの手を見つめ、突如、高らかに笑い出すサークス。周囲が唖然とする中、彼の高笑いは続く。

「ヤった、ボクはヤったぞ！　とうとうヤって見せた！　天使に傷を負わせてやったんだ！！」

その行為は端から見れば、細い髪を数本抜き取っただけに見えただろう。だが悪魔にとってみれば、天使という鉄壁の城砦を崩す、大きな綻びを探り当てたに等しい。

「よし、バラっ！」
「あいよ大将、待ってました！」

足を舐められた余韻を楽しんでいたバラが、サークスの声にスキップで駆け寄ってくる。

「お前の馬鹿力で、この天使の羽を全て毟り取ってシマエ」

その台詞に、ノエルの顔から色が失せる。
髪を抜く事が出来たという事はつまり、羽だって……。

「や、やめっ……！！」
「悪いなぁノエルちゃん。大将の命令だからよぉ……俺だってツライんだぜ？　ふひひっ」

ノエルの純白の翼、その片翼がバラに掴まれた。咄嗟に振り払おうと翼に力を込めたノエルだったが、バラの力は思いの他強い……いや、彼女の力が弱まっているのだ。到底、敵う力では無いと感じられる。

「い、いやっ……！　ダメっ！！」

バラは翼の付け根を踏みつけて固定すると、無造作に翼の先端部分を掴む。風切り羽と呼ばれる最も大きな、そして飛行する上で非常に大事な羽が生えている一帯だ。

何をされるのか、されてしまうのか。避けたいが避けられない未来を前に、ノエルは目を閉じて身体を強張らせる。そして……。

「そぉれいっ！」
「うあッ！！」

ブチブチと嫌な音がして、天使の羽がバラの手によって引き抜かれた。光子が散り、激痛が翼全体に広がる。

「続けて行くぜーっ！」
「イヤぁっ！……もう止め……きゃう！！」

力任せに毟り取られ、空に舞う白い羽。それらは髪の毛と同様、すぐに光子へと分解されて輝きながら消えて行く。それが何度も何度も繰り返され、次第にノエルの片翼から羽が無くなり、代わりに地肌が見え始める。

「ふひっ、コレ楽しいねぇ！　まるで鳥の毛を毟ってるみたい！　ぶひひっ！」
「そうか、そんなに楽しいかバラ。ではボクも、参加させてもらお

うカナ？」

サークスがバラが掴むのとは逆の翼を捕えると、ノエルは「ひっ」と短く悲鳴を上げた。その時に見えた彼女の表情は、今にも泣き出してしまいそうな、弱々しく力無い少女の物だ。

「それじゃあ、イクよ？」

「だ……ダメぇっ……！」

ニヤリと笑い、剣を抜くサークス。銀の刃へ急速に魔力が宿って火花が迸り、その切れ味が何十倍にも増して行く。

奥義・裂空。先程ノエルが事も無く、楽々と跳ね返した技だ。しかし今回は……。

「ふははっ！　バラよ、確かにコレは面白い！！　なんと痛快な遊びだ！」

「そうでしょう大将！　いやっほうーーー！」

「イヤあぁぁぁぁっ！！」

翼に押し当てられた銀の刃が動く度、バリバリと音を立てて羽が刈り取られて行く。根元から翼の先まで、羽も羽毛も全て根こそぎ、まるで羊の毛でも刈るような光景だ。

「あぁぁぁぁっ、やめて……お願い……お願いだからっ……！」

どんどん減って行く羽。夜の闇に、光の粒が舞う。

小さな頃に傷付いた天使の翼。それをヤマトが、家族が、長い時間と深い愛情で癒してくれた。天使にとって……ノエルにとって、とても大切な翼だ。その翼が今、二人の暴漢によって踏み躙られ、蹂躙されている。

どうにかして守りたい。失いたく無い！　だが力無き少女には、どうする事も出来ない。

「一本残さず、綺麗に抜くンだぞ。最終的にはノエルを、本当の意味で丸裸にしてヤルのだからな」
「わかってますよ、大将！」

悪魔たちが、そんな会話を交わしてから十数分後。彼らの足下には、地面に伏せて震える、裸の少女が横たわっていた。その背中には茹でた手羽先のような『翼だった物』が一対、所々に血を滲ませながら、くっついている。

「惨めな姿だね、ノエル。アノ時とは、大違いの情けなサだ……」
「なぁ、大将。そろそろ……」

ヨダレを垂らすバラが、揉み手するのも面倒な様子で、鼻息荒くサークスに擦り寄る。

「ソウだな、もう大丈夫だろう」

言って、サークスはノエルの地肌剥き出しとなった翼を無造作に掴み、勢い良く膝に打ち付けた。若い枝が折れるような音がして『翼だった物』が、関節では無い所からグニャリと折れ曲がる。

「念の為、コッチもだ」
「ぎゃうっ！！」

骨を折られ、中程からくたりと垂れ下がる肌色の『翼だった物』。更にサークスはノエルの足首にも剣を走らせ、両脚の腱を切断した。

「コレで、飛ぶ事も歩く事も出来ナイ」
「ひゃっほう！　もう逃げられないね、ノエルちゃん！」

サークスたちの声に、ノエルは応えない。応える事が出来ない。絶望に沈む彼女に出来る事は、せめてこの悪魔たちに、泣き顔を見せないようにする事だけだ。

「じゃあ大将、お待ちかねの……」
「アア、綺麗な顔がグシャグシャになる前に、楽しませてもらうとしよう」

銀の剣を鞘に戻したサークスが、邪悪に歪む表情で言った。

「ノエルの脚を開かせろ」

第三十五話：悪魔の村（一）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十五話：悪魔の村（一）

曇天が続く空模様と同じ胸中を抱え、太郎丸とアデリーネがその情報を掴んだのはつい先日。行方知れずとなったヤマトを見付けられぬまま、捜索開始から二週間が過ぎようとしていた日の事だった。

「天使を捕らえ嬲り者にしている村があると聞き、まさかと思い来てみたが……」

「そのまさか、でしたね」

村から少し離れた雑木林の中。木陰に身を潜めて、太郎丸とアデリーネが囁きあう。彼らが見つめる村の広場……そこには十字に組んだ磔台があり、ボロボロとなった天使の娘が逆さに吊るされ、裸で晒し者にされていた。

磔台へ横向きに通された棒。その両端に左右それぞれの足首を縛られて、脚を開いた状態でぶら下げられる天使。体中の至る所が傷付けられて乾いた血がこびり付き、何箇所かの真新しい傷からは、今も血が滲み出していた。

足と違い腕は拘束されていないようだが、脱臼、あるいは骨折しているのだろう。ぶらりと力無く垂れ下がり、ピクリとも動かない。そして腕と同じく垂れ下がる一対の翼。骨を砕かれ羽を毟り取られたむき出しの地肌は、内出血が酷く赤紫色に染まっている。

「ノエル様……でしょうか？」

「そうで無い事を祈るが、多分……な」

あまりにも変わり果てた姿に、遠目からでは本人であると確認できない。だがこの近隣でノエル以外に天使が居ない以上、磔台の天使が彼女である可能性は極めて高かった。

「先に聞いたお話とも、一致しますものね」

アデリーネの言葉に黙って頷く太郎丸。

村を占拠した悪魔たち。そのリーダー格である赤い鎧の男と馬顔の獣人は、捕えた天使の娘をノエルと呼んでいた――。噂の発生源でもある、村から逃げ出した住民たちの言葉だ。

彼らによれば、その天使は成す術も無く悪魔に囚われ、今もなお良い様に弄ばれている、との事だ。

「酷い事をする……ともかく、あれが誰であれ助けぬわけには行くまい」

「はい、太郎丸様。ですが……」

視線の先に見えるのは、磔台の下に群がる真っ赤な肌をした幾つかの人影。村の元住民であり、悪魔の甘言に耳を貸した愚か者たちだ。農具として使っていた鍬や鋤で武装し、見張りの如く磔台を取り囲んでいる。

「さて、どうした物か……」

考え込む太郎丸。悪魔と化した元人間を相手に、どこまで戦えるだろうか？

悪魔は確かに手強い存在であるが、倒せぬ存在では無い。憑いた相手が人間であるのなら、多くの場合において敏捷性で人狼が上回るだろう。ノーウェイの屋敷では不覚を取ったが……あれは別だ。相手が手強かった上に、倒したと思い油断していた。

そういった稀な要素と自らの油断を取り除いて考えた場合、悪魔たちの不意を付いて磔台に飛び乗り、ノエルの拘束を解く……ここまでは良い、多分大丈夫だ。しかし、そこから先はどうだ。

あの様子では、ノエルは自力で歩けまい。そうなれば担いで走らなくてはならない。いくら敏捷性で上回るとはいっても、人を担ぎ、無尽蔵ともいえるスタミナを持つ悪魔を相手に、果たして逃げ切れるだろうか？

多分、無理だ。追いつかれてしまう。

「あの……太郎丸様、ちょっと宜しいですか？」

「む？　どうなされた」

アデリーネが遠慮がちに尋ねる。

「もしも私が悪魔たちの気を引けたなら……太郎丸様はノエル様を連れて、脱出できますか？」

「……！」

可能だ。

一分……いや、たとえ十数秒であっても時間を稼いでくれたなら、ほぼ間違い無く脱出し、身を隠す事ができる。その自信がある。

だが太郎丸はその言葉をアデリーネに告げる事が出来なかった。それはそのまま、アデリーネに囮になれと告げるのと同じ意味であったからだ。

「可能なのですね？　わかりました、では太郎丸様……」

「し、暫し待たれよアデリーネ殿！　そのような事をしても、ノエル殿は喜ばぬぞ！？」

太郎丸が言った言葉はアデリーネを思い留まらせる為、咄嗟に思いついた言葉だった。だが彼は、その言葉を口にした直後に激しく後悔する。自分の使った言葉が様々な意味を含む事に気付いたのだ。

「確かに仰られる通り、ノエル様は私に助けられたと知れば……きっと複雑なご気分になられるでしょうね」
「あ……い、いやその……」
この知的なエルフの娘は、すぐ太郎丸の失言に気付き、チクリとやり返した。
アデリーネは間違いなくヤマトを好いている。そしてノエルもまた、アデリーネの気持ちに気付いているフシがあり……云わばライバル関係の二人だ。そんな状態でアデリーネに助けられ、果たしてノエルは素直に喜べるだろうか？
よりによって、この女に助けられてしまうなんて。これを理由に恩を売られるのではないか？　ヤマトを取られるのではないか？
明確に意識はせずとも、そういった不安に似た考えが頭を過ぎるであろう事は想像に難くない。アデリーネは恋敵を助けた上、そのように勘ぐられてしまうのだ。
「すまぬ、某が軽率だった……謝ろう。この通りだ」
アデリーネは思慮深く、優しい娘だ。自分の存在こそがノエルを不安にさせる要素だと気付き、分を弁えて己を殺し、一歩下がってヤマトとノエルを見守っている。そんな彼女へ、自分はなんと浅はかな事を言ってしまったのか。太郎丸は思慮の足らない自分の言動を恥じ、深々と頭を下げた。
だが彼女はくすりと微笑み、言ったのだ。
「冗談です、太郎丸様。どうぞ頭を上げて下さい――私、少し意地悪でしたね」
申し訳ございません――。そう告げて、アデリーネは立ち上がる。

「私がここに居るのは、勿論ノエル様を助ける為。ですが、それだけではありません。もっと強く思うのは、少しでもヤマト様のお役に立ちたいと……そう思うからです」

言いながらベルトポーチを外し、ソフトレザーの鎧を脱ぎ始めるアデリーネ。

「太郎丸様……私が初めて皆さんとお会いした日の事を覚えてらっしゃいますか？　私は覚えております、昨日の事のように」

最初、ヤマトを屋敷で見た時――半裸の自分をじっと見つめる小柄な少年に、アデリーネは微かな興味を抱いた。

ノーウェイに身体を預ける自分に対し、大半の者は蔑んだ目で見るか、好色な目を向けるか、無関心を貫くか。そのどれかだった。それに当てはめるなら、最初のヤマトは好色な目でアデリーネを見ていた事になるだろう。

だが彼は自分と目が合うと、顔を真っ赤にして目を逸らせた。単純に女性に慣れていないだけかと思って見ていると……直後に鼻血を噴出し、天使の娘に甲斐甲斐しく介抱され始めたではないか。

「初めてヤマト様とノエル様を見た時に思ったのです。なんて可愛らしい二人だろう、と。あの人たちと話をして、一緒に過す事ができれば……こんな私にでも、少しくらいは幸せを別けてもらえるのではないかと」

日々美貌を磨き、互いに蹴落としあうノーウェイの側室というポジション。互いに腹を探り合う屋敷の中にあってアデリーネは、誰かと一緒に過したいと思う事など、完全に無くなっていた。

そこへ彼が現れたのだ。微かにでも興味を抱ける対象……初心で純真そうで正直で、素直に好意を寄せる事のできそうな男性が。

「ですからヤマト様が私を庇って下さった時……本当に嬉しかった。運命という物があるのなら、これの事なのだと真剣に思いました」

鎧を脱ぎ捨て、軽装となったアデリーネ。さらにゴワゴワとした上着とズボンを脱いで、丈の長いペチコート――下着同然のワンピースに似た物だ――それだけを身に付け、ブーツも脱いでサンダルに履き替える。

「そして太郎丸様とお二人、生まれ故郷と古い友人を救って頂き……更には進むべき道まで示して下さいました。いくら感謝しても、し足りない程です」

ザックを開いて小さな手鏡を取り出し、軽く化粧を叩く。そして最後に、小さな花びらの付いた壊れた髪留めを外し……アップにしていた髪を下ろした。

「ん、よし。こんなものかしら……如何です？」

「お、おぉ……」

感想を求められ、太郎丸は思わず言葉に詰まってしまった。

アデリーネは鎧や上着を脱いで、髪型を変えただけだ。しかし先程までからは一転、種族の違う太郎丸でさえも一瞬どきりとさせられる色気が、今の彼女からは漂っている。

女は化けるという言葉の意味を、身を持って知る太郎丸。コクコクと頷く事しか出来ない。

そんな人狼の様子に満足気な微笑みを返し、アデリーネは村の方へと……囚われの天使へと視線を向ける。

「ですから太郎丸様、ご恩を返す機会を私に下さいませ。遠慮はい

りません。私の事は、使えば敵の気を逸らせる道具とでも考え、存分にご活用下さい。ノエル様がどう思われようと、ヤマト様の為に私が出来る事といえばこれくらいしかありませんし……私自身がそうする事を望んでおります」

「あ……アデリーネ殿！」

太郎丸は思う。自分はどこまで無力なのかと。

故郷に居た頃、そしてサークスと一緒に居た頃は、自分は強いと思っていた。評価されているレベルよりも真の実力では上だと、そんな自負さえ持っていた。だがヤマトたちと行動を共にするようになり、本当の強さという物を知る。

好いた女の為に身を削り、形振り構わずがむしゃらに、全力で進む男。

好いた男の為に種族の本分を捨て、常に寄り添い、共に歩もうとする女。

そして叶わぬ想いと知りつつも、好いた男の為に自らの全てを投げ打ち、捧げる覚悟を決める……今、目の前にいる娘だ。

彼らに比べ、自分のなんと弱き事、小さき事、情け無き事……。

「か、かたじけないッ！！　この太郎丸、全力を持って……命を賭して事に臨むと誓う！！」

人狼の両眼から、熱い雫が零れ落ちた。

絶対にやり遂げる。何が何でも、全力で、命の限り、あらゆる手段を持ってしてもアデリーネの気持ちを無駄にはしない。自分がどれほど弱かろうと、無力であろうと関係無い。

今こそ、男を見せる時なのだ。

第三十六話：悪魔の村（二）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十六話：悪魔の村（二）

日が落ち、村の広場に篝火が焚かれだすと、暗闇に仄かな橙色の存在として浮かび上がる磔台の天使。

炎に松の枝が投入され濛々と黒煙が湧き上がると、その煙は磔台に絡みつき、容赦無く天使を燻し始める。だが彼女は……ノエルは何の反応も見せず、指一つ動かす事は無い。

「もう死んでるんじゃねぇのか？」

痩せた悪魔が言って、篝火から燃え盛る薪を一本引き抜いた。そしてノエルのアザだらけの胸元へ、その赤熱した先端をおもむろに押し付ける。

水が爆ぜるような音。同時にノエルの身体がビクンと震え、磔台を軋ませた。

「よしよし、まだ生きてるな。このブス、手間ぁ掛けさせんじゃねぇよ！」

苛立ち紛れに痩せた悪魔が、手にする薪でノエルの顔を殴りつけた。衝撃でパッと火の粉が舞い、かつて白磁の様だと褒め称えられた頬に、黒く焼け爛れた傷跡が増える。

「ちっ！　ここまで反応薄いと、何をしてもつまんないぜ。悲鳴ひとつ上げやしねぇ」

「顔も身体も、具合良かったの最初だけだったな。あとは無茶しても壊れない玩具ってくらいのモンだ」

「もう殺しちまっても良いんじゃねぇか？」

「そうだなぁ……お三方は伝説の手甲とやらを探しに出られたんだ

ろ？　わざわざ、ご命令を頂くまでも無いか」

口々に話し合う悪魔たち。その内容が、どうやってノエルを殺してやろうか……といった物に変わった頃だ。

「ちょっと、よろしいか？」

「なっ……！　何モンだテメェ！！」

夜から溶け出すようにして、その人狼は何の前触れも無くユラリと現れた。深い青色の瞳が炎を映し、静かに燃えている。

「怪しい者ではござらぬ。某は旅の商人……この村の噂を聞き付け、足を運んだ次第」

「……商人だぁ？」

武器代わりの農具を構えて訝しがる悪魔たちを他所に、旅の商人を名乗る人狼……太郎丸は続ける。

「お話を窺っておれば、その天使、もう始末なさるおつもりの様子。でしたら某に譲っては貰えませぬか？　勿論、タダでとは申しませぬ……おい、これへ」

太郎丸の声に応え、彼の背後からローブに身を包んだエルフの美女が姿を現す……アデリーネだ。

「見ての通り、これは天使同様に希少なエルフ。ある富豪の下であらゆる技術を仕込まれ、その嬌態たるや千金に値するとまで云われた逸品。これを、天使の代わりに置いて行きましょう」

太郎丸の言葉に合わせて小首を傾げ、にこりと微笑んだアデリー

ネ。一歩だけ前に出ると、艶っぽい仕草でローブの止め具を外して足下へ落とし、ペチコートだけの艶めかしい姿態を悪魔たちの前に曝け出す。

「お……おぉ……！」

ごくり、と生唾を飲み込む悪魔たち。

欲望を糧に生きる彼ら悪魔。村人の大半が逃げ出し、ノエルをボロボロにしてしまった今、彼らは欲望の捌け口に事欠いていた。そんな中、喉から手が出るほど欲しいと思っていたモノが目の前に現れたのだ。目の色も変わろうという物だ。

「この娘、某が言うのもなんですが……ソッチの技術はかなりの物ですぞ。少なくともボロ雑巾のようになった天使よりは、お楽しみ頂けるかと」

いやらしい手付きを交えて語った最後に、太郎丸は口の端を歪めて言った。「どうなさいます？」と。

「……」

一瞬の沈黙。悪魔たちは落ち着かない様子を見せ、ノエルとアデリーネ、そして太郎丸の間で視線を泳がせる。

じわり、太郎丸の手に緊張の汗が滲んだ。

ここまでは予定通り……だが連中がどう出るか、確かな事は何も無い。最悪、一挙両得を狙って襲い掛かって来る事さえ考えられた。そうなれば自分は、ノエルもアデリーネも見捨てて逃げなくてはならない。逃げて、逃げ延びて、仲間を集って再度ここへ……。悔しいが、無力な自分にはそれ以外に無いのだ。

「おい、商人」
「はい」

刹那、緊張による集中が、太郎丸の時間を長く長く引き伸ばす。悪魔が口を開く……あれは『お断りだ』と告げようとする形か――。作戦は失敗だ！　一目散に逃げなくては！

太郎丸が両脚に力を込める。だがそれよりも一瞬早く、隣で動く物があった。

「ふふっ……」

ふわり、風に舞い、流れるような青み掛かった銀髪。澄んだ水の如き輝きが、一同の目に映る。

アデリーネが髪をかき上げ、悪魔たちへと軽く微笑んだのだ。

「……その女を置いて行け。天使は、くれてやる」
「あ……ありがとう、ございます」

流れが変わった。太郎丸の全身から冷や汗がどっと噴出す。横目で見れば、アデリーネもこちらへと軽くウィンクを返して来た。その瞳は「このくらい余裕です」と語っている。

伸るか反るか、こういった瀬戸際での駆け引きを繰り返し、アデリーネはノーウェイの屋敷で側室として生き永らえて来た。欲に塗れた悪魔など、彼女にとってみればヤりたい盛りの若造と同じ。掌の上で転がすのに、何の苦労があるというのだろう？

「では……」

悪魔たちの脇をすり抜け、磔台へと歩を進める太郎丸。その耳に、悪魔たちの内緒話が聞こえて来る。

「良いのか、サークス様に告げず勝手な事して」
「どうせ最後には殺すつもりだったんだ、面倒は無い方が良いだろう」
「それにあれだけの上玉、中々お目に掛かれないぜ？」

何もかもアデリーネ殿の予想通りか。感服の至りだ。
心の中で呟いて、心からの賛辞をアデリーネへと送る太郎丸。だが彼が磔台へと登る頃、そのアデリーネは既に悪魔たちによって乱暴に押し倒されていた。
背後から聞こえる絹が引き裂かれる音と下卑た歓声。自らの無力さに指先を震わせながら、太郎丸は剣を振るい、ノエルを縛る縄を切って捨てる。

「確かに天使、貰い受けた」

しっかりと抱え上げた両の腕の中、ぐったりと横たわり、気を失ったノエル。間近で彼女を見た太郎丸は吐き気を覚える程の怒りに、我を忘れまいと魂を削らんばかりの努力を必要とした。
そこに、かつての可憐な天使の姿は無い。
体中の傷や痣は言わずもがな、特に酷いのが首よりも上だった。陽光を思わせる金髪は滅茶苦茶に毟り取られてざんばら髪となり、頭皮ごと剥れている部分まである。左目は潰れて大きく落ち窪み、右目は無事であるようだったが、目を閉じられぬように瞼が削ぎ落とされていた。鼻は折れ曲がり、歯は折られ、柔らかな唇も上下とも切り取られて歯茎が剥き出しとなっている。そして耳からも出血があり、果たして機能しているのかどうか怪しい所だ。

この……下衆どもがッ！！

今すぐ腰の剣を抜き、片っ端から切り捨ててくれる！　目の前が眩む程の怒りが、太郎丸を支配する。四肢の筋肉が膨れ上がり、全身の毛が逆立った。塵も残さず、木っ端微塵にしてくれよう！！

だが振り向いた先では、アデリーネが悪魔の慰み物となりながらも目で訴えて来る。「早く行け」と。

「……っ！！」

歯を食いしばり、アデリーネに頷き返す太郎丸。彼女の身体を張った頑張りを、自分如きが怒りに任せた行動で台無しにする事は出来ない。それこそが彼女に対する最大の冒涜だ。

ノエルの肩にマントを掛け、その場から離れる太郎丸。

村を抜け、篝火が遠く離れ、嬌声が遠退いてもまだ彼は速度を緩めず、川を渡り、山を越え、更に川をもうひとつ渡ってもまだ走り続ける。

そうして月が空の頂点に達した頃になり、ようやく歩を緩めた。

「ここなら見つかるまい」

山林の中にある岩壁の亀裂。幅は人が一人、横になってギリギリ通れる程度。高さも太郎丸の身長ほどしか無い。だが身を細めて中へと進んでみれば、大人四人程がゆったりと座れる空洞が広がっている。

そこはエルフの隠里からの帰り道、ヤマトとアデリーネの三人で通り雨に降られてさ迷い歩き、偶然見つけた自然の休憩所。それと同時に、アデリーネと申し合わせた隠れ家でもある。

「ノエル殿、もう安心だ。ゆっくり休まれよ」

枯葉のベッドに傷付いた天使を横たわらせると、ベルトポーチか

らありったけのポーションを取り出す太郎丸。それを丁寧にノエルの傷口に振りかけて行く。

傷に反応し、淡い魔法の輝きを放ち始めるポーション。だが案の定、思ったような効果は出ない。悪魔の呪詛が、治癒を邪魔しているのだ。

「う……あ、あぅ……！」

「ノエル殿ッ！」

傷が痛むのか、時折りノエルは苦しげに喘ぎ、身を捩った。額に手を当てれば、熱病にでも侵されたかの如き発熱がある。激しく汗をかき、うわ言のように何かを言っている。未だ目覚めぬ彼女がどんな悪夢を見ているのか、想像するだけで虫唾が走る。

そんな中、太郎丸は聞いた。苦しげな吐息の中で、確かにノエルは呼んでいた。ある男の名を……何度も、何度も……まるで忘れる事を恐れているかのように、何度もだ。

「……ヤマトよ、お前は今、どこで何をしている」

手持ちのポーション、その大半を使い切る頃、ようやくノエルの呼吸が穏やかになってきた。熱も随分と下がり、傷口から流れ出していた血も、とりあえずは止まったようだ。

その事を確認し、太郎丸は立ち上がる。

今、ノエルが最も必要としている男は居ない。自分に彼の代わりは不可能だ。しかし、やれる事はある。今ここに居る自分にしか出来ない事だ。

「ノエル殿、某は暫し留守にする。明日の朝には戻る故、ゆっくり眠るがよかろう」

聞こえていないだろうと思いつつも、その旨を告げる太郎丸。
腰の剣を確認し、鎧の留め具を絞め直すと、岩壁の隠れ家から外へと歩み出る。
未だ月は空にあり、夜明けの時は、まだ遠い。だが……。

「もっと遠く、安全な場所まで逃げろとお主は言うのかもしれぬが……許せ、アデリーネ殿」

太郎丸は道具袋に収められた、小さな布張りの箱に語りかける。
強い衝撃でも受けたのか、その箱はひしゃげ、形を崩している。そして中に収められた品……小さな花びらが可愛らしい髪飾りもまた、壊れていた。

『太郎丸様、これを預かってもらえますか？　私の、とても大切な物なのです』

どこか切なげな、アデリーネの言葉が蘇る。この壊れた髪飾りが如何様な物か計り知れたが、自らの身体を悪魔に差し出す事さえ厭わぬ娘が『大切な物』と言ったのだ。彼女の中でこの小さな物品がどれほど大きな意味を持つのか、それくらいはわかる。

「いま行くぞ！」

揺るぎない決意を胸に、漆黒の人狼が月夜を駆ける。その姿、疾風迅雷が如く。

第三十七話：悪魔の村（三）（前書き）

このお話には残酷な表現と、性的な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第三十七話：悪魔の村（三）

太郎丸はノエルを連れ、安全な場所まで逃げられただろうか？
そしてノエルの受けた傷は大丈夫だろうか？　気掛かりで仕方ない。

「ん？　エルフの姉ちゃん、流石に疲れてきたか？　まぁ夜通しぶっ続けだからなぁ」
「あ……はい。ですが平気です、申し訳ございません」

暫し呆けていた自分に気付き、悪魔たちへの奉仕作業へと意識を戻すアデリーネ。土の上に直接敷いたゴザの上で裸の上体だけを起こし、白み始めた東の空に、時の経過を思う。

心を殺していると、こんなにも無為な時間が過ぎて行くものなのか。そう考えるとノーウェイの屋敷で過した長い年月は、ここ最近の一年にも満たない時間の、ほんの数分の一の価値にも及ばないように思える。

様々な事を考え、仲間と喜びや悲しみを分かち合い、今を精一杯生きるという事。千年に及ぶと云われる長い寿命を得て、エルフという種族はそういった刹那の輝きを失っているのではないか？　そう思える程に、アデリーネにとってヤマトたちと出会ってからの生活は充実し、輝いている。

とはいえ、屋敷で培った技術がこうして役立っているのだから、天の配剤という物を意識せずにはいられない。。

「次は俺の番だ。エルフ、こっちに来い」
「はい、参ります」

肌を合わせていたのとは別の悪魔に呼ばれ、立ち上がろうとするアデリーネ。だが自分でも気付かぬ内に、彼女の体力は既に底をつ

いていたようだ。
　立ち上がろうにも膝が笑い、腰が鉛のように重い。腕も痺れて感覚が薄く、なにやら目の前も霞む。動こうにも、動く事ができない。
「おい、どうした。早く来ないか！」
「も、申し訳ございません。今すぐ……」
　今、ここで頑張らず、いつ頑張るのだ？　気力を奮い立たせ、四肢に力を込めるアデリーネ。
　少しでも時間を稼がなくては。ノエルを安全な場所まで逃がす為……彼の大切な人を助ける為に、自分が出来る最善を尽くさなくては！　それが自分に優しくしてくれた、彼への……せめてもの恩返しとなるのだから。
「うぐ……っ！」
「あん？　どうした、エルフ？」
　アデリーネの脳裏に浮かび上がる、彼の顔。優しくて、不器用で、真っ直ぐな人。小さくて弱いけれど、何度も立ち上がる強さを持った……。
「ぐっ……げほっ！！」
「うひぃ！　この女……吐きやがった！！」
　目の焦点が定まり、穢れた自分自身と、周りにある爛れた現実が見えた時――アデリーネは胃の中の物を全て吐き戻していた。吐しゃ物は彼女の下に居た太った悪魔に降りかかり、情けない悲鳴が上がる。
「この野郎！　なんて事しやがる！！」

「げほっ、申しわけ……きゃうっ！！」

太った悪魔がアデリーネの頬を張った。たかが平手とは思えぬ威力に華奢なエルフは大きくよろめき、ゴザの上から土の地面へと転がり出る。

「げっ……げふっ……」

「こンのクソアマ……俺様が優しくしてやった恩を仇で返しやがって！」

太った悪魔が倒れるアデリーネに迫る。

もう限界だった、自分を騙し続けるのは。いくら彼の大事な人の為と思っても、いくら彼の役に立ちたいからと考えても、彼を……ヤマトを想うたび、胸が張り裂けそうになる。こんな事をしか出来ない今の自分が嫌で嫌で、どうしようも無くなる。

「あの天使と同じ目に合わせてやる……手足を圧し折り目を抉り、髪を毟って歯を抜いて……キレイな顔を滅茶苦茶にしてやる！！」

太った悪魔の目が真紅の輝きを帯び、薄闇に真っ赤な尾を引いて動く。

その目を見つめ、アデリーネは思った。時間稼ぎもここが限界。あとは悪魔たちの拷問に、自分の命をどこまで保てるか……それだけだと。

天使とは違い、脆弱なエルフの身体。ノエルと同じ責め苦を与えられたなら、精々半日も生きていられれば御の字だ。その後、この悪魔たちは自分の死体を捨て置いてノエルを追うだろう。その時までに、どうか太郎丸が遥か彼方の安全圏まで到達していますように……それだけを望み、未だ見ぬ神へと祈る。

「そら、まずはその尖った耳からだ！　両方とも引き千切って、豚の餌にしてやる！！」
「いっ……あぁぁっ！」

悪魔の手が、アデリーネの耳に伸びる。抵抗するも強い力で掴まれ、側頭部にも手が掛かる。力任せに引っ張られ、肉と骨が軋む音が耳そのものから聞こえて来る。ノエルの時と同じ状況が再び繰り返される……誰もが思った時だった。

「……ッ！？　ぐがあぁぁぁぁッ！！」

悲鳴が上がった。野太い、悪魔の悲鳴が。
アデリーネの耳は無事だ。逆に無事で無いのは、彼女の耳を掴んでいた悪魔の腕。両腕とも肘が普通ではあり得ない方向に曲がり、ブラリと垂れ下がっている。

「ギャアァァっ！　俺の腕が！　どうして！？　なんでっ！！」
「どうした、何がどうなった！？」

騒ぎ出す悪魔たち。その視界の隅で、漆黒の影が疾風のように動いた。

「ぎゃっ！」
「ごぶっ！？」
「ぐばぁッ！！」

次々と、何かに弾かれるようにして吹き飛ぶ悪魔たち。ある者は家の壁に突っ込んでぶち破り、またある者は高々と空を舞って礫台へと激突し、砕けた支柱と共に地面へと転がった。

「なっ……！　ど、どうして……！」

驚き、我が目を疑うアデリーネ。

ようやく山影から顔を出した朝日に照らされ、自分を庇うようにして立つ人物。それは黒い毛皮の寡黙な人狼、太郎丸その人だった。

「待たせてすまぬな、アデリーネ殿。走れるか？」

「は……走れるか、ではありません！　こんな所で何をなさっているのです！　予定と……違うではありませんか！！」

珍しく激昂し、声を荒げるアデリーネ。ノエルを助ける為に彼女が立てていた計画はこうだ。

まずは自分が囮となり、ノエルを逃がす。太郎丸はノエルを連れて、可能な限り遠くへ逃げる。その後アデリーネは自力で村を脱出。ノエルを逃がし終えた太郎丸と隠れ家で合流し、逃げる……。

「貴方が戻ってきてしまわれては、私がここに残った意味が……」

「何を言う。そなたとて、最初から逃げる気など無かったではないか」

お互い様だ、と太郎丸は言った。そしてアデリーネにマントを掛けて肌を隠させると、ベルトポーチから数本のポーションも取り出して手渡す。

「今度は某が時間を稼ぐ。今の内に体力を回復させ、この場を離れるのだ」

そうだった。この男もまた、ヤマトと同じく愚直な男だったのだ。

何の得にもならないというのに、危険を冒してまでエルフの隠里で戦った彼。有名人となったサークスと袂を別ち、行方知れずの低

レベル冒険者を探す彼。損得や効率では無く、じぶんのやろうと思った事を黙々とやってのける――太郎丸は、そんな人なのだ。

「さっきの野郎か！　逃げてりゃ良い物を、ノコノコ戻ってきやがって……もう見逃しゃしねぇぞ！！」

痩せた悪魔が、鍬を振りかぶって太郎丸へと襲い掛かる。武器こそ見劣りするが、突進速度はミノタウロスのそれに匹敵し、力では大きく上回る。防御力もまた凄まじく……。

「ふんッ！！」
「ぎゃぶっ！？」

だが様々な分析よりも、上段に構えた太郎丸の剣が悪魔の頭蓋に振り下ろされる方が早かった。

大岩が落ちたような衝撃と轟音が村中に響き、粉塵が巻き上がる。痩せた悪魔は頭の天辺をべっこりとへこませて首を胴体に減り込ませ、更に身体の半分ほどを地面に減り込ませた状態で気を失った。

「なん……だとっ！？」

三下じみた台詞を吐いて、たじろぐ悪魔たち。

もしも彼らが少しでも武術や剣術を嗜んでいたのなら、その目には映っていた事だろう。仁王立つ漆黒の人狼から、陽炎のように立ち上る激しい怒気を。迸る闘気を。

「今日ほど……下衆を斬る刃を持たぬ我が身を、口惜しいと思った日は……無い！」

パッと土煙が上がったかと思うと、そこにもう太郎丸はいない。

次の瞬間には凄まじい衝突音と情け無い悲鳴が上がり、真っ赤な肌の悪魔が地面を抉りながらすっ飛び、別の悪魔と激突して倒れる。

「ひっ……怯むんじゃねぇ、お前ら！　少々ぶっ飛ばされたって、俺達は死にゃしねぇ！　一斉にかかっブギャッ！？」

喋り終える前に顔面へ鋭い突きをもらい、胴を軸としてその場で回転する悪魔。空中で数回転した後に、横腹を薙ぎ払う横一閃の漸撃で他の悪魔たち同様、遥か彼方へと飛んで行く。

「……次はどいつだ？」

「あひっ！？」

太郎丸の視線が向いた先に偶然居た悪魔が息を飲む。

「貴様かッ！！」

牙を剥き、迅雷が如く剣を振るう太郎丸。

「オォオォオッ！！」

夜明けの村に、人狼の咆哮が轟いた。

第三十八話：悪魔の村（四）

顔や身体に包帯を巻き、痛々しげに足を引き摺る悪魔たちが村野集会所に集まる。魂を売って強靭な肉体を得た彼らの、そんな姿を見る機会など滅多にありはしない。

「逃げらレた、だと？」

情けない顔で頭を下げる悪魔たちへ、サークスは多分に怒りの色を含んだ声を浴びせ掛けた。

「その……天使を連れて逃げた狼の獣人が滅法強くて……あとエルフの女も……」

「結構追い込んだんスよ？　でも逃げた先に罠がいっぱいあって……」

「くっ……！　太郎丸とアデリーネか。油断モ隙もあったモノでは無イな」

悔しげに呻き、かつての仲間を思い返すサークス。

自分たちが伝説の手甲を探す為に村を離れた、ほんの一週間程の期間。その間に乗っ取っていた村が襲撃を受け、戦力は半壊。その上ノエルまで奪われた。無残な天使の姿をなるべく多くの人々へ見せつけ、その信頼を削ごうと生かしておいた事が裏目に出た形だ。

僅かな隙を突いて、見事に目的を達した彼ら二人。何十体もの悪魔がうろつく村へ、たった二人での天使奪還作戦はあまりに無謀と感じられる。

しかし太郎丸はベテランの冒険者、アデリーネは高い知力を誇るエルフ。覚醒したばかりで能力が低く、しかも冒険経験の無い悪魔たちでは一度でも見失ってしまえば追跡は困難だ。それを見越して

の大胆不敵な行動……敵ながら天晴れという以外に無い。
しかし、天晴れなどという言葉では収まりがつかないのが、以前よりアデリーネに目を付けていたバラだ。鼻息荒く脚を踏み鳴らし、手近な者に食って掛かる。

「ばるるっ！　で？　お前らはイイ思いしたのか？　アデちゃんに、イイ事してもらったのかっ！？」
「え、ええ。まぁ一応……あんだけの別嬪さんだモンで、ヤっとかないと損かと思っ……」

その悪魔は最後まで言葉を続ける事ができなかった。激昂したバラに、頭部を丸ごと食い千切られたのだ。
ボリボリと頭部は噛み砕かれ、残った胴体からは真っ黒な血が勢い良く笛のような音を立てて噴出し、ゆっくりと崩れ落ちる。

「ぶおぉぉぉッ！！　お前らッ！　よくも俺より先にッ！　ア、ア、アデリーネに手ェ付けやがったなあアァァァッァッ！！」

茶褐色だったバラの肌がサッと赤銅色へと変色し、深い赤色だった目から真紅の輝きが漏れ始める。

「ゆッ！　るッ！　さッ！　んッ！　ぞおぉぉぉぉッ！！」

地団太を踏んで地を揺らし、一言発する度に腕を振うバラ。運悪く丸太のような彼の腕に巻き込まれた悪魔たちはまとめて薙ぎ倒され、踏み鳴らす蹄によって体の各所を踏み砕かれる。
苦しげな悲鳴を上げる悪魔たちだが、肉体の強化された彼らがそう簡単に死ぬ事は無い。だがそれ故に、とことん運の悪い者は何度も何度もバラに踏まれ、死ぬ事も出来ずに地獄の苦しみを味わう事となった。

「バラ、その辺にシておけ。辺りがクサくなる」
「ぶふっ、ぶふっ、ぶはーーーっ！　くっそ、くっそぉ……！」

サークスに言われて仕方なく動きを止めるバラ。まだ腹の虫は収まらない様子だったが、これ以上にダダを捏ねても仕方がない。

「ソレにしても……」

サークスは思う。生物の大半を遥かに凌駕する能力を持ちながら、悪魔は何故これほどまでに脆く、この世界に進出する事が出来ないのか。理由は幾つかあるが、その内の一つが、この理性と協調性の無さだろう。

欲望を糧とする悪魔。それ故どうしても己の欲望に忠実となってしまう。私利私欲を捨てて目標の為に協力するという事を知らず、物欲や性欲に溺れて目の前にある餌に食いつき、隙を突かれてしまう。

天使の始末よりも、己が欲望である武具探索を優先させた自分に言えた義理では無いが、本当にどうしようもない馬鹿さ加減だ。特に悪魔憑きとなったばかりの悪魔は飢えており、そういった傾向が強い。

「クソ……仕方ない。武具捜索を一旦打ち切ッテ、太郎丸たちヲ……」
「まあ、そう焦らなくても良いではありませんか、ボス」

サークスの声をやんわりと遮る者があった。一連の騒ぎには関与せず、少し離れた場所で寛いでいたガイランだ。腕を組む彼の両腕には、黄金色に輝く見事な手甲が装着されている。伝説の武具に名を連ねる『幻魔の爪』だ。

「伝説の装備でも探しながら、ゆっくりと向えば良いのです。賢者の鎧が天使の力にも有効だと判った今、我らに敵はおりません」

組んでいた腕を解き、ゆるりと立ち上がるガイラン。虎の獣人は音も無くサークスへ近寄り、小さく耳打つ。

「我らが嬲り、ポンコツとなったあの天使がいくらか回復した所で、たかが知れております。それならば今の我らに必要なのは、攻撃力。信仰を失っていない天使にでも通用する、巨大な破壊力です」

鋭い目を赤く爛々と輝かせ、ガイランが手甲から伸びた爪を擦り合せる。この獣人が欲するのは、強さ。敵を蹂躙し、嬲り者に出来る圧倒的なチカラだ。

「狩りを、楽しみましょう」

「ソウだな……」

彼の言葉に頷くサークス。伝説の鎧と盾を得て天使の光が脅威では無くなった今、仮にノエルが復活したとしても焦る必要は無い。むしろ……。

「ボスが気に掛けていたチビも、俺の手にかかれば簡単に虫の息。自分の女が滅茶苦茶にされた事を知れば、ベッドの上でさぞ悔しがる事でしょう」

「アア、ソウだ……その通りだ。奴だけは生かさず殺さず、苦しみを与え続ける必要がアル」

ヤマト。奴を嬲る事こそが先決だ。

サークスは……いや、サークスを乗っ取った悪魔は思い出す。光

の奔流に飲まれ、聖なる力に身体を焼かれながら吐き出した言葉を。

『ヤマト！　お前ダケは何千、何億回生マレ変ワロウとも見ツケ出シ、最高の屈辱と絶望を与エテ、必ズ殺ス！！　覚えてイロ、必ズだ！！』

長い時間を掛けて欲に肥え太った人間に囁き続け、やっと魂が手に入った……と思った途端に滅ぼされる口惜しさ。しかも、最も大きな障害となったのがレベル４程度の小童なのだから、余計に許し難い。

「ぶひ？　確か大将が前にゲットした身体って……ノーウェイとか言いましたっけ？」

サークスの中に住まう悪魔が頷いて返す。

「アレは中々だった。身体の性能は低かったガ、家柄と資金力だけは比類無く……邪魔さえ入らなければバ、酒でも女でも、金で手に入るモノなら全て得られていただろう。ソレだけに、奴らの妨害は腹立たしイ」

サークスの口を借りて、軽く舌打つ悪魔。

だがかつてノーウェイに憑いた自分を滅ぼしたパーティーも、サークスは自らの手の中へ堕ち、ノエルは再起不能。ヤマトもガイランの手によって蹂躙されて半死人となっている筈だ。残るは太郎丸のみだが、その太郎丸とて悪魔の軍勢を前にノエルを連れて逃げるのが精一杯だった様子。アデリーネの協力を得てもその程度なのだから、恐れるに足りない。

「よし……全員、身支度ヲ整えテおけ！　明日カラ動くぞ！」

サークスの声に、おう！　と声を上げる一同。

「覚悟しろヤマト。お前の大切な物は全て、この僕が破壊してヤル……お前の目の前で！　そして最高の屈辱と絶望の中、優しく縊り殺シてあげるよ……」

革グローブを軋ませて拳を握り込み、にやりと笑った金髪の青年。真面目で責任感が強く、ドライだけれど仲間思い――そんなかつての面影は、今のサークスには微塵も残されていなかった。

第三十九話：コーヒー・ブレイク（一）

夢を見ていた――とても懐かしい夢だ。

木漏れ日の中、大樹に寄りかかるようにして天使の少女が泣いている。背に生える純白の翼には痛々しい傷――そう、これはあの時の――彼女と初めて会った時の夢だ。

夢とはわかっていたものの、少女のあまりに痛々しい様に見ていられず、手を差し伸べようか――そう思った時だ。どこからか現れた小汚い少年が慣れない様子で天使に近付き、あれこれと声を掛けて、慰め始めた。だがあまりにも乱暴な言葉遣いと荒っぽい態度に、夢の主は――ヤマトは思わず苦笑してしまう。

『もっと上手い言い方があるだろうが、ったく。ちったぁ女心ってモンを考えたらどうなんだ？』

夢の中の少年へ――過去の自分自身へ、誰かさんを棚に上げてダメ出しをするヤマト。その声が届いたのか否か、やがて少年は天使の少女へと手を差し伸べ、少女も――ノエルも涙を拭き、ヤマトの手を取って立ち上がる。

もしかすると、二人が一番幸せだったかもしれない時。何もかもが溢れていた、満たされた時代。

『あの頃は良かった……なんて、な』

もう二度と取り戻せない時間。夢の中でしか見る事は叶わない。

やがて時が経ち、翼の癒えた天使の少女は、少年の手を離し大きく羽ばたいて舞い上がる。強く、頼りになる男と共に。空を駆ける二人の速度は速く、高度は高く、とても自分の足ではついて行けない。どんなに全力で走っても、追い縋るどころかぐんぐん離され、

終いには見えなくなってしまう。

『……これが地虫と、鳥の差か。どうしようも無ねぇな』

息を切らせて立ち止まり、痛む胸を押さえてヤマトは呟く。

少女が、少年に歩調を合わせてくれる時期は終わった。これからは互いに、相応しい場所で生きる方が良い。暗く湿った地面と、明るく広大な大空で――と、その時だ。

『……！？　なんだ？』

突如、晴れ渡っていた青空に暗雲が広がり、陽光が遮られた。夜のように暗くなった世界に滝の如く降り出した雨は激しく地面を叩き、雲の間には雷光が走り雷鳴が轟く。

突然の出来事に呆然と空を見上げるヤマト。その目に、何かが映った。雲の切れ間から、真っ直ぐに落ちて行く白い物。あれは――。

『ノエル！』

くるくると回転して羽を撒き散らし、遥か遠くをゆっくり堕ちて行く天使の少女。

今すぐ助けに行かないと！　受け止めてやらなくちゃ！

ぬかるんだ地面を蹴って走り出すヤマト。しかし何時の間に負ったのか、全身に受けた傷が彼の走りを遅らせる。走るべき足は折れ、受け止めるべき両腕も動かない。だがヤマトは地面を這って――それこそ地虫のように這いずって、落下地点へと急ぐ。

『おいおい、何やってんだよ。馬鹿じゃねぇのか？　行っても無駄だぜ？　あの下じゃサークスの野郎が準備万端で構えてんだ』

『ふざけんな！　受け損なうかもしれねぇだろ！？　行かなくてど

うすんだ！』

『這って行ったんじゃ、どうせ間に合わねぇって。楽しそうにしてる連中を、間近で見る羽目になるだけさ』

『だとしても、何もしねぇよりマシだ！　黙って見てるだけなんざ、糞食らえだ！！』

弱い自分を怒鳴りつけ、這いずり続けるヤマト。だがその間にもノエルは高度を下げて地面に迫る。堕ちる天使は遥か先。這って到達するには遠すぎる距離だ。どんなに手を伸ばしても届く事は無く、落下地点には誰も居ない。そして……。

『うわあぁぁぁぁッ！！』

叫び、薄いシーツを跳ね上げて、ヤマトは飛び起きた。瞬間、押し寄せてくる現実感――。

夢から覚めたのだ。

「こ、ここ……どこ、だ？」

見覚えの無い室内。小ぢんまりとした部屋に、ぽつんと置かれたベッド。そこでヤマトは眠っていたようだ。

清潔な白いシーツが敷かれたベッドの脇には水差しが置かれており、床に落ちている氷嚢はきっと、今し方まで自分の額に乗っていたのだろう。少しだけ開いた窓からは涼しい風と陽光が差し込み、微かに小鳥の声も聞こえる。どこか遠くからは明るい人の話し声と、妙に懐かしさを感じさせる香ばしいコーヒーの香り。

一体、どうして自分はこんな所に寝ているのか？　何がどうなったのか？　確か包帯男にやられて……？

ボンヤリとした頭でそれらを考える内、部屋の外から小さな足音が近付いて来た。やがてドアを乱暴に足で押し開け、姿を現した人

物。それは……。

「んぉっ？　おぉっ！　やっと目が覚めたか、糞チビぃ！」

元気良く、明るい声が室内に広がる。水の入った桶と手拭いを抱えて満面の笑みで登場した幼い少女……かつてコーヒー収穫の依頼を受けて訪れた村で出会った、スミという娘だった。

半年……いや、一年ぶりくらいだろうか？　久しぶりにみた彼女は相変わらず田舎のオテンバ娘といった風情で、健康的な小麦色の肌を簡素な貫頭衣で包み、深い赤毛の髪も以前と変わらず頭の天辺で雑に結んでいるだけ。もう少し格好に気を配れば光る物がある容姿ではあるのだが、齢十程度の彼女に、それはまだ少し早い話なのかもしれない。

「スミ!?　おま、なんっ……ゲホ、ゲホッ……！」

「おいおい無理すんな糞チビ。お前、喉も潰れてんだから。大声出さずに、横になっとけ」

スミはそう言って手拭いを絞り、寝かせたヤマトの額に置いた。ヒンヤリと心地良い感覚が、頭の中にまで染み込んで行く。

「糞チビ。お前、自分がどうしてココで寝てるか、わかるか？　ま、わかんねぇよなアレじゃ……」

何かを思い出すように、視線を落すスミ。歳の割には、妙に大人びた仕草だ。

「ココはアタシの村。お前が運び込まれて、もうずっと寝たままで二週間……三週間くらい？　そんくらい経ってるんだぞ？　途中で何回か飛び起きてたけど……その顔じゃ覚えて無いな？」

微かに頷くヤマト。この場所がスミの村だという事さえ初耳だ。
それに加えて、自分が謎の包帯男に襲われてから、既に一ヶ月近くが経過しているという事実にも驚いた。

「よし、暇潰しにアタシが教えてやるよ。糞チビがどうして、この村に居るのか」

窓枠にひょいと腰掛け、話し始めるスミ。
語り自体があまり上手で無く、しかも時間軸が前後してわかり辛い彼女の話をまとめると、こうだ。
ヤマトたちが幻のコーヒー『コピ・ルアク』を手に入れ、村を去った後からスミの話は始まる。
村人たちはヤマトが発見した、ネコの糞から豆を集める方法を使って、コピ・ルアク生産販売に着手した。幸いにも競合他者が居なかった事や、富豪ノーウェイが悪魔憑きとなった事件が丁度良くコピ・ルアクの宣伝となった事もあり、商売は非常に順調。正に順風満帆となった。
そんなある日、スミと村人がコピ・ルアクを売り歩いていた時の事だ。町と町とを繋ぐ街道の中程、『旅人たちの家』に差し掛かると、森の茂みから聞き覚えのある、悲痛な声が聞こえて来た。何事かと思い、こっそりと覗きに行くスミたち。するとそこには全身傷だらけで倒れる血塗れのヤマトと、包帯を体中に巻いた怪しい獣人が立っていたのだ。

「そん時に見た獣人……多分、ありゃあトラだな！　ブチのめしてやろうと思ったんだけど、そのトラ野郎はアタシたちに恐れをなして、お前を置いて、あっという間に山の中に逃げちゃった」

ほっと息を吐くヤマト。下手をすれば、スミたちも自分と同じ目

に遭っていた所だ。複数人で居た事と、街道に近く、一目に尽き易かった事が幸いしたのだろう。

「で、フルボッコで死に掛けの糞チビを村まで運んで、チヤホヤと養ってやってたってワケだ。感謝しろよ？」

確かに、これは感謝しないわけにはいかないだろう。もしスミたちが通り掛からなければ……あるいは傷付いたヤマトを見捨てていれば、きっと今頃命は無かったのだから。

声が出せないヤマトはスミと目を合わせ、軽く頭を下げて感謝の意を表した。そんな彼からスミは、何故か恥かしげに顔を背ける。

「ヤメロよ、気持ち悪い！　イイんだよ、そんなの。ありがとうなのは、こっちなんだから」

首を傾げるヤマト。だがその疑問は、すぐに氷解する。

「お前のお陰で、村は潤ったし……コイツも助かった」

スミが目をやると、窓の隙間からするりと入り込む小さな生き物。しなやかな身体とふわふわの毛並みが美しい、それは茶色い一匹の猫だった。その顔付きにはどこか見覚えがあり、ヤマトが記憶を紐解いて行くと……コピ・ルアク発見のヒントをもたらした子猫の存在が思い浮かぶ。

「そ。あん時の山猫だよ。アタシが飼ってるの……っていっても、半分野良だけど。名前は……ま、まぁイイか」

何故か口澱むスミを他所に、ヤマトはその猫に視線を寄せる。

そっか、元気でいたんだな――。

ヤマトの気持ちを察したのか軽やかにベッドへと飛び乗り、頬に頭を擦り付けるスミの猫。何が気持ち良いのか、ごろごろと喉を鳴らして目を細めている。

「村を助けてくれた冒険者っつって、みんなお前らにゃ感謝してんだ。そんなワケだから遠慮せずに、ゆっくりして行けよ糞チビ！アタシはお前が起きたって知らせて来る！」

ひらりと窓枠から飛び降りて、とたとた軽い足音と共に走り去るスミ。その背中を見送り終えると、途端にヤマトへ睡魔が押し寄せて来た。

（村を救ってくれた冒険者、か……）

なんだか、まだ良くわからない事も多いが、今はとにかく眠い。何もかも忘れて、とりあえず眠ろう……どうせもう、何の目的も無いのだから。

目を閉じ、猫と一緒になって寝息を立て始めたヤマト。

彼はまだ、何も知らない。遠い空の下で起っている、辛い現実を。

第四十話：コーヒー・ブレイク（二）

ヤマトが目覚めてから三日。

その頃になると体力もある程度は回復し、ふらつきながらもベッドから起きて自力で用を足せる程度にはなっていた。何をするにも一々介添え人の手を借りなければならなかった彼にとって、これはかなり嬉しい進歩だ。

といっても筋肉や腱が何箇所も断裂し、骨も折れていた両脚。杖を使った上で壁に寄りかかり、ゆっくりと移動するのが精一杯で、完全回復には程遠い状態なのだが。

「ほら、見ろよ糞チビ。村の真ん中に砂場みたいなのあるだろ？あそこで猫がウンチすんだ。凄いだろ？　前みたく、わざわざ山の中まで取りに行ったりしないんだぜ！」

良く晴れた空の下、病み上がりのヤマトを介助しつつ、リハビリも兼ねて村を案内してくれるスミ。

日中のヤマトは、歩行訓練をひたすら繰り返していた。自由に動かない身体を引き摺っての運動はかなり辛いものだったが、見上げた空の如く明るく、どこまでも澄み渡るスミの笑顔と元気な声が陰鬱な気分を吹き飛ばしてくれる。

かつて訪れた村は、以前よりもずっと活気に満ちていた。

以前発見した猫の糞からコピ・ルアクを回収するという採集法。村人たちはそれを更に発展させたようだ。

猫が同じ場所で用を足すという習性を利用し、大胆にも村の中央に巨大な猫トイレを作り、そこへ山猫たちを招いているのだ。山猫たちは森でコーヒーの実をたらふく食べた後、村にやってきて用を足す。村人たちはそれを回収する……という一連の流れ。最初に猫トイレで用を足すように躾ける必要はあるが、それ以降は特別に何

かするような事は無い。加えて村そのものが猫たちを守る柵となり、凶暴な肉食獣や密猟を企む不届き者から、猫とコピ・ルアクを同時に守る事が出来る。

「上手いこと考えたモンだな」
「おう！　いま村は絶好調だ！」

ようやく声が出せるようになったヤマトが言うと、スミはぐいっと親指を立ててケタケタと笑った。他の村人にも聞いてみたが、随分と儲かっているらしく、しきりに感謝されてしまった。

まさか自分が考えたその場凌ぎの方法で、こんなにも状況が変わるだなんて思ってもみなかったヤマトにとっては寝耳に水の話。だが村人たちは義理堅く、ヤマトへの恩返しだと言って無一文の彼に寝床と食事を用意してくれた上、手厚い看護までしてくれている。この上ない厚待遇だ。

他人から良くされる事に慣れていない彼はこんな時、どのような顔をすれば良いのか困ってしまう。

「おい糞チビ！　そろそろ腹減ったろ。メシにすっか？」

別にそれほど腹は減っていなかったが、激しく唸りを上げるスミの胃袋を慮って、ヤマトは昼食の提案を受け入れる。

山間部の貧しい村では、朝と夜、一日二回の食事が普通。しかしこの村では、軽くではあるがみんな昼食を摂っている。お昼に食べるご飯は、村が豊かになった、目に見える証といえた。

「よし出来たぞ、食え！」
「お前さぁ……もうちょっと他に言い方無いのかよ？　まぁいいや……いただきます」

ベッドのある部屋に戻ったヤマトは、床に敷いたゴザの上に足を伸ばして座り、行儀良く手を合わせてからスプーンを手に取った。スミもそれに習い、少し遅れて手を合わせる。

裏返した木箱をテーブル代わりにした、質素な昼食。置かれたお椀の中には、軽く湯気の漂う薬草粥が盛られている。柔らかな米とシャキシャキした薬草の歯応えが心地良い、療養時の定番食だ。

「……おい糞チビ、食わせてやろうか？」

「いや、これも練習だ。一人でやる」

スミの気遣わしげな言葉をかわし、ヤマトは震える右手でスプーンを握る。そろりそろりとお粥にスプーンを潜り込ませ、持ち上げようとするが……。

「うあっ！」

最後まで持ち上げる事が出来ず、スプーンを取り落としてしまった。湿った米粒が散らばり、スプーンも床で跳ねる。

「悪い、スミ！　またやっちまった……」

慌てて詫びるヤマト。そして包帯が巻かれた自分の右手を恨めしそうに見つめた。

彼の右腕、その肘から先は、もう殆ど動かない。包帯によって隠された右腕は破壊し尽されてグシャグシャとなり、それは酷い有様なのだ。

「ま、気にすんな。ほれ、無理せずに左で食えよ」

差し出されたスプーンを左手で受け取るヤマト。だがその左腕と

て肩から上には持ち上げられず、万全とは言い難い。
そして薬草粥を運ぶ口も同様だ。ズタズタにされた咥内と、中程で折れた歯については、ポーションによってほぼ再生している。だが完全に抜き取られてしまった多くの歯は元に戻らず、今も失われたまま。昼食メニューがお粥なのも、それが理由だった。

「糞チビ……やっぱポーションじゃダメか？　全部は治らないか？」
「いや、気長にやってりゃ、そのうち治るだろ」

そのうち治る――自分の言葉に拙い嘘を感じるヤマト。彼が受けた傷の多くは、ポーションの効果をほとんど受け付けなかった。これはほぼ間違い無く、悪魔の呪詛が乗った傷……つまりヤマトを襲った包帯男は悪魔だったという事だ。
先の通り、悪魔が付けた傷はポーション等の効果をほとんど受け付けない。『ほとんど』だ。言い換えれば『悪魔の付けた傷であっても、多少であればポーションの効果がある』という事になる。
毎日欠かさず、昼も夜も絶え間なく傷口へポーションを注ぎ続ければ、ヤマトの言ったように『そのうち治る』だろう。だがそれには、どれほどの金と、どれほどの時間が必要か見当も付かない。きっと莫大な物になるであろうと予想できるのみだ。

「おぉっ！　そっか、治るのか！　んじゃあメシ食ったら、ポーション飲んどけよな糞チビ！」

白い歯を見せて笑うスミ。治ると聞いて、我が事のように喜んでいる。とても無邪気な、屈託無い素直な笑顔だった。
真っ直ぐに自分へと向けられる好意に、ヤマトの胸は痛む。いくら鈍い彼であっても、色々と明け透けなスミの気持ちには気付いていた。幼い彼女の想いが、恋だとか愛だとかの類であるかまでは判然としないが、少なくとも好いてくれてはいるようだ。そういえば

前に来た時も、背負ってやったら大ハシャギして、別れ際にはションボリしてたっけ……。

「なぁスミ、いまココのコーヒー収穫ってさ、人手足りてんの？」
「ヒトデ？　さぁ？　んでもジイちゃんとか、毎日忙しそうにしてるぞ。じぎょうかくだい、とか言って」
「そっか……」

スミの言う『ジイちゃん』とは、村長の事だ。彼女の口ぶりから察するに、もう少し手広くやりたいが、そこまで手が回らない……といった所なのだろう。

薬草粥を口に運びながら、ヤマトは今後の事を考えていた。もう少し体力が回復したら、この村で住まわせてくれと頼んでみようか？　手足が完全に回復しなくても、豆拾いくらいであれば出来るだろう。

この身体では、もう冒険者には戻れない……戻る理由も無い。以前サークスに言われたように、自分と妹が慎ましく生活できる程度の金と、退屈だが平和な毎日があれば……。

「どうした糞チビ、何考えてる？　また何かウンコの中から掘り出すつもりか？」
「な、なんか引っかかる言い方だな……人をウンコの専門家みてぇに言いやがって」

だけど、それだって悪くない。この村の人に喜んで貰えるなら、何回だって掘り返してやろう。

ヤマトはスプーンを置いて椀を持ち、粥を息に喉へと流し込む。弱っていた喉と内臓が悲鳴を上げたが、お構いなしだ。良く食べて良く眠り、早く動けるようにならないと。それである程度治ったら、村長に話をしてみよう……。脳裏に浮かぶ冒険仲間の顔を振り払っ

て意思を固めるヤマト。
そして、それから一週間という時間が流れた。

第四十一話：コーヒーブレイク（三）

その日の晩、ヤマトは不意の尿意によって強制的に目を覚まされた。毎日のようにポーションを飲み続けている為、ちょっと水分摂取過多なのだ。

かなり眠かったが、この歳にもなって恩義ある村のベッドに広大な世界地図を描くような失態は避けたい。隣で寝ていた猫を起こしてしまわないように、そっと部屋を抜け出す。

「……月夜か」

空に浮かぶ、青白い月。夜道を行く明りとしては理想的だが、どこか冷たく、不気味に感じられる。

嫌な予感……妙に心がざわめく。何も無ければ良いのだけれど――しかしながら往々にして、嫌な予感ほど良く当たるものなのだ。

「……ん？」

用を足し終えて部屋へと戻る道すがら、人の気配を感じてヤマトは立ち止まった。家の玄関付近に、何人かの村人が集まって話をしているようだ。

押し殺した彼らの声に妙な違和感を感じ、ヤマトは不自由な足を引き摺りながらも、こっそりと忍び足で近付いて行く。昔取った杵柄……と呼べる程の昔では無いが、冒険者として培った隠密技術は、傷を負っていてもなお一般人には気取られぬ静かな移動を可能にしていた。

「それは確かな話なのかい？」

「はい、村長さん。私も俄かには信じられず何人かに確認致しまし

たら、中には直接見たと言う者さえ居たのです」

集まっているのは、村長と村の若者数人。そして頻繁に村へ出入りしている旅の商人だった。どうやら件の商人が話題の中心らしく、彼を取り囲むように人垣が出来ている。

盗み聞きなど良い趣味とは言えないが、これも冒険者の性というヤツだろう。ヤマトは彼らのすぐ側、扉の陰に身を潜めて会話の内容に耳をそばだてる。

「なんでも、それは酷い有様だったそうで……」

「そうかい……ノエルさんが……」

ノエル!?　名前を聞いただけで、ヤマトの心臓は勢い良く早鐘を打ち始めた。どうしてここでノエルの名前が出る？　村長の不安そうな表情は何だ？　旅の商人は一体何を言っている!?

「今は、その悪魔の村からは姿を消しているそうですが……果たして生きているのやら、死んでいるのやら……」

悪魔の村？　生死不明!?　もう少し詳しい話を――思わず一歩踏み出したヤマト。だが身体が言う事を聞かず、その場でよろめき、大きな音を立てて倒れてしまう。

「なっ……や、ヤマトさん……!?」

村長を始め、一同の注目が倒れたヤマトに集まる。各々が顔に驚きの表情が浮かび、それらはすぐ気の毒そうな物へと変化して行く。

「一体、いつからそこに居られたのです？　どこまで話を……」

「なぁ村長さん、ノエルが……ノエルがどうかしたのか!?　教え

てくれっ！」

溜息と共に俯く村長。元々高齢でしわくちゃの顔が、更に老け込んだように見える。

「ヤマトさん……年寄りの戯言と笑われるかもしれませんが……知らぬ方が良い事も、世の中には多くございますよ？　今は余計な事を考えず、傷を治す事を第一に考えてはもらえませんか」

落ち着いた、優しい口調だ。悪意など微塵も感じない。村長は自らの経験を踏まえ、ヤマトの知りたがっている事は、必ずしもヤマトの為にならない……そう判断して言ったのだ。

しかしヤマトは先達の含蓄ある言葉を、素直に受け入れる事が出来ない。

「知らない方が良い事もあるって？　ンな事くらい、俺だってわかってる！　んでも……それでも、やっぱり教えてくれ！　知りたいんだ！」

知らない間に、深い仲になっていたサークスとノエル。そんな事も知らず、ノエルに髪飾りをプレゼントして喜ばせたいと、馬鹿みたいに浮かれていた自分。結局渡す事も出来ず、後になって真実を知り、ヤケになってケンカした挙句パーティーを抜けた。

もしも、もっと早くに知っていれば……。

「たとえ知ったとしても、何も出来ないかもしれません。そうなれば、辛いだけですよ？」

村長の口調は、相変わらず穏やかで落ち着いた物だ。しかし彼の言葉は、冷静にヤマトの現状を把握した上で紡がれている。村長は

言っているのだ。『聞いた所で、お前には何も出来ない』と。

「だ、だからって……何もせずに……っ！」

村長の言う通りだ。

ただ大声を上げただけで息が切れてしまうような男に、一体何が出来るというのか。走る事さえ出来ず、村の支援無しでは生きる事さえ難しい男が、ノエルの為にと動いた所でどれほどの足しになるだろう？　きっと多くの場合、状況を混乱させて脚を引っ張るのが関の山だ。

それに、こう考えていたではないか。冒険者など辞めて、この村で穏やかに過ごそうと。

もうノエルには、自分よりも遥かに頼りになる男がいる。きっと今頃、ノエルのピンチに颯爽と現れたサークスが敵を蹴散らし、二人で愛を語らっている事だろう。自分など完全にお呼びでない。単なる邪魔者だ。

「ヤマトさん、今日はもう遅い。明日の朝まで、ゆっくりお考えなさい。それでもまだ天使様の事をお知りになりたいのでしたら、いらっしゃれば良い」

一礼して、その場を去る村長。他の者たちもゾロゾロと自分の寝床へと帰って行き、玄関前には自分以外の誰も居なくなった。

眩しい月が照らす中、取り残されたヤマトは独り家の外に歩み出る。

フラフラとあても無く歩いた彼の眼前には、ロープで区切られた大きな砂地。コピ・ルアクの生産場所である、猫のトイレだ。

以前、ここは広場だった。ノエルは村の人たちを集めて天使の力を振るい、少し離れた場所にある木陰ではサークスと太郎丸が身体を休め、自分は人の整理に走り回っていたように思う。

二度と戻れない日々。何もかも、懐かしく感じる。

「んぁ……おい糞チビぃ、そんなトコで何してんだぁ？」

不意に、背後から声を掛けられた――スミだ。多分、自分と良く似た理由で目が覚めたのだろう。寝ぼけ眼を擦りながら、のたのたと近付いて来る。

「しょんべんかぁ？　ここは猫用だから、人間は向こうだぞ？」

「そんくらい知ってるよ……ったく。馬鹿にすんな」

隣に立ったスミの頭を、動かない右手でぐしゃぐしゃに撫でる。

「やーめーろーよー」などと言うものの、さほど嫌がる様子も無く、されるがままのスミ。どこか幸せそうにも見える。

「なあ、スミ……俺さぁ……」

どうしたら良いと思う？

そんな事を、こんな小さな娘に尋ねようとした自分に、ヤマトは自己嫌悪を抱く。

自分は……迷っているのだ。

この村での穏やかな生活を捨ててまで、自分が必要とされていない場所へ赴くのか？　果たしてそれで、誰かが幸せになれるのか？　ただの一人も……自分さえも幸せにならない選択肢だというのに、何故、迷うのか。

「……糞チビ？　どうした？」

「ん、いや……」

右手に、スミの体温を感じる。こんなポンコツの自分でも、この

場所でなら他人を幸せに出来る。選択の余地など無いではないか。

「この村、出ていくのか？」

「え……！？」

驚き、隣を見ると……スミが、じっとこちらを見ていた。吸い込まれるような深い色の双眸で、何もかも見透かすかのように。

「アタシは……糞チビの、好きにすれば……良いと思うぞ」

「いや、別に出て行くなんて言ってねぇぞ？　それに好きにって言われてもなぁ……」

軽い調子で返そうとしたヤマトだったが、スミの雰囲気に圧倒されて言葉を続けられない。彼女は、至って真剣だった。

「好きにしたいから、冒険者なんて……やってんだろ？　また冒険、したいから……毎日必死こいて、歩く練習したり、右手動かす練習……してんだろ？　迷ってんなら、本当にやりたい事……やれよ」

「スミ、お前……」

口を開くたび、赤毛の少女の目がみるみる潤み、ボロボロと大粒の涙が零れ出す。ヤマトのシャツを強く掴んでグスグスと鼻を啜ってしゃくりあげながら、必死に言葉を吐き出すスミ。

「オマエ、ノエル姉ちゃんトコに、戻りたいんだろ？」

「……！」

「だったら……余計な事考えずに、さっさと行けよ……行っちゃえよ」

スミに言われ、初めて自覚する。自分は、ノエルの所へ行きたか

ったのだと。

冒険出来ない身体だとか、必要とされてないだとか、自分より凄い男がいるだとか、誰も幸せにならないだとか、それっぽい理屈を並べて言い訳をしているだけだ。例え自分さえ不幸になったとしても、ヤマトは望んでいる。ノエルと共に居る事を。

「大丈夫だって、心配すんな。きっと姉ちゃんだって……糞チビの事、待ってる」

「スミ……！」

この娘は一体どこまで知って喋っているのか？　いいや、何も知りはしないのだろう。これこそがきっと、女の勘というヤツなのだ。

「わりぃ、スミ。俺、お前に……！」

少女の小さな身体をぎゅっと抱きしめ、ヤマトは心から詫びる。こんな良い娘を、自分が深く傷付けてしまっている。しかも自分自身の意思で、我侭で。

「何だよ、気持ち悪ぃな……イイって事よ！　糞チビ、すぐにどっか行くだろうなって思ってたし……色々、前から知ってたし。オマエは何も気にすんな！」

明るい声で言って、スミは涙を拭き、ヤマトから身体を離した。そこに立つのは、いつもの明るい少女……それを演じる、とても強い心を持った、スミという小さな女の子だ。

「よしっ！　おい糞チビ、ぜんはいそげって言うんだろ？　じゃあ、すぐに準備しようぜ！」

軽い足取りで走り出すスミの背中に、ヤマトは何度も心で詫びる。許される事で無いとわかっていたが、そうせずには居られなかった。

「スミにここまでさせちまったんだ……もう逃げられねぇぞ、俺！」

がつん、と右手で頬を殴る。いつまでもどん底気分に浸っている場合では無い。スミの気持ちに報いる為にも、自分は全力で前に進む必要がある。

「這ってでもな！」

覚悟を決めて歩き始めた少年の行く手を、幾分か温かみを増した月が優しく照らし出していた。

第四十二話：コーヒーブレイク（四）

翌朝、まだ日が昇りきらない程の早い時間。ヤマトは旅支度を整え、村長宅へと出向いた。

彼を出迎えた村長は、なんとも深みのある表情でゆっくりを息を吐き、彼を家の中へと迎え入れた。そして居間に彼を待たせて姿を消し、しばらくして、しわくちゃの手に小さなザックを持って戻る。

「話は昨日の内に、スミから聞いております……行かれるおつもりだとか。どちらにせよ、来るだろうとは思っていましたがね」

村長がザックを机に置くと、革製のそれはガシャリと硬い音を立てて形を変えた。

「どうぞ、お持ち下さいヤマトさん。きっと貴方には必要な物でしょう」

ヤマトが訝しく思いながらも中を開けてみると、そこには小さなガラス瓶に入った色とりどりの液体がギッシリ詰まっていた。それらは揺れる度、仄かに魔法の光を放って輝いている。

「こいつはポーションに……ハイポーション？　毒消しに麻痺消しまで……それに、こいつは……エリクサじゃねぇのか!?」

驚きを隠せないヤマト。だが無理も無い。

ポーションを濃縮し、効果を高めたハイポーション。その価格はポーションの十数倍にも及ぶ。そして更に上位となるエリクサは、ありとあらゆる傷を癒し死者をも蘇らせると噂される人類史上最高かつ究極の回復薬であり、価格はポーションの約千倍である。

貧乏冒険者のヤマトにとっては、ハイポーションでさえ高嶺の花。エリクサに至っては道具屋に鍵付きで陳列された物を、ガラス越しに眺める事しか出来ない幻も同然の道具である。使い捨てだなんて、とても信じられない超高級品なのだ。

「ちょ……ちょっと待ってくれ村長さん！　気持ちは嬉しいけど、こんなの受け取れねぇよ。俺もうアンタたちに滅茶苦茶借り作ってんのに、まだこれ以上世話になんて……」

「いいえ、受け取って下さい。これは私からではなく、スミがコツコツと溜め込んでいた物なのです」

「……スミが？」

慌てるヤマトに村長は温和な笑顔を向け、だが有無を言わさぬ強い調子で言った。

「ヤマトさん、最近スミの標準語が上手くなったとは思いませんか？」

「え……？」

確かに、思い返してみれば以前のスミが口にしていた標準語は非常に拙く、所々聞き取り辛かった。だが今はどうだ？　相変わらず口は悪いが、意思の疎通に何の不自由も無い程度には向上している。

「どうしてだと思います？」

尋ねる村長に、ヤマトは明確な答えを返せない。

「それにね、スミはまだ幼い身で……コピ・ルアクの行商へ、いつも付いて行くのです。小さな背中に重い豆を背負って遠い町まで、脚を棒にして……何故だと思います？」

「い、いや……さっぱりわかんねぇ」

首を捻りながら、冷や汗をかくヤマト。村長から、やけに強い重圧を感じる。

「答えは簡単、全て同じです。スミは……貴方に会いたかったのですよ、ヤマトさん」

ヤマトはガツンと強く頭を殴られた気がした。受けた衝撃に、膝から崩れそうになる。

「街へ行けば貴方が居るかもしれないと考えたのでしょう。言葉が上手になれば、もっと貴方と話せると思ったのでしょう。血塗れで、顔も潰れていた貴方を、一目でご本人だと見分けたのは誰だと思っているのです？　他でもない、スミなのですよ」

全身から血の気が引く。身体が強張って、指の一つさえも動かす事が出来ない。

「スミの気持ちを知った上で、それでも貴方はノエル様の話を聞き……この村を出ると仰るのですか？」

年老いた村長の口から発せられるゆるやかな言葉が、異様に重い。圧し掛かる重量に、心も身体も押し潰されてしまいそうだ。

スミの気持ちは知っている。その上で昨夜、決めたのだ。だがこうして改めて言葉にされてしまうと、気持ちが揺らぎ、心が折れそうになる。

「わ……悪い、わかってる……でも俺……」

村長へ返す言葉を捜すヤマト。だが何も思い浮かばない。
当たり前だ。これからヤマトがしようとしている事は、単なる彼の我侭なのだから。どう取り繕った所で、スミを捨てて他の女の所へ行くという行為は変わらない。
だが何か言わなくてはならないだろう。良い訳だろうと見苦しかろうと、我を通すのだから、そのくらいはして見せなくては……。と、口を開きかけたヤマトの足下を、しなやかにすり抜けて、猫がやってきた。すっかりヤマトに懐いた、スミの飼っている猫だ。

「そうそう。スミが飼っているその猫、名前をご存知ですか、ヤマトさん」

いいや、知らない……答えようとしたヤマトより早く、スミの猫が「にゃあん」と答えた。まるで返事をするかのように。

「……？」

「ヤマト、ですよヤマトさん。その猫の名前は、ヤマトというのです」

村長が目を細めて言うと、ヤマトと名付けられたスミの猫が机に飛び乗って、伸びをした。

「あ……」

ヤマトは……人間の方のヤマトは、もう泣きそうだった。ずっと自分の事を想ってくれていたスミの気持ちが胸に刺さる。
かつて村を訪れた際に、偶然助ける形となった山猫。スミは自分に懐いたその猫にヤマトと名前を付け可愛がり、寂しさを紛らわせていたのだろう。
覚悟を決めていた。誹りを受けるのには慣れている。だから嫌わ

れたって構わないと思った。だが、自分の事を良く想ってくれている人を傷付ける事の、なんと辛い事か。旅立ちの一歩を踏み出す前から、彼の心はボコボコに叩かれて傷だらけだ。

「その、俺……」

情けない顔で、言葉を探し続けるヤマト。そんな彼を、不思議そうな顔で見上げる猫のヤマト。そして村長は……。

「ふふっ……」

穏やかな表情で、笑っていた。意味がわからずキョトンとするヤマトに、村長はゆっくりと語り始める。

「……申し訳ございません、ヤマトさん。年甲斐も無く、意地の悪い真似をしてしまいました」

ひょいと猫を抱き上げ、村長は続ける。

「恩人に対して取るべき態度では無いと知れてはいたのですが……スミを……泣きじゃくる可愛い孫の顔を見ていると、どうしても腹が立ちましてな。貴方が心根の優しい男で、孫の事を引き合いに出せば傷付くだろうと知った上で、あのような真似を……重ね重ね、申し訳ない……この通りです」

しわくちゃの顔を更にしわくちゃにして、深々と頭を下げる村長。その姿に、ヤマトは言葉が出ない。謝りたいのはこっちの方だというのに、先に謝られてしまった。

「この回復薬はお持ち下さい。残して行かれては、私がスミに怒ら

れます。そして、これも……」

傍らの道具入れから取り出された物。それは見覚えのある革鎧と、短剣だった。

「あれ……これ、俺の……鎧と剣？　な、なんで……？」

記憶が確かなら、革鎧は包帯男によって引き裂かれ、剣は噛み砕かれたはずだ。しかし目の前にある二つの装備は両方とも綺麗に修復された上、丁寧に油が塗られて整備も万全のようだ。

「スミが拾っておいた物を、我々が直したのです。なに、ここは元々貧乏な村――物を直す事に関しては、本職にも遅れを取ったりはしませんよ」

捨てれば良いものを、わざわざ取っておいてくれたのだ。ボロボロになった鎧や剣を直すのは、口で言うほど易しい事ではない。だが村長は、それを微塵も感じさせない口ぶりだ。

「さて、ヤマトさん。引き止めておいてなんですが、あまり旅立ちが遅くなっては見送りの目が疎ましいでしょう。昨日からお聞きになりたがっていたノエル様の噂……私の知る限り、お伝えします。まずは……」

「ちょっと待った！　待ってくれ、村長さん！」

話し始めた村長を、ヤマトの声が遮る。

「言える内に、これだけは言わせてくれ」

机に両手を付き、深く頭を下げるヤマト。そして顔を上げ、はっ

きりとした声で言う。

「俺、この恩返しは必ずするよ。アンタたちが何て言ったとしても、この村のみんなに頭を下げに戻る……絶対に！」

「……琥珀色の村、です」

ヤマトの言葉に、村長がそっと付け加えた。

「この村の名前ですよ。村に名前を付けようと、皆で話し合って決めたのです」

「……ああ、わかった！　琥珀色の村だな。絶対に忘れない」

そして一刻程の後――。朝靄が掛かる村の入り口に立つ、ヤマトの姿があった。

見送りは居ない。数匹の猫だけが、彼の背中を見つめている。

朝靄が消えるより早く、皆が起きる前に行けと、村長は言った。

だがヤマトは知っている。今はもう、普段ならば勤勉な村人たちは起き出して、畑仕事に精を出している時間帯なのだ。ヤマトに少しでも気を使わせないようにと、誰もが家の中で息を潜めてくれている。

「あんがと、みんな……行って来る」

目元を拭い、ヤマトは歩き出す。

会いたい人、ただ一人を目指して。

第四十三話：反撃の狼煙（一）

分厚い雲に覆われた黒い空。まだ夕刻だというのに辺りは夜のように暗く、時折、雷鳴が轟き山々に木霊して幾重にも鳴り響く。

滝のように降り続く雨の中、太郎丸は身を低く沈ませ、背の高い草原の中を駆けていた。背中には幾許かの食料と、何本かのポーションが入ったズタ袋。全て近隣の村々から少しずつ分けてもらったものだ。

やがて見えて来た丘の上に建つ一軒家を前に、足音を雨音に紛れ込ませ、扉の前まで移動する。そして息を殺して慎重に、少し痛んだ木の扉を、ゆっくり、ゆっくりと開いて行く。

「いま戻っ……うぉっ！？」

戻った、と言い終わるよりも早く、小気味良い風切り音と共に鉄製のフライパンが鼻先を通り過ぎた。

「あ、太郎丸さんだった。お帰りなさい」

「……いま戻った、スダチ殿」

身を反らしてフライパンを避けた太郎丸の目に映りこんだのは、思い切りフライパンを振り切った体勢でこちらを見やる、ちいさな娘の姿。ヤマトの妹、スダチだった。

着古したエプロンドレスに肩までの茶色い髪。小柄ではあるが快活な印象は、兄と血の繋がりを感じさせる。

「その、スダチ殿？　もうそろそろ、出会い頭にフライパンを振り回すのは……」

恐る恐るといった調子で、やんわりとスダチを諫める太郎丸。いつフライパンが翻るかと緊張しているようだ。

滅多に人が訪れる事の無い田舎の一軒家。幼い身で一人暮らしのスダチは、自衛策として少しでも怪しいと感じた足音に対しては戸口でフライパンを見舞う事にしていた。太郎丸はしばらく前に初見で一発。つい最近もう一発を鼻先に食らい、フライパンが多少のトラウマとなりつつある。

「でも太郎丸さん、もう避けられるから平気ですよね？」

「う、うむ。まぁ確かにそうなのだが……なるべくなら……」

悪びれずに言われてしまうと、他人の家の習慣という事もあって、少々追求し辛い。

「太郎丸様、お帰りになられたのですね。雨の中ご苦労様です……どうでしたか、辺りの様子は？」

二人が玄関先で話していると、明り代わりに火の付いた薪を掲げて、家の奥からアデリーネがやってきた。青味がかった銀髪をアップにし、ハーフパンツに厚手のチユニックだけを纏ったラフなスタイルだ。

「うむ、落ち着いた物だ。怪しい者を見たという話は無かった……安心は出来ぬがな」

スダチから受け取った手拭いで濡れた毛並みを整えて、偵察の結果を伝える太郎丸。

悪魔に支配された村からノエルを助け出した太郎丸とアデリーネ。彼らは今、ヤマトの生家に身を寄せていた。

村から逃げ出し追っ手を撒いた後、傷付いたノエルをゆっくり休

ませる場所を探した二人。だが、ほろ酔い亭を始めとしたサークスの知る場所に逃げ込んではすぐに見つかってしまう。そう考えた二人が逃げ込んだ場所、それがヤマトの生家だった。

一人静かに暮らすスダチには申し訳なかったが、相手は伝説の武具を見つけた英雄として各所で幅を利かせる白銀のサークス。他に頼るアテなど無い。

「ところでノエル殿は？」

「今は随分落ち着かれ、ご自分の部屋で横になられています」

「食事は？」

太郎丸の問いに、アデリーネは哀しげに首を横に振る。

「手を付けられていません。どうも焼けた油のような物を飲まされたようで、口から喉にかけてが……」

「あいわかった、アデリーネ殿」

全て聞かずともノエルの痛ましい有様は、間近で見た太郎丸にも良くわかっていた。普通の人間ならば数回死んでお釣りが来る程の責めを、若い天使はその身に受けているのだ。話を聞くだけでも辛い。

「天使は少々食べずとも死にはしないと聞くが……」

「はい……」

心配だ、との言葉を飲み込み、俯く二人。外の天気と同じく、家の中が重苦しい空気に包まれる。

そんな中、不意に上がる緊張感の無い声。

「ねえ、それはそうと二人とも……そろそろゴハン食べますか？」

顔を上げると、湯気の立つ小さな鍋を抱えたスダチが、食卓を準備しながら小首を傾げていた。

「……スダチ殿」

子供ゆえの無邪気さか、事の重大さに気付いていないのか。スダチの心情を量りかねた太郎丸が軽いため息と共に口を開きかけると、彼の胸元にお椀が一つ、ぐいっと押し付けられる。

「食べておかないと動けないですよ太郎丸さん。今、私たちの頼りはあなただけなんですから、無理してでも頑張って食べて下さい」

「う……うむ」

今は遠慮する、と食事を断ろうとした太郎丸は、出鼻を挫かれてしまう。

「はい、アデリーネさんも。家に来てから、あまり食べてないんですから。それともエルフは食べなくても平気なんですか？」

「あ……いいえ。い、頂きます……」

不承不承といった様子でお椀を受け取った二人に背を向け、鍋を手にスタスタとノエルの部屋へと歩いて行くスダチ。これはまずい、と気付いたアデリーネが逸早く声を上げる。

「待って下さい、スダチさん！　今、ノエル様は……その、そっとして置いてあげた方が……」

その声にくるりと振り返るスダチ。彼女はじっとアデリーネの顔を見つめた後、頭の辺りへと視線を移した。

「わ、私の顔に何か……？」
「アデリーネさん、その髪留め……お兄ちゃんに貰ったの？」
スダチの指摘に、全身を強張らせるアデリーネ。ピンと背筋が伸び、背中と掌に一瞬で嫌な汗が滲み出す。
銀のロングヘアを留めている大事な髪飾り……小さな花びらがあしらわれた、壊れた髪飾りは確かに一度はヤマトの手にあった物だ。
「あ、ど……どうして……」
「ううん、なんとなく。なんか、お兄ちゃんが好きそうなデザインだったから」
事も無く言ってのけるスダチ。取り残された形の太郎丸は「そうなのか、アデリーネ殿？」と聞くので精一杯だ。
「あの、いえ、その……これは……」
言葉に迷うアデリーネ。身内とはいえ、まさかこうも容易く看破されるとは思わなかった。
かといって『直接ヤマトから貰ったわけではなく、彼がノエル用に買ったが壊れて捨てた物を拾い、後生大事に付けてます』などと言えるはずもない。同時に、当のノエルが寝込んでいるというのに、件の髪留めを恥かしげも無く付けている自分が酷く卑しい女であるとも感じられた。
「この髪留めは……じ、自分で……」
「ふぅん、そうなんだ」
完全に見透かされていると感じるアデリーネであったが、今の彼

女にはそれ以上に気の利いた言葉が思い浮かばない。何を言った所で、スダチの前では説得力など皆無だろう。兄に貰った物を嬉しそうに着けながら、ノエルを気遣うフリ？　片腹痛い！……と、そんな声が聞こえて来そうだ。

返す言葉も無く、アデリーネはそっと髪留めを外し、手の中に隠した。本来なら捨てるか返すかすべきなのだろうが……泥棒猫のような真似をして手に入れたとはいえ、彼女にとってはこの上なく大切な物なのだ。もし取り上げられでもしたら……きっと泣いてしまう。

しゅんとして、すっかり小さくなったアデリーネ。そんな彼女にスダチは一瞥をくれると、くるりと踵を返す。そして止める間もなく、ノエルの部屋の扉を叩いた。

ピンク色のペンキを使い、子供っぽい字で『ノエルのへや』と書かれた扉。その向こう側にノエルは居るはずだ。しかし、ノックの後しばらく待ってみても返事は無い。

「開けるよ、ノエルお姉ちゃん」

元々、鍵の無い扉だ。スダチは半ば強引に、扉を押し開ける。

「お姉ちゃん……？」

何も無い部屋――窓には戸板が打ち付けられ、テーブルも、椅子も無い。備え付けの棚も空っぽで、床には包帯の切れ端とポーションの空瓶が何本か転がっているだけ。何も無い、というよりも、その場を満たすべき物が失われているのだとスダチは感じた。

その部屋の端に、押し付けられるようにして設けられたベッド。そこへ敷かれた血に汚れたシーツの上で半身を起こし、彼女は……ノエルは佇んでいた。

「スダ、チ……ちゃん」

掠れた声。かつて『澄んだ鈴の如き美声』と称えられた声は、もう存在しない。悪魔によって喉は焼かれ、完全に潰されていた。そしてそれは、顔や身体も同じだ。滅茶苦茶にされた顔と翼には幾重にも包帯が巻かれ、折られた両手、両脚には添え木が為されている。何も知らずに彼女を一目見て、天使だと言える者は皆無であろう。

「ごはん、食べないとダメだよ。良くならないよ」

棚の端に鍋を下ろし、お椀へと食事を盛るスダチ。湯気の上がるそれは、柔らかな芋の煮物だ。

「前に良くお母さんがつくってたの、覚えてるでしょ？　お姉ちゃんも好きなやつだよ」

喋るスダチの方へと首を廻らせるノエル。包帯によって隠された左目は潰されたまま再生しておらず、視界が狭い。その為、瞼の失われた右目のみで動きを追おうと、自然に動きが大きくなる。

「私……いいよ。み、みんなで食べて……食べなくても、平気だから」

口元の包帯を避けて、小さくノエルが言った。だがそれを無視してスダチはお椀いっぱいに煮物を盛ると、スプーンを手にノエルのベッドに腰を下ろす。

「ダメだよ、お姉ちゃん。食べないと」

煮物をスプーンで掬い上げ、顔の前へと差し出すスダチ。だがノ

エルはゆっくり首を横に振って、それを拒んだ。

「た……べたいけど、喉痛くて……飲み込め、ない……の」

「ううん、それでもダメ。痛いのはわかるけど、我慢して食べて！　そうしないと、治んない！」

強引に食事を進めるスダチに根負けしたか、それとも呆れたか。ノエルは少しだけ顔を引いて姿勢を変え、背中をスダチへと向ける。

「これ……見て、スダチ……ちゃん」

そう言ってノエルは、怪訝そうな顔をするスダチの前で、翼に巻かれた包帯を解いて行く。ベリベリと音を立て、乾いた血と共に包帯に張り付く赤茶色に染まった羽毛が剥がされ、露わとなる翼……だったモノ。

「スダチちゃん……ゴメン、ね。気持ち、悪い……でしょ？」

包帯の下から現れたノエルの翼は、村で傷付けられた時と同じ……ほぼ禿山状態で地肌がむき出しのままだった。根元から折れ曲がって垂れ下がり、腫れ上がった上に内出血によってどす黒く染まっている。

「私が、ここに戻って……一週間、くらい？　村から逃げた日からだと……もっと、経ってるよね」

掠れた声で、ノエルは一つ一つの事実を確認して行く。

自分が助け出されてから、結構な日数が経過している事。その間、ほぼ毎日のようにポーションによる治療が行われていた事など、スダチが判るように、言葉を選んで慎重にだ。

「これだけやったら、普通……もう少し、良くなる。でも、私の翼……全然、治ってない。顔なんか……もっと、酷い。それに……」

ゆっくりと添木で固定された腕を持ち上げて、部屋の外から漏れてくる光へとかざすノエル――光を操ろうとしているのだ。しかし床に伸びる光は微動だにせず、音も無く、淡く輝くばかり。

「天使の、力も……もう、使えない」

力無く腕を下ろしたノエル。能力の消失を示すかの如く、ずっと彼女の頭上で輝いていた天使の光輪も今は消え失せている。

そこまでやって見せて、彼女はスダチの目をじっと見つめた。

わかったでしょ？　もうダメなの、治らないの。だから、そっとしておいて――。傷付いた天使の目は、そう語っている。

「で……でも、だからって諦めちゃうの!?　まだ早いよ!　がんばろ、ノエルお姉ちゃん!　私も応援するから!」

身を寄せて叫ぶスダチ。しかし彼女の言葉は、ノエルに届かない。

「もう……良いよ。別に、治りたいとも、思わないし……治っても、やりたい事、無いし」

「いいの!?　ホントにそれでいいの、お姉ちゃん!　モタモタしてたら、アデリーネさんにお兄ちゃん取られちゃうよ!?」

スダチの言葉に「あ、そうか」と気付くノエル。スダチは知らないのだ。ヤマトが、自分の前から去った事を。無神経な自分に愛想を尽かし、彼が行ってしまった事を。

「スダチ、ちゃん。ヤマトは……」
「お姉ちゃん、おかしいと思わないの!?　いっつもノエルノエル言ってウロウロしてるお兄ちゃんが、こんな時に飛んでこないなんて！　あのお兄ちゃんがだよ!?」

またも、スダチに気付かされるノエル。
ヤマトが居ないのは、彼自身の意思による物だとばかり思っていた。だが自分がそうであるように、ヤマトだってもう一度会いたいと願ってくれているのなら……。

「きっと何かあったんだよ！　だから来れないんだよ！　そうじゃなきゃ、とっくに来てる！　それでロクに話も聞かずに、ノエルお姉ちゃんの仕返しだって言って飛び出して行ってるよ!!」
「……スダチちゃんの、言うとおり……かも、ね」

もしそうであったなら、どれだけ嬉しいだろう？　昔、子供だった頃。近くの村でイジメっ子に、天使のくせに飛べないとからかわれた時のように「ノエル泣かすヤツは俺が許さねぇぞ！」と大見得を切って助けてくれたなら、どれほど……。

「ノエルお姉ちゃん。お兄ちゃんとケンカか何かしてるんでしょ？　前に来た時、様子がおかしかったからわかったよ」

当たらずとも遠からず。若干場違いな思いではあったが、スダチはいつも鋭い所を突くと感心するノエル。

「でも……きっとお兄ちゃん、もう怒ってないよ。ケンカは弱っちいし、ちょっと怒られただけですぐにヘコんじゃうくらいガラスのハートな人だけど……凄く単純だし、それに……」

ぎゅっとシーツを握り、スダチが叫ぶ。

「ウチのお兄ちゃん、意外と強いもん！！」

そしてスダチは、再度お椀から芋の煮物をスプーンで掬い上げる。

「お兄ちゃんに何があったとか全然わかんないけど、きっとお姉ちゃんを心配して探してる。だから、会った時の為にお姉ちゃんは少しでも傷を治しとかないと！　だから食べて、少しでも良いから！」

グイグイと強引なスダチ。そして彼女は続ける。

「それともノエルお姉ちゃん、怪我でお兄ちゃんの気を引く作戦？　だとしたら、それちょっとズルいよ？　お姉ちゃん天使なんだから、ズルはダメだよ！」

全く……どちらがズルいのやら。スダチに気付かれないよう、ノエルはそっと溜息を吐いた。それは諦めの溜息……自暴自棄でいる事を、諦めた溜息だ。

馬鹿で身勝手な姉を説得する為、自分の中にある、ありとあらゆる引き出しをこじ開けて、必死に声を上げる可愛い妹。傷が治らないとしても、彼女の為に……私だって、ほんの少しだけ、まだ頑張れるんじゃないだろうか？

いや、ここで頑張れなくっちゃ、天使どころか、姉失格だ！

「そう……だね。少しでも、良くなっておかないと……ね」

「……！　うんっ！！」

笑顔を見せるスダチ。久々に見た他人の笑顔に、すっかり忘れていた暖かな物が心に灯った気がする。これから先の事を思うと気は

重いが……。

「はい、お姉ちゃん。みんな結構美味しいって褒めてくれたんだよ！」

うん、なんとか頑張れる気がする。

傷付いた天使が決意も新たに一歩を踏み出した時……。

「……あれっ？」

激しい雨音が、微かに変化した。

第四十四話：反撃の狼煙（二）

スダチが強引にノエルの部屋へと突入した時、部屋の外には微妙な……なんとも言えない、重苦しい空気が充満していた。

空気の発生源は、壊れた髪飾りを手に立ち尽くすアデリーネだ。普段から冷静な彼女にしては珍しく、言葉も無く俯き、小さく震えているようにさえ見える。

「あ……アデリーネ殿」

雨音だけが支配する室内。何と声を掛けて良いかわからず所存無く座り込んでいた太郎丸であったが、いつまでもこうしていた所で埒が開かない。何でも良いから、思い切って声を掛けてみよう――そう考え、口を開く。

「その髪飾りは、ヤマトに貰っ……」

そこまで言った瞬間だ。ギッ！　と鬼のような形相でアデリーネに睨みつけられ、太郎丸は慌てて口を噤む。この話題は、かなりホットな地雷であるようだ。地雷原の数歩手前で危うく踏み留まった事に気付き、肝を冷やす。何か他の話題を探さなくては――。

「そ……そうだ、アデリーネ殿。せっかくスダチ殿が作った飯が冷めてしまう。早々に頂くとしようではないか、なぁ？」

白々しく言ってみた太郎丸だったが、アデリーネからの反応は皆無。無視されているというよりは、耳に入っていない感じだ。

「……あ、アデリーネ殿？　如何なされた？」

恐る恐る、アデリーネの顔を覗きこむ太郎丸。すると、いつも知的でクールな大人のエルフである彼女が、口を真一文字に引き結び、顔を真っ赤にして目を潤ませ、肩を震わせているでは無いか。

「だって……ですからっ」

「ん？　な、何か申されたか？」

人狼の優れた聴力を持ってしても聞こえない程に小さな声量で、何事かを呟くアデリーネ。なんとなく、面倒な予感を感じた太郎丸だったのだが……思わず聞き返してしまう。そういう性分なのだ。

やれやれ仕方が無い……そう思った彼がきちんと座り直して聞く体勢を整えると、それを待っていたかのようにアデリーネが声を上げた。

「だって……だって、しょうがないじゃないですか！　どうしても、欲しかったんですからぁっ！！」

溜め込んでいた気持ちを吐き出すと、溜めていた涙も同時に溢れ出す。次々に頬を伝う涙としゃくり上げる声は、普段見る彼女とはまるで別人。年端も行かぬ子供のようだ。

「前に……隠里から町に戻った時……や……ヤマト様がアレを買ってるの、私……偶然、見てて……」

「アレ、というのは髪飾りか。隠里から戻った時というと、我らだけで行動していた時だな」

涙声で語られるアデリーネの心情を、太郎丸は丁寧に聞き、解き解いて行く。どうやらヤマトが道具屋で髪飾りを買う姿をアデリーネが目撃したのが、事の発端となったようだった。

「アレは、絶対にノエル様に買ってるんだと思って……でも、少しだけ……私にも何か、あるかもって……ひぐっ……」
「どれ、これを使うと良い」
込み上げる涙で溺れそうな娘へ、太郎丸は手拭いを渡す。
アデリーネは、ヤマトが自分にも何かプレゼントを買ってくれるのでは無いかと淡い期待をしてしまったのだと言った。だが優しいだけで朴念仁のヤマトが、そんな気の利いた事を出来る筈が無い。案の定アデリーネには何も無く、せっかく買ったノエルへのプレゼントも渡し損ねるという体たらくだったのだ。
「でも、何も無かったのは……ぐすっ。それほどでもなくて……」
少しがっかりはしたものの、自分はヤマトに買われた身。高望みが過ぎたと反省し、日々のあれこれに邁進するアデリーネ。やっと冒険者としての活動に慣れ、手応えを感じ始めていた、そんな頃だった。突然ヤマトが居なくなったのは。
「それで、ヤマト様を探しに行った時……ゴミ捨て場に……」
それは偶然だった。最後にヤマトの目撃情報があったゴミ捨て場。そこを訪れたアデリーネの目に飛び込んできたのは、壊れてゴミと一緒に捨てられていた、見覚えのある髪飾りだった。
これはヤマト捜索の手掛かりになるかもしれないと拾い上げたアデリーネに、ふと後ろ暗い考えが過ぎる。どうせ捨てるような物なら、自分が貰っても良いんじゃないだろうか？　と。
「捨ててありましたしっ……壊れてたから、誰もいらないと思って……」

誰にとっても不要な物だとしても、アデリーネはその髪飾りが欲しかった。ヤマトが買ってくれる、彼の想いが詰まったプレゼント。どれほど願っても彼女には決して手に入らない物だ。

それが今、手の中にある。

「それで、こっそりと自分の物にしたというわけか」

太郎丸の言葉に、黙って頷くアデリーネ。その頃にはもう、涙は止まっていた。

「アデリーネ殿、それほど思い詰める事ではござらんのではないか？　某とて何者かに恋焦がれる気持ちはわかる……それに不要品として捨ててある物を拾った所で、悪い事とは……」

「ですが、恥かしい事です」

諭すように語る太郎丸の台詞を遮り、きっぱりと言い切るアデリーネ。彼女が胸に秘める思いまで推し量る事はできないが、人としての尊厳だとか、女のプライドとか、そういった部分に強く関わる事なのだろう。

「本来ならスダチさんに指摘された時点で……いいえ、もっと前に捨てるべきだったのです。でも……」

壊れた髪飾りを、両手でぎゅっと握り締めるアデリーネ。せっかく止まった涙が、見る見るうちに、またも零れ始める。

「わっ……私には宝物でっ……す、捨てられなくてっ……！　ヤマト様、居なくなっちゃうし……私だって、お屋敷出てから慣れない事ばっかりで、心細かったのにっ……！」

「アデリーネ殿……あいわかった、涙を拭かれよ」

泣きじゃくるアデリーネを座らせ、背中をさすって宥める太郎丸。ここの所いろいろあって、すっかり他に気を取られていたが……確かにアデリーネは、さぞ心細い思いをした事だろう。せめて自分が気付いてやれれば良かったのだが、今となってはもう遅い。

「大丈夫だ、アデリーネ殿。お主の宝物を、誰も捨てろなどとは言わぬ。某が言わせぬ。安心召されよ」

そんな薄っぺらい言葉しか掛けられない自分を情けなく思う太郎丸だったが、元々、あまり口が上手な方では無い。あとは行動で示すしか無いだろう。ヤマトが戻るまでの間――それが何時までなのか不明だが――自分に出来る精一杯の形で、この強く儚い娘を庇い立ててみよう。

「さあ、元気を出されよ。先にも言うたが、煮物が冷えてしまう。スダチ殿では無いが、少しでも食べて気力を……」

「ぐすっ、ありがとうございます……？」

涙を拭って煮物の入ったお椀を受け取るアデリーネ。だが不意に押し黙った太郎丸に、只ならぬ気配を感じて身を硬くする。

この時、太郎丸には聞こえていた。降り頻る雨を遮り動く、何者かの足音が。

「早急にスダチ殿を連れ、ノエル殿の部屋へ隠れるのだアデリーネ殿。何かが、ここへ近付いている」

「は、はいっ！」

泣いている場合ではないと涙を拭い、慌てて家の奥へと引っ込む

アデリーネ。彼女を見送り、太郎丸は腰の剣に手を伸ばす。
近付いて来る不審者の気配。スダチの話では、普段この家に来る物好きなど殆ど居ないとの事。そんな場所へ雨の中、わざわざやって来る理由……となれば、これはもしや追っ手に我らの居所がバレたか？
柄に添えた手に、汗が滲む。これまでに感じた事の無い、激しい緊張。
今、頼れるのは太郎丸しかいない――そうスダチは言っていた。確かにそのとおりだ。自分が倒れれば、背中に庇う三人の娘にも危害が及ぶ。それぞれが、それぞれの強さを持つ、尊敬できる娘たち……彼女らが傷付く事、それだけは避けたい……絶対に！　何があっても守りたい！

「命に代えても……ッ！」

扉の前で腰を落とし、神経を集中してジッと一瞬のタイミングを待つ。家の外で追っ手が扉に触れようとした瞬間――その時に、一呼吸で斬り捨ててくれる！
待ち構える太郎丸の元へ、何者かが近付いて来た。扉の手前で立ち止まる気配――！

「きえぇぇぃ！！」

怪鳥音と共に、横一文字！　入り口扉もろとも、扉の向こうに立つ何者かの胴を輪切りにして斬り倒す。
手応え有り！　だが――。

「これは……！」

太郎丸が斬って捨てた、丸太のように太い胴体。だがそれは、胴

では無い……脚だ。八本ある内の、一本。
破れた扉の隙間から垣間見える真っ黒な雨雲。そこに浮かぶのは十六からなる真っ赤に輝く複眼。針のような毛に覆われた、見上げんばかりの巨体。

「……大蜘蛛！！」

家と同じか、それよりも大きな蜘蛛が、赤と黒の毒々しい身体を雨に光らせて鎮座していた。切り落とした脚の先からは、自然には有り得ない真っ黒な体液が流れ落ち、徐々に傷口を塞ぎ再生している。
真紅の眼、真っ黒な体液、異様な再生能力。明らかに悪魔憑きだ。冒険者の依頼において、ごく普通の、悪魔憑きでは無い大蜘蛛を討伐する際に提示される推奨レベルは7。家を超えるサイズの物となれば１０前後のレベルを求められる。悪魔憑きともなれば、そのレベルは一気に跳ね上がり、２０か３０かといった所だろう。
しかも太郎丸が大蜘蛛の背後に目をやると……更に二体。合計三体の大蜘蛛が、草原の小さな家目指してゆっくり歩を進めている。

「逃げる際、糸でも付けられていたか？……ぬかったわ」

剣を鞘に戻し、雨の中へと進み出る太郎丸。彼のレベルは……17。

「相手にとって不足なし」

身の丈を遥かに超える巨体に三方を囲まれ、背には守るべき家を背負い、漆黒の人狼は腰を落して構える。そして――。

「太郎丸、いざ……参る！！」

雨が、爆ぜた。

第四十五話：反撃の狼煙（三）（前書き）

このお話には残酷な表現が含まれます。苦手な方はご注意下さい。

第四十五話：反撃の狼煙（三）

四方八方、ありとあらゆる方向から強い粘性を持った蜘蛛の糸が吐きかけられる。太郎丸は身を屈め、地を蹴って影のように走り、それらの糸を紙一重で避けて身を翻す。

一瞬でも気を緩めればそこに待つのは死の一文字。脳裏に浮かび上がる自らの姿……蜘蛛の糸に絡め取られ、大顎に噛み砕かれる無残な死体。その映像を掻き消し、ただひたすら戦闘に集中する。

視界が埋もれる程の糸をかわし、時折りやってくる大顎を弾いて防ぎ、隙を見て堅甲の隙間へと漸撃を叩き込む。太郎丸にとって幸運だったのは、三体の大蜘蛛がそれぞれ自分勝手に攻撃を繰り出してくる事。もし連携が取れていたなら、五分ともたなかっただろう。

「せいッ！！」

裂帛の気迫でもって刃を走らせ、前に出ていた大蜘蛛の脚を一本、斬り飛ばす。

元が昆虫であり、なおかつ悪魔憑きとなった大蜘蛛であっても、やはり痛みはあるのだろうか？　脚を失った大蜘蛛は大きく仰け反り、金属を擦り合わせるような不快な咆哮を上げてのた打ち回る。

これで最初に斬った分も含めれば、切り落とした脚は合計四本。一体に集中して攻撃を加えた為、三体の大蜘蛛の内一体は機動力が半減した事になる。

だが、もう次は無い。

ちらりと見た愛刀は刃こぼれを起こし、所々が痛々しく朽ちていた。蜘蛛の体液に何か金属を腐食させるような毒が含まれていたのだろう。

「ここまでか。後は持久戦……！」

切り落とした脚を盾代わりに使って糸を避け、背の高い草の間を縫うようにして走る。

さあ追って来い。体力の続く内に、娘たちが隠れる家から少しでも遠ざけてくれる――。

だが太郎丸は、自分の考えが酷く甘いものであった事をすぐに知る事となる。

「な……ッ！！」

突如、脚を取られての転倒。移動する事に気を取られ、全く気付かなかった。草原に生い茂る草の中、その至る所に細い蜘蛛の糸が張り巡らされていたのだ。

脚に粘り付く何本もの糸。細くしなやかでありながら鋼のような強度を持つその糸は、ぐいぐいと太郎丸の脚を締め付け、脛当てを砕き、肉へと食い込んで来る。

「ぐぁっ……！　この程度！！」

副武装の小太刀を抜き、無理矢理糸を切り落とす。その際に多少の肉も抉れたが、気になどしていられない。それよりも時が惜しかった。

だが、立ち上がり再度走り出そうとした太郎丸の眼前に、地鳴りを伴って大蜘蛛が降り立つ。脚を大きく広げ、勝ち誇るように大顎を打ち鳴らす邪悪な姿――進路を塞がれてしまった。

「くっ……！」

あきらめてたまるか！

身を翻し、残る道を探す。しかし至る所に蜘蛛の糸が張り巡らさ

れ、糸の無い場所は大蜘蛛が塞いでいる。

「万事休す、か」

これ以上は逃げられそうにない。こうなれば……。

小太刀を構える太郎丸。刺し違える覚悟であれば一体くらい、どうにか出来るかもしれない。その間に願わくば娘たちよ、一歩でも遠くへ逃げてくれ――そう祈りを込めて、刃を振るう。

だが現実は厳しい。主武装に比べて短く、攻撃力にも劣る小太刀は大蜘蛛の硬い外殻に弾かれて歯が立たず、一体を倒すどころか傷を負わせる事さえ難しい。しかも太郎丸が脚に受けた傷は思いの外深く、人狼の機動力を大きく鈍らせる。

「ぐぁ……ッ！」

やがて利き腕に絡まる糸。易々と手甲を砕いて肉に食い込み、ミシミシと締め上げて筋肉を千切って行く。血液が搾り出されるようにして腕から流れ落ち、すぐさま感覚が無くなった。取り落とした小太刀を拾おうと、必死に伸ばした逆腕にも糸が巻き付き、更には脚、そして首にも……。

最早これまで――。首に食い込む糸によって喋る事さえ出来ず、薄れ行く意識の中でそう思う。

戦いの中で死ねるのは本望だが、最後がこのザマとは些か心残りだ。幼いスダチと傷ついたノエル、そしてアデリーネは逃げ切れるだろうか？　気掛かりでならない。

そしてヤマト……まだまだ未熟で覚束ない男の行く末を、隣に立ち、この目で是非とも見ていたかったが……致し方あるまい。

目が霞み、雨音が遠ざかって行く。そんな中――。

「……丸様！」

声が聞こえる……自分を呼ぶ声だ。

「太郎丸様、しっかりなさって下さい！　諦めるには、まだ早すぎます！」

今度ははっきりと聞こえた。間近で我が名を呼ぶ女……アデリーネの声。心なしか、その肌の温もりすら感じられる気がする。

そして温もりは次第に熱く、激しく、炎のような熱でもって身体を炙り――。

「熱ぅッ！？」

「お早いお目覚め、感謝致します」

朦朧とする意識をどうにか振り払い、目を開く太郎丸。その眼前には、ずぶ濡れのアデリーネが居た。肌に張り付く髪を避けながら、倒れた彼を庇うようにして立つ彼女の手には、明々と燃え盛る松明。

「この蜘蛛の糸、随分と強靭ですが細さ故か熱に弱いようです。少々乱暴かとは思いましたが、太郎丸様に絡まっていた糸も、燃やして取り払いました」

言われて自分の両手を見れば、蜘蛛の糸はボロボロになって解け、代わりに体毛が焼け縮れて嫌なニオイを出している。さっき感じた熱はコレだったようだ。

だが、そんな事より……。

「アデリーネ殿、何故逃げぬ！　後の二人は！？　お主が付いておらねば、怪我人と子供ではとても……！」

敵を前にして言う事では無いと思ったが、思わず口に出た。せっかく敵を引き付け時間を稼いだというのに、ノコノコ出てこられては意味が無い。これでは命を捨てる覚悟で挑んだ自分が馬鹿のようでは無いか。

「申し訳ございません。私のせいで、太郎丸様の頑張りをふいにしてしまったようですね……」

ジリジリと後退しつつ、こちらをちらりと振り返ったアデリーネ。絶望的な状況の中、松明の炎に照らされる彼女は……なんと、微かに笑っていた。

「ですが、先にこれをやったのは太郎丸様なのですよ？　人がせっかく身体を張ったというのに『遅れてすまん』などと言って。あの時は流石に腹が立ちましたわ」

「む……！」

悪魔の村で、時間稼ぎにアデリーネが残った時の事を引き合いに出されてしまった。アレとコレとは話が別だ！　と言いたかった太郎丸だが、客観的に見れば非常に酷似した状況だと思える。

「それに以前、皆様方は私にこう言われました。次の機会などと言わず、今やりたい事をやれ、と」

それは確かエルフの隠里での事だったろう。狂ったシルフを放置しての一時撤退を薦めるアデリーネに、確かそんな事を言ったような――。

「いや、それを言ったのは某ではない。ヤマトだぞ？」

「私にとっては同じ事です」

さらりと返すアデリーネへ、ふん、と鼻を鳴らして応じる。この状況で、よくもまぁ言ってくれたものだ。

両脚を踏ん張り、歯を食いしばって、のそりと立ち上がった太郎丸。身体は重いが……萎えかけていた気力は完全に戻っていた。

「すまなかった、アデリーネ殿」

「……？　何がでしょう、太郎丸様」

守るなどと、おこがましい事を考えていた事を詫びる。

そうだった。彼女は強い……自分よりもずっと強く逞しい。共に並び立ち戦うに相応しい、頼れる仲間だ。

「いや、某の独り言だ。お気にめさるな」

拾い上げた小太刀を構え、アデリーネと背中合わせに立って、にじり寄る大蜘蛛へ睨みを利かせる太郎丸。

「さて……それではアデリーネ殿、反撃と洒落込むか！」

負ける気がしない。

いま太郎丸は、生まれて初めて誰かに背中を預けていた。

第四十六話：反撃の狼煙（四）（前書き）

このお話には残酷な表現が含まれます。苦手な方はご注意下さい。

第四十六話：反撃の狼煙（四）

変わらず降り頻る雨の中、さて、と一息ついて、太郎丸は背後のアデリーネへ小声で尋ねた。

「ところで……某、反撃などと嘯いてみたものの、取り立てて手段があるわけではござらん。アデリーネ殿、どうなされる？」

聡明で知られるエルフが、この危険な状況へ松明だけを手に飛び込むわけが無い。何か逆転の策を携えての参戦であろう――そう思い聞いたわけなのだが……。

「何もありませんよ」

予想外の素っ気無い答えに気を削がれ、え？　と聞き返す太郎丸。

「この蜘蛛の糸が炎に弱い事だけを確認し、慌てて駆けつけましたので策は何もありません。やって来た時、糸を燃やして作った道も既に塞がれているようですし」

期待はずれも良い所だ。途端に背中が寒く感じられる。

だが贅沢は言えない。糸が炎に弱い事、そしてその炎を持ち込んでくれた事だけでも十分な……。

「太郎丸様、申し訳ございません。雨が強く、松明の火が消えてしまいました。やはり即席では限度があるようです」

「……！！」

淡々と冷静に状況を告げるアデリーネ。そんな彼女に詰め寄って

「消えただとぉ！？」と叫びたくなる気持ちを太郎丸はぐっと堪えた。叫んだって仕方ない。今は二人、力を合わせる時なのだ。

じりじりと間合いを詰め、襲い掛かるタイミングを計る大蜘蛛の目を盗み、太郎丸は必死に周囲へ視線を走らせ策を練る。

こんな時、ヤマトであれば高い洞察力で相手の裏をかき、隙を突いて会心の一撃を決めるのであろう。だが自分にそのような機転は働かない。敵と向かい合い、真正面から斬る以外には何のとりえも無い能無しなのだ。

あの男なら、この状況をどう切り抜ける？　考えろ太郎丸、全力で！　もう時間が無い……！

「太郎丸様……何をお考えです？」

「静かにしてもらえるか、アデリーネ殿。いま、必死に考えをめぐらせている所だ」

疎ましげに会話を打ち切る太郎丸。もう次の瞬間には大蜘蛛が襲い掛かって来るかもしれないのだ。今は一秒でも時間が惜しい。

「もしや、ヤマト様ならどのように立ち回るか……と考えているのですか？」

「良いから、黙っておれ！」

太郎丸の口調が、若干荒くなる。策が無いのなら静かにしててくれ。今はとにかく集中して、打開策を考えなくては！

だがアデリーネは、そんな太郎丸の焦燥と苛立ちを軽く受け流して言葉を続ける。

「太郎丸様、だとすれば、それは無意味です」

「～ッ！！　煩いぞアデリーネ殿！！」

とうとう堪忍袋の緒が切れた。怒りを露わに牙を剥き、背後のアデリーネへと怒鳴りつける。

「何故、無意味と言い切れる！　ヤマトは力で劣ろうと知恵を絞って必死に立ち向かい、状況を打開して来た！　ならば某とて奴と同じ！　頭足りずとも全力で考え、知恵を絞り出すのみ！！　それが何故、無駄だと！？」

雨の音に負けぬ、叩きつけるような怒号。だがアデリーネは顔色一つ変えない。それどころか、より落ち着いて、より冷静に――事実だけを告げる。

「理由は簡単です、太郎丸様。なにも奇策を練らずとも貴方様の実力であれば、この蜘蛛たちに勝てるからです」

「な……！？」

何を馬鹿な、気でも狂ったか？　その言葉を太郎丸は辛うじて飲み込んだ。

利き腕を痛め、愛刀を失った自分。傷や疲れによって戦闘開始直後よりも明らかに能力は低下している。万全の状態でも歯が立たない相手に、消耗した今の自分が勝てよう筈も無い。

「太郎丸様、ご心配には及びません。戦いが終わる頃には――私が『策など何も無い』と言った意味が、おわかり頂けるでしょう」

そんな彼の気持ちを読み取ったのだろう。アデリーネが軽く振り返って囁く。その口元には……余裕の笑み。

「下手の考え休むに似たり。もう休憩は終了です。敵が……来ます！」

ついに大蜘蛛が動いた。尻の先から糸を噴出し、数ある脚を振り上げて三方から同時に二人を襲う。

こうなったら破れかぶれだ。何の策も無いまま、太郎丸は小太刀だけを頼りに戦う覚悟を決める。

「おぉぉっ！」

糸をギリギリで避け、迫る蜘蛛の脚を小太刀でいなして身をかわす。敵わぬまでも、せめて一太刀……硬い部分に刃は立たないが、柔らかい部分であれば刃も通るかもしれない。そう考えて、ジリジリと間合いを詰める。

アデリーネはと視界の端で見てみれば、火は消えたものの未だ熱の残る松明で蜘蛛の糸を掃い、大蜘蛛の一体を引き付けて逃げに徹しているようだ。

「いま暫らく堪えてくれ！」

「こ、心得ておりますっ！」

せめて一体、蜘蛛を減らす事が出来れば。そうすればアデリーネだけでも逃がせるかもしれない。脚を怪我し、動きの鈍った自分に出来る事といえば、その程度だ。

視界を覆いつくす勢いで吐きかけられる糸……それは遥か遠く、故郷の店先に下がる簾を思い起こさせる。幾重にも重なるそれらの隙間へと身を滑り込ませ、最小の動きで避け、やり過ごし、少しずつ大蜘蛛へと近付く太郎丸。一歩一歩確実に、じわじわと敵を追い詰める。

――何故だろうか。

先程まで、あれほど激しく感じていた大蜘蛛の攻撃。だが今は、少し手緩い程度に思える。時間が経ち、幾度も攻撃を受ける内……

繰り返される大蜘蛛の攻撃に慣れたのだ。勿論、アデリーネが一体を引き受けてくれた事も大きいだろう。しかし太郎丸の目が、耳が、鼻が……五感全てが敵の動きを読み取り、あらゆる情報を伝えて来る。

大蜘蛛の脚が動いた瞬間、振り下ろされる位置がわかる。風を切る音が聞こえたなら、糸が飛来する合図だ。そしてこのニオイ……これは、追い詰められた獲物が発する、焦りのニオイ。

「ギィッ！？」

これでもかと繰り出した攻撃の全てを人狼に避けられ、間近までの接近を許した大蜘蛛。圧倒的優位である筈の自らが追い詰められるという不測の事態に、大いに焦り、戸惑い……判断を誤る。

疎ましい人狼を噛み砕いてやろうと、頭を下げたのだ。

「ふんッ！！」

下がった大蜘蛛の頭、そこで真っ赤に輝く複眼目掛け、しっかりと握り込んだ小太刀を突き立てる太郎丸。岩を突いたような硬い感触と、その岩が砕ける確かな手応えが全身に伝わって来る。

「討ち取った……！」

根元まで突き刺した小太刀を渾身の力でもって捻り、引き抜くと、大蜘蛛は潰れた目から真っ黒な体液と、ヘドロのような何かを撒き散らしてのたうち始める。脚を意味も無く振り回し、尻から吐き出す糸も止め処なく垂れ流し状態。多分ヘドロのように見えた何かは蜘蛛の脳か、それに類する運動を司る部位だったのだろう。

小太刀を一振りして穢れを払い、他二体の蜘蛛へと向き直る太郎丸。その目には、失われていた確かな物……自分への自信が満ちて

いる。

「……忘れていたな」

敵に近付き、斬る。ただ、それだけ。自分に出来る事は、それくらいしか……それ以外には無い。

だが、それで良い。

サークスの剣技や、ヤマトの機転。ノエルの聖なる力やアデリーネの知恵。それらに勝る物など、自分は持ち合わせていない。だがそれ故に、一歩一歩確実に、地道に、真面目に、ひたむきに……わき目も振らず真っ直ぐに歩くしか無いではないか。

「ギィィッ！！」

糸を吐く大蜘蛛……だが最早そんな物、恐れるに足りぬ。水鉄砲も同然だ。そしてそれは脚による攻撃も同様。避けながら関節部へと小太刀をねじ込み、引き裂く――ただそれだけで、一抱え程もある脚が千切れて転がった。

程無く八本ある脚の全てが地に転がり、身動きの取れなくなった大蜘蛛の頭部へ、躊躇無く小太刀を突き立てる……先と同じ感覚。そして噴出すヘドロ。

「残り、一体」

太郎丸の声に、アデリーネを追っていた大蜘蛛がようやく事態に気付く。

いつの間にか倒されていた同胞。手負いの獣が放つ、只ならぬ殺気……そして大蜘蛛は判断する。逃げよう、と。

だがその判断は、あまりにも遅すぎた。

「逃しはせぬぞ！」

先に切り落とし、糸が絡まったままとなっていた大蜘蛛の脚を拾い、力任せに投げ付ける太郎丸。大蜘蛛の胴に命中したそれは、未だ粘性の落ちない糸で悪魔の四肢を絡め取り、動きを鈍らせる。

もらった。

そんな声が聞こえたか否か――。瞬間、小太刀の煌きを最後の映像として脳に残し、大蜘蛛の思考は途絶える。砕かれた複眼、噴出すヘドロ。コントロールを失った複数の脚がくるりと腹側へと丸め込まれ、大きな図体は地鳴りを起こして仰向けに引っくり返り、痙攣し始める。

「……ふぅ」

戦闘能力を失った大蜘蛛を見やり、ゆっくり息を吐いて濡れた草に膝を付く太郎丸。極度の緊張と集中から解き放たれ、蓄積していた疲れと痛みがどっと押し寄せる。

利き腕、そして脚から流れ出す大量の血液。早鐘を打ち鳴らすが如く鳴り響いていた心臓の鼓動も、ゆっくり、そして弱くなりつつある。

もう、限界だ。

「無事か、アデリーネ殿？　某は、もう動けぬ……」

太郎丸は、少し離れた場所に倒れるアデリーネへと伝える。

蜘蛛はすぐに復活する。頭が再生すればまた動き出し、襲い来るだろう。今の自分に、連中へ止めを刺す力は無い。だから今の内に、ノエルとスダチを連れて逃げてくれ、と。

だが――。

「御託は結構です太郎丸様、今すぐそこから離れて下さい」
「っ！？」

立ち上がったアデリーネが懐から何かを取り出し、それに素早く着火……身動きの取れない大蜘蛛へと投げ付けた。
妙に冷静なアデリーネの様子に何か危険な予感を感じ、何の事だかわからないままではあったが、太郎丸はとりあえず全力で横っ飛び、距離を取る。

「伏せて――」

そんな声が聞こえたのと、辺りが紅蓮の炎に包まれたのは、ほぼ同時だった。
アデリーネが投擲し、大蜘蛛に命中した何か――火の点いた油壷だ――それが砕けた瞬間、眩いばかりの光と共に爆発するようにして広がる炎。

「う、うおぉぉぉ！？」

巻き込まれないよう、草原を這いずり必死で逃げる太郎丸。
炎は一匹の大蜘蛛を包むだけに留まらず、辺り一面張り巡らされた糸を火種として激しく燃え上がり、倒れていた他の二匹さえも灼熱の牙に捕え、噛み砕く。
バチバチと薪の爆ぜるような音。もがく大蜘蛛の硬い体表に無数のヒビが走り、その隙間から漆黒の霧が噴出する。その霧にも引火し、炎はますます強く、熱く。そして大蜘蛛の体内にも火が回ったのだろう。大顎からは吐息の度に、竜が吐く火炎の如く橙色の熱波が長く伸びては消え、消えては伸びるを繰り返す。

「こ……これは一体……！？」

山のように持ち上がり、チリチリと毛皮を焼く業火に目を丸くしてへたり込む太郎丸。大蜘蛛が燃える……これだけの炎であれば、如何に悪魔といえど耐えられはしないだろう。その証拠に、のた打つ大蜘蛛の動きが次第に鈍くなり……やがて止まる。

そこへ舞い散る火花から髪を庇い、腰を低くしたアデリーネが「ご無事でしたか？」とやって来た。

「アデリーネ殿、この炎は……何故、このような？」

「申し訳ございません太郎丸様。私、三つ程……嘘を付いておりました」

「……？」

何を言い出すのかと首を傾げる太郎丸に止血を施しながら、エルフの娘は落ち着いた声で淡々と告げる。

「一つ目は、蜘蛛の糸を『熱に弱い』と言った事……正確には『良く燃える』と言うべきでした」

「ど、どうやら、そのようだな」

油紙か、それとも乾いた杉柴か――。それらを遥かに凌ぐ引火のし易さは、目の前で揺れる巨大な炎のオブジェが、これでもかと証明して見せている。

「そして残る二つの嘘。一つは『策など無い』と言った事。そしてもう一つは『松明が雨で消えた』と言った事です。正確には『雨で消し』ました」

どうして、そのような事を？　問いかけた太郎丸が見つめる前で、炎に炙られ炭となった大蜘蛛たちが崩れ落ち、赤く光る塵となって

消えて行く。

「最初、蜘蛛の糸が良く燃えると判った時。私はこれを使って蜘蛛を焼こうと思いました。その為には大量の糸が必要だったのです。そこで太郎丸様に回避重視の戦闘をお願いして、効率良く糸を集めようと思ったのですが……」

「お主が駆けつけた時、某は既に死に体だったというワケか」

頷くアデリーネ。太郎丸を助ける為、松明に着火して糸を払い除けたものの、このまま炎を持っていたのでは蜘蛛に警戒されてしまう。そこで雨を理由に、松明を消したのだ。

そして太郎丸を焚き付けて蜘蛛たちに糸を吐き出させ、十分に溜めた所で隠し持っていた火種を使い、即席の火炎瓶で……というわけだ。

「それならそうと言ってくれれば、某とて……」

結果オーライとはいえ、太郎丸にしてみれば刺し違える覚悟だったのだ。何やら利用されたようで、あまり面白くは無い。だが……。

「いえいえ、流石は太郎丸様です。私もまさか本当に、悪魔憑きの大蜘蛛を三体も倒してしまわれるとは思っておらず……」

えへへ、と笑って誤魔化し、目を逸らすアデリーネ。

まさか倒すと思っていなかったという事は、当初の計画では大蜘蛛もろとも太郎丸も……！

「ふむ。『戦いの終わる頃には、策が無いと言った意味がわかる』か……。ま、そうだな。流石はアデリーネ殿だと言っておこう」

「ありがとうございます」

ニヤリと笑い、小太刀を鞘へ戻す太郎丸。
アデリーネは太郎丸もろとも……彼女自身さえも囮として、大蜘蛛を焼き殺すつもりだったのだ。
その度胸、死の淵でも微笑んでみせる愛嬌。どれをとっても、流石としか言いようが無い。

「これで男運さえ良ければな……」
「何か仰いましたか、太郎丸様？」

天はニ物を与えず――。その言葉を胸の奥に仕舞い込み、太郎丸は空を仰ぐ。
天高く上る炎に散らされて、雲が薄く、雨が弱くなりつつあった。

第四十七話：きみがいるから（一）（前書き）

このお話には残酷な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第四十七話：きみがいるから（一）

人が去り、急に静かになった家の中。
ノエルはスダチと共に、部屋の隅でシーツに包まり、震えていた。

「太郎丸様の援護に向います！」

そう言い残し、松明を手に飛び出して行ったアデリーネ。家に残されたノエルには何も出来る事が無く、ただひたすら戦う者の無事を願い、恐怖に怯えるだけ。
無力な我が身に、屋根を叩く雨の音が、やけに煩い。耳を傷めている為なのか、頭の中にバラバラと降り注いでいるかの如く、大きく鳴り響く。

「ノエルお姉ちゃん……外、静かだね。もう怖い人たち、どっか行ったのかな？」

震える声でスダチが囁く。
太郎丸が交戦している正体不明の敵……といっても十中八九、自分への追っ手だ。ノエルはそう考え、首を横に振った。仮にそうであるのなら自分を見つけない限り、敵は居なくなったりしないだろう。
「今はまだ危ないから、静かに、じっとしてようね」掠れた声で伝えるノエル。だがスダチは、張り詰めた空気と緊張の中で耐え続けるには、まだ幼すぎたようだ。

「私、ちょっとだけ覗いてみるよ」
「……！　待っ……！」

静止しようと口を開くノエルだったが、潰れた喉が脚を引っ張る。引きとめようと伸ばした手もすり抜けて窓際へと駆け寄ったスダチは、打ち付けられた戸板を少しずらし、開いた隙間から外を覗く。

「……スダチ、ちゃん？」

窓の隙間を覗き込んだ姿勢のまま、固まるスダチ。ノエルの声にも何の反応も見せない。だが「大丈夫？」ともう一度声を掛けると、ガクガクとぎこちない動きで、ゆっくりとこちらへと振り返る。

「あ、あわわ……っ」

口を金魚のようにパクパクとさせ、何かを言おうとするスダチ。彼女の顔は晒し紙のように真っ白で、額には大量の汗。そして脱力しへナへナと崩れ落ちた彼女の背後――窓の隙間から見えたのは、夕暮れの薄闇を貫いて真紅に輝く、不気味な双眸。猫の如く縦に割れた瞳が、微動だにせずジッとこちらを覗き込んでいる。

ぞっと背中に走る悪寒。見つかってしまった！　その事実を直感的に感じる。

「スダっ……逃げ……！」

逃げなくては……一刻も早く！

包帯だらけの身体を無理矢理動かし、腰を抜かしているスダチを起き上がらせる。

窓の外に気配を感じる……近い。壁を挟み、相手の呼吸すら感じられる程の距離だ。こうなったら、自分が囮になって彼女だけでも……そうノエルが考えた時だ。

「お姉ちゃん、先に行ってて！　私は、一発……っ！」

ノエルの手を振り切って、スダチはその場に踏み止まった。小さな少女の手には、血の気が引くほど強く握り締められたフライパン。

迫り来る正体不明の敵に、幼い身体は恐怖に強張り、手足は小刻みに震えて、ノエルが手を貸さなければ一人で立っている事さえ難しい。だがスダチは自らを奮い立たせて仁王立つ。気丈にも、敵に立ち向かうつもりなのだ。

「スダチちゃ……！！」

ダメよ、戦うなんて無理！　とにかく逃げよう！　私が時間を稼ぐから、その間に安全な場所まで……。

痛む喉から声を振り絞り、そう説得を試みたノエル。だがスダチは頑として首を縦に振ろうとはしない。

「お願、い。スダチちゃん……聞分けて。あなた、だけでも……」

そう。せめてスダチだけでも逃がさなければ。太郎丸もアデリーネも居ない今、悪魔を相手に二人ともが逃げ切るのは不可能だ。一人が逃げ延びるだけでも至難であろう。それならば自分が餌になって、少しでもスダチの脱出確率を高く……そう考えるノエル。

だがスダチはノエルと同じ前提で思考したにも関わらず、全く逆の結論へと辿り着いたようだ。頼りなく蚊の鳴く様な声ではあったが、邪悪な敵へ明らかなる反抗の意思を込めて囁く。

「普通に逃げたって、きっと捕まっちゃう。それだったら一か八か、思い切りぶつかって……チャンス作って、二人で逃げよ！　あんなバカにでも、もう一回会いたいんでしょ！？」

この娘は……この兄妹は昔からそうだ。諦めるという事を知らな

い。妥協という言葉を好まない。
今もノエルは自分が悪魔に身を差し出して、スダチだけを逃がそうと考えていた。それが自分の役目だと……二人で逃げるなど、最初っから頭に無かった。だがスダチは未熟な頭で必死に考え、なけなしの勇気を振り絞って絶望の中に希望を見出そうとしている。絶望と戦っているのだ。
決して最善策では無い。ギャンブル好きと言われたら、きっとそうなのだろう。しかしこの状況で一体何人が微かな可能性を見出し、一縷の望みを繋げようと足掻き続ける事ができるだろうか。

「ん……そう、だね。わかった、よ」

頷くノエル。ついさっき、諦める事を諦めた筈だ。自分が出て行ったとしても、スダチだって狙われる可能性が高い。どちらに転んでも同じであるのなら……やれるだけの事を全力でやってみよう。もう一度、生きて彼と会う為に！

「約束だよ、お姉ちゃん！　二人で頑張るの……ほら、指きり！」

小指を絡ませあい、二人が約束を交わす……と、その時！　横殴りの衝撃と共に、部屋の壁が吹き飛んだ！

「〜ッ！？」

声も上げられず、壁の残骸と共に吹き飛ばされるノエル。寸での所でスダチを抱き寄せ庇ったものの、怪我をしたままの腕では抱き留めておく事は叶わず、地面に叩き付けられると同時に放してしまう。

「うぁっ！」

濡れた草の上に投げ出されるノエル。付近には大小様々な家の破片が舞い落ちる。元居た場所を見れば、自分の部屋があった場所に大きく深く四本の爪痕が刻まれており、壁が無残にも切り裂かれ、その大半が吹き飛んでいた。

「……スダ、チ……ちゃん！？」

雨の冷たさを包帯越しに感じながら、小さな人影を探して周囲に視線を配る……が、傷付き狭まったままの視野では人探しさえままならない。そして探していた人物よりも先に、襲撃者の姿が目に入った。

「また会ったな、天使の娘」

「ガイ……ラン！」

暗闇の中、血のように赤い眼を光らせるのは、かつての仲間であり、ノエルを嬲った悪魔の一人でもある虎の獣人、ガイランだった。

以前は虎を象徴するような黄色と黒のツートンカラーであった毛色。だが悪魔憑きとなった今は赤と黒の二色となり、元々大きかった身体も更に一回り大きく膨らんでいる。

そして両の腕には黄金の手甲……伝説の武具の一つである『幻魔の爪』だ。どこか禍々しさを感じさせるその形状は、指先から肘までをスッポリと覆う、重なり合う装甲板によって作り出されている。そして指先部分には、それぞれの指ごとに独立した鋭い鉤爪。

「この爪の味、まだ忘れてはいまい？」

ノエルへ見せ付けるように鉤爪を擦り合わせ、舌なめずりをするガイラン。擦れ合う爪からは、青白い魔力が火花となって迸る。そ

の魔力が生み出す特殊な効果は、捕えられている時に嫌という程味わった。

「大人しく同行するなら……いや、あえて問うまい。何せうちのボスに厳命されている……お前と、その協力者全員を、力尽くでも連れて来いと……な」

やっぱりね。嫌な想像ばかりが良く当たると、自分の勘に対して失望を覚えるノエル。

サークスらは天使に組する者を捕えて痛めつけ、見せしめとする事で協力者を減らすつもりなのだろう。

「さぁて今度は、どこから切り刻んで欲しい？　内腑から切り取り、食らってくれようか？　それとも残った目を抉ってやろうか？」

身構え、腕を振りかぶるガイラン。

いけない……！　危険を感じ、身を捻って空へ逃げようと咄嗟に翼を広げるノエル……だが、今の彼女に飛べる翼など無い。

「……っ！」

「食らえ、幻魔の爪ッ！！」

地を蹴り、飛び掛るガイラン。ノエルは咄嗟に左手を頭上にかざす。腕の添木で爪を受け止めて……だが！

「貰った！　『皮膚』ッ！」

「あぐっ……！！」

魔力の煌きが軌跡となり、雨の中に曲線を描く。

幻魔の爪は何の抵抗も無く添え木をすり抜け、ノエルの肌に食い

込んだ。そしてガイランが彼女の左腕に沿うようにして爪を滑らせると、ピーラーで野菜の皮を削ぐかの如く、ノエルの左手から皮膚が剥がされて行く。

「～ッ！！」

声にならない悲鳴。皮膚だけが腕から削がれて行く激痛。悪魔の村で味わった痛みが、再度ノエルを襲う。

このままじゃ、左手が使い物にならなくなる。なら、それよりも前に……！

「てぇ……いッ！！」

激痛に耐えながら、爪が振り切られる直前に逆腕でガイランの胴を突き、距離を取るノエル。

鮮血が舞った。

左腕から剥がされた皮膚がだらりと垂れ下がり、剥き出しとなった肉からはじわじわと血が滲み出して滴る。なんとか致命傷だけは避けたノエルだったが、ガイランの攻撃はまだ終わらない。

「中々どうして！　悪くない反応をするではないか、天使の娘ェ！楽しくなってきたぞ！！」

悦楽に口の端を歪めて、何度も爪を振るうガイラン。瞬きさえ致命的な隙となる程の速度でもって、左の爪で薙ぎ払い、右の爪で突き刺して来る。悪魔憑きと化した獣人の凄まじい反応速度は、ノエルが万全の状態であったとしても対応出来得るものでは無い。不調であるなら、尚更だ。

「ぐっ！　あぅっ！！」

左の肩、右手の甲、右の太股、左の膝……避けきれずに爪が肌に食い込む度、皮膚だけが剥ぎ落され、押し殺した悲鳴と血が飛び散る。だがその際、爪が命中しているにも関わらずノエルの衣服には傷一つ付いていない。

「真剣に避けねば、全身の皮膚が無くなるぞ！　それとも……」

ノエルの眼前にまで大きく踏み込むガイラン。そのまま速度を緩めず、華奢な天使へと当身を見舞う。体勢を崩したノエルは、たたらを踏んで退く……と、ガイランはノエルが後退するより早く脇をすり抜けて背後へと回り込み、爪を構えて叫ぶ。

「もっと痛いのがお好みか！？　ならば……『痛覚』ッ！」

「あぐっ！！」

深々とノエルの背中に突き刺されるガイランの爪。彼は胸へと貫通したそれを、胴を上下へと引き裂くように勢い良く振り切る！　激しく魔力を迸らせる幻魔の爪。

「がっ！！……あぁ……かはっ……！！」

服は破けず、傷も無く、血も出ない。だがノエルは悲痛な声を上げ、まるで爪で全身を引き裂かれたかの如く背中を弓なりに反らし、濡れた地面の上に倒れる。

「どんな物だ、身体を一気に裂かれる痛みは？　如何に天使といえど……さぞ辛いだろうな」

倒れたノエルに、ガイランが歩み寄る。

幻魔の爪は、それほど大した攻撃力を持つ武器では無い。精々、良く切れる包丁程度の切れ味だ。しかしその特殊能力故に、攻撃力以上の脅威でもって敵対する者を苦しめる。

それは、指定した物だけを切り裂く能力――。

皮膚と指定すれば皮膚だけを。痛覚と指定すれば痛覚だけを、心臓と指定すれば心臓だけを刃に掛ける対象とするのだ。その行く手は何人たりとも阻む事叶わず、岩壁だろうと鋼鉄の鎧だろうと、果ては肉体そのものや、魔術的な効果を持つ天使の防御能力ですらすり抜ける。

「これからお前を、サークスの所へ連れ戻す。手足と翼の筋肉を全て切断し、動けなくしておいて……な」

足下で伏して動かないノエルの、包帯が巻かれた翼を無造作に掴み上げるガイラン。

「この場にバラでも居たなら、お前を裸に剥いで見せろと煩かっただろうが、生憎と俺にそういう趣味は無い」

幻魔の爪が切り裂く対象を『筋肉』と指定するガイラン。そして彼は「そういう趣味は無いが……」と続け、翼の先端部分に爪を乗せる。

「俺は、お前たちの苦しむ姿を見るのが大好きだ」

耳まで届く程に割れた口を邪な喜びに歪め、ガイランは翼の中に爪を刺し込んだ。そして、ゆっくり、ゆっくりと翼の付け根目指して指先の刃を動かし、翼を内部から切断して行く。

「あうぁっ！　ぎゃ……あぁぁぁぁ……ッ！！」

「どうした天使の娘、そんなに痛いか？　それとも、せっかく治りかけていた翼がまた痛めつけられて辛いのか？」

翼の筋肉と同時に、天使の心を引き裂くガイラン。大した切れ味を持たない爪であるが故に切断はスムーズに進まず、筋肉の密集地に爪が掛かる度ノコギリで引くかのように、前後に刃を動かして強引に切り進む。それがノエルに更なる苦痛をもたらす。

「あっ！　あぐっ……！！　いぁ……！！」

「どうした、以前のように泣いて許しは請わぬのか？　何でもするから、それだけは止めてと言わなくて良いのか？　大事な翼が骨と皮だけになってしまうぞ。それでも良いのか？」

包帯で巻かれたままの翼が内部から破壊され、ズタズタにされる。あまりの激痛と大切な物が壊される辛さに、何度「止めて」と懇願しようと思っただろう？

だが、ダメだ。それは許されない。

何故なら約束したからだ。

スダチと二人、頑張ると！

「あ、あああぁぁぁッ！！」

「うぉ……！？」

この約束は、破れない！

ノエルは掴まれた翼もお構い無しに強引に身体を捻り、腕を振って背後のガイランへと打撃を見舞う。振り返りざまの、手の甲を使ったパンチ。いわゆる裏拳だ。

見事にガイランの尖った顎先を捉えた裏拳ではあったが、強靭な獣人の肉体を前にダメージは皆無に等しい。しかし死に体だった天使が見せたまさかの反撃に、怯んだ様子を見せるガイラン。

押し返すなら、今しかない！

「やあぁぁぁッ！！」

「調子に乗るな、小娘！」

だが反撃しようと伸ばした手はガイランに届かず、代りに丸太のように太い彼の膝がノエルの腹にめり込む。

「えぅっ……！」

背中まで抜ける重い衝撃に身体をくの字に曲げ、動きを止めるノエル。ガイランは彼女の翼を捕えたまま、更に二度、三度。強烈な膝蹴りを腹や胸、そして顔面へと叩き込む。

胃を押し潰され、血の混じった胃液を吐き出すノエル。包帯に鮮血が滲む。そして掴まれたままの翼も強い衝撃を受けて裂け、夥しい量の血飛沫が噴出す。

「根性を見せたくらいで、状況が好転するとでも思うたか？　甘い！　甘いのだ、お前らは！」

力任せにノエルを地面に叩きつけ、腹の上に跨って、顔面へ拳を連続で打ち込むガイラン。頭蓋骨を砕かんばかりの加減無い殴打。一撃、一撃が命中する度、地響きを伴って地面揺れる。

「そういえば、あの小僧もそうだった。両手を潰してやったら、何を思ったか剣を咥えて切りかかりおって……確か、ヤマトとか言ったか？　馬鹿も、そこまで行くと可愛げすら感じるわ！」

ヤマト？　混濁した意識の中、ノエルの耳が彼の名を捉えた。

「歯を折って顎を砕いた時は見物だったぞ。情けない声で、血の混じったヨダレを垂らして……その後、脚を捻った時も……」

そうか、ヤマトがほろ酔い亭から居なくなった後、ガイランが彼を襲っていたのか。伝説の手甲を探しに旅立った際、しばらく姿を見かけなかったと思ったが……そういう事だったのか。

ヤマトは怪我をしていて来れないんだとスダチは言った。彼女の予感は当たっていたのだ。

「中々しぶとく、面白い獲物だったが……あれだけの重傷、あれだけの嫌われ者だ。誰もヤツを助けはしまい。多分今頃は野山で野垂れ死に、蛆の餌にでもなっておろうな」

ヤマトが重傷？　死んだ？　という事は、もう二度と……。触れる事も、話をする事も、顔を見る事も……。

ノエルの中で、理性が弾ける。コイツは……この悪魔は、ヤマトの仇だ！

「う、うぅ……ッ！！」

拳を打ち込まれ続けて半ば地面に埋まりながらも、感情のまま、憎い敵へと右手を伸ばすノエル。その手がガイランの腕を掴み……。

「さっきも言ったが、根性を見せたくらいで力の差が埋まると思ったか？　弱者が如何に足掻こうと、圧倒的な力の前には……何の意味も無い！」

ノエルの腕を振り払い、それを幻魔の爪で薙ぎ払うガイラン。筋肉のみを寸断されたノエルの右腕は、赤黒く変色しながら力無く地面に横たわる。

全く歯が立たない。目の前の敵に……なんとしても倒したい相手なのに！

どれほど足掻こうと、たとえ命を賭けたとしても、駄目な物は駄目で……無理な物は無理なのだろうか？　どんなに強く、切実に望んだとしても、叶わない事も……。

ノエルの頭にそんな考えが浮かび、意識が、そして再び立ち上がる気力が失われかけた……その時だ！

「がふッ！？」

ノエルに跨っていたガイランが苦悶の声を上げ、大きく仰け反った。そしてそのままの体勢で勢い良く吹っ飛び、濡れた地面の上をゴロゴロと転がって近くの草むらへと頭から突っ込む。

「ごちゃごちゃ喋ってイイ気分に浸ってんじゃねぇぞ、この猫モドキが！！」

これは、夢か幻だろうか？

朦朧とするノエルの耳に届いた、懐かしい声。

「躾けの悪ぃ猫が、ションベン臭ぇ股ぁノエルに擦り付けてんじゃねぇ！　テメェの便所は猫砂の中だろうが！」

口汚い罵り。どこかで聞いた事のある……いや、毎日のように聞いていた、二度と聞けないと思った、あの声。

雨の中、自分を庇うようにして立つ、懐かしい後姿。雨の中で別れたあの日以来、夢の中でしか見る事の出来なかった背中が、ゆっくりと振り返る。

瞼を失ったノエルの瞳に映る者。それは……。

「悪い、ノエル。遅くなっちまった」
「ヤマト……！！」
それは彼女が強く、切実に会いたいと願った、少年の姿だった。

第四十八話：きみがいるから（二）（前書き）

このお話には残酷なシーンが含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第四十八話：きみがいるから（二）

久しぶりに……本当に久しぶりに見る事ができた彼の顔。聞く事のできた愛しい声。

右目の奥から溢れ出す熱い物が、枯れたと思っていた涙だと気付いた時、ノエルは再度、彼の名を呼んでいた。

「ヤマトっ！」

その呼びかけに少年は軽く頬を歪ませ、いたずらっぽい笑顔で応える。

「よぉ、久しぶり」

そんな彼の頬には、以前は無かった深い傷跡が刻まれている。霞んだ目でよくよく見れば、その傷以外にもたくさん……まだ治っていない物も多いようだ。

ガイランがヤマトを襲い重傷を負わせたと言っていたが、どうやら嘘ではなかったらしい。

自分のせいで彼に危害が及んだと、心を痛めるノエル……だがそれは、ヤマトの方も同じであったようだ。ノエルの惨状を見て、哀しげな表情を見せる。

「あ……わ、わたし……」

あれほど会いたいと思っていたのに、ヤマトを前にした今。ノエルは、急に不安になってしまった。嫌われるかもしれない——深く冷たい沼に飲み込まれたかのように、胸が苦しくなり、息が詰まる。

彼がこの場にやってきたという事は、多少なりともノエルがどう

して傷を負っているかを知っているのだろう。そして村で何をされたのかという事も。

悪魔たちに穢された自分。顔も身体も、全部滅茶苦茶にされてしまった。せっかく来てくれたのに、久しぶりに会うというのに……綺麗な自分を見せたかった。それなのにこんな姿で……これ以上ヤマトにガッカリされたくない。

優しい彼であるから尚更だ。こんな汚い天使は嫌だと思っても、きっと無理をして笑ってくれる。

「ったく、久々に見たと思ったら……お前、酷ぇ有様じゃねぇか。どこのどいつだ、ンな事しやがったのは！　全員見つけ出してボコボコに……！」

「や、ヤマ……ト……」

また彼がどこかへ行ってしまったらどうしよう？　今度こそはと追いかけたくても、今の自分には飛ぶための翼も、まともに歩ける脚も無い。あの時のように捨てられてしまったら、もう本当にお終いだ。

喜びの涙が、悲しみの涙へと移り変わろうとした時だ。

「あ？　なに泣いてんだよお前。しょうがねぇ奴だな……おい、もう泣くな。泣いたってしょうがねぇだろ？　元気出せよ」

どこかで聞いた台詞――。

（大丈夫だよ、ケガが治ったら飛べる）

「大丈夫だよ、そんな怪我くらい。治るって！」

声が重なって聞こえる。それはずっと前、懐かしい木の下で初めて会った時に聞いた言葉。

絶望の淵にある女の子を慰め、勇気付けようと、まだ小さな男の子が少ない語彙の中で一生懸命考え伝えた、心からのメッセージ。

（もし飛べなくても、飛べるようになるまで俺がずっと面倒見てやる。だから――）

「もし治んなくても、お前さえ良けりゃ……俺がずっと面倒見てやる」

声と共に暖かな物が胸の奥へと伝わり、浸透して行く。暖かで、優しい……まるで陽だまりに居るかのような感覚。そうだ、この感じに魅入られてかつての私は――ノエルは、ヤマトの手を取ったのだ。

「だから――心配すんな！」

「うんっ！」

そして、今もまた！

涙を振り払うかのように、大きく頷くノエル。

もうウダウダと悩むのは止めた。どう思われていようと、神様とか天使とか関係なく、自分で選んだこの人なのだ。あの時に感じた光を、握った手から伝わる温もりを。

大好きなヤマトを信じて、今は、前へ――！

「ま、色々と言いたい事はあるけどよ。細けぇ話は後にしようぜ。あの黒ネコを、とっちめた後でな！」

その言葉を待っていたかのように、少し離れた草むらの中からのっそりと起き上がる影。ヤマトの助走付き飛び蹴りによって吹っ飛び、倒れていたガイランだ。その真っ赤な目に宿るのは、深い怒りの色。

「小僧……味な真似を。俺に身体中を砕かれた痛み……喉元を過ぎ、忘れたようだな」
「あぁん？　何のこと言ってやがる。テメェなんぞにボコられた覚えは……え？　なんだよノエル」
言いかけたヤマトに、傍らのノエルがそっと囁く。
「あぁ。あん時の包帯男、お前だったのか。どーでも良い三下の脇役なんざ、イチイチ覚えて無いもんでな」
「この……ッ！　調子に乗りおって！！　今度は加減せんぞ！」
怒りの雄叫びを上げ、腰を落とすガイラン。そして勢い良く飛び上がり、一気に間合いを詰め……詰めようとしたのだろう。
だが彼の身体は宙を舞う事無く、ジャンプした直後に大地へと引き戻されて、飛ぼうとした勢いのままに生い茂る草の上へと叩きつけられた。
「なっ……！？　なんだコレは！」
脚に違和感を感じ、ガイランは慌てて自らの下肢を確認する。するとそこには彼の両脚に絡み付く太い蔦……いや、蔦を装った頑丈なロープだ。背の高い草に紛れてわからなかったが、倒れこんだ草むらに脚を拘束する罠が仕掛けてあったのだと、今頃になって気付く。
「なんの！　こんな物、容易に……『縄』ッ！」
幻魔の爪に縄だけが切れるよう設定し、ザクザクと大胆に拘束を解いて行くガイラン。身体を切ってしまわぬよう気を使わなくて良

い分、その作業は早い。
しかしヤマトが待っていたのは、まさにこのタイミングだった。

「今だっ！！」

声を張り上げるヤマト。何をするつもりかと周囲に警戒するガイラン……と、その横っ面目掛けて、何かが投げ付けられた。それが顔に命中する直前、咄嗟に手で払い除ける。

「……？」

払い除けたそれは、何かの詰まった紙袋のようだ。手にぶつかった衝撃で、ぱんっ、と音を立てて簡単に粉々となり、その中身が付近に舞い落ちる。薄い紙袋に入った『何か』。中身は黒い粉末状の物だが、毒では無いようだ。まぁ仮に毒だったとしても、悪魔憑きには何の効果も無いのだが。
それよりもガイランは、一体誰が『何か』を投げたのかが気になり、その投擲元へと視線を移す。

「……ヒッ！」

見られている事に気付き、さっと姿を隠す何者か。随分小柄なようだ……ちらりと赤毛が見えた。人間の子供だろうか？　さっき天使と一緒にいたガキとは違っていたようだが……？
まあどちらにせよ、この幻魔の爪で切り刻んでやるのみだ。また天使と同じく筋肉だけを切り裂いて動きを奪い、村の悪魔どもにくれてやろう。暇を持て余した連中には良い玩具となるだろう。
だがとりあえずは、目の前に居る生意気な小僧からだ。

「覚悟しろ、小僧。げほっ！『きん、に……』げほ、けふっ！」

筋肉、と言おうとしたのだが、唐突に出た咳に邪魔をされた。妙に喉がいがらっぽい……急にどうした事か。それになんだろう、このニオイは？

そう考えてニオイの元を辿ると、先程投げ付けられた紙袋が目に止まる。

破れて地面に落ち、雨に濡れる紙袋。中に残っている真っ黒な粉末が雨に解け、琥珀色の液体を滴らせている。そこから漂う濃厚で香ばしく、微かに柑橘類を思わせる、芳醇な香り。

「これ、は……けふっ、げふっ！！」

「どうだ、包帯ネコ野郎。良いニオイして来ただろ？」

ニヤリと笑って短剣を抜くヤマト。

琥珀色の村で療養中、村人が言っていた。コピ・ルアクを獣人が飲むと咳とクシャミが止まらなくなる事例が多発しているという。そういえばかつてコピ・ルアクの採集中、太郎丸の咳が止まらなくなった事があったが……。

「わははっ！　そいつは通称ウ〇コーヒー！　テメェにゃ勿体無い代物だぜ！！」

「この……ゲホッ！　『きん、に……』……ゲホゲホッ！！」

今が好機！

濡れた地面を踏みしめ、走り出すヤマト。再生された形見の短剣を左手で構え、柄に右手を添えて、ロープに絡まったまま咳き込むガイランに突進する。

「コイツぁ……ノエルの分だッ！！」

狙い澄まし、走った勢いそのままに、全力でもって短剣をガイランの左目へと突き立てる！

「ガァあぁぁぁぁぁッ！？」

深く突き刺さる鋼の刃。悪魔となり信じられない程に強化されていた肉体ではあったが、ヤマト渾身の一撃を防ぐだけの防御力を、ガイランの目は持ち合わせていなかった。

「ついでに……ウチの妹の分っ！」

「グギャアァァァッ！！」

刺さった刃を捻り、これでもかと眼窩を抉るヤマト。彼を切り刻もうと爪を振るうガイランだったが、『縄』と指定されたままの爪は、空しくヤマトの肉体を通り過ぎるだけだ。

「もう一丁！　追加で……っ！　ノエルの分だ！！」

刺さったままの刃。その柄を思い切り蹴って、さらに深く悪魔の頭蓋へと突き刺す。

「ガアァァァァ……！」

頭を押さえて身を捩り、狂ったように絶叫するガイラン。その声は、まさに悪魔の叫びを思わせる。

刺さった剣は目を抜け、脳にまで達しているはず。普通の生き物であれば致命傷となり得る傷だ。しかし相手は悪魔に魅入られ魂を売り渡した、普通でない生物。この程度で倒れたりはしない。

「こ……コゾウ……！　ユル、さ……ん！！」

ゆらりと頭を振り、目に刺さった剣を無造作に引き抜くガイラン。傷口からは赤紫色の何かが湯気のように燻る。

両脚を拘束するロープを力任せに引き千切ると、幻魔の爪を外して投げ捨て、指先に生える自前の爪をベロリと舐める虎の獣人。野生の獣が持つ猛々しい威圧感が、これまでの何倍にも膨れ上がる。

「やべっ……ノエル、離れてろよ！」

「う、うん」

距離を取って身構えるヤマト。

その時、ノエルは気付いていた。ヤマトの表情に、焦りの色が浮かんでいる事を。

第四十九話：きみがいるから（三）（前書き）

このお話には残酷な表現が含まれます。苦手な方は十分にご注意下さい。

第四十九話：きみがいるから（三）

事態は切迫している。
痛む身体を引き摺って、ノエルは必死に考えていた。ガイランを倒す、その方法を。

「チョコマカと鬱陶しイ小童が！！」
「小僧だの小童だのうるせえんだよ、この糞ネコ野郎！」

未だ止まない冷たい雨の中、ヤマトとガイランが戦っている……といっても、半ばガイランの一方的な攻撃だ。
口撃でこそ勝るものの、実体を伴う戦闘においてヤマトは防戦一方であり、ひたすら避け続けているだけ。左眼を失った事により生じたガイランの死角。そこへ飛び込む事で辛うじて戦線を維持しているに過ぎない。
ノエルにはわかる。もうヤマトに策は無く、身体も限界に近い。目に突き刺した剣の一撃で、あわよくば一気にケリを付けられたら、と考えていたのだろう。

「くっ……！」
「ドウした小僧、動キが鈍ッテ来たぞ？」

予想通り、ヤマトの動きが目に見えて鈍り始めた。原因はスタミナ切れと、身体の不調……前に受けた傷が塞がっていないのだろう。特に、先程から全く使っていない右腕と、常に引き摺っている左足の負傷が酷いようだ。さっきの攻撃だって、相当なムリをしていたに違いない。

「わたしが……やんなきゃ……っ！」

残念ながら冷静に見て、ヤマトの攻撃力でガイランを倒す事は不可能だろう。そうなれば、悪魔を倒せるのは天使である自分だけだ。前にミノタウロスを倒した時のように、ノーウェイを倒した時のように。ヤマトが時間を稼ぎ、自分がトドメを放ついつものパターン。それ以外に無い。

だが……。

「くっ……っ！！　はぁっ……はぁっ……！」

辛うじて動く左手に意識を集中させ、光を集めようと試みるノエル。光の槍を作り出し、悪魔憑きガイランを討つつもりだった。以前であれば集中を開始すると同時に光がみるみる集まり、輝く槍を形成していたのだ。しかし今は全くその手応えが無い。

無理も無い事だった。悪魔の手によって、ノエルという名の天使はいま人々の信頼を大きく損ない、失っている。

彼女ら天使が力の源とする信仰とは、すなわち信じる心。あんな弱く、穢れた天使など信じられない。とても信用できない、頼る事などできない――。そういった人々の思いが多く、しかも強い為に、ノエルは力を発揮出来ないのだ。

「お願い、ちからを……悪魔を倒す……ヤマトを、助けるちからを……私に貸して……！」

強く……とても強く願い、祈りを捧げるノエル。だが光は集まらない。皮の剥がれた左手が痺れ、頭が割れる程に念じてみたが……やはり駄目だ。

「はっ……はぁっ……う、くぅ……」

それどころか、重なるダメージによって多くの血を失い、意識を保っている事さえ厳しい。頭痛は酷く、視界に掛かる霞はますます濃くなるばかり。あらゆる音は遠退き、雨に濡れた衣服が重く感じて、立っている事が奇跡的とさえ思える。

「ぐあっ！！」

そうする内、とうとうガイランの爪がヤマトを捉えた。左腕と胸板を深く大きく横に裂かれ、苦しげな声を上げて鮮血と共に倒れこむ小柄な人影。そこへトドメを刺そうと歩み寄る獣人の姿が、ノエルの霞んだ目にも映る。

「ククッ……ヤハリ武器越しではツマらン。自らの爪で肉を裂キ、血を啜るコノ感触……コレこそが戦い……我ガ人生！」

「て、テメェは肉屋の飼い猫か……！　一生豚肉で爪研いでろ、この……ヘボネコ！」

ヤマトの台詞に、ふん、と鼻を鳴らし、爪を振り上げるガイラン。

「サラバだ、口の減らぬガキよ」

太く鋭い爪が、雨粒を切り裂いてヤマトへ――だが！

「お兄ちゃんを、いじめるなーーーっ！！」

突然、草むらから飛び出す人影！　スダチだ。彼女は凶刃が兄へ到達する寸前、思い切り振りかぶったフライパンの角を、ガイランの顔面へ力の限り叩き込んだ！

「おぅっ……！」

虎の獣人が思わず仰け反る。その隙にスダチは兄を助け起こし、安全圏へと逃げ出そうとしたのだが……。

「中々ヤルではないカ、小娘」

「わっ……放せっ！……はなしなさいよっ！」

立ち直ったガイランにあっさりと捕まってしまう。

頭を掴んでひょいと持ち上げられるスダチ。フライパンも取り上げられ、手足をバタつかせる以外、抵抗らしい抵抗さえ出来なくなってしまう。

「糞ネコが……スダチを、放しやがれ……！」

「小僧、オ前の妹カ？　雨で気配ガ読み辛いとはイエ、この俺に一撃を入れルとは、中々見所がアル。鍛えれバ良イ冒険者になるだろウ」

言いながら、投げ捨てていた幻魔の爪を拾い上げるガイラン。スダチを掴むのとは逆の手にだけ装着し、人差指の爪一本だけを長く伸ばす。

「そんナ実りあル若者の前途を断ち切ル……コレ程、楽しイ事は無イ」

「スダチに何するつもりだ！　妙な事しやがったらタダじゃ……あぐっ！」

土を掴み、必死に起き上がろうとするヤマトを蹴倒し、ガイランがこの上なく楽しげな表情を見せる。伸ばした爪をスダチの頬に走らせ、薄く皮一枚だけを斬って赤い直線を刻む。

「サテ、どうシテくれよう？　柔らかナ背骨を断ち切リ、二度と動かヌ身体とシテくれようカ？　ソレとも子宮を切り裂キ、子を授かれヌ身にシテくれようカ？」

言いながら、スダチの身体を爪先で弄る。服をすり抜け、直接肌に触れる金属の冷たさにスダチは青ざめ、歯はカタカタと音を立てる。

「決めタぞ。マズは『肺』からだ……心配スルな、小娘。肺は二つアルのだ。一つ失ったトテ、死にはしなイ」

これ見よがしに爪を擦り合わせ、たっぷりと恐怖を煽ってからスダチの薄い胸へと爪を突きつける。

「ただ、気管に血が流レ込んで呼吸が出来ず、死ぬホド苦しイがな」

「っ……！　ひぃ……た、助けて……！！」

ガイランが手を動かすと、何の抵抗も無く胸へと滑り込んでゆく幻魔の爪。スダチも両手で必死に押し戻そうとしているが、子供と大人、人間と悪魔。微かな抵抗など焼け石に水であるようだ。すぐにスダチがビクリと震えて身体を硬直させ、ガイランの笑みが強まる。

「コレか、オ前の肺は……苦しイぞ、自らの血で溺れルのは」

爪へ、徐々に力が込められて行く。

もう一刻の猶予も無い。

ノエルは人々に……そして神に祈る。お願いだから助けて、と。

自分などどうなっても良いから、御慈悲を……と。

だが地を這う天使の声に人々は、そして神は耳を貸そうとしない。

「あ、あ……い、ぃ……！　けふっ！」
「スダチッ！！」

苦しげに咳き込んだ少女の幼い口元から、鮮やかな血が溢れる。
それは湧き水のようにして流れ落ち、小さなエプロンドレスを真っ赤に染めた。
ノエルの心を焦りが満たし、そこへ絶望が忍び寄る。
もう誰も……人々も、神さえも力を貸してくれはしない。自分が天使失格だから、スダチを見殺しにしろと……身の程を知れという事なのだろうか？
だが、そんな事出来るはずが無い。大事な人を……困っている人を見捨てて、何が天使だというのか。
そうだ、その通りだ。いくら私が気に入らないからって、子供のピンチに手を差し伸べる事も出来ない了見の狭い神様なんて知った事か！　頼った私がバカだった！
信仰が……信じる気持ちが天使の力になるのなら！

「私がっ！　自分を……信じて……っ！！　う、うぅぅぅ……あぁぁっ！！」

ノエルの身体から、仄かな光が立ち上り始める。
それは今までのように透明感のある、清らかで純白の、信仰が生み出す聖なる光では無い。彼女の発した光は、強い生命力と暖かさを感じさせる、優しい橙色の光。
その光の源は、ノエルの身体そのものだ。流れる血や、身体の端々。それらを無理矢理光子へと還元し、捉え、左手に集める！

「自分の身体なんだからっ……好きに操れなきゃ、嘘でしょ……！
こ、こンのぉ……っ！」

集まる光。だが同時に、耐え難い痛みがノエルの全身を襲う。これまでに受けた傷の全てから血が吸いだされ、治りかけていた爪は剥れて光となった。だが、まだ足りない。

強力な敵である悪魔を倒す為には、天使一人の力では……たかだか一つの命では、到底足りないのだろう。けれど、なんとかするしかない。ヤマトがそうであったように、周囲に嫌われ何の支援も受けられなくたって、知恵と勇気と根性と気合と……自分の中にある物全てを総動員して、目の前にある壁を打ち倒すしか無い！

「て……っ！」

左手に集まった、片手で少し余る程度の小さな光。借り物ではない、正真正銘、ノエルが命を削って自身から生み出したチカラ。それを一点に収束させ、鋭い槍の形へと整え、震える身体で投擲体勢を取るノエル。

悪魔の全身を焼き尽くす事が無理ならば、一点集中だ。ガイランの心臓目掛けて叩き込み、撃ち滅ぼすのみ！

そして神は……必死に足掻く、か弱い子羊を見捨ててはいなかった。

突如、辺りに轟く爆音。真紅に染まる空――！

「な、ナンだ！？」

少し離れた丘の向こう、現在地からは死角になる場所で、巨大な火柱が上がった。熱風によって雨は吹き飛ばされ、草木が波打ち、地面が揺れる。それは太郎丸とアデリーネが大蜘蛛を滅ぼした浄化の炎だ。

ガイランがそちらへ気を取られる。

チャンスは今しか無い！

「て……天使なめるなあぁぁーーーっ！！」

断末魔の如く叫び、投擲！

ノエルの手を離れた光の槍は、炎に気を取られるガイランの心臓目掛け、輝く尾を引いて光速で迫る。だが悪魔の力を得て強化された獣人の反射神経は、光の速度でさえも目に捉え、反応して見せた。

「ぐぉっ……！」

スダチを投げ捨て、幻魔の爪の装甲で防御すべく両腕を交差させて光の槍を受け止めるガイラン。重厚に重なり合う装甲ではあったが、ノエルの光が貫通力に勝っていた。堅甲が粉々に砕け、弾け飛ぶ！

「ぬあぁぁッ！？」

ノエルが命を削り生み出した一撃は伝説の手甲を粉砕し、獣人の逞しい両腕をも焼き貫き、分厚い胸板へと突き刺さる！……だが心の臓には、あと一歩届かない！

しかし――。

「人間、なめんなあぁぁぁぁ――――ッ！！」

立ち上がり、タイミングを合わせて飛び込んだヤマトが、ガイランの胸に突き刺さる槍へと右の拳を叩き込んだ！

ガツンと杭打たれたように押し込まれる光の槍。その切っ先が、悪魔の心臓を捉え――。

光が、闇を貫いた。

第五十話：きみがいるから（四）

突如訪れる静寂。

雨も、風も、何もかもが動きを止め……その中には、胸に穴を穿たれたガイランも含まれている。

深い黒と赤の毛皮を持つ虎の獣人は、両手を交差させたままの姿で立ち竦み……やがて胸の穴から炎に焼かれたかの如く、硬く脆い炭と化し、ボロボロにひび割れ、崩れて行く。

「や……ったぁ……！」

それを見届け、膝を折るノエル。やった！　と叫んだつもりだったが、声は枯れ、漏れたのは吐息のみ。抜けた息と共に力も抜け、そのまま濡れた草の中へと倒れた彼女は、静かに目を閉じる。

どのみち、最後の瞬間には目など殆ど見えてはいなかった。瞼も失われている今、目を閉じたというよりも、目が見えなくなった……といった方が正しいだろう。

何も聞こえず、何も感じない。降っているはずの雨の冷たさも、切り刻まれた体の痛みさえも。

そしてズッシリと重かった身体が、ふわりと綿毛の如く軽くなる。

（これが、死ぬって事なのかな）

凪の水面に浮かぶ木の葉の如く静かな空間に漂いながら、死を間近に感じるノエル。

絶対的な防御能力を持ち、この世で起る大半の出来事に対抗できる力を持つ天使にとって、死とは概念的な物に過ぎない。神より与えられた使命を全うした時、身体は光となり、魂は天へと帰る……それが天使にとっての終着点であり、生物としての死だ。

（でも私、神様になんて言われて地上に来たか覚えてないんだよね。このまま普通に死んで神様の所へ帰ったら、相当怒られちゃうだろうなぁ……）

神の命に背いた天使の魂は、粉々に分解されて新たな世界の礎になるという。それが一体どういった事なのか、どういう意味を持つのか？　全ては神のみぞ知る事だ。

（よくわからないけど、そうなっちゃったら嫌だな……）

せっかくヤマトと再開できたのに。神様の所へ帰ってしまったら話も出来ない。さらに魂まで失えば、雲の隙間から地上の様子を垣間見る事さえ出来なくなってしまう。魂が廻り廻るこの世界において、魂の消失とは真の意味で訪れる永劫の別れ。けれど、それも仕方が無いと思える。

（スダチちゃん助けたかったし……悪魔もやっつけたし。チラッとだけど、ヤマトにも会えたし……私は死んじゃうみたいだけど、頑張った甲斐があったよ）

ノエルは全力を振り絞った。命を燃やし、力とした。

通常、他人から力を受け取る事でしか能力を発揮できない天使が、自らの内から出でる力で他者を守ったのだ。これは他人の意思の具現者でしかなかった天使にとって、非常に大きな一歩であり革命的な出来事だ。

しかしそれは神の庇護下から離れ、自らの道を歩み出したのと同等の意味を持つ。神の僕たる天使が自ら楔を断ち切ったのだから、神への背信行為と言われてしまっても仕方ないだろう。

（もしも……運良くもう一回生まれ変われたら何が良いかな？）

小首を傾げるノエル。

（そうだな……ネコとか、結構良いかも）

ネコに生まれ変わったら、ヤマトの家へ行こう。

いきなり行っても飼ってはくれないだろうが、優しい彼の事だ。

戸口の前で鳴いていれば「しょうがねぇな」とか言いながら家に入れてくれるだろう。そしてスダチが絞りたてのミルクを温めて出してくれて、お腹一杯になった私は大きく伸びをする。ネコじゃらしで遊んで、柱を引っ掻いて、いい加減疲れたらヤマトの膝の上に乗って丸くなり、安らかに眠るのだ。

（うん、良いかも。きっと幸せな一生を送れると思う）

ゆっくりと、ノエルの周囲が輝き始める。静かだった水面から光が沸き立ち、空へと続く道を形作る。今こそ、地上と別れの時。

翼も、天使の光輪も失われたままのノエルだったが、羽毛が風に乗るかの如く、舞い上がる光に乗って身体が浮かび上がる。

久々の空を飛ぶ感覚に、ノエルの心は躍った。このまま天高く登り、神の下へ――。

（……痛っ！）

唐突に、右手が痛んだ。悪魔によってボロボロにされた右手……その手を、誰かが掴んでいる。

（もうっ！　ちょっと何するの？　離してくれないと飛べないよ。空の上へ行けないじゃない）

口を尖らせて掴む手を振り解こうとしたノエルだったが、どうやら相手は離す気など毛頭無いようだ。離すものかと、強い意志さえ感じる。

（痛い……痛いよ。そんなに強くされたら……っ！）

痛みを訴えるノエルに、掴む手の持ち主は乱暴で粗野な意思を返してくる。

知るか！　我慢しろ！　泣き言なら後で聞いてやる！　だから頑張れ、まだ行くな！

（行くな、って言われても……）

もう時間なのだ。早く行かないと、空への門が閉まってしまう。それに……。

（地上に残っても私、もうあの人の側には居られないよ。色々ヨゴれちゃったし……ほら見て、体中酷い事になってる。そんな女の子、近くでウロウロされたら嫌でしょ？　あの人は優しいから何も言わないかもしれないけど、嫌がられてるかもって思うと……私だって辛いよ）

少しだけ、手を掴む力が弱まった。だが、すぐさま先よりも力強さを増してノエルの手を掴み、地上へと引き寄せて怒鳴りつける。

ワガママ言うな！　ごちゃごちゃ言ってねぇで、嫌でも何でもココに居ろ！　勝手にどっか行くなんて、俺が許さねぇぞ！！

（えぇ！？　もう、どっちが我侭なのよ……）

だが彼がそう言うのなら……側に居ろと言ってくれるなら、少々辛かろうが地上へ残ろう。自分だって本心ではそれを望んでいる。

けれどもう、本当に無理なのだ。

力尽きた悪魔が塵と化すように、限界を迎えたノエルの身体は光の粒子と化し、空に上って行く。掴まれている手だって、ほとんど消えてしまい残っていない。魂もやがて同じ道を辿るだろう。

きっとこれが悪魔に穢され、人々に見放された天使の運命なのだ。

（ゴメンね……）

諦めんな！　頑張れ！！　死ぬんじゃねぇ！！

魂に響く声。

もしお前が神とやらに捨てられたとしても、俺が絶対拾ってやる！　この世の誰もがお前を嫌ったとしても、俺が愛してる！！　俺だけはお前を愛してる！！　だから俺を信じろ！　俺を信じて、戻って来い！！　戻って来てくれ……！

「……頼む！」

雨に濡れた草原で、自らの傷も省みず横たわるノエルの手を取り、声を掛け続けるヤマト。

既にノエルの身体は、半分以上が光の粒子となって虚空へと消えていた。残っているのはヤマトが握る右手と、上半身だけ。それだってボロボロで、端から順に次々へと光に変換されて消えて行く。

心臓の鼓動は止まり、呼吸もしていない。人工呼吸は既に試した。心臓マッサージは……ついさっき心臓が光になって消えてしまい、出来なくなった。どんどん削れ、軽くなって行くノエルの身体。

「畜生……！」

もう駄目なのか？

「諦めねぇぞ……俺は諦めねぇ！」

手は尽くした。

「まだだ！　まだ、何かある筈だ！」

もう無理だ。

「無理じゃねぇ！！　無理じゃ……」

（ん、無理かもね……）

独り、深い絶望と戦うヤマトの耳に……声が、聞こえた。

（無理かもしれないし、駄目かもしれない。でも、やってやるんでしょ？　前から良く言ってたじゃない）

その声がどこから聞こえたのか、ヤマトにはわからない。だが、はっきりと聞こえる。この声は……！

（だったら頑張って！　貴方なら出来る。貴方が起こしてくれるって私、信じてるから。信じて待ってるから……頑張って、ヤマト！！）

慌ててノエルの顔を見るヤマト。だが相変わらず包帯が巻かれたままの、血色の悪い死人のような顔だ。

空耳か？　いや、空耳だって構わない。ノエルが俺を信じて待ってるって言うのなら……！

「俺は諦めねぇ！！　やってやる……やってやらぁ！　見てろよ、ノエル！！」

ノエルの身体を抱きなおすヤマト。最後の瞬間まで足掻き続けるだけの気力が、少年の全身に漲る。

だが彼の意思とは関わり無く、相変わらず消滅を続けるノエルの身体。既に左半身は殆ど消え失せ、下半身も腹の辺りまで消滅が進んでいる。だが何故か右半身と頭部だけは、あまり消滅が進んでいない。

どうして？　その答えは直感的に導き出された。

「俺が触ってるからだ……！」

ヤマトが握る右手。そして抱き上げようと頭を支える左手。その他、自分の身体と触れている部分は消滅が遅い！　それに気付いたヤマトは迷う事無くノエルの身体を胸に抱きしめた。小柄な彼であっても、その両手で十分に抱えられる程にまでノエルの身体は削れてしまっていたが、そんな彼女の小さな上半身を、ヤマトは優しく、ありったけの愛でもって包み込む。

すると……。

「消滅が……止まった！」

完全にストップはしていないものの、それでも消える速度は随分遅くなっている気がする。安心するには早過ぎるが、さっきよりはマシだ。今のうちに、何か手を考えなければ！

血眼で周囲に視線を走らせるヤマト……と、辺りを見るうちに気がついた。妙に自分の周りだけが明るいのだ。最初は消えかけたノエルが光っているのだと思ったが、どうやら違う。

「な、なんだ？　光が、漂って……？」

光となって消えるノエル。彼女の身体から剥れた光の粒は、しばらく空を漂った後に力を無くして何処へかと消えて行く。だが何故か、その光の粒たちは消える事なくヤマトの周囲を漂っている。それどころか消えていた光が、一つ、また一つと虚空より現れ、ヤマトの周りに集まり始めていた。

それはまるで行き場を無くし彷徨う子供が、暖かな明りの下へ集うかの如く、光の粒はどんどんと集まり互いに隙間を埋めあって、やがてヤマトを中心とした光球を形作る。

「これって……」

ヤマトは自らを囲う光球に見覚えがあった。ノエルが悪魔にトドメを刺す際に使う、光の矢を無数に降らせる技……その最後に形作られる光の繭に似ているのだ。

ノエルが放つ件の技ではいつも、悪魔はたくさんの聖なる光に貫かれ、高熱によって身体を焼かれて塵となり消滅していた。もしもこの繭が同じ物だとすれば、自分たちも悪魔と同じ運命を辿る事になるのだろうか？

だが仮に、そうなったとしても……。

「絶対に離さねぇからな。ノエル、心配すんな」

ゆっくりと、光の包囲が狭まる。ノエルを連れてこの場から離れようかとも思ったヤマトだったが、彼の身体もまた限界だった。蓄積した疲労と失われた多くの血によって手足の感覚は無く、歩く事はおろか立ち上がる事も出来ない。だが二度と離さないと誓った両腕だけはしっかりと少女の身体を抱き留めたまま、迫る光から自ら

を盾として庇い、覆い隠す。

「絶対に、最後まで……」

光に包まれる二人。

この時、ヤマトはまだ気付いていなかった。彼の腕の中にある者もノエルであるなら、空に漂う光もまたノエルの一部であると。

光は彼ら二人を焼き尽くそうと集ったのでは無い。ヤマトに惹かれているのだ。ノエルと同じように……ノエルだからこそ、虚空へと消えてもまだ彼を慕い、再び舞い戻った。

「ずっと、一緒だ」

光の中、半分以上が消え失せたノエルへ、そっと頬寄せるヤマト。

そして優しく口付ける……永遠の愛を誓って。

丘の上の草原で、優しい光が舞い踊る。光の繭は一点に収束し、互いの想いを確かめ合う二人に吸い込まれるようにして消えた。

そして、夜の闇が訪れる。

いつの間にか降り続いた雨は上がり、満天の星空が二人を静かに見守っていた。

第五十一話：戦士たちの休息（一）

真っ暗闇の中、手探りで探し出したランタン。小さな赤毛の少女がそれを差し出すと、黒髪の少年……ヤマトは軽い礼と共にそれを受け取り、慣れた手付きで家に残っていた僅かな油を注ぎ、火口箱から火種を移す。

最初こそ燃える事を渋っていたランタンの芯であったが、程無くしてその身に火を灯し、狭い室内を暖かな色で照らし始める。

「長雨で、ちょっと湿気ってたか？　まぁ使えるんなら何でも良いか」

ランタンのシャッターを弄って光量を調節し、室内を見回すヤマト。自らが生まれ育った見慣れた風景に囲まれてか、どこか落ち着いた表情が、揺れる明りに照らし出されている。

悪魔との戦いを終えて、休息の為にやってきた一軒家。見晴らしの良い丘の上に立つ、小ぢんまりとした家だ。一部の壁はガイランによって破壊されてしまっていたが、それでも揺らぐ事無くしっかりと立つ、丈夫な家。

小さな少女にとっては初めて訪れるこの場所は、どうやらヤマトの実家であるらしかった。それを知った途端、ランタンに照らし出される全てが珍しく思えて、ついキョロキョロとしてしまう。

「ヤマトよ、すまぬがこちらに明りを貰えるか？　傷が縫えぬ」

渋味のある低い声が明りを要求した。どうやら物見遊山をしている暇は無いようだ。

頷いてそちらを照らすヤマト――と、闇の中に、傷付いた右腕に針を通す黒毛の人狼が浮かび上がる。太郎丸だ。小さな少女の記憶

にも、その姿は残っていた。手足に酷い傷を負い、体毛の一部も炎に炙られ縮れてはいたが、堂々と落ち着いた物腰は以前とあまり変わりない。

だが、彼の隣でポーションを手に待機している銀髪の美しいエルフ……あんな人は見た事が無い。小さな少女の胸が、不安にざわめいた。

「もう少しポーションを使っておかれますか？」

「いや、それには及ばぬ。これで……縫い終わった」

残った糸を歯で短く噛み千切ると、傷の具合を確かめ、腕の動きを確認する太郎丸。痛みに顔をしかめるものの、それほど深刻な傷では無かったようだ。傷を一舐めして血を拭い、片手で器用に包帯を巻き始める。

「厄介な物ですね、悪魔の呪詛という物は」

治療の後片付けを始めるエルフの女性。呪詛について他人事のように言ってはいたが、彼女自身も痛々しく血の滲む絆創膏が身体の各所に貼られている。ついさっき、大蜘蛛と戦った際に負った傷らしい。

凄く綺麗で大人しそうな人なのに、そんなに勇敢な一面もあるのかと驚きを覚える小さな少女。やはり女は度胸なのだと、強く心に刻む。

「ところでヤマト、そろそろ説明してもらえるか？　どこで何をしていたか……」

話を切り出すタイミングを窺っていたのだろう。太郎丸がそう問いかけて……ちらりとこちらを……小さな少女の顔を見た。獣人特

有の野生的な瞳が、一瞬優しさを帯びる。

「ま、懐かしい顔もある。どこに居たのかは、言わずとも判るが……な」

言って、太郎丸が微かな笑みを浮かべる。どうやら彼も、自分の事を覚えてくれてたらしい。見知らぬ場所で少し心細かった小さな少女は、ただそれだけの事が無性に嬉しかった。

「ああ……さっきスダチから聞いた。アデリーネと二人で探してくれてたんだろ？　悪い、急に居なくなったりして……あと、色々ありがとな」

バツが悪そうに、頭を下げるヤマト。そうしておいてから、自分が居なくなった日の事、ガイランに襲われて大怪我をした事。そして少女の村で養生していた事を順番に話して行く。

ヤマトは随分と気負ってるようだったが、謝られている側の二人は彼を咎めるつもりは無いようだ。ただ事実が知りたかっただけ……どことなく、そんな雰囲気を感じる。

「そう……だったのですか。では、そちらの彼女がヤマト様の恩人というわけですね？」

そう言って、少女の方へと向き直るエルフの女性。腰を屈めて目線を合わせた彼女に、小さな少女の緊張は高まる。

宝石のように澄んだ瞳。傷付いてもなお整った顔立ち、美しい肌。屈む事で大きく開いた服の胸元からは、零れ出さんばかりの豊かな膨らみが二つ、ランタンの光を浴びて輝いて見える。どれもこれも、自分には無いものばかりだ。

「私はアデリーネといいます。この耳でお分かり頂けるかしら……種族はエルフです。少し前からヤマト様のお世話になっております」

自分へと向けられる丁寧な口調、澄んだ声、柔らかな微笑み。

初めて天使のノエルを見た時も綺麗だと思ったけれど、質の違う魅力が彼女にはある。もしノエルを『美少女』と表現するなら、このアデリーネという人は『美女』だ。しかも頭に『絶世の』と付くくらいの、物凄くに整った美しさ。どうしてこうヤマトの周りには異様な程の美人ばかりが集まるのか。そんなのと比べられたら自分なんて……。

桁違いの美貌を前に、幼い少女の小さな胸は押し寄せる劣等感によってペチャンコになってしまいそうだ。……まぁ元々、物理的にはペチャンコであるのだが。

「スミさん……私からもお礼を言わせて下さい。ヤマト様を助けて下さり、ありがとうございました。本当に感謝しております」

感謝の言葉を述べるアデリーネの潤んだ瞳から感じられる、深い安堵と愛情。大切な人が無事であった事を心から喜んでいる。敏感にそれを感じ取った小さな少女こと琥珀色の村のスミは、思わずヤマトの背中に隠れてしまった。

彼の服を掴みながら半身だけを乗り出して、アデリーネの様子を覗き見るスミ。乙女のカンが激しく警鐘を鳴らしている。まさかとは思ったが……こんな美女までが糞チビの事を!?

あんなチンチクリンのどこが良いというのか？　いや、良い部分はたくさんあるのだが、何もそんな、超大金持ちが貧乏人の獲物まで奪い取るような真似をしなくても、他にもっと良いのがいくらでも居るだろうに、よりによって……！

いや、まて……そうか、わかった。いま確信した。この女が……アデリーネがヤマトを狙うというのなら、今から敵だ！　ライバル

だ！　底意地の悪い泥棒猫め！　この……女狐めっ！！

「ふーーーっ！」

追い詰められた子猫のように毛を逆立てて、警戒心剥き出しの視線を返すスミ。

あら？　と小首を傾げるアデリーネに軽く詫びを入れて、ヤマトはスミの首根っこを掴んで自分の背中から引っぺがした。

「おいコラ、人見知りなんてするガラじゃねぇだろ？　アデリーネが挨拶してんだから、お前もちゃんと挨拶しろよ……仕方ねぇ奴だな」

ヤマトが無遠慮にスミの頭を撫でると、手の平からふんわりとした温もりが彼女へ伝わる。雨で湿ったままの赤毛はクシャクシャになってしまったが、スミは、そうされるだけで幸せな気分になってしまうのだ。

（ああ……なるほど）

途端にゴロゴロと喉を鳴らし始めたスミを見やり、アデリーネは全てを理解する。この娘もなのか、と。

アデリーネが密かに抱いていた、スミに付きまとう疑念の殆どが、恋する乙女の行動力という言葉で片付いてしまった。変に勘ぐっていた自分が恥かしい。

「俺が紹介するよ。コイツ、スミってんだ。前に立ち寄った村の、村長の孫で……ここんトコずっと世話になってた。てっきり村に残ってると思ったのに、知らない間についで来ててよぉ……」

「はぁ……」

軽く溜息をつくアデリーネ。

全く、この人はなんて罪作りな……行く先々で女心をモノにして、後まで追わせてしまって。まだ小さな娘だから大丈夫とでも思ってるのかしら？　どんなに小さくても、女は女だというのに……。

「はぁ……そう、ですか。わかりました」

再度、溜息をついて視線を横合いへと移せば、渋柿を噛み潰したような顔をした太郎丸の姿が目に入った。思いは同じ、という事だろう。

「ま、お陰で助かったけどな。ガイランの野郎にも一杯食わせてやったし。なぁ？」

「うん！　アタシ、コーヒー投げた！」

輝くような笑顔でヤマトの声に応えるスミ。彼の役に立てた事が嬉しくて仕方ないようだ。その気持ちは自分にも良くわかる。彼の為に何かしたい、役立ちたいという思いは――と、ここまで考えたアデリーネはハッとなり、太郎丸の方を窺った。すると――。

「……」

黒毛の人狼が、先にスミへ向けていたのと似た、苦虫を噛み潰したような表情でこちらを見ていた……私も同類、という事か。

アデリーネは恥かしくなり、肩をすくめて硬い椅子に腰掛けた。

「ふう……。この辺りで自己紹介はもう良いか？」

これ見よがしな溜息と共に苦笑して、太郎丸が「これからどうす

る？」と話題を切り替える。

「やって来た追っ手の質と量を見るに、サークス殿は……いやサークスは、まだノエル殿を諦めてはおらぬのだろう。連れ戻し、利用する気だ。大蜘蛛とガイランが倒れたと知れば、再三の追っ手が掛かる事は間違い無かろう」

腕を組み、滔滔と述べ立てる太郎丸。

「我らは今、消耗している。傷が癒えるまではひたすら逃げ、迎撃に徹するのが良策かと思うが……」

そこまで言って、ヤマトの背後に置かれたベッドへと視線を移す太郎丸。それにつられ、全員の視線が同じ場所へと集まる。

清潔なシーツの引かれたベッド。そこには、ノエルが横たわっていた。顔には相変わらず包帯が巻かれたまま、毛布を掛けられ、まるで眠るように……というよりも。

「すふーー……、すふーー……」

定期的に聞こえる安らかな寝息。時折り、ごろりと寝返りも打っている。

サークスの手に落ちてからの数ヶ月、ずっと訪れる事の無かった穏やかな眠りに、彼女は身を委ねていた。

「良く寝てやがる」

ヤマトがノエルの額へ軽く手を乗せる。すると、うふふ、とだらしの無い笑みを浮かべたノエルは、何事かモニョモニョと寝言を言っている。幸せな夢でも見ているのだろう。

「逃げるかどうするかは、コイツ次第だな。とりあえず二、三日くらいは様子見てぇトコだけど」

そう言ったヤマトの言葉に頷き、理解を示す太郎丸。すぐさま追っ手が掛かる事も無いだろう。近々の予定は、これで決まった。

「それにしても……不思議ですね。あれだけポーションを使っても治らなかったのに……」

呟くアデリーネ。彼女が言ったのは、ノエルの傷についてだ。

数刻前――。

ヤマトと共に光に包まれた後、彼の手に抱かれていたのは、光と化して消える直前の、ボロボロとなったノエルだった。

とりあえず消え失せていた部分は身体へと戻ったものの、骨は折れ傷は開いたままで、流れる血は変わらず光と化して消えて行く。このままでは、また同じ事になってしまうだろう。

そう考えたヤマトは、ダメで元々とばかりに回復薬の最高峰、スミから貰っていたエリクサをノエルに飲ませたのだ。すると――。

「まさか効くとは思わなかったけどな」

悪魔の呪詛を受けていたにも関わらずノエルの身体は癒しの魔力が効果を表し、見る見るうちに傷が塞がり血色が戻った。そして失われていた肌や爪、唇や瞼、そして左眼までも再生したのだ。

いくらエリクサが最高の回復薬だといっても、所詮は薬。ポーションの効果を高めたというだけの物だ。これまでに悪魔の呪詛を打ち破ったという記録は無いし、噂も聞いた事が無い。それなのに、何故？

理由はわからないが、兎にも角にもエリクサによってノエルの傷

は劇的に回復した。

「だが、せっかくの朗報に水を差すようで悪いが……完全に回復したわけではござらん」

太郎丸の言う通り、全ての部位が回復したわけでは無い。

滅茶苦茶にされていた翼はとりあえず元の形になったものの、羽そのものは若干の羽毛が生えた程度で筋力も衰えており、到底元通りとは呼べない状況。そしてボロボロにされていた髪も、なんとか生え揃ってはいたが以前よりもずっと短く、ベリーショート程度の長さしか無い。そしてガイランによって筋肉を寸断された右手は他の部位と違い、全くと言って良いほど回復していなかった。

「どうして回復の度合いに、これほどの差があるのでしょう？　傷を受けてからの経過時間が関係すると考えても、翼が治って右腕が治らない理由に説明が付きませんし……」

首を捻るアデリーネ。そう悩む彼女へ、可愛らしい声が割り込んで来た。

「きっと、口移しが良かったんじゃないですか？」

そう言いながら、お盆を手に現れたのはスダチだ。彼女の持つお盆の上に乗っているのは、レモンの絞り汁とハチミツをお湯で割った飲み物。一般にレモン湯などと呼ばれ、身体を温めるのに効果的だと寒冷地などで良く飲まれている。

「はい皆さん、良かったらどうぞ。少しポーションも入ってますから、疲れも取れると思いますよ」

各々が目の前に、湯気の立つ湯飲みが置かれて行く。雨の中を走り回り、身体の芯から冷えていた面々にはありがたい差し入れだ。

「あ、アタシも良いの？」

「うん、勿論！　スミちゃんだって頑張ったんだから、みんなと一緒だよ」

「……あ、ありがと」

湯飲みを手に取り、頬を赤らめるスミ。同じ年頃の同性であるスダチには、彼女の警戒心も多少緩むようだ。

「それはそうとスダチ殿、怪我は良いのか？　なにやら血で汚れていたが……」

「あ、あとスダチさん？　口移しが良かったって一体何の事……」

太郎丸とアデリーネが、ほぼ同時に疑問を口にした。それらを受けて、実の兄へと若干冷めた視線を送るスダチ。当のヤマトは露骨に目を逸らし、ほの甘いお湯を啜る。

「怪我の方は大丈夫です。お兄ちゃんにハイポーション貰って飲んだので……」

「な、なんだよ……高級品なんだぞ、ハイポ！　スミに感謝しろよな？」

「うるさいなぁ、もう。わかってるよ、ちゃんとお礼言ったもん！　お陰さまで、ピンピンしてますって！」

どこか不服そうなスダチではあるが、言葉に嘘は無く元気そのものであるようだ。

肺を傷付けられて派手に血を吐いたものの傷自体は小さかったようで、ハイポーションを三本ほど飲み干した事で傷は塞がり、今は

痛みも出血も無いと言う。

「ふむ、ならば良かった。だがスダチ殿、完全に回復したわけでは無いだろう？　時間が薬となるだろうが、無理は禁物だ」

「あ、あの……ところでその、口移しというのは……」

一安心、といった体で満足気に頷く太郎丸の横で、やけに突っ込んでくるアデリーネ。更にはスミも、興味津々といった視線をスダチへと向けている。

「そう、聞いて下さい！　お兄ちゃんヒドイんですよ？　実の妹には適当にハイポ飲ませておいて、ノエルお姉ちゃんにはご丁寧に、口移しでエリクサ飲ませたりなんかして……！」

「し、仕方ねぇだろ！？　ノエルの奴、気絶してて何も飲みこまねぇんだから！」

「ヤマト様、なにも口移しにしなくとも、身体に振り掛けても効果は一緒ですのに……」

「雨降ってたから、流れちまうと思ったんだよ！」

「お兄ちゃん、その時にはとっくに雨止んでたよ！？」

スダチとアデリーネの二人から投げ掛けられる矢継ぎ早の追求を、どうにか口先で避け続けるヤマト。だが明らかに防戦一方で、反撃のチャンスも、脱出の機会も全く見えてこない。そしてそうする内、痛恨の一撃を受けてしまう。

「ひっ、ひっ……ひえぇぇぇえええん……！」

「あっ……」

スミが泣き出した。

大粒の涙を零し、声を上げて泣きじゃくる少女に、ヤマトの口車

は完全に停止する。

「あ～あ、お兄ちゃん悪いんだ。スミちゃん泣かした～！」

「スミさん、どうか泣かないで。ヤマト様はああいう方なのです…諦めるしか、無いのです……」

「ひぐっ、ひぐっ……う、うぅ～！」

女性陣から一斉に冷たい視線を浴びて、居心地悪い事この上無いヤマト。助けを求めようと太郎丸を探したが……彼はいつの間にか、部屋の外へと退避していた。薄情者！　と内心で罵る。

「わ、悪いスミ……いや、その、悪いっていうか……あのな、えっと……」

スミになんと声を掛けて良いかわからず、しどろもどろのヤマト。早く謝れだの、酷い殿方だのと、ここぞとばかりに集中砲火を浴びて、体力と精神力がガンガン削られて行く。

こんな時は何て答えたら良いんだ？　誰か教えてくれよ……！

自分も泣きそうになりながら、ヤマトはただひたすら涙を流す娘を慰め続ける以外、何の手立ても持ってはいなかった。

第五十二話：戦士たちの休息（二）

さっきまで聞こえていた賑やかな泣き声が、ようやく止んだ。
そろそろ起きる時間なのかな？　心地良いまどろみの中で、ノエルはそんな事を考える。

「そういや、さっきノエルの傷の回復に差があるって話してたよな？　俺さぁ、ちょっと思いついた事があって……」
「あ！　お兄ちゃんがまた話し変えようとしてる。自分の都合が悪くなると、すぐにそうやって！」
「ちがっ……！　バカ、余計な事言うんじゃねぇよ！」

そうそう、いつもそうなのだ。彼は人の事をバカとか言って、色々な事を誤魔化してしまう。そんな事ばっかり上手になっちゃって……あ、でもそれって私のせいなのかな？
その疑問に答えを出せぬままではあったが、とりあえずは起きよう……そう思ったノエル。しかし瞼が重い。頭はすっかり目覚めているのだが、身体の方はまだ少し眠りを欲しているようだ。目を開けぬまま、ノエルは仕方なく周囲の声に耳を傾ける。
それにしても、懐かしい。前は私も、その輪の中に居たんだっけ……。

「ま、まぁ良いではないかスダチ殿。さあフライパンを置いて……。アデリーネ殿も、その辺で……」

見るに見かねた太郎丸さんが、猫なで声で……ううん、犬なで声？　そんな雰囲気でヤマトのフォローに入っている。この人も相当な苦労性だ。

「そ……そうそう！　ヤマトに聞こうと思って忘れておったでござる！　悪魔どもはどうやって鉄壁たるノエル殿の守りを破ったのであろうなぁ？　某、ずっと気になっていたでござる！」

「あぁソレな、その話！　でもそれ天使の弱点にも関わるから絶対に秘密なんだぜ！？……なぁスダチ？」

わざとらしく口を合わせる男二人。特に太郎丸さんの芝居がかったゴザル口調が小憎たらしい。話を振られたスダチちゃんも、胡散臭そうに鼻をフンと鳴らし、小さく「ウザッ」と呟いた。太郎丸さんのシュンとする姿が目に浮かぶ。

「まぁ、ノエルお姉ちゃんには口止めされてるけど……ここに居る人たちになら言って良いんじゃないかな？　お姉ちゃんも許してくれると思う。それに知らないと次に同じような時、困っちゃうし」

スダチちゃんがそれぞれの湯飲みへレモン湯を注ぎながら言った。うん、教えちゃって構わないよ。悪魔だけが天使の秘密を知ってて、仲間が知らないっていうのもおかしいし。

それよりも私には、ふわっと漂って来た甘酸っぱいレモン湯の香りの方が気になる。こんな心地良い香りを感じるのも久しぶりかもしれない。

「そうだな。んじゃあ、俺が話すけど……みんなマジで秘密にしてくれよ？　あのな、天使ってのは……」

聞き耳を立てるみんなへ、ヤマトが天使の秘密を明かす。

天使はみんなから頼りにされた分だけ力を出せる。頼りにされなくなると、信頼されないと全然ダメになる。だから天使はみんなの為に頑張るし、一生懸命努力する。少しでも多くの人から愛されるように……。

ふと冷静になって考えると、天使の生き方って本当に打算的だよね。自分の為に八方美人でいる所とか。まあ悪魔と戦ったりするのに強い力が必要だから、その為にはどうしても仕方ないんだけど……。

「ふむ……つまり連中は、ノエル殿の信用を失墜させて力を弱らせたのか。だが、いくら秘密とはいえ……よく今までバレなかった物だ」

「天使そのものの数が少ねぇし、天使と出くわした悪魔で生きてる奴なんざ、もっと少ねぇ。気付いても、試せなきゃ意味無いし……それに悪魔連中は自分のやりてぇ事以外にゃ殆ど興味無いみたいだしな」

なるほど、と呟く太郎丸さん。でもまだ疑問があるようで……。

「だが小さな村で少々評判が落ちたとて、それでいきなり天使の力が出なくなる、というのも妙な話だ。その事実を知らぬ多くの者は、未だノエル殿を慕っておるのだぞ？」

意外と……なんて言っては失礼だけれど、太郎丸さんは顔に似合わず、いつも色々な事を考えている。そんなだから苦労を背負い込んでしまうのだろうけど。

なんとか体の方も起きる準備も整ってきた私は、少しだけ目を開けてみる。薄く靄がかかったような視界……あれ？　何時の間に私の目、見えるようになってたんだろう？　ダメにされちゃった左目も、薄っすらとだけど見えてる気がするし、右目も瞼が元に戻ってるような……？

「ノエル様が力を発揮出来なくなった理由については、私に心当たりが御座います」

霞んだ視界の中に、アデリーネさんが一歩前へと踏み出す姿が映った。相変わらず、すらりと伸びた背筋と無駄の無い所作が彼女の美しさを際立たせている。その辺り、私にもまだ努力の余地があるって事だ。

「お話をする前に……とりあえずは飲み物をどうぞ太郎丸様」

「む？　これはかたじけない」

空いていた太郎丸さんの湯飲みへ、湯気の立つレモン湯を注ぐアデリーネさん。本当に気の利く人だ。太郎丸さんも尻尾を振って喜んでいる……普段あまり喋らないのに今日は良く喋っていたから喉が渇いてたんでしょうね。

けれど……。

「えいっ！」

アデリーネさんは太郎丸さんがいざレモン湯を口に運ぼうとした瞬間、彼から湯飲みを取り上げ、自分で一気に飲み干してしまった！

「んくっ、んくっ……ぷはぁ」

「な、何をなさるアデリーネ殿！？　某の……」

飲もうとした所を取り上げられて、少なからずショックだったのだろう。太郎丸さんの尻尾がシュンとして垂れ下がった。レモン湯の一杯くらいでそこまでショックを受けなくても……。

けれどアデリーネさんはショボリした様子の太郎丸さんを満足気に見つめて、悪びれた様子も無く尋ねる。

「太郎丸様にお伺い致します。いま私がレモン湯を入れて差し上げ

た時の喜びと、私にレモン湯を取り上げられた時の悲しみ……二つを比べた場合、心に受けた衝撃は、どちらが上でしたか？」

何を唐突に？　そう訝しがる太郎丸さんを「後で説明しますから」と宥めて、アデリーネさんは先を促す。

「むぅ？　そうだな……どちらかといえば、取り上げられた時の方が……若干ではあるが、ショックは大きかったように思う」

若干、じゃないよね……みんなそう思ったけど誰も口にはしなかった。これぞ武士の情け。

それはともかく、太郎丸さんの言葉を聞いたアデリーネさんは微笑み「いつもご協力ありがとうございます」と告げて、発言を続ける。

「私は太郎丸様に、レモン湯を差し上げ、同じレモン湯を奪いました。その結果、太郎丸様は『レモン湯を得た時の喜びよりも、奪われた時の方がショックがより大きかった』と感じられておられます」

「若干……な」

そこは拘るんだ……。

でもそんな男の拘りは無視され、アデリーネさんの話は続く。

「レモン湯という同じ価値の物を与えられ、失った。価値は同じなのですから、本来心に受ける衝撃は同じであるはずです。ですが実際には、失った悲しみの方が大きい。これはつまり……」

「若干、だ」

太郎丸さん、結構しつこい。

「つまり人は『嬉しい、楽しい』といったプラスの気持ちよりも、『辛い、悲しい』といったマイナスの気持ちをより強く感じやすい。そう結論できます」

アデリーネさんの話に、頷いて返すヤマトとスミちゃん。でもあの薄ボンヤリとした眼差しは、全然頭に入ってないのにわかったフリをしている証拠。あとで良く説明しないと。

「要するにノエル様を知る全ての人が『天使が居て心強いと』感じるプラスの気持ちより、件の村にいらっしゃった方々が『天使が負けた』とショックを感じたマイナスの気持ちが、全体として大きかったという事になります」

付け加えるなら噂の広まっているであろう今、そのプラスとマイナスの差はどんどん開いている。何人かの人が以前と同じように私を思ってくれたとしても、覆せない程にまで。つまり私は、もう……。

「……なぁ糞チビ」

「糞チビとか言うんじゃねぇよ。どうした、スミ？」

話に置いてけぼりとなっていたスミちゃんが退屈し始めたようだ。ヤマトの袖を引いて、何事か話し掛ける。

「今の話、難しくてアタシにはわかんなかったけど……結局、みんなどうすんだ？　悪い奴、やっつけるのか？」

「それは……」

答えようとして、一瞬躊躇するヤマト。

多分、ヤマトの中ではもう決まっているんだ。でも他の人を慮っ

て即答を避けた……私には、そんな風に思える。
そんな彼の様子に、真っ先に気付いたのは苦労性の人狼、太郎丸さんだ。組んでいた腕を解いて膝の上に乗せ、リラックスした様子で口を開く。

「ヤマトよ、気兼ねなどするな。安寧を欲するなら、遠に冒険者などしておらん。某で良ければ手を貸すぞ」
「そうですとも、気持ちは同じです。乗り掛かった船……最後までご一緒させて下さい、ヤマト様」

アデリーネさんも、それに続く。
てっきり、無茶はよせ、とでも言われると思っていたのだろう。二人の言葉に少し驚いていた風のヤマトだったけれど……そんな表情をすぐに和らげ、俯き加減で「あんがとな」と呟く。
そして顔を上げると、強い意志を声に乗せ、はっきりと言った。

「俺は、サークスの野郎を叩く！　無茶だろうと何だろうと、野郎だけは許せねぇ！　必ず……絶対にブチのめす！！」

無茶や無謀なんて話じゃない。ヤマトの宣言は、彼の正気を疑うくらいの……普通の人なら『夢見すぎだろ、頭ヘンになったか？』って程の話だと思う。体中ボロボロのレベル４の人が、伝説の装備で身を固めたレベル３２の人に挑むなんて異常だ、馬鹿げてる。
けれど、誰も止めようとしない。それどころか少し嬉しそうな表情まで見せている。「そうこなくっちゃ」と、自分たちの期待に応えてくれたヤマトを、誇らしげに見つめている。

「あれ？　お兄ちゃん、もう出かけるの？　言っても聞かないとは思うけど……危なくなったら、さっさと逃げてよね？」

台所からレモン湯のおかわりを持ってきたスダチちゃんが、半ば諦めたように言う。

スミちゃんは？　と見れば、置いて行かれないようにする為だろう。自分の荷物をまとめて、もう背負っている。

ヤマトが「手を貸してくれ」と頼むまでも無く、誰の目にも迷いは無い。

「では少しでも勝率を上げるために、まずは相手の情報を収集しましょう。殴りこむにしても、場所がわからなくては行けませんもの」

アデリーネさんが率先して場を仕切り始めた。今後の行動において必要な事柄が次々にピックアップされ、まとめられて行く。

その中にあった項目『サークスについての情報』。そこへ話が及ぶタイミングを見計らって、私は起き上がる。身体は少し痛んだけど……やっと来た私の出番だもの。見逃す手は無い。

「それくらいなら……私でも力になれるかな？」

驚くみんなの注目を浴びながら、私はヤマトと共に戦うべく、知りうる限りの情報。その全てを語ったのだった。

第五十三話：いい女！（一）

朝靄が森の枝葉を濡らす静寂の中、ざくざくと土を掘り返す音が繰り返される。

朽ちた古木の洞の中、ひたすら土を掻く銀髪の娘。枯葉が折り重なる湿った腐葉土は見た目よりもずっと柔らかく、素手でも簡単に掘り起こす事が出来た。

やがて土中から現れた、油紙で幾重にも包み隠された代物。一抱えほどもあるそれは結構な重量物にも思えたが、掘り返し、抱え上げると思いの他、軽い。エルフの細腕であっても余裕を持って持ち上げる事が出来た。

「アデリ姉ちゃん、それが言ってたヤツ？　お宝ゲットなのか？」

背後に控える赤毛の少女が、興味深そうに覗き込んで来る。

「はい、スミさん。これで目標達成です」

中身を軽く確認したアデリーネが振り返って微笑むと、赤毛の少女ことスミは「やったな！」と親指を立てて嬉しそうに笑った。その屈託の無い笑顔に、アデリーネの気持ちも自然と明るくなる。

「んじゃ、次だな。えっと、こっから近いのは……」

スミが丸められた羊皮紙を広げ、現在地を指差す。

ここは森深いエルフの隠里。かつてヤマトと太郎丸、そしてアデリーネの三人で訪れ、シルフと戦った場所。アデリーネはスミと二人、この場所へ伝説の武具を回収しにやって来ていた。

「ずう～っと上の方にある、川の……」
「いいえ、スミさん。次の目的地はもう決まっております。先を急ぎましょう」

掘り出した物をしっかりと背負子に縛り付け、一分一秒を惜しむようにして立ち上がるアデリーネ。そんな彼女の様子にスミは首を捻る。

「へ？　次、一番近くの隠し場所じゃないのか？　だったら、そんなに急いでも意味無くないか？」
「そうですね……スミさん、この前お話した事を覚えておいでですか？　ヤマト様のお家でみんなと相談して決めた、これからについての話です」
「うん、覚えてる！　アレだろ？　ノエル姉ちゃんが目ぇ覚まして、銀鎧のニイちゃんが悪魔で、なんとかで……っていう」

スミの言葉に頷いて返すアデリーネ。
一週間ほど前。生気を取り戻したノエルは自分たちに、数々の貴重な情報をもたらしてくれた。中でも驚かされたのは、今サークスに憑いている悪魔は、ノーウェイに憑いていた悪魔と同一である、という話であった。
天使と同じく、何度滅ぼされようと現世へと舞い戻る悪魔たち。だがサークスに憑く悪魔のそれは、あまりにも早過ぎる。故に信じ難い事ではあったが、ノエルの話を総合すると同一固体である可能性が高く、少なくともその意思を受け継いでいる、との結論に至ったのだ。

「んで、えっと……その悪魔、前に糞チビへ『絶対コロス！』って言って死んだから、きっとヤマト狙ってくる。あと悪魔に憑かれてる銀鎧のニィちゃんが『伝説の武器探したい』って言ってたから、

それも探そうとするはず……だろ？」
「そうですね、良く覚えてらっしゃいました」

アデリーネに褒められ、満足そうに鼻を鳴らすスミ。
大人同士の会話を端で聞き、ここまで理解したのだろうか？　だとすればこのスミという娘、外見から受ける印象よりも随分頭が良いようだ。こっそりと感心しながら、アデリーネは言葉を続ける。

「仰るとおり、サークスに憑いた悪魔はヤマト様の命を狙うか、伝説の武具を探そうとしているはず。そしておそらくは、ヤマト様の命など何時でも奪えると軽んじて、我々より先に伝説の武具を手に入れるべく行動しているでしょう」
「んだから、アイツより先に伝説装備盗っちゃえ！　って作戦だよな？　だからソレ、掘り返したんだろ？」

アデリーネが背負う包みを指差すスミ。いともあっさり掘り出してしまった為に有難味が薄いが、包みの外からでも感じられる一種異様な魔力の波動……そしてアデリーネが手に入れていた情報との合致。その包みの中身こそ伝説に名を残す武具である事に、ほぼ間違いは無いだろう。

「じゃあ、やっぱり次だろ？　場所もわかってんだし、サクサク行こうぜ」

地図を確認するスミ。今の彼らは伝説の武具、その名前や性能、そして隠し場所の詳細に至るまで、何もかも全てを把握していた。
どうやってそのを知り得たか？　アデリーネの功績が大きいそれら詳細については後述する事にして、今はともかく、アデリーネはスミの言葉に首を横に振って応える。

「どうしてだ、アデリ姉ちゃん？」
「普通でしたらスミさんの仰った案でよろしいのですが……実は私、少しだけウソをついておりました。というよりも、ある可能性について、黙っていたのです」

手に入れた伝説の武具を背負い、歩き出すアデリーネ。彼女の背中で縛られた包みがカシャカシャと音を立てている。

「現在サークスに憑いている悪魔が、以前、お屋敷で滅ぼされる際の断末魔、それは……」
「だんまつま？」
「簡単に申しますと、悪魔が死ぬ際の負け惜しみですね。その負け惜しみは、屋敷の隅へ隠れ潜んでいた私にまで聞こえてきました。かの悪魔は、こう言っていたのです。『ヤマト、お前だけは何千、何億回生まれ変わろうとも見つけ出し、最高の屈辱と絶望を与えて、必ず殺す』と」

アデリーネの後ろに続きながら、軽く顔をしかめて自らを抱くスミ。ボロボロ状態のヤマトを最初に発見しているだけに、悪魔が残した妄執を肌身で感じているのだろう。

「悪魔はその言葉通り、心身ともにヤマト様を痛めつけ、ノエル様さえも毒牙に掛けました。ヤマト様へ最高の絶望と屈辱を与えているのです。さらには執拗にノエル様を追い、ヤマト様のご実家に現れた大蜘蛛とガイラン……ですがあれは本当に、ノエル様を追っての事だったでしょうか？」

歩くペースを上げるアデリーネ。早歩き程度の速度であればスミが無理なく追従できる事は、ここ数日の行程で実証済みだ。

「もしやあれは別の目的があって訪れた場所に、偶然ノエル様が居合わせただけでは無いかと、私は思うのです」
「じゃあ、狙われてたの……スダチか？」

スミの言葉に、アデリーネは軽い驚きを覚える。今の話だけで、私の言いたい事を理解したというのだろうか？　だとしたら、この歳で本当に大した物だ。学習の機会さえあれば、あるいは……いや、それを考えるのは全員が無事で戻ってからだ。

「糞チビの妹だから？　ヤマトを苦しめる為に？」
「はい、おそらくは。聞けばガイランは、ヤマト様の仲間全員を生け捕りにしようと考えていたようですから」

ヤマトの協力者全員を連れて来いと厳命されている――ノエルが聞いた、ガイランの言葉だ。

「彼らはヤマト様を苦しめる為、近親者や友人を片っ端から襲うつもりではないかと、私は考えています」

そこまで話が進んだ時、スミの足が止まった。彼女の顔から笑顔と顔色が失せる。

「じゃ、じゃあ……ウチの村も――」

スミの心から不安が勢い良く湧き出し始める。琥珀色の村――大好きな祖父の顔や、仲の良い友人。そしてヤマトと名付けた山猫の姿が、血塗れで横たわっていたヤマトの姿に重なって見える。

「大丈夫です、スミさん。ガイランの発言から、彼らはヤマト様の行方を掴んでいなかった事がわかっています。つまり悪魔たちは、

スミさんの村がヤマト様を助けていたとは知らないはずです」

不安に震えるスミにしゃがんで目線を合わせ、落ち着いた声で宥めようと努めるアデリーネ。だが慰めの言葉だけで渡り行ける程、甘い世界に生きているわけでもない。子供だから安全が保障されるわけでもない。

否応無く厳しい現実との最前線に立たされているであろうスミと正面から向かい合い、肩に手を置いて、しっかりとした口調で語る。

「今は大丈夫……ですが、やがて知れるでしょう。というよりもサークスが村の存在を知る以上、既にターゲットとなっている可能性は十分にあります」

だからこそ急ぐのです、とアデリーネは語る。琥珀色の村へ先回りして準備を整え、やがて来るであろう悪魔を迎撃する。敵と戦うのだ！

幸いにもサークス本人以外、彼の周囲で村へ訪れた経験のある者は居らず、地理に関して不案内だ。しかも悪魔である彼らに馬車など公共の乗り物は使い辛く、歩き易く整備された街道を行く事も憚られるだろう。

「今からでも、先回りは十分に可能です」

「じゃ、じゃあ糞チビたちにも教えて、みんなで……」

「いいえ、それは出来ません」

泣きそうになっているスミの口元に指をひとつ当て、アデリーネは首を横へ振る。

「いまヤマト様は、サークスを倒す千載一遇の好機に恵まれて……簡単に言うと、凄いチャンスを得ているのです。ですがもしも彼が

スミさんの村が狙われている事を知れば、きっとそのチャンスを捨て、村の安全を優先させようとするでしょう」

若干、声のトーンを落すアデリーネ。別に意識したわけでは無い。スミの心情を思うと、自然にそうなってしまった。ヤマトの為、貴女の村を危険に晒します。今の彼女はスミに……ヤマトの事が大好きな女の子に、そう伝えているのだ。村かヤマトか、どちらかを選べ、と。

「スミさんのお気持ちは十分に理解できます。ですから私が、全身全霊を持って村を守ります。先程手に入れた伝説の武具は、その為に得たのです」

言葉を紡ぎ、なんとかスミの理解を得ようと心を砕くアデリーネ。彼女の考える作戦にはスミの協力が必要不可欠だ。それどころか、もしも彼女がヤマトに話を伝えようと考えたなら、アデリーネはそれを全力で阻止しなければならない。なんとしてでも。

「ヤマト様や太郎丸様、そしてノエル様に比べ、私では頼りにはならないと感じられるでしょう。わた……むぐっ!?」

アデリーネの言葉が遮られる。スミの小さな手で口を塞がれてしまったのだ。ムグムグと声を詰まらせるエルフに、赤毛の少女はいつもの、屈託の無い笑顔を見せて言い放つ。

「わかった！　んじゃあ二人で悪いヤツぶっ倒してやろうぜ！」

「スミさん……！」

ぜんはいそげだ！　と拳を突き出し、コーヒーの香り漂う村を目指して元気良く走り出すスミ。アデリーネも自らの考えが杞憂に終

わった事に胸を撫で下ろし、腰を上げる。

「んでも、こっそりやっつけちまったら糞チビに自慢できないな」

山道を身軽に走り抜けながら、少し残念そうに呟くスミ。そんな彼女に追いついたアデリーネが、何かの秘訣でも伝授するかの如き密やかさで答える。

「それで良いのですよスミさん。イイ女には秘密が付き物なのですから」

言って、意味有り気に微笑んでみせるアデリーネ。

「そんなモンか？」

「ええ、そんなモノです」

女二人、目指すは琥珀色の村。

第五十四話：いい女！（二）

青々と芽ぐむ木々の隙間から、ようやく見えてきた人工物。
太く逞しい首や長細い顔に引っかかる蜘蛛の巣を疎ましげに剥ぎ取りながら、悪魔に憑かれた馬の獣人バラは一つ嘶き、目を瞬かせる。

「ぶひひ……やぁっと着いた。場所、判りにく過ぎるだろコレ？」

ここに着くまで、かなり迷った。何せ地図にも載っていない小さな村だ。大まかな場所は聞いていたものの、探し当てるにはかなりの時間を費やしてしまった。無心で真っ直ぐに走るのは得意だが、考えて走るのは大の苦手。それがバラだ。

「さて、と……」

先程からオヤツ代わりに食んでいた山猫の肉を吐き捨てて、耳を澄ます。すると村の方から人間たちの声が微かに聞こえて来た。
悪魔が来たぞ。みんな急げ――。

「ぶひ？　もう気付かれてる？　あ……やっぱり、さっき引っかかった糸、鳴子だったかぁ。やっちまったなぁ……」

ポリポリと首筋を掻き、ぶるると唇を震わせる。蜘蛛の糸かと思ったが、誰かの仕掛けた警報付きの罠だったようだ。
だが、何の問題も無い。

「サークスの大将にゃ、適当に楽しんで来いとしか言われて無いしな！　ぶひひっ！」

本当ならば、なるべく村人を捕らえ、特に村長と孫娘は生け捕りにしたいとサークスは考えていた。しかし猪突猛進を本分とするバラに、そんな細かい注文をつけても実行不可能であり、無意味だ。

「男は皆殺し！　女は生け捕り！　そんでもって酒池肉林！！」

こんな性格のバラだから、放って置いても若い女は生け捕るだろう……バラが最高のパフォーマンスを発揮する状況を心得ているサークスは、そこまで計算して、適当に楽しめと命じた。

「いま行くよ！　俺のカワイ娘ちゃんたちぃ～っ！」

力強く大地を蹴って走り出すバラ。硬い蹄によって、踏み固められていた地面が大きく穿たれ土が飛び散る。

はちきれんばかりの筋肉によって、ぐんぐんと加速する大きな身体。押し退けられた空気が突風となって周囲の物を吹き散らし、木々が見る間に後方へと消えた。簡素な木で組まれた村の入り口が、あっという間に目前へと迫る。

瞬発力でこそ劣るが、走行能力において他の種族を圧倒する馬の獣人。悪魔憑きとなった今、バラの走りは、それそのものが武器と言える程にまで高まり、触れる物全てを打ち砕く弾丸のような突進となって村の入り口を潜り……。

「……ぶひっ？」

突然、足下から踏みしめるべき地面が消えた。落とし穴だ！　と気付いた時にはもう遅い。

空中で何度か足を空回りさせたバラは、それまでの勢いそのままに巨大な落とし穴へ嵌り、手足をバタつかせながら垂直な穴の中へ

と落ちて行く。

「なんのっ！」

咄嗟に土壁へ指を突き立てて、落下を阻止しようとする。だが土壁は脆く、逞しい獣人の体重を支える事無く崩れ落ちてしまう。

さらに、その落とし穴は実に巧妙な作りとなっていた。

「……あ、あれ？」

深い穴の底へと落ちたバラは、身動きが出来なくなっている事に気付く。落とし穴は底へ近付くほど穴幅の狭まる逆円錐形となっており、落下の勢いと自らの体重で、バラの身体はそこに挟まってしまったのだ。

悪魔憑きであるバラは、並みの罠でダメージを負うような事は無い。だが落とし穴のように半ば強制的な場所移動を伴う罠に関しては、他者と同じく、このように動きを制限されてしまう。

罠に嵌め、動きを止めておいて、その上で……。

「今です！！」

号令と共に、穴の底でもがくバラ目掛けて穴の上部から無数の矢が打ち込まれた。

降り注ぐ矢の雨。鋭い矢尻が絶え間無くバラの肉体を叩く。だがこの程度、悪魔である彼には本物の雨と大差無い。

「ぶひっ！　目に入ったりさえしなきゃ、どうって事は……！？」

バラは、余裕ぶった台詞を最後まで言い切る事が出来なかった。

開いた口へ、大量の土砂が流れ込んだのだ。

矢の次は土！　しかも水を含み、重くなった泥だ！　口に入った分を吐き出した途端、次の土が押し寄せる。手で払い除けようとしたが、落とし穴に挟まって動かない！　そうする内、頭以外の身体は土に埋って……。

「ぶはっ！　ぶひ！！……ばっ、ぶばっ……」

程無くして、村の入り口に掘られた巨大な落とし穴が完全に埋め立てられた。バラの声はしばらく前に途絶えたきり、聞こえて来ない。

周囲では土で膨れた麻袋を抱えた人たちと、手に弓を構える人たちが、色の違う地面の様子を固唾を飲んで見守っている。その中に紛れ、険しい視線を地面へと向けるアデリーネ。

ここまでは予定通り。だが、これまでに見聞きした悪魔憑きの身体能力から推察するに、この程度で仕留められるとは思えない。その証拠に、地中より響く微かな地鳴り――。

「あ、アデリ姉ちゃん……馬面野郎、やっつけたのか？」

物陰から不安そうに尋ねるスミへ、アデリーネは首を横に振る。

「……スミさん、予定通り、村の皆さんを今すぐ避難させて下さい」

次第に大きくなる地鳴りは、今や地響きとなって周囲の地面を細かに揺らしている。

「さあ、早く！」

「わかった！　みんな、こっちへ――」

村人たちが皆、埋めた穴から離れた瞬間！　地震を伴って爆発す

るように土砂が跳ね上げられ、赤色の何かが土中から空高く飛び出した。
ぱらぱらと土や砂が降り注ぐ中、どすん、と着地する赤色の何か。村人たちがそこに見たのは、泥に塗れ、怒りに目を輝かせるバラの姿だった。

「テメエら、ヤってくれタな……俺様のイカス鬣を、泥塗レにしやがっテ……！」

ゆっくりと振り返るバラ。一歩足を踏み出す度に大地が揺れて、硬い地面に深く足跡が刻まれる。
真紅に染まる肌。血のように赤い光を放つ双眸。悪魔が、その力を最大限に発揮する時に見られる現象だ。まとわりつく泥さえも、赤く侵蝕して行きそうな勢いさえ感じられる。

「ぶフっ、ぶフッ……この村の奴ラ全員、生キ埋めダ……俺様と同じ目に合わセて……？」

そこへ一本の矢が飛来し、こつん、とバラの額に命中した。
矢の放たれた方を見やれば、弓に次の矢を番えて立つ、凛々しい女性の姿。

「バラさん、あなたのお相手は私が勤めます」
「お、オォォォ……！　アデりん、来てたンだなぁぁぁぁぁっ！！」

地の底から響くような声で、喜び嘶くバラ。自らが欲望の対象を見つけた事によって全身に力が漲り、筋肉がはちきれんばかりに膨らんで不気味に脈動する。
アデリーネはそんなバラにも動じる事無く、冷静に矢を放つ。狙い違わず悪魔の左眼へと迫る矢弾であったが、瞬きをした瞼によっ

て簡単に弾かれてしまう。

「コノ穴、アデりんが考えたノ？　賢イねェ！　それに弓モ上手いんだネ！？　流石エルフは凄いヨおォォォ！！」

叫ぶバラ。その凄まじい声量は彼の身体から泥を吹き飛ばし、付近の家々を震わせる。

爆音響く中、アデリーネは退避する村人たちの最後尾で高らかに親指を掲げるスミの姿を認めると、長い銀髪をかき上げ、アップにしてまとめる。

これから、この獣人を……バラを殺す。強い思いを込めながら、壊れた花弁の髪飾りを髪に留めるアデリーネ。

彼女はバラに対し、個人的な恨みは無い。どれもヤマトやノエル経由の間接的な恨みだ。だからだろうか？　少しでも気を抜くと、殺意が鈍ってしまいそうになる。なるべくなら殺したく無い等と甘い事を考えてしまうのだ。

加減して戦えるような相手では無い。全力で、それこそ殺す気で立ち向かっても勝てるか……しかし、それでも……。

「可愛イねアデりん！　久しぶリに見たキミは輝いてル。その服も素敵ダヨオォォォ！」

真っ直ぐに自分へと向けられる好意故？　それともただ単に、自分の手を汚したくないだけ？

悪魔に憑かれたとはいえ、バラは顔見知りだ。ちょっと女癖は悪いが、明るく気楽なパーティーのムードメーカーであり、力仕事を率先して行うといった美点も少なくない。その事は以前、賢者の鎧探索にしばらく同行して、知っている。

戦いたくない、殺したく無い。

せめてあと何か一つ、バラを恨み貫ける理由があれば――。

「ぶふふ……でもアデりん、それだケは頂けナイなぁ。頭のソレ……可憐なキミには似合わなイよ。安っぽいシ……そレに、壊れテんじゃない？」

バラが鼻先でアデリーネの髪飾りを示す……と、不意の突風が彼女の髪から件の髪飾りを弾き飛ばした。

「ぶひっ、命中……！」

ニヤリと笑うバラ。鼻に詰まっていた泥を飛ばして、髪飾りを狙撃したのだ。

元々壊れていた髪飾りは更に砕け、バラバラとなって地面に落ちる。もう本来の用途を果たす事は二度と出来ないだろう。

ばさり、と青みがかった銀髪が解け、エルフの背中でしなやかに広がった。

「ウん、やっぱアデリンは髪を下ろしてる方が似合ウ！　セクシーだ！！　でも、キミがどうしてモって言うのなら、そんなボロじゃない新しイ金の髪飾りをプレゼントするヨ、ぶひひっ！　それで髪を留めたまえ。黄金の輝きが、キミの髪に良く映える！！」

ウキウキと夢と欲望に溢れる未来を語るバラ。自らの尻尾を髪に見立て、髪飾りの形状を説明し始める。そんな彼へ、アデリーネは静かに言った。

「ありがとうございます、バラさん」

いやあ、それほどでも……と身を捩って照れるバラ。だが自らに突き刺さる冷たい視線から、アデリーネの様子が先程までと全く違

う事に気付き、動きを止める。

「おかげ様で……個人的に貴方を殺す理由が出来ました」

弓に矢を番え、ギリギリと引き絞るアデリーネ。その切っ先には、深遠から湧き上がる怒りと、迷いの無い殺意が宿る。

「アレ？　俺、ナンかミスっ……うぉっ！？」

状況が掴めず首を捻るバラヘ、アデリーネは矢を放つ。正確に、冷酷に。

殺したくない？　手を汚したくない？　何を馬鹿な！　甘い考えどころか、ありえない思考だ。

なんとしてでも、どんな手を使っても、自らの手が如何に汚れようとも……確実に殺す！

絶対に、許さない！！

第五十五話：いい女！（三）

ふわり、雲ひとつ無い空に木の葉が風に舞うかの如く、アデリーネは空中へと優雅に身を躍らせる。

空気以外に何も手掛かりの無い空間で、彼女は細い腰を捻って脚を振り、その勢いを使って体の動きを制御する。追い縋るバラの突撃を回避する為に。

「アデりいィィィんッ！！」

高らかに叫んで地面、そして家の屋根を蹴り、両手を広げて空高くにまで追いかけて来る馬の獣人。アデリーネは突っ込んでくる彼の顔面目掛けて矢を一射。空中にてギリギリで突撃を回避し、振り返って背中へ三射、加減の無い矢弾をお見舞いする。

「うヒョウ！　アデりんの愛を背中に感じルうゥゥゥ！」

嬉しげに声を上げるバラ。じゃれ合ってでもいるつもりなのだろう。ひ弱なエルフの放った矢は、一発たりとも彼の皮膚を貫通してはいない。

それはバラの持つ伝説の武具が一つ『消撃の盾』、その効果が発揮されている為なのだが、それだけが理由では無い。単純にバラ本来が持つ防御能力を貫けていないのだ。

緩やかに着地したアデリーネは家の戸口に手を突っ込み、あらかじめ隠しておいた矢を引っ掴んで矢筒へ補給する。

もう既に放った矢の数は、百をゆうに超えているだろう。矢を放つ右手は、指先と親指の付け根が鬱血して腫れ上がり、ずしりと重い。限界はとっくに越えている……だが、まだだ！

ベルトポーチから小刀を取り出し、自らの右手を傷付けるアデリ

ーネ。そして傷口を絞るようにして溜まった血を抜き、素早くポーションを振り掛ける。魔法の輝きと共に傷が塞がり、手が軽くなった。これで、まだ戦える！

「無駄だよアデりん！　ソロソロ俺の腕の中へ……鬼ゴッコはもう終リにしヨウ！」

地鳴りと共に着地したバラ。彼の台詞を見事に無視して、次々に矢を射掛けるアデリーネ。それを面倒そうに盾で弾き落すバラ……このようなやり取りが、既に一刻ほども続いている。

勢いのある疾走と無尽蔵のスタミナで執拗に獲物を狙うバラに対し、地形を利用して物陰へと身を隠しながら矢を射続けるアデリーネ。手数では圧倒的にアデリーネが勝っていたが、それ以外……特に純粋な攻撃力や防御力において、圧倒的な差が二人の間にはあった。しかも……。

「ねえ、アデりん。俺が気付いテ無いとでも思ってル？」

射掛けられた矢の一本を掴み取り、余裕の表情で問いかけるバラ。その声に、アデリーネの胸がドキリと高鳴る。

「コノ弓矢……これ、魔法の品だよネ？　しかモ結構強力な……もしかしテ、伝説の武具？」

バラが掴んだ矢を指先で弄び、軽々と圧し折って投げ捨てる。彼の問い掛けには何一つ答えを返さないアデリーネだったが、その沈黙こそが質問内容を肯定しているといえた。

「魔力が宿ってるのは、ソノ弓？　ソレとも矢の方？　使用者の魔力デ威力を上げるのカナ？　さっキ村の連中が撃った矢より、アデ

りんの撃つ矢の方ガ威力強いモンね」

肌身をもって感じ取ったのか、それとも冷静に観察していたのか。アデリーネはいかにも頭の悪そうな馬の獣人が見せる鋭い観察力に、若干の驚きを覚える。

スミの意外な賢さといい、この所、驚かされる事ばかりだ――いや、自分が驕っていたのだろう。気を引き締めなければ。

「サッキからアデりんは、俺の目を狙っテんだよね？　元々弱イ部分は、悪魔憑きになってモ、あまり強化サレないと踏んデ。狙いハ悪くナイし、戦うキミの姿は素敵だケド……残念、無駄だヨ。もし当たったとしても、この程度の矢じゃ、瞼も貫けナイ。もう判ってるでショ？」

ぺらぺらと喋りながら一歩一歩、間合いを詰めて来るバラ。首をふらりふらりと動かし、まるで酔っているかのような動き……事実、自分の台詞に酔っているのだろう。

アデリーネは再度矢を番えて弓を引き絞り、もう何度撃ったかもわからない矢を、無言のままで放つ。矢は狙い違わずバラの目へ！

だが……。

「無駄ッテ言ったでショ？」

矢は、バラの目の前で止まっていた。正確には、目に届く直前。瞼に挟まれ停止していたのだ。

「アデりんの矢、ボクには止まって見える。今まで避けナカったのは、愛するキミに判って欲しかったカラだ。抵抗しても無駄だっテ」

消撃の盾を捨て、腕を広げ、更に歩を進めるバラ。大きな歩幅で

一気に間合いへと踏み込まれ、アデリーネは慌てて後退する。そしてなおも矢を番えて弓を引き……。

ばつん――。

「っ！」

弓の弦が切れた。その反動でバランスを崩すアデリーネ。

ようやく訪れた好機に満面の笑みを浮かべたバラは、ぐっと腰を落とし、硬い蹄で大地を蹴る。

「おおっ、アデりぃんんンンンッ！　俺ヲ誘ってるんだネ!?　据え膳食わヌは男の恥イィィィ！！」

「きゃ……！」

雪崩のようなタックルでアデリーネの腰を捉えて抱え上げると、そのまま地面へと押し倒すバラ。倒れこんでもまだ突進の勢いは衰えず、土煙を上げて滑走する二人。硬い地面と擦れあったアデリーネの背中に、骨に染みるような鈍い痛みが走る。

「やっト俺の所へ来てくれタねアデりん！　さ、愛を確かめ合おウ！」

「み、妙な愛称で呼ばないで……！」

仰向けとなった腹の上に圧し掛かられて息をするのも苦しいアデリーネだったが、辛うじてそれだけを言って、唇を突き出してくるバラの顔面を片手で押し止める。

「それに、私の愛は……貴方の方を向いておりません！」

そして空いた逆手で矢を握り、力一杯バラの首筋に突き立てる。

だが、やはりというべきか。悪魔憑きであるバラの硬い皮膚を突き破るには威力が足りず、その表面を軽く引っ掻いた程度の痕跡だけを残し、弾き返されるのみ。鋼鉄の表面を爪楊枝で突いているような物だ。

「ツレない事言うなヨ、アデりん。悪魔になっテモ、俺の愛は本物ダヨ？　キミが望むならドンな事でもすルし、何でモ買ッテあげル。ソしテ毎日愛し合おウ。そうダ、子供は何人がイイ？」

アデリーネの首筋へ鼻先を摺り寄せながら、荒い鼻息と共に愛を囁くバラ。軽く掴んだアデリーネの細い肩からは、ミシミシと骨の軋む嫌な音が聞こえてくる。だがその間も彼女は、ひたすらバラへと矢を突き立て続ける。

「俺達の子供ナラ、きっと可愛いト思うんダ！　種族ノ違い？　ノン！　至高の愛ヲ前に、ソンな事はノープロブレム！！　さあアデりん、今スグ愛の儀式を……？」

と、独り盛り上がっていたバラは、妙な事に気付いた。

「アレ……アデりん。そんナに髪、長かったっケ？」

押し倒した際に地面へと広がった、アデリーネの細くしなやかな銀髪。オーロラのような輝きを見せる青みがかったその髪が、さっきよりも随分と伸びている気がする。確か彼女の髪は、腰より上くらいの長さでは無かったか？　最初見た時、そのくらいだったような……。

「でも、まぁイイか！　俺、ショートよりロングヘア好きだシ！　さて、ソレじゃ既成事実とイウ事で愛の営みヲ……」

愛しい女の胸元に手を掛けて服を引き裂き、柔肌を存分に堪能する！　そして欲望のまま、猛々しく愛の証を彼女へ……！

と、なるはずだった。

普段のバラであれば。

「……あレ？」

だが、何故だろう？　そんな気分にならない。そそる女を組み伏せているというのに、燃えるように熱い欲望が……込み上げてこない。アデリーネの事をいとおしい、とは思う。だがそれが男性的な欲求に結びつかないのだ。

ふと、彼女の服を掴む自らの手を見る……自分の手は、こんなにも筋張っていただろうか？　逆の手も……妙にやせ細っている気がする。爪は乾燥してひび割れ、皮膚にも妙なシミが何箇所も出来ている……なにかがおかしい。

「ナンだ、コレ……」

「バラさん、ちょっと失礼しますね」

困惑するバラの下から、彼を押し退けて這い出そうとするアデリーネ。「そうはサセないヨ！」と、彼女を押し止めようとしたバラだったが、あっさりと身をかわされ脱出を許してしまう。

「ど、ドうシ……て？」

力が入らない。体が思うように動かない。

良く見れば、細っているのは手だけでは無い。鍛え上げた腹筋も、自慢の脚力を生み出す両脚も……筋肉は萎み、骨と皮だけが形作る枯れ木の如き有様となっていた。

更には体毛だ。燃えるような赤色だった鬣が、いつの間にか抜け落ちて疎らとなり、残った部分も白く変色している。これは……白髪なのか？

「言い残す事はありますか、バラさん」

やせ細った……いや、年老いたバラの前に立ち、そう問いかけるアデリーネ。長くなっていた彼女の髪は更に伸び、バラの周りを囲む緩やかな曲線を描き出している。

良く見れば、指先から流れ落ちる血……彼女の爪は、何故か全て剥がれ落ちていた。

その視線に気付いたアデリーネは、軽く指先を振って血を拭い、若干のポーションを垂らして傷を塞ぐ。

「この、爪の傷ですか？　私が思っていたよりもずっとバラさんが洞察力に優れているようでしたので、伸びているのがバレないように先程念の為に、自分で剥がしました」

「伸びて……？　あ……！」

バラは、この時になってようやく自分とアデリーネの身に起った変化と、伝説の矢が持つ真の効果を理解した。それは魔力を使って威力を高める効果などでは無く――。

「ええ。ご想像の通りです」

死を間近に控えた老人を前に、若く美しいエルフは穏やかに微笑んでいた。

第五十六話：いい女！（四）

時は遡り、数日前。琥珀色の村の、村長宅での事。
集まる村人たちの注目を浴びながら、アデリーネは部屋の中央にて真っ直ぐに立ち、落ち着いた声色でもって、ゆっくりと話し出す。

「私は皆さんに、この村へ悪魔が向っている旨と、その退治に際するご協力をお願いしたいと考え、やってまいりました」

ヤマトの仲間であると名乗ったエルフが口にした唐突な話。その突拍子も無い内容に、村人たちはざわめき立つ。悪魔だとか退治だとか、こんな田舎の村にまでやってきて、この娘は一体何を言っているのだ？　といった調子だ。
唯一、年老いた村長だけが微動だにせず、二の句を待っているようだ。

「まずは私の出自から……先程スミさんからもご紹介に与りましたが、改めてヤマト様との関係性についても説明しながら、今、彼の周りで起っている事と、この村がどう関わっているか……その全てお話したいと思います」

誰かを説得する上で、あまり効果的とは言えない話の運び方だった。しかしアデリーネは、あえてそれを選んだ。
事実を隠した話術や損得を考えた駆け引きで、この人たちを煙に巻きたくない。ヤマトはきっと、それを望まない。何もかも理解した上で、協力をお願いしたい……そう考えたのだ。

「私は、ヤマト様がこの村を訪れた際の依頼人である、富豪ノーウェイに側室として仕えていた者です。彼に捨てられた所をヤマト様

に助けて頂き、そのままお側に仕えて……えと……冒険のパーティーに加えて頂き、現在に至ります」

彼女自身とヤマトの話。そしてこれまでと、今起っている事。それらを包み隠さず、誤解を生まないよう気を配りながら正直に話して行く。

ヤマトが悪魔から酷く恨まれている事。彼を苦しめる為に、彼にとって大切な物が次々と狙われている事。その中に、十中八九この村も含まれている事――。

アデリーネの話を聞く内、村人たちのざわめきが大きくなって行く。当然だろう。悪魔に狙われる……それは一般人にとってみれば、自然災害のような抗えない大きな力に襲われる事と同じなのだ。

「もしも敵がこの村を狙っているとヤマト様が知れば、きっとあの人は何を置いても駆け付けようとするでしょう。この村を全力で守る、と」

すらすらと喋っていたアデリーネ。だが、少しだけ声のトーンが落ちる。それに、僅かな反応を見せる村長。

「ですが今、ヤマト様は非常に希少な機会の中にあります。普段であれば手の届かない、憎い仇を叩けるかもしれない……そんな千載一遇の好機を得ているのです」

ここから先を喋るかどうか？　刹那の時間の中で、何度も迷うアデリーネ。何故ならば自分の独断で、この村に対して不利益をもたらす選択をしたと告白する事になるからだ。

もしこれで大きく信頼を損なえば、協力してはもらえないだろう。それどころか、ヤマトの名前にまで傷がついてしまう。だが……もしも彼ならば。嘘を付いて、村の皆を騙してでも協力を得ようとす

るだろうか？　答えは……否だ！

「ここへ救援に駆けつけた場合、そのチャンスは二度と失われてしまいます。私は、彼の……ヤマト様の邪魔をしたくありません。ですから彼には何も告げず、私の勝手な判断で……戦力の少ない状態で悪魔と戦おうと単独でここへ参り、皆さんに無理なお願いをしております」

膝をつき、床へ手を添えるアデリーネ。

「ここへ来るまでの間に、スミさんと協力して鳴子を仕掛けております。事前に悪魔の来訪に気付く事が出来れば、最悪、逃げる事は可能だと思います。一旦は逃げて悪魔をやり過ごし、安全を確認してから村に戻るという手も……ですが……っ！」

アデリーネが頭を下げ、床に擦り付ける。

「お願い致します！！　ヤマト様の為に、どうかご協力をお願いしたいのです！　皆様のお力無くして悪魔の討伐は果たせません！　あの悪魔を野放しにすれば、いつかまたあの人に危害が及んでしまいます。それだけは……！」

床に突っ伏した姿勢のまま、アデリーネが声を上げ続ける。当初の落ち着いた声はどこへやら、切羽詰った、必死さの滲む甲高い声だ。

「それだけは、私の何に代えても……嫌なのです！　どうか、お願いします……ご協力を……！」

必死に頭を下げるアデリーネを前に、困惑気味の村人たち。

ヤマトは村を豊かにした恩人である。このエルフの娘にも協力してやりたいとは思う。だが、悪魔と戦う……それは戦いの心得が無い一般人にとって、死を意味する。

流石に、それは怖い。それに個々の生活や、守るべき物だってある。だから無理だ……村人の一人が、そう告げようと口を開いた時だ。それまで身動ぎ一つせずに話を聞いていた村長が、一歩前に進み出て他の者を制し、アデリーネに問い掛けた。

「お嬢さん。策は、あるのですか？」

「あ……は、はい！」

村長の声に跳ね起きるようにして頭を上げ、傍らに置いてあった背負子の包みを解くアデリーネ。中から現れた油紙を剥がして行くと、そこに見えたのは何十、何百という数の鋭い矢だった。

これが一体、何だというのだろう？　そう首を捻る村人たち。そんな中、村長の隣で矢の束をじっと見ていたスミが身を乗り出して言った。

「アデリ姉ちゃん。これ……なんか、光ってねぇか？」

「え……スミさん、この光が見えるのですか！？」

戸惑いながらも頷くスミ。どうやら彼女には、この矢が放つ淡い魔法の輝きが見えているようだ。それはすなわち、スミに魔法を扱う素養がある事を表している。

まさか希少な魔法使いとしての才能が、こんな所で眠っているなんて。まだ幼く聡明な彼女が十分な修練を積めば、きっと優れた魔法使いになれるだろう。アデリーネは驚きと喜びを同時に噛み締める。

だが今は、それについて語っている時間は無い。

「スミさん、貴女が見ている光は……この伝説の武器が一つ『朽木の矢』が放つ、魔法の光です」

伝説の武器という言葉に、村人たちから「ほぅ」と溜息が漏れた。

この矢を使い、悪魔を倒す。それが策だと語るアデリーネ。

「直接戦闘を避ける為、まずは悪魔の動きを止めます……それには罠を使います。落とし穴の類であれば動きを止める事が可能でしょう。そこへ、皆さんでこの矢を打ち込んで欲しいのです」

「でも、こんな細い矢が悪魔に通用すんのかい？　いくら魔法の矢と言ったって、俺たちが持ってる弓は、狩りに使う程度の安物だよ？」

そう言って首を傾げる村の若者。彼は胡乱げな態度で朽木の矢へと手を伸ばす……。

「ダメです！　触ってはいけません！！」

と、大声でそれを制止するアデリーネ。ビクリと身体を固め、若者の指先は矢の一寸手前で止まった。

「な、なんだい……急にそんな大声で」

「申し訳ございません。この矢は、素手で触れては危険なのです……見ていて下さい」

そっと矢を手に取るアデリーネ。

すると彼女の全身が淡い緑色の光に包まれ、スルスルと髪が伸びて行くではないか。同じく爪も、時間を早送りしているかのように伸びて行く。

「なぁ……っ！？」
「お分かりになられましたか？　この矢は、触れた者の時間……すなわち寿命を吸い取ります。そして吸い取った分だけ鋭さを増し、傷付けた相手からは、吸い取った分と同じだけの時間を奪い去るのです」
「なんと……矢を使う者と使われる者、互いの寿命が縮むという事か！？」

震える村長の声へ、一年分ほど歳を増したアデリーネは静かに頷いて返し肯定の意を示す。

「悪魔憑きとなり強靭な肉体を得たとて、時間は有限、寿命はあります。朽木の矢は、エルフ族の長い寿命……それを悪魔を倒す力へと転化させた武器です」

かつて、故郷であるエルフの隠里を襲った悪魔の群れ。その災厄をアデリーネの両親たちは退けたようだった。
だが、どうやって？　アデリーネは、ずっと不思議に思っていた。自分の同族たちは如何にして悪魔を退けたのか？　しかし隠里に朽木の矢が隠されていると気付いて、その効果を知った時、全てがわかった。
勇敢なエルフたちは自らの寿命を削って悪魔を滅ぼし、自らも倒れて行ったのだ。

「この矢に私の寿命を込めます。ですから先程言ったように皆さんで悪魔へと、朽木の矢を射掛けて欲しいのです。威力は関係ありません。刺さらずとも当てるだけで効果が出て……充填された寿命の分だけ、悪魔の寿命が減ります」

それと動きを止める為の落とし穴。その製作も協力して欲しいと

皆に伝える。

「矢を放った後、皆さんには安全な場所へ退避して頂き、後は私が。悪魔の寿命を削り殺してご覧に入れます」

如何でしょう？　そんな視線を、周囲へと向けるアデリーネ。

村人たちの危険は極力減らしたつもりだが、危ない橋である事に変わりはない。断られても仕方が無い話だ。せっかくスミに案内してもらい琥珀色の村までやってきたが、もし断られてしまった場合は……。

村人たちの様子を窺いながら、そんな事を考えていたアデリーネ。その視界を何かが横切った。その小さな人影は一直線に朽木の矢へと向うと、躊躇無く素手で拾い上げる。

「な……っ！」

慌てて小さな人影へと駆け寄るアデリーネ。だがその小さな影は……スミは、矢を離そうとしない。

「何をして……っ！　今すぐそれを捨てて！　捨てなさい！！」

「ヤダぁっ！！」

何がそんなに嫌だというのか。ダダを捏ねるスミに組み付き、無理矢理手を開かせて矢を奪い取るアデリーネ。投げ捨てた矢が乾いた音を立てて床に転がり、淡い魔法の輝きを放つ。

「あぁ……なんてことを！　スミさん……！！」

組み付いていたスミから身体を離し、アデリーネは絶望の呻きを上げた。

先程まではショートボブ程度だったスミの赤毛が、腰の近くまで伸びている。爪も伸び、同じく身長も……軽く頭一つ分は伸びているのではないか？　子供っぽく、寸胴だった体型も腰がくびれて胸が膨らみ、女性としての一歩を踏み出している。そして顔も、ふっくらとしていた頬が引き締まり、どこか大人びた顔付きに。更には……。

「ぺっ！」

スミが吐き出した、幾つかの白い物。この十秒足らずで乳歯が抜け、永久歯へと生え変わったのだ。

「スミさん！　ご自分が何をなさったかわかっているのですか！？　貴女は寿命を……命を削られたのですよ！？」

一年、二年……いや、もっとだろうか？　この将来有望な少女の貴重な時間が、こんな矢一本によって大きく削り取られてしまった。人の一生は短く、エルフの十分の一にも満たない希少な物。特に子供の頃に過す時間は、大人になってからの何十倍にも匹敵する価値のある時間だ。それが……それなのに！

「本当にっ！　本当に、なんて馬鹿な事を！　いま失った時間でスミさん、貴女は！　様々な事を学び、家族と憩い、大好きなヤマト様と楽しい時間を過す事ができたのです！　私のように有り余る無駄な時間とは違う、スミさんの貴重な時間……！　なのに、それを……っ！！」

少し大きくなったスミの肩に手を掛けて、アデリーネは考え無しの馬鹿な少女と自分自身を激しく責める。

こんな事になるのなら、先に全ての矢へ自分の時間を込めておけ

ば良かった。寿命が尽きてしまう事を恐れ、必要な分にだけ……などとケチな事を考えたばっかりに、スミに大変な事をしてしまった。

どう詫びて良いか……本人に、そしてご両親や彼女を大事に思う全ての人に、自分如きがどう償えば良いのかわからない。

「アデリ姉ちゃん」

自らの肩に置かれた手を握り返すスミ。その声も少しだけ、大人びた物となっている。

「姉ちゃんさ、もしもあたし達に協力断られたら、村のずっと手前で悪魔と戦うつもりだっただろ？」

「何を……！　今は、そんな話をしているのではありません！！」

手を振り払い、アデリーネは後悔や懺悔を怒りとしてスミへぶつける。

だが図星だ。もし協力を拒否されたなら、少しでも時間を稼いで逃げ遅れる者を減らす為に、村から離れた位置に罠を張って一人で戦うつもりだった。

「そうなったら、あたしも一緒に戦う……戦わせて？」

「ですから、今は……！」

「なぁ……あたし達、狙われてるんだよな？　それじゃあ、ココでやんなきゃ結局はすぐ死ぬか、ずっと先に死ぬかの違いだろ？　だったら、少しくらい協力させてよ……寿命なんか惜しくない。あたし糞チビにしてやれる事、他に無いんだから」

スミの言葉に、かつての自分を思い出すアデリーネ。

悪魔の村からノエルを助ける際、良く似た事を太郎丸へ言った記憶がある。自分がヤマトの為に出来る事は、他に無いと。

スミもきっと同じなのだ。あの時、自分は身体を差し出し時間を稼いだが、スミは命を差し出した……それだけの違いであり、思いは同じ。

惜しむ物など何も無い。ただ愛する人の、力になりたい――。

「……矢を用いても、勝てるという保障はありません。そもそも矢が掠りもしなければ、効果もなにも……」

「その為の罠なんだろ？　それに矢が当たりゃ、その分だけ悪魔の寿命が減るってんなら、矢に込める寿命も無駄じゃねぇ」

「三十路を超えたあたりで、必ず後悔しますよ」

「いま後悔するより、良いんじゃないの？」

項垂れるアデリーネへ、スミは以前と変わらない、青く晴れ上がった夏の大空の如き爽快な笑顔を見せて言った。

「それにさ、今のあたしくらいだったら糞チビと並んでても変じゃなくね？　むしろお似合いだろ！」

「……ばかじゃないんですか、あなたは……もう」

瞳の奥が熱くなる。

今わかった。傷ついたヤマトの身体を癒したのが琥珀色の村であるならば、傷だらけの心を癒したのは、間違いなくこの少女だ。スミがこの眩いばかりの笑顔でもって、彼の進むべき道を明るく照らし、優しく導いたのだ。

「ふふ……全く、うちの孫は誰に似たのですかな」

二人のやり取りを見ていた村長が、一歩前へと踏み出す。その表情は、孫の時間が失われた事に対する陰りと、心身ともに立派な成長を遂げつつある幼子への喜びが見て取れた。そして彼は、スミと

同じく何の躊躇も無く、朽木の矢へと手を伸ばす。

「い、いけません！」

今度こそはと、村長の手が矢に触れるより前に身体を割り込ませ、制止する事に成功するアデリーネ。ところが、彼女が村長の制止で手一杯になっている隙に……。

「そうそう、村長は止めときな。死んじまうぜ」

「これを握れば良いの？　三つ数える間くらいで良いのかしら？」

「俺の人生、濃いからな！　かなり凄ぇ威力になるんと思うぜ！」

村の面々が、次々に朽木の矢を手に取り出したでは無いか。

「皆さん何を……！　お止め下さい！！　貴重な皆さんの時間が……！」

アデリーネが悲鳴にも似た声を上げる。だが、そんな彼女へ村人たちは笑顔を向ける。

「いつまでも冒険者にだけ頼ってられねぇ。ここは、俺達の村なんだからよ」

「私たちの時間が貴重だって言うけれど、エルフさん、貴女の時間だってとても大切な物なのよ。大好きな人と過せる今という時間を、大事になさって」

「ま、みんなでちょっとずつ出し合えば良いだろ。これで悪魔倒せるんなら、安いモンだ」

「おぉぉすげぇ、髪の毛伸びたぜ！」

「……俺は……抜けた」

代わる代わる、矢を握る人々。アデリーネが止める間も無く、全ての矢に村人たちの時間が蓄えられる。

「どうやら、考える事は皆同じであるようですな」

村長は自分を押し止めるアデリーネの身体をそっと遠ざけ、深みのある優しい声で、村人たちの総意を伝える。

「アデリーネさん。我々琥珀色の村一同、貴女に協力致しましょう」

「……！」

潤んだ目を見開き、村長を見返すアデリーネ。老齢の男性は、皺枯れた細い目を更に細め、静かに頷いて返す。

「ええ、貴女と共に悪魔と戦う事をお約束致します。ですが、勘違いなさらないで下さい……これは貴女が、ヤマトさんのお連れの方だからではありません」

「……？」

聡明なエルフが、村長の言葉に首を傾げる。

「貴女になら、我々の命を預けられる。そう思ったからです。皆で一緒に頑張りましょう」

「は、はい……！」

アデリーネの双眸から、堪えていた涙が零れ落ちる。

どうして人間はこんなにも馬鹿なのだ。ただ単に少しだけ手を貸して放っておけば、馬鹿なエルフが勝手に悪魔と戦っていたものを。頼んでもいないのに大切な自分の命を削って、初対面の女にそれを託して一緒に戦おうなどと……どれだけ、馬鹿なのだ。

「おやおや、泣かないで下さいアデリーネさん。こんな綺麗な女性を泣かせてしまっては、亡くなった妻に怒鳴られてしまいます」
「わはは、流石だな村長。今も昔も女泣かせってか？」

集会所が、笑顔に包まれる。
涙を流すアデリーネもまた笑顔だ。
みんな馬鹿だ。馬鹿ばかりだ。それなのに何故だろう。こんなにも心強い。
彼らと一緒になら、悪魔にだってきっと勝てる。いや……必ず！
この時、アデリーネは思ったのだ。ヤマトの為にだけでなく……
彼らの為に命を賭けようと。

第五十七話：いい女！（五）

身体が、崩れて行く。

悪魔の力を得て、元の何倍にも強化されたカラダ。地を蹴れば遥か山の彼方が見る間に迫り、腕を振るえば木々が乾いたパンのように砕けて散る。そんな夢のようなカラダが、真っ黒く、濡れた炭のように脆くなり、動くたびグズグズになって崩れて行く。

「ヤラれちまったなぁ……くっそ、くっそぉ……」

地面に跪き、天を仰ぐバラ。だが跪くと言っても彼の下半身は既に崩れ落ちて失われ、上半身も両の腕は既に無く、頭だけでバランスを取っているような状態だ。

「ま……いいか。アデりんにだったら」

皺だらけとなり、痩せた歯茎から抜け落ちる歯、白い鬣。

バラの寿命は尽きた。そして、彼に取り憑いていた悪魔の寿命もまた尽きた。エルフと、琥珀色の村全員が出しあった命の総量が、バラと悪魔のそれを上回ったのだ。

「ねぇ、アデりん……さっき、言い残す事あるか？　とか言ってたよねぇ」

「ええ、私で良ければ。何でもお伺いします」

滅びの時間が封入された朽木の矢を手に、年老いたバラとの距離を狭めるアデリーネ。彼女は、自分自身の行動が今ひとつ、良くわからなかった。

何故、こんな事をしているのだろう？　悪魔に魂を売り渡し、ノ

エルを嬲り、大事な宝物を壊した憎い相手の遺言を聞いてやろうだなんて。精々、呪詛の一つでも言い残すが関の山だと知れているのに。

「言い残す事は別に無いんだけどさぁ。アデりん、最後に……俺に、ちゅうしておくれよ」

「……ちゅう、ですか？」

問い返したアデリーネに、バラはニヤリと笑って頷いた。その動作だけで身体が崩れ、太い首の一部が欠け、耳の片方がもげる。

ちゅう……キスしてくれとは、どういうつもりなのだろう？　自分を近くに呼び寄せて、何かするつもりだろうか？　だが、バラにそんな余力はとても無いように見える。そもそも今、こうして話をしている事自体が信じられないというのに。

「俺……さっきから言ってるけどさ。アデリーネちゃんの事、好きなんだ。初めて見た時から……一目惚れなんだよね」

喋るたび、黒い塵となって崩れて行くバラ。

「種族は違うし、アデリーネちゃんが別の野郎を好きな事もすぐ気付いたけど……なんつうの？　ビビッと来た、みたいな……運命感じたんだ」

掠れる声。もう間近に居なければ、彼の声を聞き取る事は出来ない。

「だからだよ。鎧を探しに行った谷の底で死に掛けた時……悪魔の野郎に、魂売った。もう一回、アデリーネちゃんに会いたくて……一目で良いからって思ってさぁ。そしたらもう、後はワケわかんな

くて……俺、めっちゃ強くて、何をするのも気持ち良くて。でも何かする度に魂が端から食われてって……けど……アデリーネちゃん、キミの事だけは……」

そこで、バラの言葉が途切れる。

彼の口を塞ぐ、柔らかな唇。太い首に回した細い腕と、青みがかった銀髪からも伝わる温もり。崩れ行く身体に負担とならないよう、優しく、そっとアデリーネは口付ける。

「……私などで、良かったのですか？」

ゆっくりと唇を離し、目を合わせてバラへと問いかけた。彼の目はもう赤くは無く、腐った苺のような色……きっと見えてはいないだろう。だが彼はアデリーネを見つめ返し、ニッと笑って言ったのだ。

「ああ、キミは最高にイイ女だよ」

そして馬の獣人は、粉々になって崩れ落ちた。塵のようになって地に積もった身体は、波に晒された砂山のように、音も無く虚空へと消えて行く。

「ごめんなさい……」

そして、ありがとう。呟いたアデリーネの言葉は、果たして届いただろうか？

「姉ちゃん！　やったのか!?　怪我ぁして無いか!?」

駆け寄ってくる多くの足音。静かになった村の様子を伺いにやっ

て来た、スミと村の人たちだ。
アデリーネは彼らへ片手を挙げて応え、微笑んで見せる。
「や、やったーーー！　悪魔、やっつけたぞーーー！！」
湧き上がる歓声。盛り上がる人々。互いに抱き合い、手を取り合って喜びを分かち合う。弓を手に戦闘へ参加し、額に汗して罠を作り、自らの寿命を削って手にした勝利だ。喜びも一入だろう。
「祭りだ！　祭りの準備だ！」
「今日を戦勝記念日にしよう、なぁ村長！　そうしようぜ！」
少し無理をして笑顔を作っていたアデリーネも、悪魔撃退の報に湧く村を目にし、安堵を覚え、そっと息を吐く。
これで良かったのだろうか？　うん、これで良かったのだ。
自問自答を繰り返しながら、少しだけ歳を取ったエルフは指笛と喝采、そして歓喜の涙が溢れる空間へと足を踏み出す。
私は上手くできました。そちらはどうですか？　後で私たちも、この村のように楽しく騒ぎたいですね――。
アデリーネは、村人からもたらされる感謝の言葉を全身に受けながら、遠い空へと願いを解き放つ。
悲しみの無い、明るい未来を夢見ながら。

第五十八話：守りたいもの、守る者（一）

琥珀色の村から遠く、山を越え谷を越え、この界隈で最も大きな街、その盛り場。

『ほろ酔い亭』と看板を掲げる宿の、食堂兼酒場となっている一階フロア。冒険者たちが多く集まるこの場所で、声を張り上げ、強者たちの注目を集める小柄な少女の姿があった。

「悪魔の村、討伐参加者、ただいま絶賛募集中ですーーー！！」

エプロンドレスに栗色の髪。トレードマークたるフライパンこそ持っていないが、威勢の良い声で冒険者を集っているのは他でもない、ヤマトの妹、スダチだった。

声を張り上げる彼女の背後には、厳しい顔で口を引き結び、油断無く冒険者たちの様子を窺う人狼と、目を閉じて静かに佇む、傷だらけの天使。太郎丸とノエルだ。

「この冒険を成功させて、そこの貴方もデーモンスレイヤーを名乗りませんか！？　しかも、成功した暁には普通では手に入らない豪華報酬が！」

近くに居る冒険者たちに声を掛けながら、スダチは手元の羊皮紙をヒラヒラと頭上にかざして視線を集める。

「なんと成功報酬は、伝説の武具に纏わる地図！　その完全翻訳版ですっ！」

スダチが言った『完全翻訳版の地図』という言葉に、ピクリと反応を返す冒険者たち。背後で彼女を見守っていた太郎丸はこの瞬間、

餌に魚が食いついた事を確信する。あとは慎重に釣り上げるだけだ。

「この地図は、私の後ろにいる実力者二人が！　かの白銀のサークスが隠し持っていた物を掠め取った、正真正銘の本物！　しかも！　誰にも読めなかった暗号や記号を共通語で記し直してある、正に完全版です！」

ぺしぺしっ、と手の甲で羊皮紙を叩くスダチ。酒場に集う冒険者たちの視線は彼女へ釘付けとなっている……より正確に言えば『完全翻訳版の地図』に、だ。

海千山千の冒険者たち。彼らが何故、小娘であるスダチの言動如きに興味を惹かれるか。その原因は、サークスにあった。

以前、サークスが行った伝説の武具探し。その際、彼に同行した冒険者たちは皆、伝説の武具が隠された場所の地図、その写しを報酬の一部として受け取っていた。これで誰もが伝説の武具を手に入れるチャンスが……と思ったのも束の間。地図に描かれた言語は未知の物であり、なおかつ暗号となっていて、誰一人として解読する事が出来なかったのだ。

辛うじて、それらの文字は武具の製作に関わった種族が常用していた物では無いか？　との見解は出たものの、それが如何なる種族なのかも判然とせず、それ以降、地図の謎は迷宮入り。宝の地図は単なる紙切れと化した。

その際、冒険者たちは思った。もしやサークスは、自分たちに偽物を掴ませたのでは？　あるいは謎を解読済みの地図を既に持っているのではないか。だから他人へ気安く地図の写しを渡す事が出来たのでは……？

その為、彼らはスダチの発言に興味を示し、それぞれの思惑を交錯させているのだ。

「だがね、お嬢ちゃん。その地図が本物で、内容が正しいって事を

証明できるヤツはいるのかい？」

冒険者の一人、年配の戦士が揺さぶりをかける。青二才のスダチから、少しでも情報を引き出してやろうとしているのだ。しかし……。

「はい。私の後ろに居る二人が、そう言っています。二人とも白銀のサークスとはパーティーを組んでいたメンバーなのはご存知ですよね？　これ以上の証拠は無いと思います」

最初、所詮は子供とスダチを見下し、バカにしたような薄笑いを浮かべていた年配の戦士。しかし澱みなくスラスラと、台本を読むかのように答えたスダチに周囲が「ほう」と感嘆の息を漏らす頃、彼の表情から笑みは消えていた。

「元、パーティーメンバーか……」

口々に呟く冒険者たち。スダチの質疑応答を受け、参加を迷う冒険者たちの注目は、自然と彼女の背後に佇む二人……太郎丸とノエルに集まる。

人狼と天使はその視線を受けると、口を開かぬまま、ゆっくりと頷く。「その通りだ」と、肯定の意を返しているのだ。

悠然と、落ち着き払った態度の二人……だが、実のところは全くの逆だ。今行っているスダチの発言――その半分以上が嘘である為に、内心では薄氷を渡るような不安な気分に苛まれ続けている。

「ほぅ、なるほどねぇ。ところでその……巷じゃノエルちゃんはサークス率いる悪魔どもに捕まった、とかいう噂が流れてんだが……その辺りは？　もしかして、地図も、その時に？」

さっきとは別の冒険者が、違う角度から切り込んで来た。
ノエルの件については、みんな気になってはいたが聞き辛かった内容である。他の者にしてみれば、よくぞそれを聞いてくれた！といった所だろう。
少々不躾な質問ではあったが、ノエルは慌てる様子も見せず一歩前に踏み出し、表情一つ変えずに返す。

「ええ……ご存知の方もいらっしゃると思いますが、つい最近まで私は悪魔の村に囚われておりました」

ざわつく冒険者たち。やはり、あの噂は事実だったのかと互いに囁きあう。

「色々と酷い目には合いましたが……そう簡単には、やられたりしません。それほど大きな怪我も無く、ご覧の通りです」

軽く小首を傾げて手を広げ、健在をアピールするノエル。しかし、その額には薄く脂汗が滲む。
人々の信頼を力とする天使。その信頼が、またぐんと下降した事をノエルは全身で感じていた。
傷付いた天使の姿――長かった金髪はベリーショートと呼べる程にまで短くなり、左眼から眉にかけて大きな傷跡が残っている。天使の象徴とも言うべき頭上の光輪は消え去り、翼も未だ羽が生え揃っておらず、小さくみすぼらしい。助け出された直後とは比べ物にならない程にまで回復した彼女ではあったが、その状況を知らぬ者からしてみれば、大変な変化だ。
彼女のそんな姿に、冒険者たちは確信を得たのだ。ノエルが悪魔たちに囚われ、嬲り者になったという噂が真実であると。それは噂を信じていなかった者たちにも、避け様の無い現実として突きつけられる。

「地図については、お察しの通り。悪魔の村から脱出の際、手間賃として頂きました……ま、戦利品です」

ノエルの胸が痛む。打ち合わせ通りの発言とはいえ、大半は嘘八百。悪魔から自分を助けてくれたのも地図の謎を解いたのも、太郎丸とアデリーネの二人だ。それを、さも自分がやってやったぞとばかりに嘯いて……。だが、目的達成の為に必要な事だ。ちっぽけな自分のプライドなど、それこそ悪魔にでもくれてやる！

「地図の真贋についての判断は、皆さんにお任せします。でも、これを見れば少しは信じて貰えるんじゃないでしょうか……スダチちゃん、あれを」

ノエルに促され、スダチが取り出した物……それは金色に輝く立派な手甲。ガイランが使っていた『幻魔の爪』だ。

「きっと完全版の地図を使って手に入れたのでしょうね。悪魔の一人が装備していた、伝説の武具です……倒して回収しました。破損しているのは、そのせいです。魔法を使える方でしたらこれが本物かどうか、ある程度ご判断して頂けるかと」

ざわつく冒険者たち。『幻魔の爪』の登場により、本当に悪魔を倒して地図を奪い取ったのかと、ノエルが語る話の信憑性が高まっているようだ。

無論、事実は大きく異なるのだが。

「それではっ！　皆さん考える時間が必要なご様子。今日は一旦お開きにします～！　明日、また同じ募集をかけます。推奨合計レベルは５０以上！　目的地までの旅費等は……」

ざわめきがひと段落した頃合を見計らったスダチが解散を告げて、その場はお開きとなった。

それぞれがパーティーごとに集い相談を始める冒険者たち。彼らを尻目に、スダチたち三人は早々と二階の自室へと引き上げた。

軋む階段を上って木製のドアを開き、まるで怯える小動物のような動きでそそくさと部屋へと入り、厳重に鍵を掛けて廊下の様子に聞き耳を立てて、誰も居ない事が確認されてから――スダチが、大きく息を吐き出した。

「ぷっふぁ～！　緊張したあぁ～！」

脱力して、ベッドへと突っ伏すスダチ。作戦の鍵を握る重要な役割を果たした幼い少女の足は、今頃になって震え出していた。

「堂々たる見事な演説であった。良くやったぞ、スダチ殿」

未だ緊張に強張ったままの小さな背中に手を置いて、今回の立役者を労う太郎丸。

アデリーネの立てた作戦――自分たち以外の冒険者を雇い、悪魔の村を襲撃する――これを果たす上で、スダチの働きは無くてはならない物だった。

ごく一部の例外を除き、冒険者は同じ冒険者に対して仕事依頼を出す事ができない。これは様々な不正を未然に防ぐ意味があるのだが、そうなると既に冒険者として実績のある太郎丸やノエルは依頼人になれない。そこでスダチの出番となったわけだ。

これが普通の仕事依頼であれば、それほど緊張をする必要は無い。だが今回は違う。

スダチの家からほろ酔い亭までの移動期間で、募集内容や、冒険者たちから質問されそうな内容を予想し、しっかりと打ち合わせた。

それから何度も受け答えの練習を積んで、万全の体制を整える。だが、いくら練習を積んだとしても相手は経験豊富な冒険者たち。何を言い出すかわかった物ではない。

そんな大人たちを相手に、嘘のストーリーをバックとした依頼の提示。幼いスダチにとっては、かなりの負担であった事だろう。

「あの様子ならば明日には十分な人数が集まる。スダチ殿のお陰だ……本当に良くやってくれた。ノエル殿もそう思うであろう？」

話を振ろうと首を廻らせる太郎丸。すると、入り口横の壁にもたれ掛って荒い息を付くノエルの姿が映った。化粧で誤魔化してはいるが、元々白い肌から血の気が失せて蒼白となり、まるで死人のような顔だ。そこから多量の汗が滲み出しては、次々と光子になって消えて行く。

「ノエル殿……！」

「だ、大丈夫です、太郎丸さん。少し疲れただけですから」

差し出された太郎丸の手を避け、近くの椅子へ倒れるように座り込み、ノエルはそう言って顔を伏せた。とてもではないが「少し疲れているだけ」では無いだろう。

先程、階下で行った冒険者たちとのやり取りによって、聖女ノエルに対して憧れや畏敬の念を抱いていた者たちの信仰を失ってしまった彼女。その為に、立っている事が出来ない程にまで消耗しているのだ。

そしてノエル不調の原因は、それだけでは無い。

無意識に避けた、太郎丸の手……男性への、恐怖。悪魔の村で受けた陵辱は、確実に彼女の心を蝕んでいる。

「ノエルお姉ちゃん、無理しないでね？」

飲み物を注いでくれるスダチへ軽く顔を上げて微笑みを返し、ノエルは椅子へ身体を預ける。

ついさっき、スダチの演説中……ノエルは、一刻も早くその場から離れたいとの思いに駆られていた。

途中、自分へと冒険者たちの注目が集まった時など、危うく泣き喚いて逃げ出す所だった。怖かったのだ。男たちに囲まれている状況が……彼らの視線そのものが。

家族同然で気心の知れたスダチと、頼れる仲間である太郎丸。二人に支えられてどうにか凌いだものの、他者から信頼を受け取る事で力を発揮する天使が負った「他者へ対する恐怖」という心の傷は、非常に根深い。身体の傷は癒えたとしても、こればかりは長い期間……あるいは一生、癒える事は無いだろう。

悪魔の村への襲撃を控えた今。いくら傷が回復したところで、こんな状態では悪魔への攻撃はおろか味方の回復も出来ない。同行したとしても、何の役にも立てないだろう。

だが、それで構わない。

今回、彼女の役割は攻撃でも回復でも無い。少しでも多くの冒険者たちに、悪魔と戦う気になってもらう事だ。

自分が悪魔に嬲られたとの噂が真実であると認めて地図の信憑性を高め、成功報酬を少しでも魅力的に見せる。その上で自らの健在を示し、冒険者たちに悪魔など大した敵では無いと思わせる。更には「悪魔どもめ、ノエルの敵討ちだ！」と思ってくれる人が何人かでもいれば……。

「……そんな顔しないで、二人とも。みんなが想ってくれてる限りは私、大丈夫だから。死んだりしないよ」

心配そうに顔を覗きこむ二人へ、笑顔を見せる天使。だがその姿は酷く痛々しい。冒険者たちを利用して、悪魔にけしかけ倒してや

ろうと策を弄する……その行為自体が、清廉潔白を由とする天使の衰弱を更に加速させている。

だが、そんな事は百も承知。アデリーネとスミ、そしてヤマトが今挑んでいる事に比べれば、この程度は小指の先で弾いて飛ばす程度の物。

「ええ、死ぬもんですか。こう見えても私、レベル２０なんですよ？　レベル４のヤマトが頑張ってるのに、私がへこたれてちゃ……！」

額の汗を拭い、強がるノエル。そんな彼女の言葉に、太郎丸は首を傾げる。

「ん？　レベル……４？　もしやノエル殿、奴から何も聞いておらぬのか？」

「……？　な、何がでしょう？」

キョトンとした天使の娘へ、人狼は意外そうな表情を返す。そして少し考えた後、腑に落ちた様子で腕を組み直し、若干声のトーンを落した優しい声で囁くように告げた。

「ヤマトはもうレベル４では無い。エルフの隠里を開放した功績により、冒険者管理組合よりレベル５に認定された……しばらく前の事だ」

「……！」

目を丸くして太郎丸の顔を見返すノエル。

「本来ならば、本人の口から直接語らせてやりたかったが……まぁ、頃合だ。これで、少しは元気が出たかな？」

「……ええ、ありがとうございます。そうですか、ヤマトが……」

太郎丸の声に、ゆっくりと頷くノエル。言葉通り、苦しそうだった彼女の表情も少しだけ穏やかなものへと変わっている。

万年レベル４だったヤマト。ここ何年もずっとレベルアップから遠ざかっていた彼が、自分の知らない僅か半年程の間に成長を遂げていた。

どこかで、変わらないと思い込んでいた。だが違うのだ。ヤマトは少しずつではあるが、変わって行く……成長して行く。どうにも目が離せない危なっかしい男の子から、頼れる男へと――。

「男子三日会わざれば刮目して見よ、と言う。次に会うた時には、また一つ二つ、レベルが上がっているやもしれぬな」

「そしたら、みんなでお祝いだね。お兄ちゃんに内緒で準備しておこうよ！」

太郎丸の言葉に、スダチが嬉しそうな声を重ねる。

みんなでお祝い。なんて素敵な言葉だろう？　暖かな暖炉を囲んで喜びの歌を歌い、少し贅沢をして美味しいものを食べながら、楽しく夜を明かすのだ。

「そうですね、必ず……みんなで！」

新しい目標ができた。楽しい未来の目標だ。今がどんなに苦しくても、それを目指して一歩一歩、確実に前へ進んで行こう。

それこそがきっと、成長するという事なのだから。

第五十九話：守りたいもの、守る者（二）（前書き）

このお話には残酷な表現が含まれております。苦手な方はご注意下さい。

第五十九話：守りたいもの、守る者（二）

晴れ渡る空、眩いばかりの日差し。風が止むと少し暑く感じるものの、雨季の中頃にあって、これ以上の冒険日和は願うべくも無い。

太陽へ眩しげに手をかざし、空を見上げていたノエルが地面へと視線を落す。そこには土へ垂直に刺さる細長い棒と、明るい日差しが生み出す棒の影。その影が、太陽が登るに従ってじわじわと短くなり、やがて棒そのものと完全に重なる時――。

「うおぉぉぉッ！！　突撃いいいいッ！！」

閧の声を上げ、太郎丸を先頭にして悪魔の村へと突入して行く冒険者たち。東西南北、全方角を包囲してからの一斉同時攻撃だ。悪魔たちの巣食う山間の小さな村は、瞬く間に剣戟と怒号で満たされた。

その様子を、村から少し離れた丘の上で見守っているノエル。戦地からはそれなりの距離があるのだが、戦いの喧騒はその激しさを物語るようにここまで届いている。

時を遡る事、十日程前――。

スダチが依頼人として冒険者たちを集った『悪魔の村を討伐する』という依頼は、応募過多となる程の盛況ぶりを見せた。

やはり報酬として提示された『伝説の武具の地図（完全翻訳済）』の影響が非常に大きいようで、参加を見送った冒険者たちの中には、多額の金銭と引き換えに地図を譲ってくれないかと持ちかけてくる者もいた程だ。

「アデリーネさんの読み通りね」

呟くノエル。アデリーネは作戦前に言っていた。

「一度は手に入れたものの、解読出来なかった宝の地図。そうなると、まずます書かれている内容を読みたくなるというのが人の性というものです。故に最初よりも強く地図を欲するはず――」

更に「なにも自分たちだけで戦う事はありません。下級の悪魔程度なら、頭数を揃えれば勝てるのですから」とも。

そのように事も無く言ってのけたエルフの言葉には、その場に居る全員の目からウロコが零れた。雇われる側である事の多いヤマトら冒険者にとって、誰かを雇って使うという発想が無かった為だ。

そして最後に彼女は、地図を報酬として冒険者を集う一連の策を説明してくれたのだった。

「デキる女っていうの、アデリーネさんみたいな人の事を言うんだろうね」

この所、彼女が見せる働きには目を見張る物がある。つい最近まで冒険などとは縁の無い生活を送っていたとは思えない活躍ぶりだ。

元々、冒険者が必要とする分野に対しての才能に恵まれていたのだろうが……それだけが理由でない事くらい、ノエルにだってわかる。

「ヤマトに良いトコ見せたくて、一生懸命頑張ってるんだろうなぁ……」

意識しているのか、していないのか。そこまで推し量るには観察が足りないものの、ヤマトの為にと奮闘している。それだけは確かだと思えた。

思えば伝説の武具の地図を解読したのだって、パーティー全体の為というよりも、ヤマトの為ではなかっただろうか？

アデリーネは、ヤマトが居なくなる直前に訪れた故郷の隠里に、地図解読のヒントがあったと言っていた。つまりヤマトが居なくなる頃には、地図が解読できる状態にあったのだ。

であるにも関わらず、太郎丸と二人で行動していた際にはそれを伏せ、ヤマトとの合流が果たせた途端に手の内を明かしてポイントを稼ぐ……流石としか言いようが無い。こういった強かさは今後、是非とも見習わなければならないだろう。

なんて考えてしまう辺りが、自分でも嫌な女だなと思うノエルなわけだが。

「ま、考えても仕方ないか……私も頑張ろう」

独り語りを切り上げて、本来の役目へと戻る。

今回、彼女が与えられている役割は、後方からの見張りと後詰、遊撃部隊の指揮だ。高台に潜んで村の周囲を見渡し、不審者や落延びようとする悪魔を発見すれば冒険者を向わせる。ついでにスダチ自身と、彼女がまとめて持っている地図を、不届き者から守る役目も仰せつかった。

天使としての能力が低下してロクに戦闘は出来ず、空も飛べなくなったノエル。部隊指揮や要人警護と言えば聞こえは良いが、実の所は味方の応援と子守を宛がわれているに過ぎない。

冒険者たちは指揮官など居なくても自分で判断して行動出来るし、スダチも子供とはいえ、しっかりとしている。それに最悪、この期に及んで地図が狙われたとしても、スダチは地図を捨てて逃げれば良いだけの話なのだ。地図は写しだし、悪魔の村襲撃という当初の目的は既に達している。

つまりノエルは、何かを期待されてこの場に配置されているわけではない。

「力があれば……」

呟き、戦火に包まれる村へ視線を落すノエル。
力があれば。そうすれば悪魔の村へ飛び込み、片っ端から悪魔どもを焼き尽くして見せるのに。自分へ酷い事をした連中へ、目に物見せてくれるのだけれど――。

「……むんっ！」

すっかり傷の癒えた左手を前に突き出し、意識を集中させる。
以前であれば人々の信仰が光となってノエルの身体を駆け抜け、聖なる力の象徴たる純白の輝きが、眩いばかりの光球となって手の平に現れていた。
だが今は違う。
ジリジリと全身を焼かれるような痛み。その痛みに呼応するかのように身体からフワリと浮かび出た、微かな光の粒。それらが、ゆっくりゆっくりと手に集まり、ほのかな橙色をした明りとなる。生み出された明りはホタル数匹程度の物でしかなく、陽光の下では霞んで見えない程の、弱く儚い光だ。しかし、それが今の彼女が出来る精一杯。人々からの信仰から外れた天使が血肉を削って搾り出す、なんとも情けない、なけなしの光だ。

「くっ……！　もう少し……」

痛みに顔をしかめて、更に光を集めるノエル。ガイランを貫いた時のように、力の凝縮された鋭い槍を生み出す事ができれば……。

「あ、あとちょっ……と？」

ふと、集める淡い光の向こう側。村から少し離れた森の影に、一瞬、何か動く物が見えた。

気のせいかとも思ったが、どうやら違う。今度は目を凝らして良く見てみれば、木々の隙間からちらりと見える赤い肌――。

「悪魔憑き！」

森の中を、何体かの悪魔憑きが移動している。すぐさま後詰の冒険者たちへとその旨を告げるノエル。ピリピリとした時間を過していた彼らはノエルがもたらした報に色めき立ち、後方へ下がる彼女と入れ替わるようにして迅速に森へと展開して行く。

「こっから先は俺たちに任せておきな！」
「天使さん、後はお願いします」
「はい、皆さんもお気をつけて！」

短く言葉を交わして冒険者たちを見送った後、ノエルは岩陰に隠した幌付き馬車へと走る。そして少々乱暴に幌を捲ると、そこには見慣れた少女の姿あった。

「スダチちゃん、最初の打ち合わせ通り。今から移動するね」
「う、うんっ！」

馬車の中、木箱に腰掛けるスダチへ早口でそう伝えるノエル。一瞬驚いた様子のスダチだったが、彼女も心得たものだ。流れ弾が飛んできた時の為に、足下に置いてあったリュックを背負うと、すぐ床に伏せる。

作戦では村の外で悪魔が見かけられた場合、非戦闘員は戦闘区域から離脱する手筈となっている。それに該当するのはノエルやスダチ、そして負傷者なのだが、現在の所、後方へと下がる必要がある負傷者がいない為、実質二人だけとなる。

御者台に腰掛け、手綱を握るノエル。一応、馬を操る訓練は受け

ているが、馬車を手繰るのは初めてだ。しかも二頭立て……自在に操るには熟練が必要なのだろう。しかし自由自在とは行かなくとも、馬なりの早足で進ませる事くらいなら出来る。

「よしっ……出発します！」

ノエルの声に促されたのか、鞭を入れずとも歩き出す二頭の馬。ごとり、と馬車が揺れ、八つの蹄が小気味良いリズムを刻み始める。

馬が無事に進み始めた事にほっと胸を撫で下ろしたノエルは、改めて先程見た悪魔たちへと考えを巡らせる。

森の中にちらりと見えた悪魔の数は決して多くなかった。精々三、四人といった所だ。冒険者たちの目を盗んで運良く村から抜け出したか、あるいは最初から包囲網の外に居たのだろう。もし自分しか居なければ、対応出来なかった所だ。後詰部隊に遊撃の任も与えた、太郎丸の部隊運用に感謝しなくてはならない。

そんな事を考える内にも、止まる事無くゴトゴトと、固く踏み固められた道を行く馬車。村からは随分と離れた。道程は今の所、順調だ。

そういえば、あの村で人質となっていた村の人たちは全員、無事に逃げられたのだろうか？　サークスは約束を守ると言っていたが、悪魔の言う事だ。どのような裏があるかわからない。何人かは無事に、最寄の村まで逃げ果せたようだが……。

思考の海に浸り、少しボンヤリとしていたノエル。まるでそのタイミングを見計らっていたかのように、トラブルは訪れた。

突然、二頭の馬が暴れ始めたのだ。

「ど、どうどうっ！　急に何で……！？」

少しでも馬たちを宥めようと手綱を引くノエル。だが二頭の馬は首を振るって後ろ足で立ち上がり、しきりに後退しようとしている。

何かに怯えているのだ。

「ちょ、ちょっと落ち着いて……落ち着いてっ！」

宥めようと頑張ってはみたものの、そもそもどうすれば馬が大人しくなってくれるのかがわからない。

これ以上放置したら馬が怪我をするし、馬車が引っ繰り返ってしまう。そう判断したノエルは馬の止め具を外し、馬車を切り離した。拘束を解かれた馬たちは先を競うようにして、この場から遠ざかって行く。

呆然とそれを見送るノエル……と、走る二頭の内、森に近かった栗毛の馬が、突然何かに躓くようにして倒れた！　良く見ればその脚に、何者かが組みついている。

「あれは……っ！」

尋常でない怪力で馬を組み伏せる、ほっそりとした人影。爛々と光る真紅の瞳に赤黒い肌。間違い無い、悪魔憑きだ。事前の調査では見落としていたのか、村から離れたこんな場所に人間型の悪魔憑きが出没している！

「……スダチちゃん、そこで待ってて」

幌の中へそう声を掛けるノエル。想定外の事態だ。

村から離れた付近の山々には何度か山狩りを行い、悪魔憑きを含む危険な魔物を排除していた。それ故に非戦闘員後退の際、大した護衛も無く撤退する作戦となっていたのだ。しかし目の前には紛う事無き悪魔憑きの姿。人間の女性に取り憑いているようで、乱れた長い髪が悪魔の狂気を感じさせる。

だが件の悪魔はこちらには全く興味が無いようで、組み伏せた馬

の首を易々と圧し折って絶命させると、おもむろに腹部へ食らい付いた。そして皮膚を食い千切って頭だけを突っ込み、内腑を貪り食い始める。腹でも減っているのだろうか？

鮮血迸る凄惨な光景ではあったが、ノエルにとってはまたと無いチャンスだ。馬が居なくなって機動力が失われた今、スダチを逃す機会は今を除いて他に無い。

「こっちへ……」

人差指を唇に当てて沈黙を促し、スダチを馬車から連れ出すノエル。

抜き足、差し足、忍び足。音を立てぬよう呼吸にも気を使って、こそこそと馬車から離れ、悪魔の様子を窺いながら森の方へ。悪魔が肉を食む音だけが響く。

その時、ノエルはある事に気がついた。背後から見た悪魔憑き……彼女が背中に何かを背負っているのだ。あれは毛布だろうか？一抱え程の何かが、布状の物で大事そうに包まれている。丁度スダチを一回りか二回り小さくしたくらいの、少し細長い何かだ。

と、その時……。

ぱきん！

静寂の中に響く乾いた音。スダチが、枯れ枝を踏み折ってしまった。

音に鋭く反応し、血塗れの顔を上げてこちらを向く悪魔憑き。

来る！　そう予感したノエルは咄嗟にスダチを突き飛ばし、構えを取った……その瞬間！

「きゃうっ！？」

唸りを上げて飛来する馬の死骸。完調からは程遠いノエルにそれを避ける事は出来ず、巨大な質量の直撃を受けて、あえなく弾き飛ばされる。

また温もりを残す馬の死骸と共に土煙を上げて地面を滑り、ようやく停止。手足に痛みを感じて目をやれば、地面と擦れあった部分が、大きく擦り剥けていた。天使の絶対的な防御能力は、飛行能力や頭上の光輪と同じく失われたままなのだ。

痛みを堪えて身を起こすノエル。そこへ追撃を加えようと悪魔憑きが飛び掛る。

「そう簡単にっ！」

やられるもんか！

ノエルはその場に落ちていた手頃な棒状の物を引っ掴み、悪魔憑きの横っ面を力任せにぶん殴った！　ぐえっ、と息を漏らしてバランスを崩し、数歩下がる悪魔憑き。効果的とは言えないまでも、多少は効いているようだ。

それにしても良くこんな道の真ん中に、手頃な棒があったものだ。神に感謝しつつ自らの握るモノを見たノエルは「うっ」と息を飲み、その感謝内容を改めた。

「お、お馬さん、ありがとうね……あと、ごめん」

ノエルが武器代わりに握っていたのは、千切れた馬の前足。悪魔に投げられた際に千切れていた物だった。

「ぎ、ぎうぅぅ……」

殴られた頭を抱え、苦しむ悪魔憑き。単純な打撃ではあったが、意外にも効いているのだろうか？

身を守る為とはいえ、天使としてはあまりに粗野で野蛮な行為。
清楚なイメージ付きまとう一般的な天使からは大きく逸脱した攻撃方法ではあったが、形振り構わず頑張った甲斐があるというものだ。
なにはともあれ、動きの止まった今がチャンス！

「はあぁぁぁっ！」

息を吐き、意識を集中するノエル。髪や羽、そして擦り剥いた傷口から、鈍い痛みと共に薄い橙色をした光がふわふわと浮かび上がり、広げた手の平の上へ集まって行く。
ガイランを倒した時の威力は出せなくとも、一般人に憑いた悪魔を倒す程度の光なら今のノエルにでも生み出せる。
集中力が足りていないのか、それとも他の要素が絡むのか。収束させて槍の形にする事までは出来なかったが、手の上でフワリと浮かぶ光の玉。それを直接ぶつけるだけでも、かなりの威力が期待できるだろう。
見れば、悪魔はまだ頭を……いや、背中を気にしている？　とにかく、隙だらけだ！

「やあぁぁぁっ！！」

掛け声と共に、腕を振り被るノエル。まるで投石でもするかの如く、光の玉を悪魔の頭部目掛け、勢い良く振り下ろ――さない。
ノエルは、腕を振り上げたままの姿勢で止まっていた。

「……どう、して？」

彼女が動きを止めた理由。それは、悪魔が取った咄嗟の行動にあった。
攻撃される！　そう判断した悪魔は、背中に背負う何かを腹に抱

え込んで身を屈め、ノエルの攻撃から身を呈して庇ったのだ。その際、僅かに解けた毛布の隙間から見えた物。それは――。

「人間の……子供？」

毛布の隙間から、子供の顔が覗いていた。

小さな女の子だ。年の頃は三つか四つ、物心付くかどうかという所だろう。少し痩せて顔色も良くない様子だったが……まだ生きている！　そして幼子の顔を見たノエルの記憶に、閃く物があった。

この子、どこかで……？

記憶の糸を辿るノエル。その間、一秒にも満たない刹那であったろう。そして思い出される、あの日の夜。

『……はい、お大事に。気をつけて帰って下さいね』

微笑むノエルに、丁寧に頭を下げてから席を立つ母親。その胸には、安らかに目を閉じる幼子の姿――。

思い出した！

いま目の前で毛布に包まれているのは、悪魔に囚われの身となった日の夜、村で最後に診療した女の子だ！　という事は？

攻撃に怯え、身を固くして蹲る悪魔の顔を凝視するノエル。そして確信する……間違いない、あの時に子供を連れていた母親だ。

どういった経緯があって、このような事になっているのか？　母は悪魔に取り憑かれたまま、幼子を背負って何をしていたというのか？　ノエルの中で渦巻く疑問。

その時、悪魔に憑かれた母親の瞳に、理性の色が戻った。

第六十話：守りたいもの、守る者（三）（前書き）

このお話には残酷な表現が含まれます。苦手な方はご注意下さい。

第六十話：守りたいもの、守る者（三）

悪魔に憑かれた母親。その目に理性の色が戻った時、彼女がまず最初にとった行動は、我が子の無事を確認する事だった。

胸に抱く愛娘の温もりを確かめ、愛しげに頭を撫でる……それからしばらく経ってようやく、自身の傍らで呆然と立ち尽くすノエルの存在に気が付いたようだ。

「天使……っ！？」

大いに驚き、恐怖の表情で後ずさる母親。取り憑いた悪魔の本能がそうさせたのか、あるいは理性でもって自分が攻撃対象になっていると気付いたか。我が子を庇いつつ、必死に距離を取ろうとしている。

「落ち着いて下さい。貴女は、この近くの村に住んでらっしゃった方ですよね。私の事がわかりますか？　一ヶ月ほど前に、あなたの村を訪れた天使です」

油断無く身構えたまま、母親へと問いかけるノエル。なるべく相手を刺激しないように、ゆっくりと……まずは事情の把握だ。しかし結局は、いくら問いかけた所で意味など無くなってしまう……何故なら、相手は間違いなく悪魔憑きであるから。

改めて確かめるまでも無く、悪魔は天使にとって不倶戴天の敵だ。取り憑かれる生き物にどれほど同情すべき理由があろうと、悪魔の誘惑に耳を傾けた時点で言い訳の余地など無く、倒すべき相手となる。だから問答無用で滅ぼすのが悪魔退治の常識だ。

悪魔憑きとなった母親の痩せこけた身体、その身に纏うボロボロの衣服。幼子を抱えた彼女が、どのようにして悪魔と関わりを持っ

たのか……それを聞き、深く関わる程に、敵を打ち倒す気持ちが鈍ってしまうだろう。なのに……。

「これを、その子に」

ベルトポーチから、小さな革袋に入った流動食を差し出すノエル。喉の完治していない自分用にと持っていた物だ。

「栄養価の高い保存食です。味は今ひとつですけれど、柔らかいですから子供でも食べられると思います」

「……」

警戒を解こうとしない母親。だがそれはノエルとて同じだ。

互いに事情が分からず、いつ攻撃されるかも分からない緊張感。種族としての本能が敵を滅ぼせと急き立てる中、「腹を空かせた子供に、何か食べさせてやりたい」という共通する思いが、双方で攻撃の手を強く抑える。

「いらないのなら、捨てちゃいますよ」

「っ！」

その言葉に慌て、ノエルからひったくるようにして保存食を受け取る母親。そして一刻を争うかのように革袋の中身を搾り出して指先で掬い取り、腹を空かせた我が子の口元へと運ぶ。すると幼子は、悪魔憑きとなった母から与えられる食事を、何の疑いも無く美味しそうに食べ始めた。

栄養重視で味が薄く、冒険者の間では非常に評判の悪い保存食。しかしそんな事は、腹を空かせた子供にとっては関係の無い話であるようだ。あっという間にぺろりと一人前を食べ尽くし、未だ足りないと云わんがばかりに小さな手を伸ばして、お代わりを求めてい

る。

「まだ、あります……良かったら、どうぞ」

ノエルが残っていた二食分、手持ちの保存食全て差し出す。恐る恐る、という風ではあったが母親は保存食を受け取り、また同じように指先で掬って子供の口元へと運び、食べさせる。

暫し続く、会話の無い時間――。

最初こそ、指先まで食い散らかす勢いで食を進めていた幼子だったが、保存食を一人前と半分ほど食べた所でお腹が一杯になってきたのだろう。母に背中を擦られて「けふっ」とげっぷをしたかと思うと、やがて目を瞬かせ、ほどなく夢の中へ――。

「眠ってしまいましたね」

「……ええ」

眠る子を起こさぬように、声を落して言葉を交わす二人。いつの間にかささくれ立った心は落ち着き、攻撃の意思は消え失せていた。

「ありがとうございます、天使さま」

愛娘を撫でながら、母親が頭を下げる。親しい者以外から、久しぶりに受け取った「ありがとう」の言葉。それがこの世で最も忌むべき悪魔からもたらされるとは。この奇妙な巡り合わせに、ノエルは神の意志を感じずにはいられない。

「お陰で、この子を飢え死にさせずに済みました」

「……もし良ければ、何があったのか聞かせてもらえませんか」

撃ち滅ぼす敵の身の上話を聞いてどうする？　そう思ったノエル

だったが、これも乗り掛かった船。非情な選択を迫る天使の本能を無視して、ノエルは心のまま母親に会話を促す。

「はい……村で天使さまが、私たちを庇って下さった後の事です……」

ゆっくりと口を開く母親。

多くの人質を取られたノエルが悪魔の軍門に下って天使の能力を失い、囚われの身となった日の翌日。サークスは約束通り、悪魔憑きとなっていない住民たちを村から放逐した。

今は悪魔憑きとなってしまった母親であるが、その時はまだ普通の人間。着の身着のままで娘共々、他の村人と一緒に村から追い出され、最寄の人里へと助けを求めてひた走ったのだと言う。

「皆と一緒に必死で走って……半日も行った頃だったでしょうか。何人もの悪魔たちが、追ってきたのです」

母親の言葉に哀しげな表情を浮かべるノエル。あれから半日後の自分はと考えれば、サークスやバラによって代わる代わる辱めを受けていた頃だ。おそらく見物に飽きた血気盛んな悪魔たちがサークスの意思とは関係無く、勝手に逃げた村人を追いかけ始めたのだろう。

ノエルとしては身を呈して村人たちの安全を確保したつもりだったが、全く及んでいなかったようだ。もしも自分がもっと上手く立ち回っていれば悪魔の追撃を防げていたのに……そう思えて仕方ない。

「悪魔たちは、まるで狩りを楽しむかのようでした。私たちは追い立てられて散り散りとなり、道に迷って孤立し……」

追い詰められ、捕まった。彼女と娘と捕えたのは、村の若い男性三人……全て見知った顔の悪魔たちだったという。

獲物を捕らえた彼らは自らの願望を満たすべく、母親に対して狼藉を働く。若く愛嬌もある彼女は、強い欲望を持て余す彼ら悪魔憑きにとって格好の餌となってしまったのだ。

地獄の釜で茹でられる方がマシではないか？　そう思える程に辛い時間が延々と終わる事無く続いたのだと語る母親。淡々とした語り口だ……しかしノエルには感じられる。平坦な言葉の端々から漏れ伝わる、彼女の辛い気持ちが。同じような経験をした同性として、痛い程にわかる。

「それから、どれくらい時間が過ぎたのかわかりません」

永劫に続くとも思えた陵辱の時間。だが母は耐えた。悪魔憑きに人質として取られた愛娘。その命を救う為であるなら、どんな事にも耐えられた。

しかし――。

「その内、彼らは私に飽きたのです。だから娘を……」

男たちの毒牙が愛娘に向けられようとした時、母の耳に、何処からか声が聞こえてきた。

我が子を救う力が欲しくはないか？　貴様の魂と引き換えに、力をやろう――。

その声が悪魔の物である事はすぐにわかった。幼い頃から伝え聞かされた、忌むべき悪魔の誘い。絶対にしてはならない取引である事は知っていた。しかし彼女はあえて誘いに乗る。そして母は……鬼と化した。

「そこからの記憶は無く……気がつくと男たちは居なくなっていて、

代わりに黒いシミが地面に三つ。ですがうちの娘は、無事に助ける事が出来ました」

一言も喋る事なく、ただただ母親の話に耳を傾け続けるノエル。

そうして悪魔憑き三体を退けた母であったが、それからが大変だったようだ。

目や肌が真紅に変色し、誰から見ても悪魔憑きとなってしまった彼女には、もう最寄の人里へ保護を求める事もできない。せめてこの子だけでも村に預けて……と思うものの、そうしようとする度に「我が子と一緒に居たい」という欲望が暴走してしまい、行動に移せない。それどころか時折り記憶が飛び、我に帰れば全身血塗れ。手元には動物の死体……というような事が立て続いたのだという。

その為だったのだろう。自分の腹は殆ど減らなかったが、娘は腹が空いたとぐずり、見る見るうちに痩せ細っていった。乳を飲まそうにも、自らの乳房からは赤黒く油の腐ったようなモノしか出ず、とても飲ませられない。仕方なく山中を這いずり回り、果実や山芋を採る事で辛うじて命を繋いでいたのだ。

「それが、つい先程までの私です」

長かった話が終わった。語り終えた母親は落ち着いた表情で正座をして座り、腕の中で眠る我が子へ愛しげな視線を向けている――今が頃合だろう。殺さなければならない、この女性を……いや、この悪魔を。

破邪の光を集めるべく、集中を開始するノエル。

どんな理由があろうと、悪魔憑きを見逃すわけにはいかない。それが世界の秩序を保つ為に必要なルールだ。可哀想だからといって目の前の彼女を逃がしてしまったら、その後にどれほどの不幸が広がるか想像もつかない。心苦しいが、仕方の無い事なのだ。

そうこうしている内……母親が顔を上げた。目に映るのは、ノエ

ルから舞い散る淡い光の粒。それを見て悟ったのだろう。彼女は、小さな声で尋ねた。

「天使さま、この光は……私を？」

「はい……ご想像の通りです。これから貴女を、滅ぼします」

天使が、悪魔憑きを滅ぼすべく活動している事は、子供でも知っている常識だ。嘘や気休めを言っても、相手を苦しめるだけだろう。

「そう、ですか……そうですよね」

また娘へ視線を戻す母親。彼女だってわかっているはずだ。悪魔に魂を売り渡した自分が、どうなるべきであるのかを。

もうノエルの手には、母親を消滅させるには十分な光が集まっている。少しずつ時間をかけて集めた光は、胸を貫くなどとケチな事をせずとも、全身を焼き払ってお釣りが来る程にまで高まっていた。これなら楽に逝かせてやる事が出来る。

「この娘が大きくなって……いいえ、せめてママって読んでくれる声くらいは……聞きたかったんですけどね」

呟き、我が子に視線を落す悪魔。頬の柔らかさや、細い髪の手触りを忘れないようにと何度も撫で、確かめている。名残惜しそうな仕草は、見ているだけで胸が締め付けられるようだ。

だが、わかっている。こんなのは、全部演技なのだ。悪魔が天使を騙そうと、演技をしているだけなのだ！

これまでにヤマトと二人、何度か悪魔と戦ってきた。大小様々な悪魔たちが居たが、その全てが狡賢く嘘吐きで、卑怯な者ばかりだった。追い詰められると命乞いを始めて哀れみを誘い、少しでも油断すれば手の平を返す。それで何度騙され、煮え湯を飲まされたか

わからない。だから今回も、この母親だって下心があるに決まっている。

そうだ、今こそが悪魔を滅ぼす時！

「……っ！」

悪魔を滅ぼせ！　そう本能が叫ぶ。だがノエルは、悪魔を……母と娘の姿を直視できない。攻撃の意思を向けられない。

倒すべき相手だ。何も見ず、耳を塞いで光をぶつければ、それで倒せる……悪魔憑きは敵なのだ！

「……っ！！」

しかし今回は……今回だけは、もしかすると違うかもしれない。だって、仕方が無いではないか。自分の大切な何かが危機に陥った時、それを守れる方法があるのなら飛びついて当然だ。言い訳も何も、誰だってそうするんじゃないだろうか？　溺れるものが藁を掴むように、彼女の場合、たまたま近くにあった藁が悪魔の囁きだった……ただそれだけなのだ。

悪魔憑きにだって事情はある。命が惜しい、力が欲しい、この世に未練がある……そんな事くらい前から理解はしていた。だが力に溢れていた頃にはわからなかった。どうしても、何を捨てても成したい事があると、その実感が伴っていなかったからだ。

だからこそ、力を失った今なら……痛みを知った今ならばわかる。悪魔の声に耳を傾ける者たちの気持ちが！

そして、ノエルは知っている。

我が子を守る為なら、命も、魂すらも惜しくない。死の淵に追いやられて苦しい中でも、子供の前でなら笑っていられる……それが親というものであると。ヤマトの両親が……最愛の父と母が、彼女に教えてくれた。

「う……くっ！」

この人を……この母親を、私は……殺す事ができない！

ノエルの目から、涙が零れる。

悪魔だろうと何だろうと大切な存在の為に命懸けで頑張った人を、どうして殺す事ができるだろう？

神様は言った。悪魔憑きにとって、滅びこそが救いになると……でも、そんなのは嘘っぱちだ！　死んでしまったら、そこで終り。子供に触れる事も、声を聞くことも出来なくなってしまうのに！

「ぐすっ……わ、私は……私は……っ！」

「天使……さま？」

自分は駄目な天使だ。神の言葉を疑い、人々に見放されたばかりか、好機だというのに悪魔を倒す事も出来ない役立たずだ。

だがなんと言われようと、たとえ神の命に逆らう事になるとしても、彼女は殺せない。慈愛に満ちる母の命を断つ事は出来ない。それをするくらいなら、私は……！

「天使さま、涙を拭いて下さい」

咽び泣くノエルへ、母親が気遣わしげに声を掛ける。そして抱いていた子供を、そっと傍らへと下ろした。彼女の表情は凛々しく、何らかの決意が見て取れる。

「身を呈して私たちを逃がしてくれた天使様を、これ以上困らせる事はできません。その子の肌着に、僅かばかりですが銀貨を忍ばせてあります。それで、どうか……」

「な、何を……？」

問いかけるノエルに、母親は笑顔を返す。

「どうか、その子をよろしくお願いします」

「まっ……！」

待って！

その言葉が発せられるよりも早く、母親の手刀は、自らの胸を貫いていた。

第六十一話：守りたいもの、守る者（四）（前書き）

このお話には残酷な表現が含まれています。苦手な方はご注意下さい。

第六十一話：守りたいもの、守る者（四）

ぐしゃり、と熟れた果実を潰すような、湿った音。
自らの貫き手で胸を……心臓ごと、背中側までを貫き通し、赤黒い血を大量に吐き出しながら、悪魔憑きの母親は前のめりに倒れ込む。

「なんて事をっ！」

叫び、駆け寄るノエル。
倒れた母親の身体を起こし、すぐさま傷口の確認をする。

「……！」

致命傷だった。
悪魔の怪力は心臓、肺、背骨など、生きる上で大事な臓器や骨の大半を破壊し、失わせていた。いくら悪魔憑きとなって強靭な肉体と驚異的な再生能力を得ていても、これだけの傷を受ければ、助からない。
すぐに治療を！
だが天使の本能がそれを阻み、ノエルの意識へと語りかける。
相手は悪魔憑き、倒すべき相手。自殺してくれたなら手間が省けたという物だ。それに母が最後に見せた人としての矜持を無駄にするつもりか？　どうせ治療した所で助からないのだ。ほら、良く見てみろ彼女の有様を。

「身体が……」

倒れたまま動かない母親。その真っ赤な肌にインクでも零したか

のように、凄まじい勢いで黒いシミのような部分が広がって行く。
そして黒くなった部分はひび割れ、端から崩れて粉々の塵となって消える。
悪魔に魂を売った者の末路がそこにある。

「……」

言葉も無く、滅び行く女性の隣で膝立ちとなり、未だ迷いの中にあるノエル。
助けたい、でも無駄だ。相手は悪魔……助けられないし、助ける必要の無い相手。
なにが正しいのか？　どうするのが最善か？　答えが出せぬままの彼女。その目に……小さな手が映り込んだ。さっきまで眠っていた子供だ。
母の異常に気付いたのだろうか？　目を覚まし、包まれた毛布から抜け出して崩れ行く母の身体に触れる。そして粉々になる母の身体を手で押さえ、その崩壊を食い止めようとしているかのようだ。
小さな手、その指の間から零れ落ちる母の身体。
どうしようもない。これが運命――。

「あ……」

その時、ノエルを仰ぎ見た子供と目が合った。その子の真ん丸に見開かれた双眸……その目が語る。
お願い、お母さんを助けて！

「っ！！」

迷いが消えた。
攻撃の為に溜め込んでいた光のエネルギー、ノエルはその全てを

即座に回復の力へと転化する。考えるよりも、行動が早かった。

「離れてっ！」

幼子を押し退け、半ば崩れ落ちた母親の身体へと、ありったけの魔力を叩き込むノエル。

自分は今、悪魔を助けようとしている。そんな事をすれば天使として神の……いや、そんな事はどうだっていい！

困っている子供に手を差し伸べる事もせず、何が神だ！　何が天使だ!!　悪魔だの何だのが関係あるものか！

ノエルの意志とは裏腹に、母親の悪魔としての身体が天使の回復を拒んだが、それを無理矢理、強引に捻じ伏せる。爆発したかのように広がる光。地面に積もっていた塵が光に押されて吹き飛び、ノエルたちを中心とした球を描き出す。

「くっ……！」

治らない――。母親は最初から致命傷、ほぼ即死状態で、そもそも命を救える状態では無かった。その上、天使の治癒を拒む悪魔の身体。ノエルが溜めていた光の力は、あっという間に底を突いた。

回復する事無く、光に圧されるがまま塵となって吹き飛んで行く母親の身体。もう手も足も、胴体さえも殆ど残っていない。そして最後まで残っていた頭部も、燃え尽きた炭のようにグズグズになって崩れ、虚空へ――。

「諦めるもんか！　諦めちゃダメ!!　頑張って!!」

ノエルが母に呼び掛け、自らも力を振り絞る。治りかけていた翼が、髪が、身体の端々が。どんどん光と化して消える。全身に走る激痛……だが、その分だけ強く輝く回復の光。

「ま……ままぁ……っ！」

子が、母を呼ぶ。

ノエルの放つ光が、強くなる。

「これから先この子に必要なのは！　お金でも、天使でも、まして神や悪魔の力でもありません！　この子に必要なのは……」

ノエル自身が光となって輝く。その頭上には、長らく消え失せていた天使の光輪が煌々たる光を放ち浮かび上がっていた。その姿は最早、眩しい光そのもの……だが優しく暖かく、まるで生命を育む太陽の如く。

「この子に必要なのはっ！　お母さん、あなたです！！」

瞬間、地上の太陽がノエルの眼前、その一点に集中する！

閃光、そして爆発。

質量を伴う光の奔流が、あたり一面あらゆる物を薙ぎ払い、直後に引き寄せる。森がざわめき、空が悲鳴を上げた。

「きゃうっ……！」

爆風が襲った。

馬車の影に隠れ、ノエルたちの様子を窺っていたスダチは咄嗟に車輪へ掴まり、飛ばされまいと踏ん張った。だが馬車は凄まじい衝撃波の前に横転し、努力空しくスダチもゴロゴロと吹き飛ばされてしまう。

やがて光が収まった頃。道端の雑草にしがみ付き這い蹲っていたスダチは、恐る恐る身を起こす。未だチカチカする目を擦り、よう

やく視力がまともになった彼女が見た物……それは雑多な物が吹き飛ばされ、塵一つ無くなったのっぺりとした地面と、一定の方向へと揃い傾いた木々。そして爆心地とでも呼ぶべき光の中心で倒れ伏す女性と、その女性へよちよちと歩み寄る小さな子供の姿だった。

「あ……あれ？　あの女の人……？」

我が目を疑うスダチ。視線の先で倒れている女性は、先程まで悪魔憑きと化していた母親に間違い無いだろう。肌の色が変化しており確認し辛いが、髪形や服装が同一人物である事を物語っている。

悪魔憑きの象徴ともいえる真っ赤だった肌は健康的な肌色へと戻り、炭のようになって崩れ落ちたはずの身体に欠損は無く、むしろ体中、どこにも傷一つ見当たらない。

そして、微かに上下する胸。

「な、治った？　生きてる！？　あの人、生きてるっ！」

スダチが驚きの声を上げる。幼子がしがみ付く母親は、確かに生きている。しかも、元の健康な姿となって！

信じられない事だった。これまでの常識を覆す、誰一人として成し遂げた事の無い偉業。何人もの強者や賢者が挑み、志半ばにして挫折した悪魔憑きよりの脱却。それを信仰から外れて傷付いた、天使の小娘が成し遂げたのだ。

「あ、あれ？　の……ノエルお姉ちゃん？　お姉ちゃんは？」

だが、その天使はどこに？　確か先程まで、女性の隣で全身を激しく発光させていた筈なのだが、同じ場所に彼女の姿は見当たらない。

まさか？　嫌な予感がスダチの脳裏を過ぎる。

ノエルは我が身を削って力を生み出していた。髪は短くなり翼が削れてもなお、全身を光と化して母親へと治癒の力を注ぎ込んでいた。そのままどこまでも際限なく力を放出し続けたのなら、あるいは肉体そのものも……！

「お姉ちゃん!?　ノエルお姉ちゃん！　どこっ！！」

自らの嫌な想像を吹き飛ばさんと、声の限りに叫ぶスダチ。だが彼女の声に応える者は無く、代わりに……。

ごとり。

横転した馬車の荷台で、何かが動く音がした。恐る恐る、スダチがそこを覗き込んで見ると……。

「あ……！」

ベリーショートの金髪、ボロボロの小さな翼。埃塗れとなって荷物の中に埋もれ、苦しげにもがくノエルの姿があった。

慌てて荷物の山をどけるスダチ。

「ぶはっ！　た、助かったよスダチちゃん……し、死ぬかと……」

「何してるのよぅ！　びっくりしたんだから！」

可愛い妹が漏らす安堵の声に、軽く詫びるノエル。だが彼女には、それよりも気になる事があった。

「さっきの、あのお母さんは!?」

「大丈夫だよお姉ちゃん、ほら……」

倒れた馬車から身を乗り出し、親子の様子を覗く二人。すると意識を取り戻した母親が、自らにすがり付く愛娘を優しく撫でる姿が

目に映る。

「良かった……」

呟き、脱力するノエル。精根尽き果て、立っている事も出来なくなったようだ。

「お姉ちゃん、やったね。本当に凄いよ！　どうやって悪魔追っ払ったの？」

興奮気味に聞いて来るスダチへ、ごろりと横になって楽な姿勢を取りながらノエルが答える。

「悪魔追っ払った……っていうか、お母さんが頑張ったんだよ。悪魔と一緒にあっちの世界へ行きかけてたのに、娘さん所に戻りたいって踏ん張って。だから私、悪魔からお母さんの魂取り返して、身体を治して帰る場所を確保して、そこへ案内して……それだけだよ」

ノエルの説明に、いまいちピンと来ないスダチ。だが、これはとんでもない事なのでは無いかと思えた。

母親の身体を治して……とノエルは簡単に言ったが、母親の身体は最終的にほぼ消滅していた。それを治すとなると、人間一人分を丸々ゼロから創り上げるのと同じ能力が必要なのではないか？

その上で悪魔に売り渡された母親の魂を取り戻し、身体へ案内した？

「お姉ちゃん、それって……」

これはもしや、神の領域であるとされ、長らく不可能だといわれていた究極の能力。世に数多くある回復系能力の最高峰であり、最

終到達地点。『蘇生』と呼ぶべきモノではないのだろうか？
スダチがしばらく考え込んでいると、寝そべったままのノエルが満足そうな笑みを浮かべて、ぽつりと漏らす。

「まぁ、このくらいは、やらないと……吊り合わないもんね」

何が吊り合わないと言うのだろう？　一瞬、そう考えたスダチだったが、すぐに言葉の意味を理解する。

「あ、そっか。お兄ちゃんって、帰ってきたら『伝説の装備に身を固めた人類最強の悪魔憑きにタイマンで勝った男』になるんだっけ？」

無言で頷くノエル。

「それじゃ『死者をも癒す天使』くらいじゃないと、吊り合わないかもね」
「そうでしょ？」

笑いあう二人。世界の常識を覆す、凄まじい奇跡が行われた直後とは到底思えない気楽な笑顔。
ヤマトの安否に不安が無いと言えば、嘘になる。だが何故だろう……負ける気がしない。必ず彼は生きて帰ってくる、そんな気がする。

「あ……ほら、お姉ちゃん聞こえる？」

遠く、山の向こう側から聞こえて来る雄々しい遠吠え――。

「あれ、太郎丸さんだよ。なんか勝ったみたいだね」

その遠吠えに合わせて上がる歓声も、微かながら聞こえてきた。冒険者たちの勝利を伝える勝ち鬨だ。

安堵感に包まれながら、未だ寝そべったままのノエルを助け起こそうと、手を伸ばすスダチ。

「そろそろ行こう、ノエルお姉ちゃん。立てる？」

「……ムリ」

ノエルが言葉少なに答えた。そんな甘えた姉へ、しっかり者の妹は頬を膨らませて手を引き、強引に起き上がらせようと試みる。

「もう、そんな事言わないで。ほらっ！　みんなと合流しなきゃでしょ？　馬車も使えなくなっちゃったから、歩かないと！」

だが、ずるずると引き摺られるがままのノエル。

「や……スダチちゃん、ホント……ムリ。もう手とか足とかプルプルして、立てないし。というか今すぐ……お布団入って寝たい……というか、もう……寝る」

言うが早いか目を閉じて、スカスカと寝息を立て始めるノエル。

「え、えぇっ!?　ちょ……こんな所で!?　ダメだよ、私運べないよ!?　それにあの人たちだって居るのに！」

慌てるスダチ。疲れ果てて眠りに落ちた姉を必死に揺すってみたが、口の端からヨダレが少し垂れた程度。目を覚ます気配は無い。

そして助け舟を期待して親子の方を見てみたのだが……こちらも安心したのか何なのか、母と子、二人寄り添い夢の中だ。

「そんな……！　ど、どうしよう？　だ……だれか～！　おぉ～……ぃ……」

安らかな寝息を立てる三人を抱え込み、途方に暮れるスダチ。彼女ら四人が無事に合流地点へと辿り着くのはもう少しだけ、先の話となる。

しかし悪魔の村は滅び、戦いは終わった。

戦いは、後一つを残すのみ。

第六十ニ話：男の夢、男の意地（一）

明々と燃え盛っていた松明の炎が、風も無く不意に消えた。その途端、ジメジメとした洞窟内が闇に閉ざされ、冷気が押し寄せてくる。

燻る松脂のニオイと、天井から滴る水滴の音。立ち止まり、それらに注意を向けている内、ついさっきまで狭いと感じていた洞窟の通路がぐんと広がり、暗闇の中へ無限に続いているかのような錯覚に襲われる。

「ココには、炎の精霊ガ居なイのカ」

炎の精霊が苦手とする、水の力が強いのだろうか？

サークスは……いや、サークスに憑いた悪魔は独り呟き、松明を足下へ投げ落す。そして懐から海底洞窟で手に入れた蒼く輝く石を取り出すと、胸の前に掲げて周囲を見渡した。石の光は洞窟の壁を青く浮かび上がらせ、悪魔の視界を確保する。

最初からこうしておけば良かった。サークスはランタンを取り出して、本来火を付ける部分である芯を抜き取り、代わりに蒼い石を嵌め込む。これで永久に輝き続けるランタンの完成だ。

そのランタンで洞窟の奥を照らしてみると……。

「マダ、先は長イようだ」

同じような岩壁が、どこまでも続いている。

ふう、と息を吐き出し、青白い明りを頼りに歩き出すサークス。

彼は今、伝説の武具を探す為、長く深い洞窟の最中に居た。

凶悪な魔物の巣食う山々を越え、深い谷を渡り、切立った崖を上りきった所にある隠された洞窟。その奥に、彼の求める物はあると

いう。

「『魔神の利剣』。コイツの為ならば、このサークス。茨の道モ喜んデ進もウ」

その剣はサークスの持つ伝説の武具の地図に、こう記されていた。『神を調伏する剣。その資格ある者にのみ、身を委ねる』と。また、その性質については『斬る対象の秘める魔力に感じ、鋭さを増す』とある。つまり持つ者では無く、斬る相手の魔力が強ければ強い程、切れ味が増すという意味だ。

「神は肉体ヲ持たヌ、魔力の塊。地図の記述ガ真実なラば……確かにこれは、神ヲも斬る刃」

最初、地図に書かれた魔神の利剣についての記述を見た時、サークスは大して気にも留めなかった。神を斬るだなんて馬鹿げた話だと思ったし、何より隠し場所について書かれた部分が解読不能だった。

しかし悪魔に憑かれ、改めて地図を見た時に驚愕する。件の剣について、これまで読めなかった箇所の多くが読めるようになっていたのだ。

地図に書かれていた解読不能の文字。それは、悪魔が使う文字だった。悪魔憑きとなったからこそ読めたのだ。そして、この時に確信を得る。

これこそが、剣を持つ『資格』だったのだ、と。

「神ヲ斬ろうなどと考えル者……即ち悪魔。だかラこそ、剣の隠シ場所は悪魔の文字デ書かれていタ……悪魔にシか読めヌように！」

一歩一歩、洞窟の奥へと踏み込んで行くサークス。魔神の利剣を

……神殺しの魔剣を手に入れる時が、確実に近付いている。その手応えに胸が高鳴る。

思えばこの伝説に残る武具の数々。どれも悪魔を倒す為に創られたと噂されていたが、蓋を開けてみればそんな事はない。悪魔の為に創られたといっても過言ではない物ばかりだ。

ガイランに持たせた『幻魔の爪』は天使の防御を貫くのに丁度良いし、バラに持たせた『消撃の盾』や、自分が着ている『賢者の鎧』は、天使の攻撃を無効化して見せた。その上……。

ちらりと自分の着る鎧に目をやるサークス。黒と赤の装甲板で構成された賢者の鎧。その装甲が、まるで生きているかのように脈打ち、身体の動きに合わせて伸縮している。

鎧は、サークスの身体と融合していた。完全に肌と一体化し、鎧に触れれば直接触れたのと同じ感触がある。これで賢者の鎧唯一の弱点であった、脱がされて無効化されるという心配も無くなった。

これで神殺しの魔剣を手に入れれば、真に完全無欠となるのではないか？

悪魔に憑かれ、鎧とも一体化し、禍々しいシルエットとなったサークス。かつて『白銀』の二つ名で呼ばれた彼の面影は、既に無い。

「もう白銀は相応しくナイな……もし我ガ名ヲ呼ぶ者があるなら、差し当たっテは……ソうだな。黒のサークスとでも、呼んでもらうとスルか」

我ながら少し調子に乗りすぎか？　と苦笑して、その黒のサークスが洞窟を更に奥へと入り込む。

道は細く、天井は高くなってきた。明りを上へと向ければ、驚いた無数のコウモリがキーキーと甲高い声を出し合って羽ばたく。そして――。

「ナンだ、コレは」

道を遮る、一本の木。
といっても下から上に向って地面に生えているわけではない。切断された太い丸太が、通路に対し横向きに、まるで道を塞ぐかのように壁と壁の間に嵌め込まれているのだ。

「……邪魔ダナ」

丸太の高さは、丁度サークスの腰辺り。跨ぐには少々高く、下を潜ろうにも微妙に狭い。切断しようかとも思ったが、道幅の狭い洞窟。壁が邪魔で、剣が振り難い。
軽く舌打ちをしたサークスはザックを背負いなおし、丸太に片手を付いた。大人しく上を乗り越える事にしたのだ。こういった場合、下手な小細工をするよりも効果的な方法がある。

「ヤハリ、な」

丸太を乗り越えようとしたサークス目掛け、突然左右の岩壁から何本もの鋭い槍が突き出された。丸太を越えようとする不安定な姿勢の時を狙い、発動するように仕掛けられていた罠だ。
もしも彼が普通の人間だったなら、今頃は串刺しとなっていた事だろう。しかしサークスは悪魔憑き。しかも賢者の鎧まで装備している。突き出された槍は命中こそしたものの、身体に突き刺さる事は無く鎧の表面でピタリと止まり、それっきり。賢者の鎧が淡い魔法の光を放った以外、何の変化もダメージも無い。
罠は掛かって踏み潰す。一般的とはいえないが、耐久力に余裕のある者ならではの確実な方法だ。

「悪魔には、無駄ダな。一般の侵入者除けカ……」

フンと鼻を鳴らし、邪魔な槍を押し退ける。無意味な罠を仕掛けたものだと、この洞窟をデザインした者を嘲笑した……その瞬間だった。

どぶんっ！　と突然の水音。同時に身体が重くなり、視界が歪む。何が起こったのかと見回す頭は何やら粘性の液体に包まれて、状況把握が難しく、その上……息が出来ない！

一瞬の混乱。だがそれは、ほんの僅か……瞬きする程の時間でしか無かった。数多の修羅場を潜り抜けてきた冒険者としての勘が、サークスを落ち着かせ、彼に状況を正しく把握させる。

（コレは、スライムか。俺は今、スライムに飲み込まレていル）

丸太の上でサークスが罠に掛かり、動きを止めた時。遥か頭上、天井に張り付いていたスライムが落下して彼を飲み込んだのだ。

スライムといえば、かつてヤマトとノエルの二人に初めて出会った時、彼らが苦戦していた魔物だ。粘性の高い身体で獲物を包み込み、溶かして吸収してしまう。その溶解液は中々に強力で、時間さえあれば金属であっても溶かしきってしまう。

洞窟に住まい着いていた野良スライムが通り掛かりのサークスを獲物と捉え、これ幸いとばかりに降り注いだか。はたまた罠の製作者が、こうなる事を計算して仕掛けていたか。真相は定かでないが、一ついえる事がある。それはサークスほどの高レベル冒険者であっても、スライムは厄介な相手であるという事。

（チッ！　荷物ガ……！）

賢者の鎧に護られたサークスに、スライムの溶解液は通用しない。だが彼の荷物は別だ。スライムに飲み込まれた革製のザックは一瞬にして溶け、内容物を曝け出す。

ロープや楔といった冒険者必携の品を初め、念の為にと持ってい

たポーションの類。それらが溶けて使い物にならなくなる。更には伝説の武具について書かれた地図もまた、白煙を上げて溶け始める。

これはマズイ。剣を抜くサークス。

本来であれば、放射状に衝撃波を放つ技である『滅空』でもって蒸発させてやる所だ。しかしここは狭い洞窟内。剣を満足に振る事は出来ず、また指向性の強い滅空は、内部からスライムを倒すのに適していない。

（少々コストパフォーマンスは悪イが、仕方なイ！）

サークスが剣を頭上に掲げ、意識を集中する。その刃へと集まる黒い靄のようなモノ……魔力だ。欲望が悪魔の糧ならば、悪魔のスタミナと呼べる物、魔力。それが剣に集まり、周囲の光を押し退けるようにして次第に膨らみ――。

「奥義！　滅空震ッ！！」

掛け声を合図に、四方へと一気に広がる。

ランタンの青白い光が、サークスを中心とする闇に飲まれて行く。そしてスライムもまた暗がりへと吸い込まれるようにしてサークスから剥れ、端から順に蒸発して行く。更に闇は止まる事無く膨張を続けて通路一杯に広がり、洞窟の岩壁さえも侵蝕し始める。

（スライムは倒した。これ以上やっては洞窟が崩落し兼ねない）

（イヤ、マダダ！　チカラヲ！　破壊ヲ！　何モカモ全テ、闇ニ巻キ込ンデ消し去ッテクレル！）

サークスの胸に、二つの思考が同時に芽生えた。冷静な冒険者としての彼と、悪魔憑きとして欲望のままに振舞う彼の思考だ。相反する思考ではあるが、そのどちらもがサークスという一人の人物の

思考である事に間違いは無い。

（だが今はマダ早い。全テ消し去るのハ、剣ヲ手に入れてからデ良い）

ブレる思考を統一し、魔力を制御するサークス。膨張していた闇が、急速に小さく萎んで行く。

「フゥ……」

音も無く消え去った闇。彼の周囲数メートルにあった物は尽く砕かれ、闇へ飲まれた。スライムも、槍の罠も、丸太も、何もかも全てだ。洞窟の壁や床もサークスを中心とした球形に削れ、ヤスリで仕上げたかのようなツルツルの断面を晒している。

「チ……勢い余っテ地図モ消しテしまっタか」

舞い落ちてきた羊皮紙の切れ端を目の端に見やり、舌打つ。

まぁ良いだろう。剣の地図に関しては諳んじる事が出来るほど、完璧に頭へ入っている。他の地図に関しても、確かあのエルフ……そう、アデリーネが何時だったか写しを作っていたはずだ。確か、ヤマトを追い出した頃だったか――。

「ソレにしてモ……」

幸いにも難を逃れていたランタンを拾い上げ、再度歩き始めたサークス。それにしても、おかしい。

「っ！？　マタか」

数歩進んだ所で薄暗い足下に紛れ、黒く塗られた細いワイヤーが飛んできた。

風切り音と共に足首へと絡み付くワイヤー。賢者の鎧によってその威力は打ち消されたが、常人であれば足首を切り飛ばされていた所だ。こんな辺鄙な洞窟の奥深く、足を怪我した上に道具をスライムによって溶かされ失ったとなれば、待っているのは死の一文字。

「ヤハリ、おかシイ」

首を捻るサークス。罠が多すぎる。しかも、致死性の高い物ばかりだ。

ここへ来るまでにも、罠はいくつかあった。落とし穴の類もあれば、矢が飛び出す物もあった。坂の上から大岩が転がって来たし、崖の登攀中に下へと突き落とすという凶悪な物まで、それこそ罠の見本市かという程バリエーション豊富に。

そのどれもが一回でも引っかかれば命が危険に晒されるレベルの物であり、サークスが悪魔憑きかつ賢者の鎧の装着者で無ければ、とっくに死んでいたと思われる。そんな物が数多く仕掛けられていたのだ。

普通では考えられない。何故ならば、罠を仕掛けた本人が誤って罠に掛かり、命を落としてしまう危険がある為だ。普通は、大事な場所に一箇所かニ箇所。十箇所もあれば、もう多すぎるだろう。だがこの洞窟に関しては、覚えているだけでニ十数か所。まだ発動していない、潜在的な罠に至ってはどれほどあるのか、想像する事さえ難しい。

神さえ切り倒す伝説の剣ともなれば、確かに幾つ罠を仕掛けても足りないという気持ちは理解できなくもない。しかしここまでするなら、通路を埋め立てた方が早いのではないか？　どうせ罠が多すぎて、通路としては機能しないのだし……。

「マァ、良い。どうせ、モう終点ダ」

洞窟の最深部。

目の前には両開きで、サビの浮いた巨大な金属製扉。これを開けた先に、剣はあるはずだ。

扉の番人である岩の人形二体が、侵入者に反応して立ち上がる。何の警告も発さずに襲い掛かるそれを剣の一振りで一蹴し、サークスは扉の前に立った。

本当に大きな、そして重そうな扉だ。両手を広げても片側の扉一枚分の幅にも及ばず、高さは自分の身長の倍ほどもある。厚みに至っては、果たしてどれほどあるのか……少なくとも、ほろ酔い亭の薄切りハムよりは分厚いのだろう。

「罠ハ無シ、か」

軽く確かめた後、扉の中央へ手を添えるサークス。スマートに扉を開く方法など知らない。それならば、抉じ開けるのみ！

地面を踏みしめて両脚を岩盤に固定し、渾身の力でもって扉を開けるべく押し始める。

「フッ……ウオォォォッ！！」

扉に付着していたサビが舞い落ち、ギシギシと軋む扉。少しだけ開いた隙間から、砂埃が室内へと吸い込まれて行く。

あと少し。自分もあの砂埃のように、室内へ……！

力任せに抉じ開けた扉の間に片腕を差込み、続けて身体を挟み込む。自らを扉のストッパーとしつつ、更に扉を押し開き、部屋の中へと一歩を踏み出すサークス。そして、更に一歩、二歩……あと一押しだ！

「オアァァァッ！！」

扉に挟まれながら片側の扉を両腕で押し、逆の扉には両脚を当てて、全身のバネを使って突っ張り、硬く重い扉を開く。そうして転がり込んだ先に広がっていた光景――。

「こ、ここ……ガ？」

広い室内。真っ白な壁と床が目の前に広がっている。広さは宿の十人部屋と同じくらい……いや、もっと広いのだろう。白い壁面によって距離感が狂い正確な把握が困難ではあるが、相当な広さがあるようだ。

そして至る所に立つ、天井と床とを繋ぐ何本もの乳白色の柱。鍾乳石のようにも見える大小様々な柱が、なんとも奇妙な光景を描き出している。床や壁を覆う白い鉱石についても同様で、微妙に波打った表面に青いランタンの光を反射し、部屋全体を明るく照らしている。

そして、部屋の中央部。

腰ほどの高さに盛り上がった地面に、ソレはあった。

「アレが……」

透き通るように真っ白い刀身。金と銀によって細かな装飾が施された鍔。分類するならば長剣に当てはまるであろう剥き身の剣が、盛り上がった岩盤を台座として、刃を半分ほど晒す形で真っ直ぐに突き刺さっている。

サークスには見える。剣の放つ、魔法の輝きが。この上なく純粋で濃度の高い光……ともすれば飲まれてしまいそうな程の魔力が、その剣からは感じられる。

「アレが、魔神の利剣……！」

とうとう辿り着いた、この場所に！　父と語った、夢の終着点へ！

その時サークスの心に満ちていたのは、純粋なる感動と喜び。

そこに悪魔の介入する余地など、ありはしなかった。

第六十三話：男の夢、男の意地（二）

床と天井とを繋ぐ生白い柱の内、適当な高さで折れている物を選んでランタンを置き、シャッターを全開にして明りを確保する。ただそれだけで真っ白な室内は青い光によって明るく照らし出され、動き回るのに十分な光量となった。

「サテ……」

呟いてサークスは、台座に刺さる神殺しの刃『魔神の利剣』へと歩み寄る。

「それにシテも、美シイ……」

ウットリとした声を漏らすサークス。見れば見るほど、美しい剣だ。随所に渡る繊細な模様細工。純白の刀身には複雑な魔法文字が刻まれているのだが、その文字さえもデザインの一部として組み込まれている。機能性と芸術性の融合――道具として究極とも呼べる美しさが、そこにはある。

見る度、新たな魅力に気付かされる比類無き剣。そんな素晴らしい武器が、我が物となる時が来た。まるで絶世の美女を前にした若者のように、サークスの胸は激しく高鳴る。

「いよいよダ」

柄に手を伸ばすサークス。

滑り止めを兼ねた文様の刻まれた柄部分は、ランタンの青白い光に、まるで濡れているかのような輝きを反射している。

魔神の利剣は資格ある者に身を委ねるという。悪魔の文字を解読

し、ここまで辿り着いた事こそが資格であるのなら、自分以外にこの剣を扱える者など居ない！

「今こそ、我ガ手ニ！」

サークスは力強く柄を握り、大地から剣を引き抜く――。

「……！？」

引き抜いた……つもりだった。

だが剣はビクともせず、変わらず乳白色の台座に突き刺さったまま。悪魔憑きとしての、太い鋼さえ折り曲げる剛力を持ってしても剣は抜けず、微動だにしない。

「馬鹿ナ！？　どうしテ……！」

資格ある者に身を委ねるのでは無いのか？　では自分に資格など無いという事か？　ならば資格とは！？

驚愕と絶望が入り混じり、ぐちゃぐちゃになるサークスの心。そこへ、新たな違和感が飛び込んで来る。

「……？　手ガ……手ガ、柄カラ離レない！？」

剣を握った右手。その手がまるで柄にくっついてしまったかのように、離れなくなってしまった。柄に沿って滑らせる事はおろか、指を開く事さえ出来ない。まるで接着剤の塗られた棒を力一杯握ってしまったかのようだ……いや、違う。

「まるで？　違ウ！　コレは……接着剤だ！」

微かに漂う独特な薬品の匂い。これは間違いなく接着剤だ。魔物の体液から抽出され、鎧などの補修に使われるこれは、塗った直後に強い力で押し付ける事で、しっかりと互いを接着させる作用がある。

それが剣の柄に塗られていた……という事は、つい最近に誰かがコレを？

サークスの考えが纏まりかけた時。彼の背後で、何かが動いた。

「おぉぉぉぉッ！！」

「……ッ！？」

雄叫びを上げて突進して来る人影。咄嗟に反応したサークスだったが、剣にくっついたままの右手が邪魔をする。

その小柄な影は手にした重いツルハシを振り被ると、走った勢いそのままに、ガラ空きとなっていたサークスの背中へ鋭く尖った鋼の先端を叩き込む！

「グっ……！」

金属同士を打ち合わせる硬く甲高い音が響き、同時に魔力を帯びた青白い火花が飛び散る。

よろめき、たたらを踏むサークス。ツルハシの頭は折れて部屋の端まで飛び、壁へと突き刺さった。

「ちっ！　やっぱダメか。これ一発で倒せりゃ、苦労無ぇと思ってたんだ」

「……！？　キ、貴様ッ！？　ど、ド、ど……」

どうしてここに！？

眼前に立つ人影の正体に、驚きを隠せないサークス。夢か幻でも

見ているのかと何度も我が目を疑ったが、間違い無い。どうやら目の前にいるその男は、夢でも幻でもない。確かな現実だ。

「ヤマト……！」

「よう、サークス。久しぶりだな」

そこに立っていたのは、ヤマトだった。ほろ酔い亭で別れて以来、野垂れ死んだとばかり思っていた男が、不敵な笑みを浮かべて五体満足で目の前に立っている。

「どうしたんだよ、幽霊でも見たような顔しやがって。つか、顔色悪いなサークス。真っ赤だぞ」

からかうような口調で笑うヤマト。だが、彼の登場をサークスが信じられないのも無理は無い。わからない事だらけ、ありえない事だらけであるからだ。

「ど……ドウやって、ココに来た？　先回りヲして、待ち伏セていたのカ？　ガイランから受けた傷はドウした？」

「質問攻めかよ。人気者は困っちまうなぁ」

壊れたツルハシを捨て、短剣を抜くヤマト。その短剣を、ガイランによって滅茶苦茶にされた筈の右手で構える。

「ま、何を聞かれようが……テメェにゃ教えてやらねぇけど！」

そして魔人の利剣に手がくっついて身動きの取れないサークスへ、容赦なく斬り掛かった。

「コノ……ッ！　問答無用と言うワケか！！」

咄嗟に左の篭手で短剣を防ぐサークス。賢者の鎧の効果や悪魔憑きとしての耐久力を考えれば防ぐ必要など無いのだが、この男の攻撃は防いでおかなければ痛い目に合う……そんな気にさせる怖さがある。

そんな探り探りの防御が動きを鈍らせたか、それとも封じられた片手が足を引っ張ったか。ヤマトの短剣が鎧の隙間へと滑り込み、サークスの左腕の付け根に深く命中する。

「ぐァ……っ！？」

思わず、サークスの口から声が漏れた。腋の下に存在する鎧の隙間に突き刺さった刃。その刃先と肌との間に、輝く魔法の力場が形成されてダメージは相殺された。しかし、もしも鎧が無かったら、サークスが悪魔憑きでなかったら。彼の左腕は深く傷付けられ、二度と上がる事は無かっただろう。

「へっ！　どうだ、見たかおいコラ！　ハンディがありゃ、俺でも結構イケるもんだな！」

「コノ雑魚ガ！　頭に乗ルなよ、ヤマトぉッ！！」

サークスの真紅に輝く目が、その深みを増す。肌の色も鮮やかな赤から、どす黒い濁った血のような色へと変色し、全身から黒い霧のような物が立ち上り始める。

迸る、目に見える程の魔力。それは悪魔の力が全開となった証。

「こんナ物ッ！」

魔人の利剣の柄に接着されたサークスの右手に、力が込められる。ベキベキと何かが割れるような音と、メリメリと何かが剥れるよ

うな音が室内に響き始めた。サークスが賢者の鎧ごと……すなわち自分の皮膚ごと、柄と右手を引き剥がしているのだ。

「ヌオォォォッ！！」

柄に残る右手の皮。それと手の平の隙間から滴る漆黒の血液によって、純白の刀身が黒く染め上げられる。

悪魔憑きといえど痛みはあるはずだ。皮を剥ぐなど、爪を剥がすにも匹敵する相当な痛みを伴うはず……しかしサークスは躊躇する事無く右手を引き剥がして行き、とうとう剣から右手を離す事に成功した。

「……ハァ、ハァ。コレで良い。コノ傷くライ、スグに再生すルんだ」

言葉通り、サークスの右手から滴っていた血はすぐに止まり、傷その物も急速に塞がって行く。そして右手が自由になると同時に、いつもの冷静さが彼の元へと戻って来た。

まずはどうやってヤマトがこの場所を嗅ぎ付けたか。

「判っタぞ。ソウか、アデリーネか。アノ女が、地図ヲ……」

件のエルフは地図の写しを持っている。ノエル救出にも一役買っていたようだし、アデリーネはヤマトに組していると考えるのが自然だ。きっと彼女が何かをして、この剣が隠されている場所を突き止めたのだろう。

「ソして、貴様だヤマト。オ前ガ、ココに来る事の出来た理由」

この場所に至るまでの道には、無数の罠が仕掛けられていた。中

には回避不可能な物だってあった。それを普通の人間であるヤマトが潜り抜けてきたとは到底思えない。そして入り口の扉には、開かれた形跡は無かった……と、なれば答えは簡単。

ヤマトは別の道からやってきたのだ。

「コノ洞窟を作ッタ者専用の、安全な秘密の通路。ソコを通ッタな？　どウやッテ見つけタカは知らナイが、全く相変わらズ目端の利く男ダ」

「そりゃどうも。罠の中を突っ切って進むほど、馬鹿じゃないつもりなんでね」

ご名答、といわんがばかりのヤマトだが、そういった言葉にさえ皮肉を挟む事を忘れない。

ヤマトが通ったのはサークスが指摘した通り、かつてこの洞窟を設計した者によって作られた安全な道。魔法の言葉によって長く封印されていた、秘密の通路だ。

「減らず口ヲ……だが、ソノ軽口も、ココまデだ」

腰の剣を抜くサークス。白銀の刀身が、青白いランタンの光を反射して剣呑な輝きを見せる。そこへ悪魔の身体から立ち上る黒い霧が絡み付くと、白銀の輝きは闇色の光へと変わって行った。

魔力を刃に集中させて切れ味を何十倍にも上昇させるサークスの奥義・裂空。悪魔の村においてノエルの羽を一枚残らず削ぎ落とした技だ。

「仲間のヨシミだ。せめテ楽に死ナせてやル」

「はッ！　ちゃんちゃら可笑しいぜ。何が仲間だ、この野郎！」

サークスの動きに応え、ヤマトもまた短剣を構える。

「ノエルに酷ぇ事しやがって……テメェは敵だ！　俺の敵だ！　俺は……サークス、テメェをぶっ飛ばしに来た！」

そして剣を突きつけ、ハッキリと宣言した。

「泣こうが喚こうが、お前だけは絶対に許さねぇからな！！」

第六十四話：男の夢、男の意地（三）（前書き）

このお話には、残酷な表現と性的な表現が含まれています。苦手な方はご注意下さい。

第六十四話：男の夢、男の意地（三）

白によって構成された室内。
伝説の剣が眠るこの場所に、ヤマトは多くの人々から力を借り、復讐を成す為に立っている。
サークスを倒しに行きたいと仲間に告げた時、止められると思った。『無茶は止めろ』『憎しみは、憎しみを生むだけだ』と、月並みな台詞で止められるんじゃないかと思った。
だが違った。『あいつムカつくから、ぶっ飛ばして来い。自分たちが手伝ってやる』そう仲間たちは言って、その言葉通り、それぞれが今も全力を尽くしてくれている。
心から、ありがたい。仲間たちの協力に報いる為、そして個人的な復讐の為。ムカつく男をボッコボコにして、徹底的にブチのめす！　その強い気持ちを胸に、ヤマトは心のまま、憎い敵へと磨き上げた牙を向ける。

「クソォ！　何故ダ！！　何故……何故ダ！？　ドうして……！？」

サークスの呻くような声が室内に響く。
彼の振るう剣……刃に蓄えられる魔力の許容量を越え、大気中に迸って漆黒の軌跡を描く程となった銀の剣。サークスが『白銀の』と呼ばれる理由の一端となった、愛用の剣だ。そして、その切れ味を増す技、奥義・裂空。堅牢な魔物の皮膚を貫き通し鋼の鎧でさえも易々と切り裂く、必殺の技。それなのに……。

「ドウして斬れない！！」

サークスの剣を、ヤマトが持つ何の変哲も無い鋼の短剣が力強く受け止め、弾く。魔力を伴った火花が飛び散り、擦れ合う金属音が

反響して耳に残る。本来ならば受け止めた刃ごと切り落とせても不思議は無い筈なのに、ヤマトの持つ剣は元のまま、変化は見られない。

「しょっぺぇんだよ、テメェの奥義とかいうヤツは！」

動揺によろめいたサークスの間合いに踏み込んだヤマトは、渾身の力で短剣を突き出し、憎い敵の喉元に一撃を加える。がつん、と硬い粘土を突いたような感触が手に返り、反動で互いの身体が離れた。

手応え有り――！　もしも生身同士の戦闘であったなら、今の一突きで決まっていただろう。

「大した事無ぇなぁオイ、白銀のサークスさんよぉ！」

「ぐ……コノっ！」

挑発し、ヤマトはサークスの攻撃を誘う。

いける……ほくそ笑むヤマト。サークスがまだ気付いていない、今がチャンスだ！

袈裟懸けに振るわれた銀の剣を受け流し、返す刃で胴を凪ぐ。大木を斧で打ったかのような重たい感触があり、衝撃に手が痺れた。この調子だ！

「何故……何故ダ？」

さっきから狂ったオウムの如く、同じ言葉を繰り返し続けるサークス。どうしてこんなにも、裂空の切れ味が鈍い？　普通の剣さえ切断できない？　その理由はとても単純な事なのだが、今の彼は気付く事ができないでいる。

思えば最初にこの事実――悪魔憑きとなったサークスの攻撃力が

大きく減じている可能性――それに気付いたのは、悪魔憑きとなってからの彼と最も長く行動を共にしていた者、ノエルだった。

『サークスさんが変に……悪魔憑きになってからかな。あの人、武具の手入れをあまりしてないみたい』

ヤマトの実家にて、昏睡から目を覚ましたノエルは過去を振り返り、そう言った。以前は頻繁に行っていた剣の手入れ……刃を研いで油を塗り、目地を絞める。それら日々のメンテナンスをサークスが行っていないようだったと、仲間たちに伝えた。

それは悪魔憑きとなり、能力が飛躍的に上昇した事による驕りだったのだろう。少々剣の切れ味が悪くとも、上昇した筋力がそれを補って余りある。だから大丈夫だ、と。

しかし、道具の反応はとても素直だ。

サークス長年の愛剣である銀の剣。その主成分たる銀は魔力との相性は良いものの、鉄などと比べると非常に柔らかい。それ故、切れ味を保つ為の手入れは欠かせない。

ずっと手入れをサボっていたのなら、見た目には変化が無くとも切れ味は格段に落ちている事だろう。なまくらとなり、棍棒同然となっている筈。そしてサークスが得意とする裂空は、魔力を集中させて切れ味を何倍にもする技。

となれば、棍棒の切れ味が増した所で、何が恐ろしいというのだろう？

「レベル３２が聞いて呆れるぜ！　冒険者養成学校あたりから、若葉マーク付けて出直してきな！！」

冒険の成否、その半分は下準備で決まる。

サークスがレベル３２という人間としては驚異的な数値を記録しているのは、こうした準備に長けていた為だ。入念な下調べと準備

を行い、堅実に、確実に仕事をこなす。
勿論、戦闘能力だって確かな物ではあるが、その能力にしたって武器の準備が万端でなければ十分には発揮出来ない。悪魔憑きとなり、力に溺れて準備を怠った時点で、サークスはその実力の半分以上を失ったに等しかった。

「今のテメェは、レベル5の……俺以下だッ！！」

なまくらとなった銀の剣を掻い潜ってサークスの腕を取ったヤマトは、素早く身体を密着させて腰を跳ね上げ、流れるような動作で一本背負いを決める。
純白の床にヒビが入る程の勢いでサークスを床に叩き付けると、更に追い討ちとばかりに鳩尾へと刃を突き立てた。

「加減しねぇぞサークス！！」

続け様に攻撃！　喉や目、あるいは関節など、鎧に守られていない部分を重点的に狙う。だが的確に命中したところで賢者の鎧が衝撃を無効化してしまい、傷は与えられない。与えられはしないのだが……ヤマトには、ある目的があった。
しかしサークスとて歴戦の兵。

「舐めルな！！」

自らの攻撃が弱体化している理由は不明ながらも、一方的に攻め続けられる状況に、何時までも甘んじてはいない。
真っ白な床に、赤い血飛沫が飛ぶ。

「ぐぁ……っ！？」

転がるようにしてサークスから距離を取るヤマト。その左手が、革製の手甲ごと大きく引き裂かれていた。肘から手首まで、鋭利な刃物で切られたような深い傷が覗いている。

「フン……裂空ガ、剣ノミの技だとデも思ったか？」

サークスがのそりと身を起こす。その右手に宿るのは漆黒の輝き……裂空。彼は手刀に魔力を集め、ヤマトに反撃したのだ。

「さぁドウするヤマト？　悪魔憑キから受けタ傷は、簡単に治ラないぞ？　今の一撃は、カなリ深く入っタ……随分と血が出たヨウだが大丈夫かナ？」

形勢逆転。

勝ち誇るサークスに対し、ヤマトは逃げ惑う小動物の如く素早く柱の影に隠れ、道具袋から何本ものポーションを取り出す。

「ソウソウ、早くポーションヲ使わナイと、タダでさえ少ないスタミナがもッと減るぞ？　そシて最後には、出血多量デ死亡コースだ！　そウで無くトも、左手はもう使エまい！」

楽しげな声を上げ、サークスは魔力を集中させた右手で床を抉り取り、力任せにヤマトの隠れる柱へと連続して投げ付ける。

次々に飛来する砕けた床は散弾の如く柱と壁を叩いて弾け、ヤマトを柱の影へと釘付けにした。そうしておいて……。

「くたバれ、ヤマト！！」

固めた拳で彼の隠れる柱を殴り、砕いた破片を飛礫としてその命を狙う……が、ヤマトはサークスの動きを読んでいた。

「ガイランと似たような真似してんじゃねぇ！」

軽いステップでくるりと柱を回りこみ、攻撃に集中していたサークスへと足払いを仕掛ける。背後へと振り返る形での下段後ろ回し蹴りは見事にサークスの脚を捉え、悪魔憑きの剣士は床に転がった。

「ワンパターンなんだよ、テメェらは！」

「ソれハ、コチラの台詞だ！！」

倒れたままの姿勢で、サークスが手刀でもって空を凪ぐ。上体を反らして回避するヤマトの前髪が何本か、風圧で千切れて落ちた。

「あぶねっ！」

「次は外さナイ。顔面を真横に引き裂いテくレるぞ、ヤマト……？」

ハンドスプリングの要領で機敏に起き上がり、ヤマトへと向き直ったサークス。怒りと苛立ちが入り混じるその表情に、ふと疑問の色が浮かんだ。

今し方、手酷いダメージを与えたヤマトの左手が……治っている？目を凝らすサークス。手首から肘にかけて革の手甲は裂けて袖も破れ、血に濡れている。だが、そこから見える地肌に傷は無く、実際ヤマトも痛がっている様子が無い。

これは一体……？

「貴様……ドうやっタ？　ソの手の傷だ……何故、治せル」

「最初に言ったろ？　お前にゃ教えてやらねぇって」

言って、フフンと得意げに笑うヤマト。その表情にサークスは苛

立ちを募らせる。
どうして不治の呪いが効かない？　ポーション程度で回復される？　わからない事だらけの現状が、彼から冷静な判断力を奪って行く。

「……天使か。ノエルの力か！？　アノ女がナニか……」
「当てずっぽうは見苦しいぜ。ちゃんと考えてから物言えよ」

間合いを計り、互いに隙を窺う二人。混乱の渦中にあるサークスを、小バカにしたような態度でヤマトが嘲笑う。

「クソ！　そウだ、きっトそうに違いナイ。天使が、ノエルが何かヲしたノだな！？　アノ天使め……散々我ラの前で尻ヲ振ってオきながラ、昔の男ガ戻った途端にコロッと鞍替えとハな！　トンだ尻軽だよ！！」

苦し紛れにサークスが吐いた、ノエルへの悪口。その時に見せたヤマトの微かな反応を、悪魔は見逃しはしなかった。

「ん？　ナンだ、そノ顔は？　ヤマト……もシかシて、ノエルから聞いていナイのか？」

剣を捨て、両手に魔力を集めながら、芝居がかった口調で語りかけるサークス。口元に勝ち誇ったような薄笑いを浮かべ、寝取った女の痴態を自慢げに語り出す。

「あの淫乱女は自ら望んデ服ヲ脱ぎ、ソノ身体で我らに奉仕シタのだヨ？　俺の上に跨リ、腰を使ッテ慈悲を乞うテいたトも！　是非、お前にモ見せてヤリたかっタ」

どうだ、悔しいだろう？　お前の苦しむ姿が、俺の喜びだ！　サークスの言葉からは、そんな邪な想いが滲み出している。だが……。

「あぁ、その事か。それならノエルから聞いてるぜ」

「何？」

サークスにとって、ヤマトの切り替えしは意外な物だった。怒りに猛るで無く、飄々とした態度で構えを崩し、小指の先で耳をほじるヤマト。そしてその小指をサークスの方へと突き出し、ニヤリと笑って言った。

「テメェのナニが小さすぎて、入ってんだかどうだか、わかんなかったとよ」

ピンッ、と小指を弾く。

「小指並み、か？」

「き……貴様アッ！！」

受けた屈辱の大きさに、サークスの身体から吹き上がる魔力の量が更に増大する。

空気を振動させ、肌に感じられる波として部屋全体へ広がる闇色の魔力。砕け落ちていた柱の欠片たちが、更に細かく砕け吹き飛ばされて行く。

「度重ナル侮辱……既ニ限界！　貴様ダケハ、生カシテ置カン！　細切レニシ、心ノ臓ヲ引キズリ出シ、目ノ前デ喰ラッテクレル！！」

サークスの声が、完全に彼の物では無くなった。賢者の鎧は身体との融合が進み、どこからどこまでが鎧であったか、もう判然とし

ない。そして、腰から伸び出す、太くしなやかな尻尾。
サークスという依り代に成り代わるようにして、ついに悪魔が本性を現した。

「へっ、やっとかよ。こっからが本番だぜ」

手の平に滲む汗を拭って短剣を握り直し、震える足に拳をくれて、無理矢理持ち直させるヤマト。
恐怖？　いいや、これは武者震いだ。
くそったれの悪魔に、地獄を見せてやる時が来た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7526w/

英雄予備軍冒険譚

2011年12月8日10時16分発行